

---

# 中国内モンゴルの文化政策による政治宣伝と 民族・地域文化の創造過程

—赤峰市オンニュート旗ウラーンムチルの演目分析を中心に—

---

---

2021 年度 千葉大学大学院 人文公共学府 博士論文  
金壮 (T. アルタンバガナ)

---

# 目次

目次	i
序章	1
1 研究背景と目的	1
2 国家と民族の形成に関する研究	3
2.1 国家と民族に関する研究	3
2.2 中国の民族形成に関する研究	4
2.3 中華民族の形成に関する研究	5
3 文化政策に関する研究	7
3.1 文化政策の概念	7
3.2 文化政策の主体	8
3.3 文化政策の機能	8
3.4 中国少数民族の文化政策に関する研究	10
3.5 ウラーンムチルに関する研究	10
4 文化の創作に関する研究	11
4.1 伝統の創作に関する研究	11
4.2 内モンゴルの行政区画の改革に関する研究	12
4.3 内モンゴルの文芸の創作に関する研究	12
5 主な資料の説明	14
6 研究方法	15
7 本論文の構成	15
7.1 章立の構成	15
7.2 各章の内容	16
<b>第一章 清朝崩壊から 1946 年までの内モンゴルの文化政策と文化事業</b>	<b>18</b>
1 モンゴル人民共和国影響下での内モンゴルの文化政策	18
1.1 内モンゴル人民革命党の成立とその活動（清朝崩壊-1930 年代）	18
1.2 内モンゴル人民革命党の活動停止から再開まで（1930 年代-1945 年）	20

2	日本の影響下での内モンゴルの文化政策 .....	22
2.1	内モンゴル王公の革新政策（清朝末期-1931年） .....	22
2.2	満洲国時代の内モンゴルの文化政策（1932-1945年） .....	22
	小結 .....	25
<b>第二章 内モンゴル自治区成立後 10 年の文化政策と文化事業（1947-1957 年） ..</b>		<b>27</b>
1	内モンゴル自治区の成立 .....	27
2	内モンゴル文工団の誕生とその作品及び文化政策 .....	28
2.1	内モンゴル文工団の誕生 .....	28
2.2	内モンゴル文工団の作品 .....	29
2.3	内モンゴル文工団に関する政策 .....	30
3	ほかの文化事業 .....	31
3.1	地域の芸術歌舞団 .....	31
3.2	芸術歌舞団の目的 .....	31
3.3	文化・教育部の設置 .....	32
3.4	ほかの民族の歌舞団 .....	32
3.5	内モンゴル文工団と民間芸能人の関係 .....	32
3.6	フフホト市を中心とする文化事業 .....	33
3.7	文化館・文芸刊行物の普及 .....	34
	小結 .....	35
<b>第三章 ウラーンムチル芸術歌舞団の誕生 .....</b>		<b>36</b>
1	ウラーンムチルの誕生経緯 .....	36
2	ウラーンムチルの変化と隊員 .....	37
3	ウラーンムチルの機能 .....	38
4	ウラーンムチル芸術歌舞団の概念 .....	39
4.1	ウラーンムチルの意味 .....	39
4.2	ウラーンムチルの設置 .....	40
5	ウラーンムチルの創立地域の概要 .....	41

5.1 スニド右旗の概要 .....	42
5.2 オンニュート旗の概要 .....	43
6 オンニュート旗のウラーンムチル創立以前の文化事業 .....	43
7 オンニュート旗ウラーンムチルの概要 .....	44
8 ウラーンムチルの時期区分 .....	45
8.1 時期区分に関する先行研究 .....	45
8.2 ウラーンムチルの草創期（1957-1965年） .....	45
8.3 ウラーンムチルの停止期（1966-1976年） .....	46
8.4 ウラーンムチルの回復期（1977-1989年） .....	46
8.5 ウラーンムチルの改革期（1990-2001年） .....	46
8.6 ウラーンムチルの創新期（2002-2012年） .....	46
8.7 ウラーンムチルの繁栄期（2013年-現在） .....	46
9 インフォーマント情報 .....	46
小結 .....	48
<b>第四章 毛澤東時代前半期のウラーンムチル（1957-1965年） .....</b>	<b>50</b>
1 反右派闘争 .....	50
2 大躍進と人民公社 .....	51
3 内モンゴルの文化事業 .....	52
4 内モンゴルの文化事業における大躍進の被害 .....	52
5 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業 .....	52
5.1 オンニュート旗ウラーンムチルの活動 .....	53
5.2 オンニュート旗の他の文化事業 .....	53
6 草創期の上演作品 .....	54
6.1 各年の上演作品 .....	57
6.2 草創期における上演作品の総括 .....	65
6.3 まとめ .....	69
小結 .....	69

<b>第五章 毛澤東時代後半期のウランムチル（1966-1976年）</b> .....	71
1 文化大革命の発動 .....	71
2 文革の被害 .....	72
2.1 内モンゴルの政治家に対する迫害 .....	72
2.2 内モンゴル歌舞団の芸術家に対する迫害 .....	73
3 内モンゴルの文化事業における文革の被害 .....	74
4 オンニュート旗ウランムチルと他の文化事業の被害 .....	74
4.1 オンニュート旗ウランムチルの被害 .....	74
4.2 オンニュート旗の他の文化事業の被害 .....	75
5 文革期の上演作品 .....	75
5.1 文革期の各年の上演作品 .....	76
5.2 文革期の上演作品の総括 .....	78
5.3 まとめ .....	80
小結 .....	80
<b>第六章 鄧小平の改革開放時代のウランムチル（1977-1989年）</b> .....	82
1 改革開放政策の実施と文革回復 .....	82
2 内モンゴルの文化事業の復活 .....	83
3 文化政策の促進 .....	84
4 オンニュート旗ウランムチルと他の文化事業 .....	85
4.1 オンニュート旗ウランムチルの活動 .....	85
4.2 オンニュート旗の他の文化事業 .....	86
5 回復期の上演作品 .....	86
5.1 回復期の各年の上演作品 .....	88
5.2 回復期の上演作品の総括 .....	94
5.3 まとめ .....	96
小結 .....	97

<b>第七章 江澤民の社会主義市場経済時代のウランムチル（1990-2001 年）</b> . . . . .	99
1 社会主義市場経済の実施 . . . . .	99
2 内モンゴルの文化政策 . . . . .	100
3 内モンゴルの文化事業 . . . . .	101
4 オンニュート旗のウランムチルと他の文化事業 . . . . .	102
5 改革期の上演作品 . . . . .	103
5.1 改革期の各年の上演作品 . . . . .	105
5.2 改革期の上演作品の総括 . . . . .	109
5.3 まとめ . . . . .	112
小結 . . . . .	112
<b>第八章 胡錦濤の科学的発展観時代のウランムチル（2002-2012 年）</b> . . . . .	114
1 科学的発展観の実施 . . . . .	114
2 内モンゴルの文化政策 . . . . .	115
3 内モンゴルの文化事業 . . . . .	117
4 オンニュート旗のウランムチルと他の文化事業 . . . . .	117
5 創新期の上演作品 . . . . .	118
5.1 創新期の各年の上演作品 . . . . .	121
5.2 創新期の上演作品の総括 . . . . .	129
5.3 まとめ . . . . .	133
小結 . . . . .	134
<b>第九章 習近平の中国夢の新時代のウランムチル（2013 年-現在）</b> . . . . .	136
1 「新時代の中国の特色ある社会主義」政策の実施 . . . . .	136
2 内モンゴルの文化政策 . . . . .	137
3 内モンゴルの文化事業 . . . . .	139
4 オンニュート旗ウランムチルと他の文化事業 . . . . .	140
5 繁栄期の上演作品 . . . . .	141
5.1 オンニュート旗ウランムチルの 2013 年春祭り演目 . . . . .	141

5.2	オンニユート旗ウラーンムチルの 2013 年のほか演目.....	151
5.3	オンニユート旗ウラーンムチルの 2016 年春祭り演目.....	159
5.4	オンニユート旗ウラーンムチルの 2020 年春祭り演目.....	168
5.5	まとめ.....	180
	小結.....	180
<b>第十章 ウラーンムチル歌舞団の政治宣伝のプロセス .....</b>		<b>182</b>
1	ウラーンムチル学会.....	182
1.1	シ氏とウラーンムチル学会.....	182
1.2	ツ氏とウラーンムチル学会.....	184
1.3	ス氏とウラーンムチル学会.....	185
1.4	セ氏とウラーンムチル学会.....	185
2	ウラーンムチル「老隊員」.....	186
2.1	ソ氏とウラーンムチル演目の創作について.....	186
2.2	タ氏とウラーンムチル演目の創作について.....	187
2.3	チ氏のウラーンムチル経歴.....	189
2.4	歌手金花氏のウラーンムチル経歴.....	190
	小結.....	191
<b>第十一章 観客からみたウラーンムチルの公演活動 .....</b>		<b>194</b>
1	ウラーンムチルの公演と観客.....	194
1.1	歴代ウラーンムチルの公演とそのデータ.....	194
1.2	フィールド調査でみるウラーンムチルの公演と観客.....	194
2	観客へのインタビュー.....	197
2.1	牧畜地域での公演.....	197
2.2	農業地域での公演.....	200
2.3	ウラーンムチルの都市での公演.....	202
3	ウラーンムチル関係者へのインタビュー.....	208
	小結.....	209

終章	211
1 内モンゴルの時代変化	211
2 内モンゴルの文化政策の変遷	212
3 内モンゴルの文化事業の変遷	214
4 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業	215
5 上演作品にみるウラーンムチル	216
5.1 ウラーンムチル隊員構成の変化	216
5.2 上演作品の制作者	216
5.3 上演作品数とその種類	216
5.4 上演作品のテーマとその変遷	217
6 政治宣伝と民族・地域文化の創造過程	218
6.1 政治宣伝	218
6.2 「民族の形成」	219
6.3 「地域文化の創作」	220
7 結論	221
8 今後の課題	222
引用文献	223
【日本語】	223
【中国語】	229
【欧文】	234
【モンゴル語】	235
【オンライン文献】	236
【新聞】	237
謝辞	238

## 序章

### 1 研究背景と目的

内モンゴル自治区は中国では、模範的な自治区として中国の少数民族地域に大きな影響を与えてきた(シンジルト 2010: 187)。1949年に中華人民共和国が成立する2年前の1947年5月に内モンゴル自治区が中国における第一の自治区として誕生した。1947年10月から始まる中国共産党による「中国土地大綱」は少数民族地域を先導し、内モンゴル自治区で土地改革が実施された。その10年後、1958年8月から始まる人民公社は、牧畜業人民公社制として内モンゴル自治区で初めて導入された。1966年から1976年までに行われた中国文化大革命においても、内モンゴル自治区から始まった(楊 2009: 30-31)。一方で文学・芸術における文化政策においても、例外なく内モンゴル自治区は先導的な役割を果たしてきた。

1946年に内モンゴルでは中国共産党の政治宣伝を行うために内モンゴル文工団(歌舞団)<sup>1</sup>が創立された。文工団とは、歌、ダンス、芝居など様々な手段で宣伝活動を行う総合的な文芸団体のことをいう(貴志 2013: 241)。内モンゴル文工団は文学と芸術活動を通し民間に国家と中国共産党のイデオロギー、政策と方針の宣伝と普及を目指す団体であった。内モンゴルでは、内モンゴル文工団の創立をきっかけに中国共産党の文化政策が拡大しつつあった。

1950年代、内モンゴル自治区では内モンゴル文工団をベースに様々な芸術歌舞団が誕生した。「自治区政府は内モンゴル文工団を内モンゴル歌舞団として拡大し、さらに民族劇団、京劇団、話劇団、民族曲芸館(現在の内モンゴル曲芸団)、サーカス団、直属ウラーンムチル<sup>2</sup>など専門的な芸術パフォーマンス団体を創立していった。各盟・市<sup>3</sup>では歌舞(劇)団を設置し、旗・県ではウラーンムチル或いは劇団を創立した」(劉 1997: 7)。こうして芸術歌舞団の中の一つであるウラーンムチルは1957年6月に旗・県に創立され、牧畜民・農民を対象に国家と中国共産党のイデオロギー、政策と方針の宣伝を担うようになった。

---

<sup>1</sup> 中国共産党には、政治宣伝の担い手として文工団が作られていた。共産党軍に文工団設けられたのは、最も早ければ1927年9月という(松浦 2000a: 44)。

<sup>2</sup> モンゴルの「ウラーン」(赤い)は、人によっては「オラーン」、「ウラーン」などと表記されることもある。先行研究では、ウラーンムチルを「オラーンムチル」や「ウラーンムチ」と表記している。ウラーンムチは「烏蘭牧騎」の中国音読みである。本稿ではオラーンムチルや、ウラーンムチに対してウラーンムチルを使うようにした。ただし、先行研究を引用する場合は原文通り「オラーンムチル」や「ウラーンムチ」と表記し、オリジナルの意味を保持することにした。また、「赤い」と「紅い」については、日本語訳と借用語として使うときは「赤い」を使い、オリジナルの漢字を使う場合は「紅」を用いる。

<sup>3</sup> 内モンゴル自治区の行政区画として首府はフフホト市である。自治区政府の下には、盟と都市があって、盟と都市の下位単位として旗・県がある。旗と県の下には、鎮と郷があり、一番下には村がある。盟はモンゴル語でアイマグ(*ayimag*)と言い、旗はホショー(*qoshiyu*)という。いずれも清朝時代から継承された行政区画に関する用語である。

ウラーンムチル (*Ulayan möcir*) とはモンゴル語で、ウラーンは赤い、ムチルは枝で、ウラーンムチルで「赤い枝」を意味する。これは毛澤東の『文芸講話』(1942)にもとづく。毛澤東はこの講話において、中国のプロレタリア革命事業を「大樹」と例え、文芸・文化工作はその中の一つの「小枝葉」であるとした(内蒙古自治区文化庁編 1997a: 80)。ウラーンムチルを中国語では「紅色文化工作隊」と翻訳している。紅色は革命を象徴し、文化工作隊は文化の活動を行う団体を指す。ウラーンムチルは中国語で「烏蘭牧騎 (*wu lan mu qi*)」とも表記する。烏蘭はウラーンの音訳であるのに対して、牧騎は「ムチル」の音を表すと同時に、「牧畜民」と「騎馬」の意味も含む。馬に乗って社会主義を実践する牧畜民というのが「烏蘭牧騎」の字義になろう。またウラーンムチルは馬や馬車、或いは徒歩で、少人数で行動する性質から「社会主義文芸軽騎兵」とも呼ばれている(シンジルト 2010: 185)。

ウラーンムチルは、1950年代に内モンゴルで誕生したアマチュア文芸団体であった(シンジルト 2010: 185)。その字義どおり、ウラーンムチルとはダンスや歌、歌劇などの文芸活動を通して、主にモンゴル地域の牧畜民や農民に対して社会主義思想の普及を目指したものだ(内蒙古自治区文化庁編 1997a)。ウラーンムチルは、1964年から全国巡回や全国少数民族アマチュア文芸コンクールを経て、国家首席の毛澤東や周恩来らと会見し、『人民日報』と『北京日報』など中国共産党発行する新聞にウラーンムチルに関する紹介記事、文芸評論が掲載された。その結果、ウラーンムチルは、説明されるべき「固有名詞」ではなく、一般的で誰もが知っている「普通名詞」として使用され始めたという(シンジルト 2010: 195-201)。ウラーンムチルは中国共産党の政治宣伝を担って 64年以上の歳月を経て、その数は増減を繰り返しながら 2021年現在は 75 団体まで増加した。

こうした中で、2017年8月にシリントグ盟のスニド右旗ウラーンムチルは、ウラーンムチル創立 60 年をきっかけに国家主席習近平に手紙を送った。そして、その3ヶ月後、11月21日に習近平からの返信(手紙)を受けとった。この返信を受け、全内モンゴル自治区で「ウラーンムチルから学ぶ」という政治ブームが沸き起こった。具体的には内モンゴル自治区政府から各ウラーンムチルに大型バスが配られ、その公演活動は例年の数倍にも増えた。牧畜民と農民を対象にしていたウラーンムチルが旗・県の範囲を超え、通遼市、赤峰市、フフホト市など約 50 万人から数百万人規模の大都市でも公演を行うようになった。さらに、1980年代の政策の下で盟・市の歌舞団や劇院に変更されていたウラーンムチルが次々にその名を復活させた。例えば、「アラシャー盟民族歌舞団」が「アラシャー・ウラーンムチル」に、「赤峰市民族歌舞劇院」が「赤峰市直属ウラーンムチル」に、「興安盟民族歌舞団」が「興安ウラーンムチル」というふうに復活したのである。その後、2019年11月に「ウラーンムチル条例」が新たに制定され、条例には国家主席の習近平の手紙を基に、1985年に制定されたウラーンムチル条例にあった公演、宣伝、指導、奉仕の4つの基本機能にプラスして、演目の創新、演目の創作、保護と継承民族・民間の文化及び対外文化交流活動を行う8つの基本機能まで増えた。新たな条例において注目に値するのは「習近平新時代の中国特色

社会主義思想」を指導するという項目が新たに加えられたことである。さらにウラーンムチルのブランド意識が条例に提示され、各旗・県のメディアがウラーンムチルの作品の宣伝を担うように制定され、その役割はより拡大している。

本論文は社会主義中国の共産党政権の下で 70 年間にわたって行われてきた内モンゴルにおける文化政策の特徴とその変遷を明らかにすることを目的としている。そのため、モンゴル人<sup>4</sup>を中心に創られた芸術歌舞団の中で、ウラーンムチルを取り上げる。同時にウラーンムチルがどのように政治宣伝及び民族・地域文化の創造を担ってきたのかを検討する。

## 2 国家と民族の形成に関する研究

### 2.1 国家と民族に関する研究

国民国家の形成においてメディアの果たした役割は大きい。アンダーソンは国家・民族・国民国家を「想像の共同体」と解釈した。この「想像の共同体」は主にメディアの宣伝によるものであるという。アンダーソンによれば、「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意志決定主体〕として想像される」ものである(アンダーソン 1987: 17)。即ち、国家・民族・国民はすべて想像の共同体に過ぎない、「国民は〔イメージとして心の中に〕想像されたものである」(アンダーソン 1987: 17)。アンダーソンは、国民は自然に生まれたものではなく、歴史的に創られた概念であるとした。特に資本主義経済の成立と印刷技術の発展による情報の共有が国民国家、即ち政治共同体の成立に大きな役割を果たしたという。中国における中華民族は、経済の成立と印刷技術以外に強制的な政治宣伝を通して創られている。この政治宣伝は、文芸、歌舞団、メディアなどさまざまな媒介を通して表現されている。本論は文芸、歌舞団を事例に中国における民族の形成について論じる。

ネイションと国民、マイノリティーについて、バーバはアンビヴァレンス（両面価値-両義性）を提出した。バーバは、ネイションと文化の相克について「ネイションは、文化的差異が社会の「水平」な視点のもとに同質化されるようなモダニティの記号ではない。ネイションは、その両義的に揺らぐ表象を通して、自ら社会的今日性を生きるための規範たることを主張する民族誌へと道を開いていく」とした（バーバ 2009: 73）。バーバは、ネイションを記述する際には「固定化されたナラティブ」と「行為遂行的ナラティブ」という両義的性質があり、亀裂を引き起こすという。さらに、「民族とは、均質な共感の共同体としての「社会性」が持つ全体化の力と、その内部で競合する不平等な利益とアイデンティティに向かって個別に働きかける諸力とがせめぎ合う場所にほかならない」という（バーバ 2005: 250）。バーバは、文化的価値の相容れない文化的差異の抗争を「文化的な抵抗とは、認識の地平を移動させてあり「陣地戦」を行う能力のことなのであるが、そのような行為を通して意味の新たな形態が確

<sup>4</sup> 本稿では、中国国家内の民族分類の族を人に使う。但し、引用資料やオリジナルの意味で使う場合は、漢族、モンゴル族というように族で表記する。

立され、アイデンティティ形成の戦略もまた新たに案出されることになる」と分析した（バーバ 2009 : 101）。国民について、「国民とは、単なる歴史的事象でも愛国的な政治体の一部でもない。かれらは社会的指向という複雑な修辭的戦略として存在しているのだ」と述べている（バーバ 2009 : 64）。本論は、中国のモンゴル人に対する中華民族とモンゴル民族という概念にこうした議論を展開しつつ、国家と民族の相克としてのモンゴル文化の存続と創作について考察する。つまり、マジョリティーとしての漢人主導の国家とマイノリティーとして存続するモンゴル人による文化の両義性について焦点を当てる。

## 2.2 中国の民族形成に関する研究

1949年10月1日、中華人民共和国が成立後、中国共産党は国民統合として民族識別工作を行っていた。そして、この民族識別工作によって、さまざまな少数民族が誕生した。中国のこうした少数民族の形成について、松村（1993）は雲南省の少数民族を事例に国民統合の視点から検討した。松村は、近代国民国家の形成問題を大きく二つに分けて論じている。一つは、国民統合論であり、もう一つは、エスニシティ論である。前者は、中央政府の視点から民族集団が近代化政策に対してポジティブに対応していく過程である。後者は、民族集団の視点から中央政府の近代化政策を捉えなおし、彼らの伝統性に注目しそのネガティブな対応を強調する傾向を持つという（松村 1993 : 51）。中華人民共和国が成立し、共産党が雲南省で権力を握った後、少数民族に対し、民族関係の回復、生活援助、民族調査の三つの方法で国民統合を試みた。「民族関係の回復」とは、中国成立以前から残っていた欧米列強や国民党の影響力という民族上層人の離反は政府にとって脅威であるため、共産党は彼らに経済的・政治的に譲歩し、共産党幹部に吸収した。「生活援助」とは、少数民族の貧窮状態を救い、隣接国の経済的影響力を弱体化し、最終的に少数民族の共産党へ信頼を得ようとする。「民族調査」とは、少数民族の実態を把握し、民族識別工作により「民族」の再編成または統合を行なうことである（松村 1993 : 59-61）。

中国の民族政策と民族問題をめぐり、更なる研究が進んでいる（毛里 1998 ; 加々美 2008 ; リンチン 2015 など）。まず中国の民族の形成について、（毛里 1998）は、中国の民族とは 1950 年代初から始まった民族識別工作により「上から作られ」、あるいは「発掘される」プロセスとして生まれたという（毛里 1998 : 74-75）。中国の民族を語る時、民族を一つの自明の単位としてアプリアリに存在するものでなく、「民族」は近代資本主義が生み出した概念であり、原始共同段階の部落や部族を「民族」というのは不適當であるとしている（毛里 1998 : 67-74）。毛里は、さらに中国の民族弁別についてこのように述べている。

1000 年以上の歴史と文化をもち、かつてユーラシア大陸を制覇したモンゴル人も、見つかったばかりの、文字も共通の歴史的記憶も持たない数千人規模の小さいエスニック・グループも、民族平等というスローガンで一括りにしたこと、南と北の歴

史的違いや漢族との関係の違いをほとんど考慮に入れずに民族弁別の基準を作っていたこと、これらが中国の民族問題の根底に複雑な影をおとしていることは否めないのである（毛里 1998 : 66）。

中国では、こうした民族識別工作により、自主登録を行った民族の数は 1953 年 6 月の人口調査では既に 400 余りに上った（加々美 2008 : 99）。しかし、当時、民族として認めず、その後も民族識別調査を行い、最終的に費孝通らによって 56 の民族が誕生した。この 56 民族の形成において、費孝通が果たした役割は大きい（毛里 1998 ; 加々美 2008 など）。

中国の民族自治政策については 1947 年 5 月に成立した「内蒙古自治政府」を雛（ひな）型とするものの、国策として固まるのは 1951 年～1952 年にかけての時期である。中国共産党は中華人民共和国が成立以前、少数民族に対し自決権を認めていた（加々美 2008 : 96）。「内蒙古自治政府」成立以前の 2 年前の 1945 年 4 月に、毛澤東は延安における中国共産党第 7 回大会で「連合政府論」を提示し、各少数民族に民族自決権<sup>5</sup>を与え、漢民族と連邦国家を建設すると宣言していた。しかし、この宣言が 1946 年の 1 月に中国共産党と国民党が協定した「平和建国綱領」によって変更されている。「平和建国綱領」では、少数民族にとっていた民族自決権が民族自治権に変更された（毛里 1998 : 38）。民族自決権では、少数民族の連邦国家を認めるが、民族自治権では、中国領域内での民族としての文化的権利しか認められない。さらに、自治共和国や分離を一律認めないとした（毛里 1998 ; 楊 2013）。また、中国成立後、1951 年 12 月の毛澤東の声明により自決権が明確に否定され、区域自治権が主張された（加々美 2008 : 96）。このように民族政策の方針が区域自治へと交換する中で、1958 年より農業と牧畜の集団化や定住化政策などが実施された。リンチンは 1950、60 年代の中国共産党の内モンゴルにおける民族政策とその実施過程を土地改革、牧畜業における集団化、モンゴル言語・文字使用の実態及び放牧地開墾と人口問題に焦点を当て克明に描き出した（リンチン 2015）。

### 2.3 中華民族の形成に関する研究

中国では公的に 56 の民族がいるとされている。他方で、この 56 民族を「中華民族」ともしている。「中華民族」について「中華民族が内包する 50 余の各民族単位は多元であるが、中華民族としては一体的なものである。両者はともに「民族」と称するが、次元が異なる」と費孝通は論じた（費 2008 : 13）。本来は 56 の民族を中国国民というべきであるが、費は国民と区別し、56 民族を「中華民族」という次元が異なる民族と解釈している。つまり、「現在、中国の流域内には 56 の民族が存在し、各民族にそれぞれの民族名がある。しかし、同時に、56 の民族には中華民族という共通の民族名が

<sup>5</sup> 「自決権とは、即ち民族の各自の希望に従って政治を行い得ることの謂いである。そは自治の原則の上に自己の生活を打ち立てる権利を有する。そは他の民族とともに連邦関係を作る権利を有する。そは完全に分離する権利を有する」（スターリン 1928 : 343）。

ある」(谷 2008 : 65)。「したがって彼(費孝通)は後に 56 の民族が基層であり、中華民族が上層であり、民族のアイデンティティは異なる層を持ち、それは矛盾しないという「多層論」を特に引き出した」(周 2005 : 83)。

費孝通のこうした「中華民族」論は多元でありながらも、中心を定め、中国におけるあらゆる民族に中心的な一つのアイデンティティを求めた理論である。費は 1988 年に、香港中文大学で最初にこの理論を発表し、翌 1989 年に『中華民族の多元一体構造(中華民族多元一体格局)』として公表した。「中華民族」論について実は、清朝崩壊前後に、孫文らは一時「五族共和」論を提唱していた。孫文を代表する漢人らは清朝の専制を脱し、新たな国を作るため、優秀な漢民族と少数の野蛮な夷狄という「華夷の別」に言及し、「大一統」を強調して「五族共和」論を展開した。さらに、「五族共和」の観点から「五色旗」が国旗にふさわしいものとして推薦された(横山 2009 : 98)。その「五色旗」の紅、黄、藍、白、黒色はそれぞれ漢、満、モンゴル、回、チベットを象徴する。しかし、元々「五族共和」に不満であった孫文らは清朝崩壊後、間もなく「中華民族」論を提唱した。「孫文は「同化」政策を正当化するため、「中華民族」という新概念を提出した。漢民族と、漢民族に「同化」した少数民族を総称して、「中華民族」と呼ぶという新提案である」(横山 2009 : 108)。「梁啓超や楊度に源流を發し、孫文や蒋介石をはじめ多くの権力者によって強調されるに至った「中華民族」というイデオロギーは「後發国でもドイツや日本のように単一民族国家に近いほど生存競争に生き残ることが出来る」という思い込みのもと」であった(平野 2014 : 194)。こうした中で生まれたのが「中華民族における少数民族」という概念である(平野 2014 : 194)。この「中華民族」論は中華民国から中華人民共和国まで続く。しかし、80 年代になって費孝通が改めて「中華民族」論を創り出した。

費のこの「中華民族」論は中国共産党の国民統治の理念として導入され、今日に至っている。しかし、「中華民族というのは政治的な概念であって、民族学上の名称としてふさわしくない」という疑問がある(西澤 2008 : 340)。他方で、少数民族にとって「歴史的に見て「漢化」か、それへの「抵抗」という選択肢しかもち得なかった彼らにとって、現状のままでいいという「多元」の全面的肯定は、心強い支えとなったようである」としている(西澤 2008 : 352)。こうした中で、少数民族の「各地で民族アイデンティティの再構築が活性化している」のである(西澤 2008 : 352)。費の強調した「中華民族」はそもそも国民に近い概念であるが、費はあえて国民という概念を使っていない。少数民族にとっての国民という宣伝が十分なされていない場合、一気に国民と呼ばれることは、民族が否定されたと同じく立場に置かれる。こうした配慮から費は国民でなく、国民の代替概念として「中華民族」を提示している。

「中華民族」というのは、「想像の政治共同体」として創られた概念といえる。しかし、中国の社会主義制度では、この「想像の政治共同体」は、もはや想像でなく、政治の力で創られた実在の共同体である。こうした中で、モンゴル人は文化的に「モンゴル民族」というカテゴリーを保持し、政治的に「中華民族」という「ネーション」

の両義性を持つことが求められてきた。その装置の1つが本論文で取り上げるウラー  
ンムチルである。

### 3 文化政策に関する研究

#### 3.1 文化政策の概念

中国共産党は、政治宣伝としての文化政策を実行してきた。まずこの「文化」につ  
いて、英国の人類学者であるタイラーは「文化」を「知識、信仰、芸術、道徳、法、  
習慣、その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複  
合的な総体」であるとする (Tylor 1871 : 1)。ウィリアムズは「文化」の範囲をその歴  
史的な意義によって独立した抽象名詞としての「知的、精神的、美的発展の一般的過  
程」を表す「文化」と生活様式としての「ある国民や時代や集団の定義」を意味する  
「文化」として扱った。またタイラーの定義と似た「音楽、文学、絵画、彫刻、演劇、  
映画」を含むあらゆる定義の総体を近代的な文化定義論として用いた (ウィリアムズ  
1980 : 109)。次に政策とは、「①政治の方策。政略。②政府・政党などの方策ないし施  
政の方針」(「政策」の項目を参考)である。そして文化と政策の合成語としての文化  
政策とは、「国、地方公共団体及び一定範囲の文化に関する権限を付与された独立行  
政法人等による文化に関する施策の総体と観念される」(根木 2010 : 12)。

文化政策の中でも、本論は生活・慣習と区別し、文学・芸術における文化政策を検  
討する。特にウラーンムチルは芸術歌舞団であることから、芸術という概念に深く関  
連する。先行研究では、芸術のジャンルを「空間芸術 (spatial art)、文学芸術 (literary  
art)、劇芸術 (choreutic art)、音楽芸術 (musical art) などの区分、範疇、ジャンルに分  
つことが行われている」という (稲垣 1952 : 164-165)。さらに、これらの芸術につ  
いて以下のように解釈されている (稲垣 1952 : 165)。

空間芸術の中には、彫刻、デッサン、絵画、写真のような造形芸術 (plastic art) や  
グラフ芸術 (graphic art) が理解されるとともに、これらを結合した建築芸術がある  
と理解されている。文学芸術の中には、詩、雄弁、小説、物語 (story-telling)、説  
話 (narrative 浄溜璃、講談、浪花節、落語、漫才)、シナリオ、リブレットの芸術  
が考へる。劇芸術の中には、歌舞伎、能狂言、新派劇、新劇、人形劇、放送劇を初  
めとし、舞踊、バレエ、默劇および言葉を伴う広義の演劇 (劇的上演物 dramatic  
presentation - ページェント、レヴェー、ショー、シュプレッヒコール=呼びかけ)  
が含まれる。

本論に事例とするウラーンムチルの演目は主に稲垣の指摘する文学芸術と劇芸術  
に含まれる詩、小説、物語、漫才、人形劇、舞踊などである。さらに音楽芸術として  
のオペラもある。

### 3.2 文化政策の主体

文化政策の主体について、「各国の文化政策の在り方には、その国の芸術・文化を支援してきた社会の歴史が反映されている。アメリカ合衆国では、美術館や芸術団体の多くが非営利組織として存在し、その財源を支えているのは寄付や政府からの公的支援である」（後藤 2001 : 8）。

さらに「ヨーロッパの国々では、政府に直接支援が行われているが、これは、王侯や貴族によるパトロネージの歴史が、近代以降、国家によって継承されたものである」（後藤 2001 : 8）。

日本では、「近世には農村舞台など村落共同体の生活に根ざした芸能が広く存在し、共同財として支えていたが、近代国家は、こうした市民による伝統を断ち切る形で、西洋の美術や音楽を取り入れるという文化政策を開始している。近世に共同財として存在した芸術・文化は、近代以降、国家が行う共同財としての芸術・文化と私的財としての芸術・文化に乖離し、最近まで接点を見いだせずにいたのである」（後藤 2001 : 8）。

中国では、政党集団、法律機構、政府のリーダー及び核心的な人物は文化政策を決定する主体群である（胡 2015 : 34）。こうした中で、ウラーンムチルは中国共産党が主体として支援するものである。

### 3.3 文化政策の機能

文化政策の機能について、「文化政策は統制とセットで講じられるべきものと認識されていた」（武田 2018 : 7）。「文化政策とは、芸術を発展させるのみならず、国家のアイデンティティの強化や雇用の創出、付加価値の創出といった目的を達成するために芸術を活用することでもある」（クサビエ 2007 : 14）。

後藤（2001 : 34-36）は文化政策の動機についてこのように述べている。

1. 国家の威信、国民のアイデンティティに繋がる。
2. 地域の経済発展に繋がる。
3. 国民の教育するに役立つ。
4. 福祉国家の建設に文化が重要な構成要素になる。

諸社会主義国家の初期から、文化政策は国家の凝集力や軍隊の宣伝や革命の武器として利用されてきた。

ソ連では、1920年代～1930年代に政治と文化教育を行うため基層機関、工場、住宅地、団地内には、農村文化館や紅角（赤いコーナー）<sup>6</sup>という文化や教育に関する施設を設けていた（王編 2000 : 172）。またソ連の労農赤軍（旧ソ連邦の陸軍の旧称）に

---

<sup>6</sup> 『角』は工作する部屋を指し、『赤』はソ連の社会主義制度に関する革命性質的な文化教育活動を指す（王編 2000 : 212）。красный угол (クラスヌイ・ウガロク)。直訳すると「赤い角＝コーナー」。日本語訳は「赤い部屋（ソ連邦の政治・文化啓蒙施設のある部屋）」（井桁 1980 : 1009）。

も歌舞団を設けていた。「ソ連の赤軍歌舞団が 1928 年に創立された。A・アレクサンドロフ (A.Alexandrov) <sup>7</sup>教授は歌舞団の指導者と指揮を務め、最初は僅か 12 人の歌手と舞踊者がいた」(夏編訳 1950 : 6)。

当時、中国の共産党軍にも以上のような施設として文工団が設置されていた(松浦 2000a : 41-42)。文工団は、共産党の政治宣伝、イデオロギーとして原作は延安魯迅芸術学院とある歌劇「白毛女」を演じていた(松浦 2000b : 166)。こうした文化施設の影響の下、内モンゴル自治区では、ウラーンムチルが文化館をもとに創立された。「文化館(当時は人民文化館と呼ばれた)とは、民国期に民衆教育館と呼ばれていたものが人民共和国の成立とともに改組されたもので、言うなれば総合的「社会教育」施設である」(戸部 2015 : 211)。文化館は旗の中心街にあり、固定された場所で移動できない。ウラーンムチルは、小規模で移動性があり、かつ総合性の歌舞団として活躍した(T.アルタンバガナ 2020)。

モンゴル人民共和国にも、1920 年代にモンゴル人民革命党のイデオロギーを普及するため「Ulaan ger」(ウラーンゲル)を設けていた。ゲルはフェルトをかぶせ作った家屋である。ウラーンゲルは「赤いゲル」という意のモンゴル語で、モンゴル・ゲルにおける文化施設である(Marsh 2006 : 292)。また、モンゴル人民革命党は大衆のプロパガンダの手段として歌と歌を用いた演劇、映画などを作っていた(木村 2013 : 267)。さらに、同党はモンゴルの王公・ラマの搾取を批判した階級闘争のポスターや社会主義思想を讃えたプロパガンダ芸術のポスターも数多く作っていた(Konagaya et al. 2020)。このようにモンゴル人民共和国時代、歌、演劇、文学、絵画、映画などの芸術活動は同党の政策に則った社会主義国家の宣伝活動であった(木村 2013 : 270)。

こうした影響を受け、内モンゴルにおける中国共産党による文化政策は 1940 年代から始まったものである。内モンゴルの文化政策は、当時は国家・民族のアイデンティティを強化するために作られていた。現在の文化政策にも当時の機能が継承されている。他方で地域の振興と民族の伝統文化の継承という機能もある。中国の文化政策の研究者胡(2015 : 11-12)によれば、文化政策の機能は四つあるという。

1. 制約の機能である。国家権威による文化政策は人、社会及び国家の文化行為を約束する。
2. 指導の機能である。文化政策のイデオロギー的な性質によるものであり、政府は人々及び社会の文化行為における公共文化の利益の損失を守るために指導の機能を発揮する。
3. 調和の機能である。異なる文化による利益の衝突を避けるために調和の機能が必要である。
4. 分配の機能である。国家は国家戦略における文化資源のコントロール以外に、如何なる個人や社会組織に対する文化特権が存在しない。それは文化政策の下での文化資源の再分配によるものと考えられる。

---

<sup>7</sup> 明らかな誤植などは筆者が訂正した。原著には A.Alexanarov と書いてある。

社会主義諸国家で、文化政策は上述したように政党のイデオロギー、国家、民族のアイデンティティの強化、国民統合の役割を果たしてきた。本論は内モンゴルにおける社会主義中国の共産党政権下での文化政策を分析するため、以下は中国の少数民族の文化政策に関する先行研究を検討する。

### 3.4 中国少数民族の文化政策に関する研究

中国少数民族の文化政策として中国共産党が少数民族にとっての公共文化政策、言語・文字の政策、新聞・メディア・出版事業などに関する政策が論じられている（楊 2013）。中国共産党の少数民族にとっての文化政策が国家の凝集力を促し、民族地域の経済発展に貢献したという研究もある（劉 2013）。

ほかに少数民族の地域として雲南省における少数民族の文化政策の実施状況について分析した論文では、雲南省の少数民族の言語・風俗・書籍・文物・民間の無形文化財に関する法律について少数民族は自らが十分に把握し、活躍できていないため、政府から主導する必要があるとされている（呉 2014）。

延辺の朝鮮族における中国共産党の文化政策の実践について、公共の文化インフラの建設、伝統文化の継承と保護、広告・メディア・出版事業と民族文化の産業、民族文化の人材育成が事例に論じられている（陳 2018）。

近年、少数民族には「中華民族の共同体」という概念が再び強調されている。こうした中、中華人民共和国成立 70 年における少数民族の国家承認に関する民族政策の研究がなされ、中国が成立して以来から現在までの共産党の少数民族にとっての民族政策が論じられている（廖 2020）。

新時代のチベット族大学生の中華民族文化の承認に関する研究もある（曹 2021）。中華民族文化の承認とは、各民族が中華民族という大家庭の文化生産に関する帰属感とそれを創造しているという自覚をいう（曹 2021 : 143）。

さらに、少数民族の音楽・舞踏芸術を対象に、少数民族の文化政策の改善すべき点が指摘されている。この研究では、近年少数民族の音楽・舞踏芸術が破壊され、なくなっている点が多いと指摘している。そのため、音楽・舞踏芸術の伝承と保護を促進し、少数民族の文化政策を強化する。さらに、少数民族の音楽・舞踏芸術について詳細に分類し、産業化する必要があるとしている（李 2016）。

上述したように中国における少数民族の文化政策では、様々な研究がなされている。しかし、少数民族のイデオロギー、伝統文化の創造という概念による研究はない。

### 3.5 ウラーンムチルに関する研究

ウラーンムチルの研究はその政治性や少数民族の文化政策、文化資源の視点から着目したもの（シンジルト 2010 ; T.アルタンバガナ 2017 ; 紅 2019）や中国の大衆路線教育としてのウラーンムチル及び文化パフォーマンスとしての社会的な役割（T.アルタンバガナ 2018;2019）や内モンゴル自治区の東部地域を事例に 1990 年以降の活動状

況を論じたものがある（紅 2013）。またウラーンムチルの制度とウラーンムチルの草創期（1957-1965年）、文革期（1966-1976年）、回復期（1977-1989年）の演目について筆者は研究を重ねてきた（T.アルタンバガナ 2020）。

これまで内モンゴルにおけるウラーンムチルの役割は中国の国民統合や内モンゴルを宣伝するための道具と言われてきた（シンジルト 2010）。さらに、ウラーンムチルはその発展形態から内モンゴル文工団<sup>8</sup>と比較して「専門性、制度性、権威制」はなく、「大衆性」を特徴とするとされる（シンジルト 2010）。つまり、その活動の対象は牧畜民、農民、労働者、兵士（軍人）、教職員や学生などであった。それゆえに、ウラーンムチルは特にその草創期において社会主義思想を宣伝するという役割を持つとともに、民族文化を普及することを役割としていたとされる（紅 2013 : 157）。ここでいう民族文化とは牧畜文化である（紅 2013）。

シンジルトは、内モンゴルが外部に与えてきた一連の影響を、「内モンゴル・インパクト」と呼び、このインパクトを明確に表現してきたのは、内モンゴルを発信地とするウラーンムチル現象であるとする（シンジルト 2010: 187）。ウラーンムチルはモンゴル族的なものとして展開され、内モンゴルを基準として中国モンゴル族的な共通点の確立に寄与してきた（シンジルト 2010: 209）。つまり内モンゴル自治区以外の人にウラーンムチルは、モンゴル族のカテゴリーを巡り、中国モンゴル族のイメージーションとして働きかけてきた。

ほかに無形文化遺産とウラーンムチルの関係を中心に論じたのが阿木爾（2020）である。阿は、フルンボイル市の新バルグ左旗のウラーンムチルを事例にウラーンムチルは地域文化の運び手であると同時に、モンゴル族の伝統文化を継承しているという（阿 2020 : 3）。

シンジルト（2010）や紅（2013 ; 2019）の研究は国家政策への批判的検討を主眼とする。阿（2020）の研究は伝統文化や地域文化がア priori に存在するものとしている。

## 4 文化の創作に関する研究

### 4.1 伝統の創作に関する研究

国民国家の形成や多民族国家の形成において、民族が創られる一方、文化も創られている。中国では、民族は民族識別工作により「上から作られ」、「発掘される」（毛里 1998）とともに、文化も大量に創作されている。こうした文化の創作に関する研究では、ホブズボウム（1983）やレンジャー（1983）の研究が著しい。彼らの研究によれば、英国という国家の形成において、大量の伝統が創り出され、構築され、制度化されている（ホブズボウム 1992）。また文化は民族的な概念に合わせて、利用され、不断的に修正されている。「現存する慣習的、伝統的慣行—民謡、競技、射撃—は新たな

---

<sup>8</sup> 内モンゴル文工団は、1946年4月1日に張家口で創立している。1953年に「内モンゴル歌舞劇団」に改名し、1956年に「内モンゴル歌舞団」に改名した（シンジルト 2010 : 190）。

民族的な目的にしたがって修正され、儀礼化され、制度化された」(ホブズボウム 1992: 16)。文化のこうした創作は、英国だけでなく、ヨーロッパを始めインドや、さらに植民地の成立においても大量に作られた。特に「1870年代、1880年代そして1890年代は、教会、教育、軍事、共和制、君主制など、ヨーロッパで創り出された伝統が大きく花開いた時代であった」(レンジャー1992: 323)。アフリカにおける植民地では、「入植者たちは、ヨーロッパで作られ出された伝統を利用して、自分たちの役割を明確にし、正当化した」(レンジャー199: 324)。

以上は英国、ヨーロッパを始め、インド、アフリカの植民地で創られた文化(伝統)の事例であるが、国家の形成において、中国でもこうした文化の創作の一端を担ってきたのが、ウランムチルである。本論はウランムチルの演目の分析から社会主義中国におけるモンゴル人の中華民族への統合とモンゴルの伝統・地域文化の創出を克明に描き出す試みでもある。

#### 4.2 内モンゴルの行政区画の改革に関する研究

内モンゴル自治区の成立当時において、中国共産党は積極的にモンゴル民族の文化的なものを継承させ、発展させていた。例えば、内モンゴル自治区について、中国の行政制度における「自治省」(*zizhi sheng*)ではなく、省の代わりに区として「自治区」(*zizhi qu*)と名付けた。

さらに地方行政区においても、中国の行政制度の市・県や郷・鎮や村に代わって、清朝から受け続けていたモンゴルの行政制度のアイマグ (*aimag*, 盟)<sup>9</sup>やホシヨウ (*hoshuu*, 旗)、ソム (*sum*, 郷)、ガチャ (*yacha*, 村)をそのまま使用した。しかし、これが1970年代から始まる中国の行政制度の改革により変更されていく。それは、自治市化(都市化)というプロセスである(Bulag2006)。モンゴルのアイマグとホシヨウの行政制度は自治市(地級市)に変更されていく。このプロセスでは、まず1976年までに三つの地域が歸綏市(归绥市)からフフホト市、包克図県から包頭市、烏達市と海勃湾市が合併し烏海市に変更され、その後4つの地域が都市として追加設立された。具体的には、1983年にジョーオダ (*Jo'uda*) 盟が赤峰市に、1999年にジェリム (*Jirim*) 盟が通遼市に、2001年にイクジョー (*Yekeju*) 盟がオルドス (*Ordos*) 市に変更され、2002年にフルンボイル (*Hülünbuir*) 盟がフルンボイル市に変更された。この中で、フルンボイル盟だけが元地域の名前が維持された(Bulag2006: 57)。この変更は、行政制度上の単なる地域名の変更だけでなく、地域の文化・アイデンティティ、そのすべての変更を意味する。

#### 4.3 内モンゴルの文芸の創作に関する研究

文芸の分野においても、こうした文化の創作はより顕著である。内モンゴルには、日本でよく知られる『スーホの白い馬』という民話がある。しかし、この民話ははる

---

<sup>9</sup> 本論文では、必要なモンゴル語の表記はモンゴル文字のラテン文字転写で表現する。

か昔からあったものではなく、中華人民共和国が成立して間もなく創られた民話であることが明らかにされている（ミンガド 2016）。『スーホの白い馬』が内モンゴルで書物によって初めて知られたのは 1956 年で、それは塞野<sup>セノイキ</sup>の書いた『馬頭琴—内蒙古民間故事』によってである。この物語が日本に初めて紹介されたのは、1961 年 10 月に発行された月刊絵本『こどものとも』に掲載された『スーホのしろいうま』によるという（ミンガド 2016 : 14-16）。また馬頭琴演奏者であるチ・ボラグの自伝『馬頭琴と私』（2001 : 502）によれば、塞野とサンドールンという人物が 1950 年～1953 年の間に、旧チャハル盟（現シリングル盟）のドロンノール地方の民間芸人の語った伝説を記録し、1958 年からサンドールン氏が内モンゴルのメディアで取り上げたという。またチ・ボラグは、自伝において、『スーホの白い馬』は社会主義国家における階級闘争の過程で創作された物語ではなかったのか。私の知る限り、解放前<sup>10</sup>の内モンゴルには、このような物語はなかったはずだ」と述べている（斉 2001 : 504）。

また『スーホの白い馬』における階級闘争の物語に通じる内容の文学作品には、『シャグデル・アホの物語 (*Šhagder soliyatu*)』、『バラガンサンの物語 (*Balyansang-un Üliger*)』、『ガーダー・メーリン (*yadamiren*)』などがある。これらの作品は、中華人民共和国成立以前からあるが、中国成立以降に発掘され、再編集され、モンゴル語の教科書に教材として引用されている。これらの作品の内容は、貧しい農民・牧畜民が封建官僚、地主、牧畜主の搾取や抑圧を暴いたものである。作品の物語は、社会主義中国が強調する階級闘争を象徴するものである。物語の主人公とその悪者は、中国共産党の強調する階級闘争であるプロレタリア対ブルジョアというイデオロギーに対応したものである。中国共産党は内モンゴルでの政権が確定した後、多くの民歌（民謡）を収集し、編集した。その中、いち早く編集されたものとして『モンゴル民歌集（蒙古民歌集）』（1949）、『東モンゴル民歌集（東蒙民歌選）』（1952）、『内モンゴル民歌（内蒙古民歌）』（1954）、『ジョーオダ民歌集（昭烏達民歌集）』（1958）などがある。これらの民歌集には、「シャグデル」、「バラガンサン」、「ガーダー・メーリン」のような階級闘争に関する英雄的、模範的人物を賛美した民歌が多く掲載された。こうした階級闘争を強調した作品は中華人民共和国が成立してから文化大革命が勃発するまで続いている。

兼重（2014 : 339-340）は、中国のこうした文芸政策について、三つの時期に分けて検討した。

1) 建国から文化大革命までの時期（1949～1966 年）である。この時期、民間文芸は経済的な側面からではなく、政治的側面から為政者によって評価され、社会主義イデオロギー（階級闘争、反封建）の発揚・宣伝が強調された。

---

<sup>10</sup> 内モンゴル自治区の成立時期は 1947 年だが、中国では一般的に中国成立の 1949 年を区切りとし、それ以前の時期を解放前という。

2) 文化大革命から改革開放政策への転換までの時期（1966～1978年）である。この時期、伝統的なものが四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）として破壊され、少数民族の文化が否定された。

3) 改革開放以降の時期（1979年以降～現在）である。この時期、階級闘争路線から市場主義経済化に向かい、少数民族の民間文芸は観光資源として民族地域の経済発展のために積極的に利用された。

本論は中国における文化の創作に関するこれらの研究を踏まえ、内モンゴルの歌舞団によって創られた「文化政策」における政治宣伝と民族の伝統、地域文化とその変遷について検討する。

## 5 主な資料の説明

本論で大きく依拠したのは、内モンゴルの文化史や、文化事業に関する資料や報告書である。さらにウラナムチルの歴史資料（内蒙古自治区文化庁編 1997a；鳥編 2002；達・朱編 2007；劉・張編 2012；達・朱・洪編 2017 など）やウラナムチル隊員に関する回想録などが出版されている（朱・吉編 2018；王・刑編 2018 など）。これらの中で、本論が依拠したのは主に以下の6つである。

①内モンゴル自治区文化庁編の『ウラナムチルの路—記念ウラナムチル建設四十周年（烏蘭牧騎之路—記念烏蘭牧騎建立四十周年）1957-1997』（1997a）である。この資料は、ウラナムチルの発展史に関する記事や新聞や公文書を掲載し、さらにウラナムチルに関する政策や計画や条例なども掲載している。

②文化館や文化庁で働いていた職員8人が編集した内モンゴル文化事業の50年の報告書『内モンゴル文化50年（内蒙古文化五十年）』（1997b）である。この報告書には、主に内モンゴルにおける芸術事業、大衆文化事業、図書館、博物館、映画事業などに関する報告が掲載されている。この報告書の劉希燕の「芸術事業」と包銀山の「大衆文化事業」が芸術歌舞団や文化事業の変化について詳しく記録している。歌舞団創立当時のデータや文芸方針なども記載されている。

③内モンゴル文化庁文化志文物志の編纂委員会と内モンゴル文化庁革命文化史料の征集委員会編の『内蒙古文化史料』（第一集,1989；第二集,1990）である。この史料には、内モンゴルの歌舞団に関する政策報告と文化事業の設立経緯などが記録されている。

④内蒙古自治区党委宣传部編の『内蒙古自治区志・宣伝志』（2015）である。本誌は内モンゴル自治区政府の所属である共産党の宣伝部が、中華人民共和国成立前後に内モンゴルで実施したあらゆる政策を記載した資料である。この資料では、内モンゴル成立当時の新聞、雑誌などの刊行物を始め、内モンゴル成立から2010年12月までの共産党の文化政策と宣伝政策が記録されている。

⑤内モンゴル大学教授であった郝維民編の『内蒙古自治区史』（1991）である。この史料では、内モンゴル自治区成立（1947）から1987年までの共産党の民族政策、内モンゴルの社会、経済、文化、教育、医療に関する詳細な記録が記載されている。本論では、大

躍進と人民公社進時代、文化大革命時代、改革開放時代における内モンゴルの文化事業と共産党の民族政策について参考にしている。

⑥文化・ラジオ局や地方誌事務局の職員である劉増軍と張仲仁編集の『オンニユート旗ウラーンムチル誌（翁牛特旗烏蘭牧騎志）』（2012）である。本誌は本論で事例として取り上げるオンニユート旗ウラーンムチルの創立から2012年までの組織の構成、上演作品、上演活動、奉仕<sup>11</sup>、隊員について中国語でまとめたものである。

## 6 研究方法

本論はウラーンムチルの中でも、ウラーンムチル創立地域の一つである赤峰市のオンニユート旗ウラーンムチルを事例にする。オンニユート旗は内モンゴルの東部地域に位置する半農半牧畜地域である。もう一つの創立地域はシリングル盟のスニド右旗である。この地域はオンニユート地域と比べ、牧畜を生業にしている。中国共産党は、ウラーンムチルの性質から牧畜地域だけでなく、農業地域にもウラーンムチルを設立した。オンニユート旗はモンゴル地域であるが、漢人が約9割で、モンゴル人が約1割にすぎない。言い換えれば、内モンゴルにおける漢人にもウラーンムチルを通して中国共産党の社会主義イデオロギーを宣伝する狙いであった。

本論は、ウラーンムチルの演目をインフォーマントの語りと文献資料から分析する。インフォーマントについて、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員に限らず、もう一つのウラーンムチルの創立地域のシリングル盟のスニド右旗ウラーンムチルの隊員やほかのウラーンムチルの経験者、内モンゴル民族芸術劇院の団員、内モンゴル軍区政治部の文工団の元団員などに幅広くインタビューしている。文献資料は「主な資料の説明」で取り上げた資料などである。

## 7 本論文の構成

### 7.1 章立の構成

章立てにおいて、まず中国共産党の国家政策を分析し、次に内モンゴルの文化政策、文化事業の実態を検討する。さらに、オンニユート旗ウラーンムチルの活動とオンニユート旗のほかの文化事業について取り上げる。その上で、オンニユート旗ウラーンムチルの演目を分析し、文化政策の変遷と民族・地域文化の創造過程について考察する。取り上げる期間は、内モンゴル自治区成立以前から現在までである。ウラーンムチルの時期区分については、中国共産党の最高指導者の任期期間に準じて区分する。具体的には、毛澤東、鄧小平、江澤民、胡錦濤、習近平の順にウラーンムチル創立の1957年から現在に至るまでの6区分である。この中で、毛澤東の時代は最も長く、「反右派闘争」、大躍進と人民公社期及び文化大革命期を経ている。

---

<sup>11</sup> 牧畜民や農民を手伝い、労働することをいう。農村、遊牧地域に入り、遊牧民、農民に生活、生産サービスを行う。例えば、図書の代理販売、撮影、散髪などである（紅2013：172）。

最後に、筆者のフィールド調査としてのインフォーマント（隊員、観客）の語りを整理し、習近平時代に大きく変化しているウランムチルの活動、及びウランムチルによる政治宣伝と民族・地域文化の創造について考察する。さらにウランムチルの観客に行ったインタビューを整理する。

## 7.2 各章の内容

本論は、第 11 章から構成され、序章と終章を合わせて 13 章になる。第一章から第三章までは、ウランムチル創立以前の内モンゴルの文化政策で、第四章から第九章までは、中国共産党の国家政策とともに行われた内モンゴルの文化政策、オンニュート旗ウランムチルの現状と他の文化事業、オンニュート旗ウランムチルの演目分析である。第十章から第十一章までは、筆者のウランムチルの隊員と観客へのインタビューである。

序章では、研究背景、目的、先行研究、主な資料と研究方法について述べる。

第一章では、中華民国期の内モンゴルの文化政策について記述する。清朝崩壊後、内モンゴルは名義上、中華民国に属していたが、実際にはモンゴルの王公制が存在し、モンゴル人は軍隊を持っていた。こうした中、内モンゴルにおける文化政策は、モンゴル人民共和国と日本の満洲国の影響を受けていた。本章では、この両国の影響とともに行われていた文化政策について概観する。

第二章では、内モンゴル自治区成立（1947）からウランムチル成立（1957）までの 10 年間の内モンゴルにおける文化政策を検討する。この 10 年間、内モンゴルの共産党リーダーであったウランフーの指導で、文化事業が盛んであった。本章では、この時期の内モンゴルの文化事業の詳細とその政策について記述する。

第三章では、内モンゴル成立 10 周年を機に作られたウランムチルの誕生経緯、創立地域、概念、時期区分について論じる。ウランムチルは 1957 年に文化館を基に創立された芸術歌舞団である。本章では、以上の問題を詳細に述べ、さらに本論の聞き取り調査に協力したインフォーマントについても述べる。

第四章では、毛澤東時代前半期のウランムチル（1957-1965 年）について記述する。ウランムチルは 1957 年に知識人を批判した「反右派闘争」の最中に創立された。この闘争で、モンゴル人には「民族融合論」が提示された。そして、翌年の 1958 年から中国で大躍進と人民公社政策が行われ、内モンゴルの牧畜社会は人民公社化を実現した。本章では、こうした時代背景と政策などを触れつつ、ウランムチル草創期の演目を分析する。

第五章では、毛澤東時代後半期のウランムチル（1966-1976 年）の活動を述べる。1966 年 5 月に中国では、共産党の「極左」路線により文化大革命が発動し、政治家、文学家、芸能人、牧畜民、労働者などさまざまな人々が批判の対象になった。こうした中、ウランムチルの活動も停止され、一時的に専ら毛澤東を宣伝する「毛澤東思想の宣伝ステージ」（毛泽东思想宣传站）に変更された。本章では、こうした時代背景と文化事業の被害を述べるとともに、ウランムチルの演目を分析する。

第六章では、鄧小平の改革開放時代のウランムチル（1977-1989年）の回復状態について述べる。1976年、毛澤東の死を機に文化大革命が終結している。1978年から鄧小平が権力を握り、「社会主義近代化建設への移行」すなわち改革開放路線（政策）を提起した。この時期、文革の被害者と文化事業の回復が話題になった。さらに、牧畜地域や農業地域に文化政策の促進も行われていた。本章では、こうした時代背景と文化事業の回復を記述し、この時期におけるウランムチルの演目を分析する。

第七章では、江澤民の社会主義市場経済時代のウランムチル（1990-2001年）の活動について述べる。江澤民の時代において、民族文化が市場化、産業化された。内モンゴルでは、芸術パフォーマンス団体の体制改革が行われ、公演が市場化された。ウランムチルは市場のニーズに対応し、企業と連携し、活動を行った。本章では、こうした時代背景と内モンゴルの文化事業の実態を述べ、この時期のウランムチルの演目を分析する。

第八章では、胡錦濤の科学的発展観時代のウランムチル（2002-2012年）の実態について解明する。胡錦濤は、「科学的発展観」と「社会主義調和社会（和諧社会）」の政策を打ち出した。内モンゴルでは、「民族文化大区」に建設する方針が決められた。こうした中、ウランムチルは、サックス演奏、マジックなど新たなジャンルの演目を披露した。本章では、こうした時代背景と内モンゴルの文化事業の実態と政策を述べ、ウランムチルの演目を分析する。

第九章では、習近平の中国夢の新時代のウランムチル（2013年-現在）の活動を記述する。胡錦濤に続いて、習近平になり、「中国の夢」、「中華民族の偉大なる復興」、「新時代の中国の特色ある社会主義思想」などの政策を打ち出した。内モンゴルでは、こうした影響を受け、文芸団体は、習近平の講話内容をもとに演目を創作し、公演を行った。本章では、こうした時代背景と内モンゴルに実施された文化事業とその政策を論じ、ウランムチルの演目を分析する。

第十章では、ウランムチルの政治宣伝のプロセスについてインタビューを整理する。ウランムチルは2017年、中国国家主席の習近平の返信を受けたことにより内モンゴル政府には、ウランムチル学会が組織された。本章では、習近平の返信をきっかけに行われているウランムチル学会の活動及び政治宣伝のプロセスをウランムチルの「老隊員」のインタビューを通して解明する。

第十一章では、ウランムチルの観客に関するインタビューを分析する。筆者のフィールドワーク調査として行ったウランムチルの農村地域、牧畜地域、都市での公演をそれぞれ取り上げる。その目的は、観客から見るウランムチルはいかなるものであるのかを解明することである。最後に、ウランムチルの内部問題についてウランムチルの責任者にインタビューしたものを分析する。

終章では、本論の結論として内モンゴルの時代変化、文化政策、文化事業の変化及びオンニュート旗ウランムチルと他の文化事業をまとめた上で、オンニュート旗ウランムチルの演目からみるウランムチル隊員の構成、演目ジャンル、テーマなどを論じる。最後にウランムチルにみる民族、地域文化の創造過程を考察する。

## 第一章 清朝崩壊から 1946 年までの内モンゴルの文化政策と文化事業

本章では、内モンゴル自治区成立以前の清朝崩壊から 1946 年までの文化政策の実態を検討する。この間の内モンゴルの文化政策は、主に二つの国家からの影響を受けている。一つは、モンゴル人民共和国であり、もう一つは満洲国を通じた日本である。

清朝崩壊後、内モンゴルは中華民国の名の下にあったが、自治区でもなければ、連邦国家でもなかった。多くの王公が自軍を保有し、自領を所有していた。一方、一部の地域では中華民国の軍隊に抑圧され、内モンゴルの王公はモンゴル人民共和国や日本の協力を得ようとしていた。

こうした背景をもとに内モンゴルでは、モンゴル人民共和国による文化政策と満洲国を通じた日本による文化政策が広がっていた。

以下、本章では内モンゴルと二つの国家それぞれとの関わりについて歴史的背景を踏まえつつ、文化政策と具体的な文化事業について述べる。

### 1 モンゴル人民共和国影響下での内モンゴルの文化政策

清朝崩壊後、現在のモンゴル国ではボグド・ハーン政権（1911-1924 年）が樹立した。同じ頃、内モンゴルでは諸王公の多くが 1912 年からボグド・ハーンに帰服し、大モンゴルを建国した。しかし、間もなくボグド・ハーン政権の後盾であるロシア帝国が中華民国との関係悪化を懸念し、内外モンゴルの統一活動を阻止し始めた。

こうした動きを受けて、内モンゴルでは、内モンゴル人民革命党が組織され、内外モンゴルの統一活動が行われた。

以下は内モンゴル人民革命党の成立とその活動経緯（清朝崩壊～1930 年代）及び彼らの活動停止から活動再開（1930 年代-1945 年）までの二つの時期に区分して論じる。

#### 1.1 内モンゴル人民革命党の成立とその活動（清朝崩壊-1930 年代）

##### 1.1.1 歴史的背景

1917 年のロシア革命により、ソビエト連邦が成立した。ソビエト連邦が成立以降、ユーラシア大陸のほとんどの国家が社会主義の影響を受けるようになった。

内モンゴルもまた、その例外ではなかった。中国の公的な歴史では、内モンゴルの社会主義的なイデオロギーの始まりは中国共産党とされる。しかし、実際は内モンゴルの社会主義的なイデオロギーの始まりは中国共産党ではなく、モンゴル人民共和国である。

当時、モンゴルの一部であったブリヤートがソ連邦の加盟国として、1923 年にブリヤート・モンゴル・ソビエト社会主義自治共和国を建国した。さらに、「ボグド・ハーン政権は 1924 年にソ連の影響下にあるモンゴル人民共和国に変身する。世界で二番目の社会主義国家である」（楊 2015a : 12）。

この時期、中国には共産党が組織されたばかりであり、軍隊を持っておらず、当然政権も取っていなかった。こうした事実からも、内モンゴルのモンゴル人はモンゴル人民共和国から社会主義的なイデオロギーを取り入れていた、といえよう。

1924年にモンゴル人民共和国が成立されたことをきっかけに、内モンゴルでは内モンゴル人民革命党が組織され、翌1925年の10月に正式に成立した。さらに、内モンゴル人民革命党の指導下で、1927年に内モンゴル人民革命青年同盟（青年同盟）が作られた。

### 1.1.2 党の機関誌と革命歌

内モンゴル人民革命党は「党の機関誌『内モンゴル人民旬刊』および『内モンゴル画報』なども発行し、モンゴルの大衆に向けて宣伝活動を行った」（フスレ 2005:33）。こうした中で、1920年代に「内モンゴルを振興させる歌」、「内モンゴル人民の歌」、「内モンゴルの赤い旗」、「シネラマの軍隊の歌」などの革命歌が作られた。これらの革命歌はすべてモンゴル人民共和国の「赤い旗」や、「モンゴル・インターナショナル」（国際労働歌「インターナショナル」L'Internationaleとは別曲）といった国歌と軍歌の影響を受けて作られたものである。この時代、モンゴル人民共和国で革命歌以外に、演劇もモンゴル人民革命党の宣伝活動として行われていた（木村 2013:270）。つまり、これらの演目から、内モンゴル人民革命党の宣伝活動はモンゴル人民革命党の影響を受けていた。以下は、革命歌を事例に分析する。

「内モンゴルを振興させる歌」の歌詞には以下のように書かれている（フスレ 2005:33-34）。

赤い旗を掲げ  
故郷を防衛し  
モンゴルの各族を率いて  
前進させ、栄えさせよう  
…  
人民の願望に基づいて  
自治国家を樹立せよ  
正義を実行し/  
幸福平和な生活をともに享受しよう」

「全内モンゴルの歌」にも以下のように書かれている（フスレ 2005:36）。

人民共和の赤い旗で  
地球を覆おう  
内モンゴルの全てのホショー（旗）に  
主権を与える人民党

さらに「シネラマの軍隊の歌」にはこのように表現されている（フスレ 2005 : 37）。

赤い旗を掲げ  
国と人民を守り  
反逆者たちを  
打倒しよう

これらの歌謡の歌詞は「自治国家」を樹立する事を主旨とする。赤い旗、自由、幸福、主権、繁栄、人民共和、党、反逆者、打倒という表現からは、社会主義のイデオロギーを広めようという意図が強く窺える。フスレによると、「モンゴル人民共和国の「モンゴル・インターナショナル」の曲に合わせて作詞された「全内モンゴルの歌」は、当時の内モンゴルの「国歌」に相当していたという。これに対して、モンゴル人民軍の歌「赤い旗」のメロディーに合わせて作られた「内モンゴルを振興させる歌」は、内モンゴル人民革命党が指導する内モンゴル人民軍の歌である」（フスレ 2005 : 37）。

内モンゴル人民革命党及び青年同盟は、1930年代以降に入ると中国国民党、共産党および日・ソ連の各種条約によって左右されるようになり、また党内部、青年同盟内部の対立は激しくなり、地下に潜るようになった。

## 1.2 内モンゴル人民革命党の活動停止から再開まで（1930年代-1945年）

### 1.2.1 歴史的背景

内モンゴル人民革命党と青年同盟の活動は1930年代に入ると、地下に潜るようになった。具体的にいつからその活動が潜ったかについては、明確ではない。党内部と外部の原因で活動が一時停止され、同党による「自治国家」の樹立や「民族自決」が実現不可能となり、さらにはモンゴル人民共和国との関係も一時的に断絶した。内モンゴル西部では1937年に生まれた徳王（デムチュクドンロブ）<sup>12</sup>の蒙疆政権もモンゴル人の高度な自治権を目指していたものが、第2次世界大戦後の中国共産党の勢力の拡大により終結した。

「1945年8月、ソ連・モンゴル人民共和国連合軍の内モンゴル、中国東北への進出をきっかけに、東モンゴル、フルンボイルと旧蒙疆政府などにおいて、内外モンゴルの統一を目指す民族運動が盛んに繰り広げられた」という（フスレ 2005 : 42）。さらに「1945年8月14、ハーフンガー、ボヤンマダフらの満洲国の旧官吏は、内モンゴル人民解放委員会を組織し、ボヤンマンダフを委員長とした。18日に、内モンゴル人民革命党を復活し、同党東モンゴル中央委員会の名誉で「内モンゴル人民解放宣言」を発表し、「内モンゴル人民革命党の指導のもと、ソ連とモンゴル人民共和国の指導

<sup>12</sup> 徳王，189？-1968年、内モンゴル史上、初めて、内モンゴルの近代独立国家の創立を主張した旗王である（デレングト 2016 : 344）。

を受けて、内モンゴルをモンゴル人民共和国に加入させる」と述べ、モンゴル人民共和国に加入する願望を強く表明した」（フスレ 2011 : 98）。

### 1.2.2 拡大する革命歌

上述したように 1930 年代から地下に潜っていた内モンゴル人民革命党や、青年同盟が 1940 年代中旬から復活し、モンゴル人民共和国へ合併するというイデオロギーが浮上した。こうしたイデオロギーの下にはモンゴル人民共和国のトップ・リーダーを讃えた文芸が流行した。有名なものは「親愛なる英雄」、「我々の太陽チョイバルサン」、「モンゴル人民革命党」、「スヘバートル」<sup>13</sup>など詩歌である。これらの詩歌以外に、1942 年に「スヘバートルの英雄神話」構築ためのプロパガンダ映画として『スヘバートル』が制作されていた。このように映画はモンゴル人民共和国の国家建設であるスターリン時代の宣伝活動の手段として成立した（木村 2013 : 269-270）。

チョイバルサン（1895-1952 年）はモンゴルの政治家で、1939 年から 1952 年までモンゴル人民共和国の首相兼外相を務めた。スヘバートル（1893-1923 年）はモンゴルの革命家で、1920 年にチョイバルサンらとともにモンゴル人民党を結成し、政治や軍事指導者としてソ連の指導の元で、中華民国軍やウンゲルン軍を追放し、モンゴルの解放と革命を成功させた人物である。

「スヘバートル」と「チョイバルサン」を賛美しているこれらの文芸作品を、フスレは「モンゴル人民共和国と合併を切実に願っている内モンゴル人にとっては、やはり求心力となり、モンゴル人のアイデンティティを反映していたことは間違いない」と述べている（フスレ 2005 : 43）。その後、さらに内モンゴル人民革命青年同盟により「内モンゴル人民革命青年同盟歌」など革命歌が作られた（フスレ 2005 : 44-45）。

こうした思想の革命歌は、ほとんど内モンゴル人民革命党と青年同盟の下で作られ、彼らの機関誌などを通じて宣伝されていった。さらに満洲国で発行されたモンゴル人の機関誌である『青旗』（1941）などにも「モンゴルを復興させる詩」が掲載されていた。

しかし、1945 年に列強によって結ばれた「ヤルタ協定」と日本の敗戦及び「中ソ友好条約」によって、内モンゴルは中国共産党の支配下に入ることとなった。「内モンゴルのモンゴル人たちがモンゴル高原に住む同胞たちと統合するチャンスは、大国同士で勝手に交わされた「ヤルタ協定」によって剥奪された。中国に組み込まれた内モンゴルは中国人の植民地となった」（楊 2013 : 49）。だが、1945 年中旬から、1947 年の 5 月 1 日の内モンゴル自治区が成立するまでは、様々な政党組織が作られていた。しかし、徐々に中国共産党の勢力下に入り、それら組織は解散させられた。

---

<sup>13</sup> 「モンゴル人民革命党と国家のもといを築き、帝国主義と封建制に抗して、一九二一年の人民革命を指導したモンゴル人民の真の息子、偉大な総司令官テムディニー・スヘバートル」（チョイバルサン他著 1971 : 87）。

## 2 日本の影響下での内モンゴルの文化政策

内モンゴルのモンゴル人はモンゴル人民共和国の影響だけでなく、満洲国を通じた日本の影響も受けていた。以下は、日本の影響下にあった内モンゴルの文化政策を清朝末期～1931年までと、満洲国時代（1932-1945年）の二つに区分して検討する。

### 2.1 内モンゴル王公の革新政策（清朝末期-1931年）

「遊牧民のモンゴル人の近代的な騎兵戦術は日本から学んだ。大勢のモンゴル青年が日本の陸軍士官学校に留学して帰国・帰郷し、民族と独自の軍隊を統率した。日本もまた彼らを鼓舞しようとして、多くの歌を作った」（楊 2015b : 80）。

内モンゴル人は、清朝末期に日本から革新的な政策を取り入れていた。「光緒末年に清朝政府は国内外の抑圧を受けて新たな政策を行い、全力を挙げて危機に陥った国を救い出す方針を取った。この方針とともに、一部の国内外と接触が多い、新たな物事に対する開放的な思想を持っていたモンゴルの王公も法制を変えてモンゴルを甦るべきと考え、教育を興す政策を取った」（呉 2006 : 241）。モンゴル王公の中で一早く足を踏み出したのは、グンサンノルブ（貢桑諾爾布）という人である（sečinbatu2009）。ジョスト盟ハラチン右旗出身のグンサンノルブ親王（貢王）は 1902 年から、崇正学堂や、毓正女学堂、守正武学堂など男女子学校、軍事学校を設立していた。「光緒三十一年（1905）年に貢王は河原操子が帰国（1905 年一度帰国し、1907 年まで毓正女学堂で働いていた）際に、毓正女学堂の何恵珍、于保貞、金淑貞の三人を東京の実践女子学校に派遣し学ばせた。光緒三十二年に伊徳欽、<sup>ハミンビリグ</sup>金永昌、<sup>モンヘ布林</sup>呉恩和、<sup>テムゲト</sup>汪睿昌、于恒山を振武学堂に派遣した」（sečinbatu2009 : 106）。

そのほか、近代モンゴル騎兵の父とされるバボージャブと日本の関わりも重要である。「バボージャブは「モンゴルの近代的な騎兵の創始者」である。息子のガンジュールジャブとジュンジュールジャブ兄弟は日本の陸軍士官学校を卒業してから、モンゴルの興安軍官学校の設置に尽力した。ジュンジュールジャブは興安軍官学校の創設を提案した人で、兄のガンジュールジャブは校長を務めた。いわば、父親は近代モンゴル騎兵を組織し、二人の息子は青年将校たちをシステムティックに育成して騎兵の近代化を一層、推進したのである」（楊 2015a : 19）。バボージャブの息子らが日本に渡って留学したのは 1922 年からである。その後、間もなく満洲事変が起こる。

### 2.2 満洲国時代の内モンゴルの文化政策（1932-1945年）

#### 2.2.1 歴史背景（1932-1945年）

「1931年、満洲事変が起こり、満洲国が建国されると、内モンゴル東部地域は満洲国内にくみ込まれた」（小長谷 2013 : 429）。満洲事変をきっかけに、1932年に内モンゴルの東部地域と中国の東三省を含む地域で満洲国が建国した。「満洲事件における満洲国の建国、支那事変における日本の真意は蒙古民族の精神をふるひただせた。蒙古民族の正しい方向は日本の進路と共にあることであつた」（菊地 1943 : 26）。「一方、

満洲国外の領域においては、1937年に張家口を中心とする蒙古聯盟自治政府が察南自治政府・晋北自治政府とともに設立され、さらに1939年にはそれら3行政区を統合する蒙古聯合自治政府に発展し、1941年以降は蒙古自治邦となる」（小長谷2013：429）。徳王のこの蒙古自治邦を蒙疆政府ともいう。しかし、この蒙疆は日本側から与えられた名前であり、徳王は決して受け入れなかった。徳王はこう回顧する。「蒙古」の二字は民族のみならず、土地・人民をも意味しており、しかも「蒙古」と言えば、世界中知らない者がいないからである。これは歴史上昔から確定している名称であり、「蒙疆」と改称すれば、やはり中国の辺境であって、独立した蒙古政権ではなく、中国に隷属する地方政権を意味することになってしまうのである」（テムチュクドンロブ1991[1994]：221）。

日本人は徳王を抱き込むため、財団法人善隣協会を組織した。「蒙古善隣協会は、当初東京、次いで中国の張家口に設けられた現地法人で、純蒙地区で診療・教育・牧畜指導・踏査などに当たっていたが、日支事変後になると張家口・厚和・包頭で回民に対する文化事業を併せ持つことになる。回民診療所の開設・回民小学校における日本教育・善隣回民女塾の開設・興亜義塾の開校等がそれに当たる」（小滝2008：73）。徳王はこの善隣協会を通してモンゴル人の留学生を日本に派遣していた。派遣された留学生の中に、モンゴルの有名な詩人になったサイチンガ（ナ・サインチョクト）もいた。「サイチンガは15歳になってから学校に入り、のちにテムチュクドンロブ（徳王）の独立を目指す人材育成プログラムの選抜試験に合格して、1937年日本留学に派遣される。東京善隣高等商業学校設予科を経て、東洋大学（専門部倫理学教育科）に入学し、1941年に卒業する。1941年12月に帰国するが、早速、徳王の秘書を担当し、自治・独立・文化振興・啓蒙教育など多方面に渡って精力的に活躍する」（デレングト2016：344-345）。

徳王のこの蒙古自治邦は内モンゴルの中部地域に位置する。満洲国に組み込まれた内モンゴルの東部地域も例外でなく、エリートや、知識人らが満洲国を通して日本に派遣されていた。「1943年春、選ばれたモンゴル青年たち約100人が近代国家日本への留学の途についた」（楊2009：84）。その中に内モンゴルの元副主席であるハーフンガーや、ウラーンチャブ盟の元副盟長で後に内モンゴル人民出版社で働いていたトブシンらがいた。ハーフンガーとトブシンらは帰国して、日本の主導で近代的な学校を作った。興安学院、興安師道学校、興安軍官学校などである。同時に、興安総省の省長だったボインマンダホらと内モンゴルの「高度自治」を目指す「東モンゴル人民自治政府」を創設した。

### 2.2.2 出版物とチンギス・ハーン崇拜歌

「1932年から1945年間の内モンゴルの東部地域および東北部地域を含んだ満洲国、内モンゴル西部地域を含んだ蒙疆政権においてモンゴル語の書籍、新聞・雑誌などの定期刊行物、文芸団体や学校の機関誌などの出版が次第に増えていった。満洲国内においては蒙古会館、青旗社、蒙文編訳館などが、蒙疆政権域内では、主席府出版

社、蒙疆新聞社、蒙古文化研究所などの機関が出版活動を主に担っていた」(内田 2008: 225)。

日本人は、さらにモンゴル青年に民族主義を盛り上げられるためにチンギス・ハーン崇拝を勧め、中国人との対立を図った。「チンギス汗の進軍歌はそのまま蒙古青年の革新運動の歌となってただ進もうとばかり、じっくり腰を入れて省みる余裕さえ与えない場合が極めて多いのである」(菊地 1943: 28)。こうした中で「チンギス讚歌」、「父チンギス」、「聖・成吉思汗(チンギスカン)の歌」などが生まれた(小長谷 2013: 425-447)。小長谷は、「父チンギス」が日本の「戦友」のメロディーで作られた事を明らかにしている。「チンギス・ハーンと無関係な日本の歌が「父チンギス」という名称をもつ歌になって伝承されつつあったことから、チンギス・ハーン崇拝を巡る日本からの影響力が感得されよう」としている(小長谷 2013: 439)。また「聖・成吉思汗の歌」と「成吉思汗出征の歌」が同じ歌詞で楽譜をつけたという。さらに「成吉思汗出征の歌」を「チンギス・ハーン軍歌」とも概念化した。「この「チンギス・ハーン軍歌」については、いまのところ、作曲者も作詞者も不明である。メロディーは明らかにモンゴル民謡と異なっている。また、その歌詞には、アジアを征服し、南北を征服し、ヨーロッパを平定し、チベットと中国を平定しようとしてあり、大陸進出のムードが鮮明に表れている。この詩の内容から、日本人の主導によってモンゴル人とともにつくったのではないかと思われる」としている(小長谷 2013: 440)。

### 2.2.3 モンゴルの宣撫班と演劇活動

一方で、モンゴル青少年によって新しいモンゴルの建設・新しい文化運動が活発化した。「更に日本留学生及び中央学院、興蒙学院(何れも張家口)の蒙古少年によって新しい蒙古の建設が始まった」(菊地 1943: 27)。こうした中、モンゴル青少年たちに宣撫班が作られた。この宣撫班について菊地(1943: 29)は「蒙古における宣撫はすでに所謂宣撫ではない。日本内地において日本の戦力の増大、健全なる思想、皇道精神の向揚を具体的な事業にうつしたとすれば、それに相当するものが蒙古の宣撫である。蒙古人自身が彼らの本然の民族精神を向揚して大東亜建設に協力する民族心を喚起する事が直接の目標である」と述べている。この蒙古の宣撫班では座談会や、年一度の簡素な宴会が行われ、モンゴルの古来の音楽、民謡が歌われるようになった。「若い少年、青年達の手によって草原を背景にして、蒙古音楽のうちに祖先の遺した言葉を聞かせ、働いて見せたのである。又新しい文化の姿をみせ蒙古に今こそ再現した本然の道義を聞かせたのである。蒙古青年同盟の民族劇の創設がそれである」(菊地 1943: 29)。日本人は「モンゴル人の民族主義を鼓吹することによって、日本を利するであろうモンゴル族の独立国家を作り出そうと試みて、ある程度の成功をおさめた」(田中 1988: 2)。

モンゴルの青年達は 1940 年から演劇研究を始め、41 年に蒙古善隣協会の指導下に「蒙古民族演劇研究室」を作った。演劇研究室が成立された時点からすでに演劇が始まっていた。演劇は最初、適当な教材が手に入らず、日本の教材を参考にして創作さ

れていた。菊地は「共同研究はルナールの「にんじん」の日本訳を更に蒙古語に翻訳することから着手した」という（菊地 1943 : 31）。演劇の作品は「にんじん」、「山の神々」、「光の門」、「雨の物語」、「チンギス汗劇」、「逃げた駱駝」などであった（菊地 1943 : 22-35）。日本人はさらに、新京（現在の長春市）では満映協会を作り、『チンギス・ハーンの歌』の映画も作っていた（藤澤編 1938）。

#### 2.2.4 軍歌の制作

蒙古善隣協会以外に興安軍官学校で「陸軍興安学校校歌」、「興安軍官学校校歌」、「蒙古軍人の歌（法王進軍の曲）」が作られた。「法王進軍の曲」とも呼ばれる「蒙古軍人の歌」の歌詞にはこのように書いてある（楊 2015b : 79-91）。

…あゝ繚乱の桜花  
蘭もひとしく薫るなる  
吾学園に朝日さし  
英雄霊もかけるらむ  
…法王の軍健男子  
法鼓一度とどろきて  
論宝一度めくるとき  
四方に仰がん  
日に光

「モンゴル人の興安軍官学校も満洲国の皇帝に忠誠を尽くすことになっていたの  
で、ここでいう「法王」は溥儀を指していると理解できよう」（楊 2015b : 83）。「チ  
ンギス・ハーンの進軍歌」や、「興安軍官学校校歌」などいずれにしても満洲国の背後  
にある日本の影響が大きいことは否定できない。当時、日本人は中国の東三省を含む  
地域を支配していたことで中国人との対立が目立っていた。こうした対立を解消する  
には、モンゴル人の協力を求めていた。

#### 小結

本章では、清朝崩壊から 1946 年以前の内モンゴルにおける文化政策と具体的な文  
化事業について記述した。この時期の内モンゴルの文化政策は、モンゴル人民共和  
国と日本の影響を受けていた。

モンゴル人民共和国の影響下で、内モンゴル人民革命党と内モンゴル人民革命青年  
同盟が結成され、「自治国家」を樹立する目的の下で活動を広げていた。人民革命党  
と青年同盟の下で『内モンゴル人民旬刊』、『内モンゴル画報』など文芸に関する機  
関誌が発行された。さらに内外モンゴルの統一を掲げてモンゴル人民共和国のトップ・  
リーダーを崇拝した革命歌を作った。人民革命党と青年同盟のこうした活動は、モン

ゴル人民共和国との合併や自治国家を樹立するという政治宣伝の役割を果たしていた。

満洲国を通じた日本の影響下では、蒙古会館、青旗社、蒙古文化研究所などが設けられ、モンゴル語の書籍・新聞・雑誌などが出版されていた。またモンゴル青少年たちによって、宣撫班が作られ、座談会・宴会などが行われていた。宣撫班では、モンゴル古来の音楽、民謡が歌われるようになった。さらに、蒙古善隣協会には「蒙古民族演劇研究室」が作られ、日本の教材の下で演劇活動が行われていた。草原を背景にして、蒙古音楽のうちに祖先の遺した言葉を再現し、新しい文化を創作した。こうした中、「チンギス・ハーンの進軍歌」、「チンギス汗演劇」、「チンギス・ハーン歌」など歌、劇、映画が作られていた。日本人はこうした政治宣伝を通し、モンゴル人に民族主義的なイデオロギーを構築した。モンゴル人の協力の下で中国人に抵抗するためであると考える。

しかし、これらの活動は、第2次世界大戦の終結と満洲国の崩壊とともになくなり、中国共産党の指導下で内モンゴル自治区が成立する。次の章では、内モンゴル自治区の成立と中国共産党の指導下で内モンゴルの文化政策と文化事業について検討する。

## 第二章 内モンゴル自治区成立後 10 年の文化政策と文化事業(1947-1957 年)

本章では、まず内モンゴル自治区の成立及び中国共産党の指導下での内モンゴル文工団の成立状況を詳述する。続いて、内モンゴル文工団とほかの文化事業を紹介する。その上でウランムチルの成立過程と概念を述べる。こうした詳述を通じて、内モンゴル自治区成立から 10 年の内モンゴルの文化政策と文化事業がいかなるものであったかを検討する。

満洲国崩壊後、内モンゴルの政権は中国共産党に移る。こうした中で、中国の革命根拠地と言われる延安で育ったウランフー（雲澤）は、中国共産党の協力をうけつつ内モンゴルの政党をまとめる。具体的には 1945 年末期から内モンゴルでの共産党宣伝活動を行い、その一環として 1946 年に内モンゴル文工団を創立し、1957 年にウランムチルを創立する。

### 1 内モンゴル自治区の成立

1945 年中旬、満洲国崩壊後、内モンゴル東部にハーフンガーやボインマンダホがリードする内モンゴル人民革命党が「東モンゴル人民自治政府」<sup>14</sup>を組織した。この組織の下に、また内モンゴル人民革命青年団（青年同盟）の東モンゴル本部がウランホト（興安盟の盟庁所在地）に設置された。当時、この二つの組織から『人民の道（人民的路）』、『よあけ（黎明）』などの刊行物が発行された（内モンゴル自治区党委宣传部 2015：27-28）。

『人民の道』はモンゴル語で発行し、その内容はモンゴル族人民の革命を呼びかけることを宗旨とし、内モンゴル人民革命党の指導下で、民族の独立と繁栄を目指すというものである。内モンゴルの現状を時事的に紹介し、国民党の評論を掲載していた（『内モンゴル大辞典』編纂委員会 1991：830）。

『よあけ』はモンゴル語で発行され、その内容は、モンゴル青年の団結を導き、モンゴル民族の自由、解放と独立統一を宗旨とする。当時のソ連、モンゴル人民共和国、中国共産党の革命を宣伝し、国民党の大漢族主義を批判していた。さらに、国際社会や、マルクス・レーニン主義の理論、革命リーダーの紹介、モンゴル文学、詩歌などを掲載していた（『内モンゴル大辞典』編纂委員会 1991：830）。これら刊行物の目的はモンゴル人に内モンゴル人民革命党と青年団の活動主旨を理解してもらうためであった。

内モンゴル西部において、徳王の蒙古自治邦は 1945 年 8 月 9 日のソ連の対日参戦と日本の敗戦によって崩壊したが、その 1 ヶ月後に「内モンゴル人民共和国臨時政府」<sup>15</sup>が新たに組織されている。また同じ内モンゴル西部には、ウランフーがリードす

<sup>14</sup> 1946 年 1 月に組織されたものである（楊 2009：重要歴史事項 22）。

<sup>15</sup> 1945 年 9 月 9 日にシリングル盟スニド右旗で組織された。のちに中国共産党はウランフーを派遣し、改組が進められたとともに、中共軍の協力と共にウランフーが主席に選ばれ、拠点を中共軍の支配するシリングル盟南部の張北に移転された。その後、名前を「自治共和国」から「区域自治」に変更した（楊 2009：重要歴史事項 23）。

る「内モンゴル自治運動連合会」<sup>16</sup>も組織された。ウラーンフーのこの組織は、『内モンゴル週報（内蒙古週報）』及び『綏蒙日報』<sup>17</sup>を刊行していた（内モンゴル自治区党委宣传部 2015：27-28）。『内モンゴル週報』はモンゴル語と中国語で発行され、その内容は中国共産党の民族政策、内モンゴル自治運動連合会の方針を宣伝するものである。また地方の新聞や評論、衛生の常識、文芸作品などについても掲載していた（『内蒙古大辞典』編纂委員会 1991：826-830）。

しかし、間もなく 1946 年 4 月 3 日に熱河省<sup>18</sup>の承德で開かれた「承德」会議、もしくは「四・三会議」とも言われる会議では、中共側の軍事力を背景するウラーンフーと劉春<sup>19</sup>の圧力によって「東モンゴル人民自治政府」が解散させられ、内モンゴル人民革命党の活動は停止させられた。早速、「内モンゴル自治運動連合会」は 1946 年 5 月 3 日に『よあけ』を『大衆報（群衆報）』に変更し、さらに 1947 年 1 月 1 日に『内モンゴル自治報（内蒙自治報）』と変更した（内モンゴル自治区党委宣传部 2015：28）。

こうした中で、1947 年 5 月 1 日に内モンゴル自治政府がウラーンホト（王爺廟）に成立し、ウラーンフーが自治区政府の主席に選ばれ、ハーフンガーが副主席に就任した。劉春は内モンゴル共産党工作委員会の宣伝部部長に就任した。これは、中華人民共和国成立の 2 年半も前のことであったが、中国共産党によって主導されていた。

## 2 内モンゴル文工団の誕生とその作品及び文化政策

### 2.1 内モンゴル文工団の誕生

内モンゴルでは 1946 年に初めて中国共産党がリードする文化機構として内モンゴル歌舞団を創立した。歌舞団は当時、文工団と言われていた。「内モンゴル文工団は 1946 年 4 月に主席のウラーンフーの指示で成立した」（『烏蘭夫伝』編写組編 2007：427）。「内モンゴル文工団は自治区誕生以前の 1946 年 4 月 1 日に張家口で成立した。その基盤は、晋察冀や延安から東北へ工作活動を展開するため、張家口に滞在した共産党の文芸幹部と、張家口にあった内モンゴル軍政学院のモンゴル族や満洲族の学生だった」（シンジルト 2010：190）。

<sup>16</sup> 1945 年 11 月に中国共産党が内モンゴル西部出身のウラーンフーを担ぎだして、張家口で作った組織である。軍隊は漢人の劉春らを派遣し、監視されていたという。ウラーンフーはのちに中国共産党の軍事力を背景に「東モンゴル人民自治政府」と中西部の「内モンゴル人民共和国臨時政府」を乗っ取り、1947 年 5 月 1 日に内モンゴル自治政府を成立させる（楊 2009：重要歴史事項 24）。

<sup>17</sup> 中華民国時代、内モンゴルの西部に綏遠省（1928-1949 年）があり、省庁所在地は帰綏市（現在のフフホト市）であった。この地域では、ウラーンフーが中心に共産党の宣伝活動を行っていた。『綏蒙日報』は中国共産党綏蒙民族委員会によって 1946 年 7 月 1 日、集寧市に創刊された。

<sup>18</sup> 現在の内モンゴル自治区、遼寧省、河北省の交接地域から構成された省（日本の県に当たる）である。省会所在地（日本の県庁所在地のような都市）は承德市であった。

<sup>19</sup> 劉春（1912-2002 年）は、江西省出身の漢族。延安民族学院民族研究室主任を経て、ウラーンフーの監視係を長期間担当。大漢族主義者で、中国の少数民族政策の立案者の一人である（楊 2009：人物紹介 19）。

『ウラーンフー伝（乌兰夫伝）』によれば 1945 年 11 月に、内モンゴル自治運動連合会が張家口で成立した際に、芸術家の周戈という人物がウラーンフーと会ったという。周戈（1914-2000）は、漢人の劇作家で、湖北省の出身である。1940 年に延安に赴き、共産党の革命活動に参加し、芸術創作を担当した。1945 年に延安から張家口に行き、内モンゴル文工団の創立活動に参加した（『蒙古学百科全書』編集委員会編纂『芸術巻』編集委員会編 2013：488）。周戈はウラーンフーとともに、中国革命根拠地の延安で教育を受けた経験がある。ウラーンフーは延安の時からすでに彼の才能を知っていた。ウラーンフーは彼に、革命の宣伝や啓蒙教育を広める目的から内モンゴル文工団を建設することを提案し、また内モンゴル文工団の成立に備え一つの舞台劇を創ることを義務づけた。

## 2.2 内モンゴル文工団の作品

内モンゴル文工団の創立に合わせて、周戈は内モンゴルの革命主題の第一オペラ『血案』という歌舞劇をつくった。この『血案』はモンゴル人と漢人の団結を提唱し、中国共産党の指導の下で民族解放の道を辿ろうという内容である。そこには、「被害した同胞たちのために復讐しろ！」「共産党は私たちの恩人である！」「共産党に連れていくことに断固として！」というように書かれており、見た人たちはみんな感動したという。ウラーンフーはこの『血案』の内容に非常に満足したという（『烏蘭夫伝』編写組編 2007：427-428）。

その後、1946 年 8 月にウラーンフーは漢人の文工団から呉曉邦を招いて、「モンゴル踊り（蒙古舞、または希望という）」、「ダウール踊り（達斡爾舞）」及び舞劇『内モンゴルの三部曲（内蒙古三部曲）』を創作させた。呉曉邦（1906-1995 年）は、漢人の舞踊家で、江蘇省の出身である。1929 年から 1936 年まで、三回に渡って日本を訪れ、日本の舞踊家である高田雅夫と江口隆哉に舞踊を学んだ。1932 年に上海で呉曉邦舞踊学校を創立し、1935 年に呉曉邦舞踊研究所を設立している。1938 年から 1945 年まで、中国を転々し舞踊活動を行った。1945 年 6 月に、延安に赴き、延安魯迅文芸学院で舞踊を教えた。1946 年、ウラーンフーに招かれ、モンゴルの特徴を取り入れた舞踊を創作した。中華人民共和国成立後、中国の舞踊界でリーダーとして働いた（『蒙古学百科全書』編集委員会編纂『芸術巻』編集委員会編 2013：420）。

「モンゴル踊り」は、1944 年に呉曉邦が青海省の塔爾寺で神踊りをするラマ（僧侶）に祈っていたモンゴル族の女性をきっかけに制作したダンスである。女性の幸福と平和な生活を望み、ラマに祈りを捧げる姿が呉曉邦にとって印象的だった。呉曉邦はモンゴル音楽に合わせ、このダンスを制作した。内容は、モンゴル族の新たな生活を向ける喜びと希望を描いた作品である（鵬・塔 2001：45）。

「ダウール踊り」は、内モンゴル文工団に新しい団員として招かれた荷雲というダウール女性の踊りを基に制作した。この踊りは、ダウール族の民間踊りに由来する。内容はダウール女性の化粧する様子を描いたもので、ダウール少女を賛美した作品で

ある。このダンスは、内モンゴルにおける民族・民間の舞踊を収集し、整理、編集するには模範的な役割を果たした（鵬・塔 2001 : 53-54）。

『内モンゴルの三部曲』は、革命歴史劇で、第一部は、内モンゴル人の昔の自由自在な生活を描いた作品である。第二部は、国民党、日本帝国主義、モンゴル・スパイらに圧迫された内モンゴル人の苦難の時代を描いている。第三部は、共産党の指導の下で、モンゴル族と漢族が団結し、内モンゴルを解放した様子を描いている（鵬・塔 2001 : 50）。

呉曉邦の作ったこれらのダンスは、主に民間舞踏に基づいて制作されている。しかし、具体的にいかなるダンスに基づいたかは不明である。またほとんどの作品は、政治の色彩が強い。特に『内モンゴルの三部曲』には「モンゴルと漢族の団結歌（蒙漢団結歌）」があり、民族の団結に積極的な役割を果たした。さらに、翌年に元満洲映画協会の舞踏俳優であった満州人の賈作光（1923-2017 年）を内モンゴル文工団に団員として招き、「牧馬踊り（牧馬舞）」、「ハクマイ踊り（哈庫麦舞）」、「オロチョン踊り（鄂倫春舞）」などを制作した。これらのダンスは農民の圧迫をはねのけ立ち上った生活と精神を表現した（劉 1997 : 5-6）。

「牧馬踊り」は、草原の朝露の中で、放馬する青年牧畜民を描いた作品である。朝露の中で一人の青年が放牧し、大自然に浸っていた最中一匹の馬が突然群れから逃げ出した。青年は急いで長い棒を持ち、馬を駆って逃げ出した馬を捕まえ、群れに戻した（賈 1992 : 360）。労働する牧畜民を描いた作品である（『内蒙古大辞典』編纂委員会 1991 : 801）。

「ハクマイ踊り」は、ダウール族の民間舞踏を基に振り付けした作品である。ダウール女性の生活を愛する性格と労働を喜ぶ心を描いている。この作品は、ダウール族の民族特徴と生活の雰囲気強い（賈 1992 : 433）。

「オロチョン踊り」は、賈作光がオロチョン族の居住する地域に行き、オロチョン人民の民間舞踏を勉強し、このダンスを制作した（鵬・塔 2001 : 55）。オロチョン族の狩猟生活を描いた作品である（『内蒙古大辞典』編纂委員会 1991 : 801）。

### 2.3 内モンゴル文工団に関する政策

ウラーンフーは内モンゴル文工団の建設に以下の四つの方針（目的）を提案した（『烏蘭夫伝』編写組編 2007 : 429）。

- 一、党の文芸路線を執行し、啓蒙教育を普及させる。
- 二、民族の優れた文化と伝統を継承する。
- 三、民族の新文化を発揚させ、民族の幹部らを養成する。
- 四、当団の性質は公演団体であるが、学校でもある。

「内モンゴルの文工団は、1953 年に内モンゴル歌舞劇団、1956 年に内モンゴル歌舞団へと名称を改めた。設立当初の背景やその後の展開、あるいはこれまでに演じた社会的役割から分かるように、文工団そしてその展開である歌舞団はエリートによる芸術専門団体であり、純粹芸術の側面では、ウラーンムチルに対して指導的な立場に

なる」(シンジルト 2010 : 190) <sup>20</sup>。「ウラーンフーは、新しく作った文工団をきっかけに、内モンゴルの民族新文化に主に二つの要求を求めた。この二つの要求はプログラムの編集と宣伝することであった。新たに作った内モンゴル文工団では、民族幹部を養成することを重視し、文工団は「老雌鶏」(さきがけ)であり、ほかの団体に「老雌鶏」の役割を發揮していくことを要求した」(『烏蘭夫伝』編写組編 2007 : 434)。「老雌鶏」とは、内モンゴルで芸術歌舞団の中で、内モンゴル文工団が他に先駆けて誕生し、それを基に様々な歌舞団が作られたことを意味している。

### 3 ほかの文化事業

#### 3.1 地域の芸術歌舞団

内モンゴル文工団は内モンゴルの当時の政治の中心地であった張家口で成立した。これ以外にほかの地域でも様々な劇団・歌舞団や、文芸組織や、文化機構が創立された。例えば、1945年12月に承徳市に延安からきた文芸幹部によって「熱河軍区勝利劇社」が創立され、1947年に熱北(中華民国時代の行政区画名、現赤峰市の北の地域)、林西(現赤峰市における県)に移転し、「翼察熱遼文工団第一団」と改名した。同年、赤峰市には「魯迅文芸学院」(または魯迅芸術文學院)も作られた。この学院には、文工団、少年芸術班、短期訓練班などを設けられていた。さらにこの学院はわずか1年半に延べ約1,000人を卒業させている。この学院はまた24の文工団や宣伝隊を組織し、隊員の訓練に携わっていた(内蒙古文化庁文化志文物志編纂委員会 1989 : 2)。

#### 3.2 芸術歌舞団の目的

上述の文工団、少年芸術班、短期訓練班の中で、「翼察熱遼魯芸」という劇団では、長期で9ヶ月~1年、短期で2ヶ月~3ヶ月のトレーニングを行った。トレーニングの目的は四つある(内蒙古文化庁文化志文物志編纂委員会 1989 : 6-8)。

1つ目は、学習すること及び団体を建設することである。様々な地方からきた学生を文工団や宣伝隊に組織する。また一部の人を軍事化する。

2つ目は、知識や技能を学習させる。「文芸新方向」、「政策時事」などを毎週一回学習させるとともに、「演劇」活動に参加させる。「楽譜と歌」、「舞台活動」や「美術の応用」や「楽器」を教える。

3つ目は、実践と教育を両立させる。演劇をしながら、パフォーマンス技能を勉強し、歌を練習しながら楽譜や発音及び指揮などを勉強する。

4つ目は、段階に分けて教育する。教育期間は全3ヶ月である。第一段階は1ヶ月で、教育を普及させる。第二段階は重点教育を行う。重点教育というのは、隊員を監督、指揮、楽団長、美術工作者、作家になるように教育することである。第三段階は、

<sup>20</sup> 内モンゴル文工団は、2000年に内モンゴル民族歌舞団とし、2014年に内モンゴル民族芸術劇院と改名し、現在この民族芸術劇院の管轄下にはウリゲル(物語)・モンゴル劇団を始め、モンゴル青年合唱団、内モンゴル自治区直属ウラーンムチル、京劇団などモンゴル人や漢人を中心に自治区のレベルでは9つの歌舞団がある。

公演に関する実習である。大衆を対象に公演し、また牧畜民を対象にして草原で公演する。それでようやく卒業となる。

隊員に関する教育の目標は以下の5つである（内蒙古文化庁文化志文物志編纂委員会 1989 : 21）。

1. 一人が10の歌を勉強するとともに簡譜<sup>21</sup>を覚えること。
2. パフォーマンスする基本知識を習得し、一人で3つの小劇を演じること。
3. 簡易化粧を習得すること。
4. 書道を練習すること。
5. 二胡の基本演奏法を覚えること。

以上は内モンゴルにおける当時の歌舞団・劇団の普及過程であり、様々な文芸団体に応用されていた。

### 3.3 文化・教育部の設置

1949年に中華人民共和国が成立し、内モンゴル自治区人民政府に文化・教育部が設けられた。この文化・教育部の下には群衆（大衆）文化事業管理機構と文化処（課）が設けられ、中華人民共和国成立（1949年）以前の民間劇社、民間教育館、流浪劇団などを管理した（包 1997 : 32）。こうした管理もあり、1946年に8つあった芸術歌舞団が、6年後の1952年に38の団体にまで増加し、586人の団員（隊員）から1,942人の団員（隊員）にまで増加した。同年において、劇場・映画館が12数から22数までに増加し、職員が96人から173人とほぼ2倍近く増加した（内蒙古自治区文化庁編 1997b）。

### 3.4 ほかの民族の歌舞団

当時、内モンゴル自治区には、内モンゴル文工団（1946）が成立したが、中国の他の少数民族地域でも様々な歌舞団が作られていた。例えば、新疆ウイグル自治区には、伊犁（イリ）文工団（1946）や新疆文工団（1949）、チベット自治区には、チベット軍区政治部文工団（1950、前身は豫皖蘇〔ユワンソ〕軍区文工団という）などが作られていた。そして、1950年の10月1日に中華人民共和国の建国一周年を迎え、159名少数民族の代表と222名の文工団団員が北京に招かれた（劉 2014 : 117）。

### 3.5 内モンゴル文工団と民間芸能人の関係

内モンゴル文工団の団員（隊員）に民間の芸能人（芸術家）を雇用した。民間芸能人というのは牧畜地域や農村地域における楽器や歌に堪能な人を指す。例えば、牧畜民の中で、馬頭琴が堪能なセーラジ（1887-1968年）という人は1949年に内モンゴル文工団に団員として雇用されている。彼は1950年10月に建国一周年に「ジュスレーイ」というモンゴル人の民謡を披露し、中国の主席毛澤東や共産党幹部に褒められた

<sup>21</sup> 略譜。中国式ドレミ：1から7までの数字をドレミにあてる（愛知大学中日大辞書編纂所 2010 : 829）。

という。また説唱に堪能なパージェ（1902-1962年）やモーイハン（1906-1979年）らが内モンゴル文工団に雇用され、共産党や毛澤東や革命英雄を讃えた多くのホルボーを作り、社会主義民族芸術の発展に貢献したとされる（包 1997 : 39）。説唱とは、語りや歌で行われる伝統芸能：「相声」や「弾詞」などである（愛知大学中日大辞書編纂所 2010 : 1603）。ホルボーとは、「頭韻を持つ詩。掛け合いで激しく応酬されるものもある」（原山 1995 : 29）。『ウラーンムチルの路』（1997）では、「ホルボー」はモンゴル民族の民間の説唱形式の一種類であり、以前においては一人が楽器を持ち自ら歌う、或いは二人が対話の形式で歌うもの。解放後、多数人の「ホルボー」や漢語の「ホルボー」も出現した」という（内蒙古自治区文化庁編 1997a : 243）。ホルボーを漢語では「好来宝」と表記する。

内モンゴル文工団に雇用された民間芸能人によって多くの民間芸術作品が演じられた。このように民間芸術作品は共産党と政府に支持され、土地改革政策、朝鮮戦争における抗美援朝<sup>22</sup>、三反五反<sup>23</sup>など重大な政治活動、愛国主義、国際主義教育の普及において大きな役割を果たした（包 1997 : 40）。

### 3.6 フフホト市を中心とする文化事業

内モンゴル自治区の首府は 1947 年 5 月 1 日、内モンゴル自治区が成立する際、興安盟のウラーンホト市（旧王爺廟）に設置された。しかし、1949 年に中華人民共和国成立を機に張家口に移転させた。さらに 1954 年、内モンゴル西部の綏遠省をフフホト市に変更し、自治区の首府を張家口からフフホトに移転させた。こうした中で、1950 年 10 月 1 日、雑誌『内モンゴル文芸（内蒙文芸）』が創刊された。この雑誌は『花の原野』と『草原』という雑誌の前身である（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 31）。

1951 年 7 月 24 日、内モンゴル宣伝部<sup>24</sup>に中国共産党内モンゴル支局の「全党を動員し、宣伝工作を強化する決議」が下り、中国共産党にマルクス・レーニン主義、毛澤東思想など政治イデオロギーの教育を行い、大衆に抗美援朝や反革命を鎮圧する政治イデオロギーの教育を宣伝し、共産党の党内外におけるリーダーシップを発揮していくことを決定した（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 32）。

1953 年 7 月 25 日、内モンゴル話劇団がフフホト市に成立し、1954 年 2 月、ウラーン・チャトル（紅色の劇場）を創立した。ウラーン・チャトルは内モンゴル歌舞団の

<sup>22</sup> 1948 年に朝鮮民族の分断国家である朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と大韓民国（韓国）の間で戦争が発生し、朝鮮半島の主権を巡る国際紛争になった。そこで、朝鮮民主主義人民共和国は中国やソ連に応援され、大韓民国はアメリカに援助された。

<sup>23</sup> 「三反」は 1951 年に提唱された官僚主義、汚職、浪費の三害に反対する運動を指す。「五反」は 1952 年に提唱された贈賄、脱税、国家資材の横領、原料のごまかし、経済情報の漏洩の五毒に反対する運動を指す。

<sup>24</sup> 内モンゴルで、1945 年 11 月に、ウラーンフーがリードする「内モンゴル自治運動連合会」の下に組織部、宣伝部、青年部、女性部（婦人部）、軍事部の 5 部が設けられた（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 171-173）。内モンゴル自治区政府が成立後、宣伝部が継承され、教育、芸術、新聞などを監視する役割を果たしている。都市、旗・県、さらに郷・鎮のレベルまで宣伝部の組織が設けられている。

公演を行う劇場である。同年 10 月に内モンゴル自治区文聯<sup>25</sup>の第一回代表大会が開かれ、勇夫が文聯の主席に、陳清漳は副主席に選ばれた。二人は「内モンゴルの文学・芸術事業の発展に努める」というテーマで発表した（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 254-261）。

こうした中、1955 年 12 月に内モンゴル自治区文聯と文化局に「内モンゴル自治区民間職業劇団の登録管理条例」が決定され、内モンゴル自治区各地域の戯曲・曲芸パフォーマンス団体を登録した（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 36）。1955 年 10 月 1 日～20 日に「内モンゴル自治区第一回民族・民間の音楽・舞踏・戯劇コンクール大会」がフフホト市で行われた。このコンクール大会にセーラジやパージェや、モーイハンなどが参加し、セーラジは 29 の民間歌曲を演奏した。パージェはホルボー「お互いに協力するのが良い（互助合作好）」を披露し、モーイハンはホルボー「鉄の牛（鉄芒牛）」を語り、2 人ともに優秀賞を授与された（包 1997 : 39）。

### 3.7 文化館・文芸刊行物の普及

内モンゴル自治区政府は大衆文化活動の機構（施設）として各地域には文化館、文化ステージ（站）を建設した。そうした中、1956 年 2 月に中国文化部と共産主義青年団の共同発言の下で「農村における合作化運動の広がりに伴い、農村文化工作を行う指示」を発表し、各旗・県に文化館を普及することを決定した（包 1997 : 33）。

1956 年 8 月から文学・芸術工作者は共産党中央の計画「双百」<sup>26</sup>の方針を習得し、社会主義建設のため積極性と創造性を強化した（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 37）。1957 年 1 月には、内モンゴル自治区群衆（大衆）芸術館<sup>27</sup>が創立され、中国語の『鷹』やモンゴル語の『ホンガール』（鷹）などの雑誌を発行した（包 1997 : 33）。

1957 年 4 月 19 日にフフホト市（内モンゴル自治区首府）では「内モンゴル自治区民族実験劇団」が創立された。これは内モンゴルにおける歌舞団の中で、初めて民族という語を使ったことになる。民族実験劇団の創立について、内モンゴル文化庁は以下のように評価した。「これから、モンゴル民族は自民族言語を使い、戯劇芸術のパフォーマンスを行う。これはまた、共産党の民族政策における民族文化芸術上の勝利であると共にモンゴル民族文化芸術史における大事な出来事である」（内蒙古文化庁文化志文物志編纂委員会 1990 : 7）。民族実験劇団の創立当日、内モンゴル自治区の副主席であったハーフンガーが出席し、次のように指摘した。劇団は「主にモンゴル語

<sup>25</sup> 中国共産党内モンゴル自治区委員会の指導で創られた内モンゴル自治区の文学と芸術界の聯合会の略称である。中国語では、「内蒙古自治区文学艺术工作者联合会」という。

<sup>26</sup> 「百花齊放，百家争鳴」という双百の計画を指す。その内容は、1956 年に毛澤東が提出した文学、芸術、学術上の政策的スローガンである。知識人に芸術、学術における自由な発言を呼びかけた。ところが、これらの発言は「右派」分子による反党・反社会主義の「毒草」と批判され、1957 年 6 月に「反右派闘争」のきっかけになった。

<sup>27</sup> 内モンゴル群衆芸術館が 1956 年 1 月、内モンゴル自治区政府の許可を得て成立されたという（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 258）。

で公演し、中小型の劇目に重きをおくことである。牧畜地域や農村の広大なモンゴル族の群衆に奉仕することである」（内モンゴル文化庁文化志文物志編纂委員会 1990：7）。

1957年6月に内モンゴル共産党委員会が「党の教育」の出版に関する決定」を公布し、「内モンゴル宣伝員」と「労働者宣伝員」を合併し、雑誌『党の教育』を刊行した（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015：38）。また1957年9月にジェリム盟（現通遼市）にジェリム盟文化工作隊<sup>28</sup>が創立した。ジェリム盟歌舞団は、社会主義の方針である「双百」計画に基づき、民族の風格や地方特徴を表した様々な演目を作ったという。演目では、「アンダイ踊り」、「シラームルン川浴い」、「馬を飼う牧畜青年」、「草原賛歌」、「馬蹄の踊り」などが有名である（内モンゴル文化庁文化志文物志編纂委員会 1990：61）。1957年12月に雑誌『内モンゴル文芸』を『花の原野』と改名し、続刊を発行した（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015：39）。

こうした経緯を経て、文化館を基に、1957年6月に牧畜地域と農業地域に「ウラーンムチル」芸術歌舞団が誕生した。次の章では、ウラーンムチルについて述べる。

## 小結

本章では、内モンゴル自治区成立後10年（1947～1957年）の内モンゴルにおける文化政策と文化事業を検討した。内モンゴル自治区が1947年に成立し、政治宣伝の担い手として、内モンゴル文工団（歌舞団）が創立された。内モンゴル文工団をもとに、モンゴル青年合唱団、京劇団などさまざまな歌舞団が作られた。内モンゴル文工団は地域の芸術に優れた民間芸能人を採用し、活動を行った。

1949年から内モンゴル自治区人民政府には、文化・教育部が設置され、民間劇社、民間教育館、流浪劇団などを管理した。特に内モンゴルの自治区の首府フフホト市を中心に文化事業が盛んになった。さらに、大衆文化活動を活性化し、政治宣伝をスムーズに行うため、文化館と文化ステージを普及させた。また群衆（大衆）芸術館を創立し、文芸雑誌を刊行した。これらは内モンゴル文工団の方針である「党の文芸路線を執行し、啓蒙教育を普及させる」ことと、内モンゴル宣伝部の「全党を動員し、宣伝工作を強化する決議」など政策に影響されたものであった。

このようにモンゴル人が1945年以前に抱いていたモンゴル人民共和国との合併や自治国家を樹立するという政治イデオロギーが、徐々に中国共産党の指導下で、共産党の文芸路線の執行に繋がった。

---

<sup>28</sup> ジェリム盟文化工作隊は、1959年にジェリム盟文工団と改名し、1975年にジェリム盟歌舞団と変更した。

### 第三章 ウラーンムチル芸術歌舞団の誕生

#### 1 ウラーンムチルの誕生経緯

当時、内モンゴルにおいて、文化館と文化ステージの機能や人員の構造が充実しておらず、職員は辺境の牧畜地域や半農半牧畜地域の隅々までアクセスできないのは問題だった。この問題について各地域の文化機構が研究や検討を通し、解決策を積み重ねてきた（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。

以上の問題の解決策に悩んでいた内モンゴル自治区文化局の社会文化処（課）は1956年の夏に牧畜地域のシリングル盟の正蘭旗、正鑲白旗、スニド右旗と半農半牧畜地域<sup>29</sup>のウラーンチーブ盟の達茂旗に關係者を派遣し、文化活動について調査を行った（内蒙古自治区文化庁編1997a：82）。關係者が調査した結果、「これら地域の特徴は面積は広いが、人口が少ない。交通が不便であるゆえに、人口が散居している状態であった」ことが分かった（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。そして、これらの地域において牧畜民と農民の文化生活をより豊かにする方法が検討された。検討策として、「これらの地域では軽い設備で移動に適合した人員が必要であり、一人で多くの役割を担う総合的で小規模な文化工作隊が必要である」と明言した（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。これをきっかけに、「農牧民が居住するホト<sup>30</sup>や牧場に、社会主義の文化芸術を直接的かつ継続的に届けられるにはこの方法しかない」と分析した（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。社会文化処はこの調査結果に基づき、「牧畜地域や半農半牧畜地域の特徴に合わせ、旗・県の文化館を改造し、1950年代初のシリングル盟宣伝隊とチャハル盟の宣伝隊のような小型のかつ流動的総合性がある文化工作隊を創立することを提案し、その名を「ウラーンムチル」の事業方案とした」（内蒙古自治区文化庁編1997a：82）。このウラーンについては、1920年代～1930年代にソ連やモンゴル人民共和国に流行していた政治宣伝と文化教育施設の紅角（赤いコーナー、красный уголок）とウラーンゲル（赤いゲル）を模倣して名付けた可能性が高い。

關係者は、この方案を1957年3月1日に内モンゴル自治区文化局の共産党組織委員会に提出した。方案は1957年4月9日に許可され、社会文化処は慶来氏（文化局の職員）をスニド右旗に派遣し、ウラーンムチルの「創立実験」（試点工作）<sup>31</sup>を実行するためにスニド右旗政府と意見交換を行った。1957年4月20日、慶来氏がフフホト市に戻り、ウラーンムチル創立実験においてスニド右旗の共産党委員会と政府の許可を得たことを文化局の共産党組織委員会に報告した。

<sup>29</sup> 中国語では「半農半牧区」という。農業を営みつつ、牧畜を行うことを指す。

<sup>30</sup> ホトはモンゴル語であり、その意味は「都市」を指す。しかし、1950年代は家族や親戚が公有地として暮らす範囲をホトに、一つの家をアイルと表現していた。モンゴル社会に関する調査を行った梅棹によると、「いくつかのアイルで構成される集落のことは、ホトとよぶ。「町」の意味である。アイルはふたつ三つの場合もこの語でよぶ」と言われている（梅棹 1991：60）。

<sup>31</sup> ウラーンムチルを立ち上げるための実験をいう。中国語で「試点工作」という。本稿では、「創立実験」と訳す。これと別に「試点演出」があり、日本語では「実験公演」と訳した。

そして、1957年5月初頭に、内モンゴル自治区の共産党委員会の第一書記兼主席であったウランフーが内モンゴル自治区の成立10周年を機に工作報告会を催した。その際、ウランフーは、内モンゴルの「経済と文化の建設においては集密的、システム的な調査研究が欠如し、一部の仕事では民族的かつ地域的特徴を配慮せずに党と国家の総合的な方針や政策をほかの地域の経験を基にそのまま転用しているケースが多い」と指摘した（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。この発言に基づき、内モンゴル自治区文化局は農牧地域にウランムチルを創立することとなった。

ウランフーの発言と文化局の促進により、1957年5月27日に、社会文化処の方案としての「ウランムチル実験計画」と「ウランムチル事業条例（草案）」が内モンゴルの副主席であったハーフンガーの許可を得て、公文書として配布された。

公文書の配布により、ウランムチルは1957年5月28日～1957年6月17日まで、大衆文化事業の比較的盛んなシリングル盟のスニド右旗とジョーオダ盟（赤峰市）のオンニュート旗に創立実験を行った（内蒙古自治区文化庁編1997a：81）。その結果、オンニュート旗は同年6月15日に実験を終え、6月25日にウランムチル創立認可を下している。一方、スニド右旗は実験終了日の17日に認可が下りた。そのため、スニド右旗が内モンゴルでは最初に創立されたウランムチルとなった。

## 2 ウランムチルの変化と隊員

ウランムチルは1957年6月に牧畜地域のシリングル盟のスニド右旗と半農半牧畜地域のオンニュート旗に創立された。同年の9月25日にはシリングル盟の正蘭旗にもウランムチルが創立されている。このようにウランムチルは創立当時の1957年の時点では3団体存在していたが、1960年代には61の団体まで増加した（烏2002：411-413）。中国の文化大革命期（1966-1976年）において、多くのウランムチルは専ら毛澤東の思想を宣伝するため、「毛澤東思想宣伝隊」や文工団などに変更された。

文化大革命終結とともに政治情勢が緩和され、名称が戻された。ウランムチルは1980年初頭に80団体以上まで増加する。しかし、1984年12月に内モンゴル自治区文化庁にて、内モンゴル全区の芸術パフォーマンス団体の体制改革についての座談会が開かれ、「芸術パフォーマンス団体の調整と改革方案」及び「ウランムチル条例」に修正する法案が下された。その法案を基に、ウランムチルに46団体だけを残し、約半分を旗・県の劇団として改革した（内蒙古自治区文化庁編1997a：173）。1990年代、ウランムチルは社会主義市場経済の影響を受け、体制の改革が行われ、地域内外の大手企業に連携し、活動を維持していた。この時代のウランムチルの在り方については第七章で詳しく論じる。

ウランムチルは2000年以降、国家の支援を受け、社会主義市場経済の影響で悪化した状況が徐々に回復した。そして、「2007年の時点で、内モンゴルには68のウランムチルがあり、自治区の各地に分布している。各ウランムチルは農牧民に対して、毎年平均100回以上の公演を行っている。同時に様々な文化活動に携わっている」（達・朱編2007：2）。

さらに、2010年に「新時代ウラナムチル事業の強化意見」（達・他編2017：129）のもとでウラナムチルの活動は徐々に活発化している。現在、「内モンゴル草原では75のウラナムチルが活躍している」という（馮2018：323）。この75のウラナムチルのうち、1つは内モンゴル自治区直属ウラナムチルである。3つは盟・市におけるウラナムチルであり、それぞれシリングル盟ウラナムチル、アラシャー盟ウラナムチル、興安盟ウラナムチルを指す。そのほか、71のウラナムチルが旗・県におかれている。

内モンゴル自治区芸術研究院の主任である張瑞鋒の研究<sup>32</sup>によるとウラナムチル隊員は3,119人であり、正式隊員は1,828人(58.6%)で、臨時雇用の隊員は1,291人(41.4%)であるという。この研究データによると、各ウラナムチルに平均して42人の隊員がいる。ウラナムチルは事実上、内モンゴルだけでなく、内モンゴルをベースに中国の各地域で誰もが知る「普通名詞」として発展している（シンジルト2010：201）。

### 3 ウラナムチルの機能

「ウラナムチルには主に公演と宣伝、指導及び農牧民大衆の生産、生活に奉仕する任務がある」（劉・張編 2012：57）。こうした中、「公演隊、宣伝隊、指導隊、奉仕隊の『四隊』はウラナムチルの基本機能であり、存在価値でもある。この『四隊』の重点は公演、奉仕は核心、指導は奉仕の一つの形式（方法）である」という（劉・張編 2012：107）。

ウラナムチルの基本機能である公演とは、具体的に歌舞、演劇、演芸などを含む舞台劇のことを指す。それは牧畜民大衆の文化活動を促すための舞台芸術劇である。宣伝とは、共産党政府の政策や方針を随時的に宣伝することである。ウラナムチルの4つの機能のうち、指導と奉仕とは、大衆を教育することと、自らが大衆と一緒に労働することを指す。教育することとは、文字を読めない人に新聞、雑誌、本を読み聞かせることを指す。労働することは、牧畜民や農民の中に入り、牧畜業や農業を手伝うことを指す。

しかし、この4つの機能は2018年に変更されている。2018年8月に行ったスノド右旗ウラナムチルの隊長であるMJ氏<sup>33</sup>（42歳、男性）へのインタビューによると、「ウラナムチルは2017年11月21日、中国国家主席である習近平の返信（手紙）をうけて、4つの機能から6つの機能に拡大されている」という。その6つの機能とは、以上の4つの基本機能以外に創新（新たなテーマの作品を作る）と創作（作品の創作）<sup>34</sup>を加えたものである。さらに、2019年9月26日に行った内モンゴル自治区

<sup>32</sup> 2019年8月21日にアラシャー盟の図書館における「新時代ウラナムチルの創新と発展に関するシンポジウム」（新時代烏蘭牧騎創新与發展研討会）に参加し、報告した資料データである。

<sup>33</sup> MJ氏は1979年生まれのモンゴル人男性である。1996年にシリングル盟の鑲黄旗のウラナムチル隊員として働き、2000年からスノド右旗のウラナムチルで働いている。2007年からはスノド右旗ウラナムチル隊長になっている。

<sup>34</sup> 創新はもっと新たなアイデアで新たなテーマの作品を作ることを言い、創作は導入や改変だけでなく、オリジナル作品を制作することを指す。

第13期の人民代表常務委員会の第15回全体会議において元々の「内モンゴル自治区ウラーンムチル条例（草案）」が新たに改革され、中国国家主席の習近平の手紙を基に、ウラーンムチルの基本機能は8つの基本機能まで拡大した。MJ氏の言う6つの基本機能に「保護と継承民族・民間の文化及び対外文化交流活動を行う」が加わった。以上のように新たな「内モンゴル自治区ウラーンムチル事業条例（草案）」が内モンゴル地域では、2019年11月1日から実行された。

## 4 ウラーンムチル芸術歌舞団の概念

### 4.1 ウラーンムチルの意味

ウラーンムチルという芸術歌舞団体とは、モンゴル語で「ウラーンムチル」とは、「赤色（紅色）の文化工作（支援・宣伝）隊」を意味する（写真1）。モンゴル人の間では「我々のウラーンムチル (*Man-no ulayan möčir*)」、あるいは「我々の子ども (*Man-no keiked*)」とも呼ばれる。「我々の」や「子ども」といった表現から、ウラーンムチルがモンゴル族に愛されていたことが分かる。愛されていた理由も、その歴史にある。



写真1 スノド右旗ウラーンムチルの公演  
(2018年8月16日 筆者撮影)

ウラーンムチル草創期の1957-1965年（紅2013：157）における『人民日報』は「内モンゴル草原を旅行して牧畜民の生活に接触していく中では、常に「ウラーンムチル」という歌舞団体と会ったりする。「ウラーンムチル」とは、モンゴル語で紅色（赤色）の文化工作（支援、宣伝）隊という意味である」（『人民日報』1964年11月20日）と報じている。「紅色文化工作隊」の紅色はモンゴル語で革命を象徴し、文化工作隊は文化の活動を行う団体を指す。ここで「文化工作」と表現されているものは毛澤東の

講話ですでに触れられている。ウラーンムチルに関する報告には、それに関して報告している部分がある（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。

文芸工作について、毛澤東は1942年5月の延安における「文芸講話」において、「文芸工作は全プロレタリア革命事業の一部」と発言した。全革命事業が一つの「大樹」とするならば、文芸工作はその一つの「小枝葉」である。牧畜地域における小さな文化工作隊は、枝葉の「小新芽」である。モンゴル語では「ムチル」というのは「新芽」<sup>35</sup>を意味する。「ムチル」を文化工作隊として代替する。「ムチル」に「ウラーン」という形容詞をつけて「ウラーンムチル」という。つまり、「紅色の文化工作隊」という意味である。

ウラーンムチルは中国語で「紅色の文化工作隊」と翻訳されるが、通常は「烏蘭牧騎」と表記する。それは「馬に乗って社会主義を実践する牧畜民」（シンジルト2010：185）の意味で、この存在にはロマンチックなイメージが与えられている。また内モンゴル人以外の外部人に対して、モンゴル人は遊牧民というイメージを与えるためだろう。

#### 4.2 ウラーンムチルの設置

内モンゴル自治区では、ウラーンムチルは文化館をもとに創立された。文化館は旗の中心街にあり、固定されて場所で移動できない。一方、ウラーンムチルは、小規模で移動性があり、かつ総合性の歌舞団として活躍した（T.アルタンバガナ2020a）。ウラーンムチルの隊員は創立当時、約10人だったが、2010年から正式隊員は35人と定めている（達・他編2017：80）。



図1 内モンゴル自治区の行政区画図  
(筆者作成)

<sup>35</sup> ムチルについて中国語訳では新芽と表記されてきた（内蒙古自治区文化庁編1997a：80）。しかし、これは誤訳である。ムチルは中国語で枝を指し、ナヒヤは中国語で新芽という。

ウラーンムチルは内モンゴル自治区の旗・県における芸術歌舞団体である。中国には5つの自治区があるが、内モンゴル自治区での行政区画は自治区、盟・市、旗・県、郷・鎮、そして村といったように大きく5つに分かれている（図1）。モンゴル語では盟をアイマク（*ayimag*）、旗をホショー（*qoshiyu*）、郷をソム（*sumu*）、村をガチャ（*yacay-a*）と表記する。このモンゴル語表記は実際にも使われているが、ここでは便宜的に漢字（中国語）表記を用いる。

ウラーンムチルは、政治宣伝の担い手でありながら、文化教育活動を行う役割を果たしている。ここでいう政治宣伝とは、中国の国家政策のことを指す。内モンゴル自治区のレベルにおいては、内モンゴル自治区直属ウラーンムチルを含むモンゴル青年合唱団、京劇団など9つの歌舞団があるに対し、旗・県のレベルではウラーンムチル以外のほかの国立芸術歌舞団体はほとんど存在しない<sup>36</sup>。

## 5 ウラーンムチルの創立地域の概要

内モンゴルにおいて、ウラーンムチルが最初に成立されたのは、まず牧畜地域のシリンドル盟のスニド右旗と半農半牧畜地域の赤峰市のオンニュート旗である。このうち、本論はオンニュート旗ウラーンムチルに着目する。従って、この地域は比較的早い時期から内モンゴルの変化する社会の特徴を備えている。

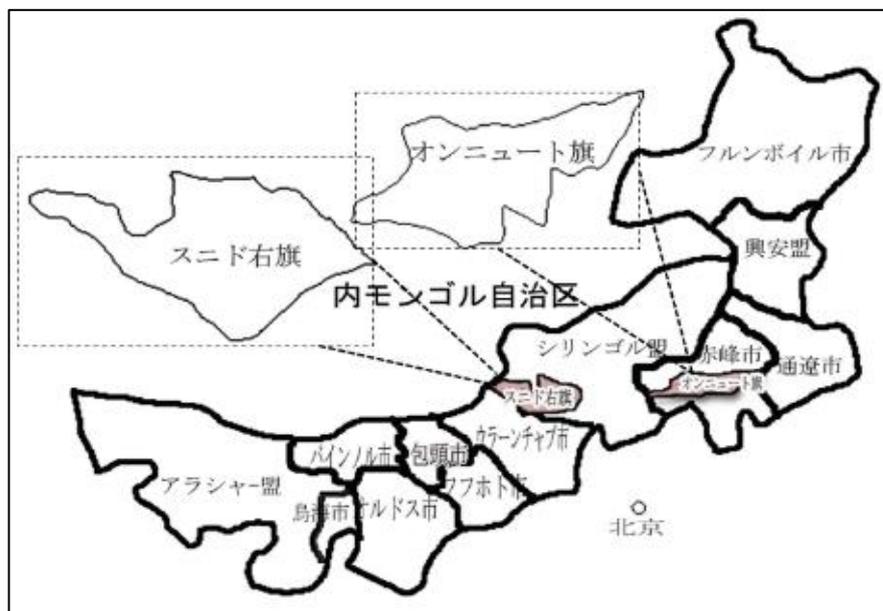


図2 スニド右旗とオンニュート旗の位置

（内モンゴル地図を元に筆者作成）

<sup>36</sup> 1980年代まで、ウラーンムチルは内モンゴル自治区の首府フフホト市以外のいくつかの都市にもおかれていたが、のちに都市の拡大や人口の増加によりウラーンムチルは民族歌舞劇院に、或いは盟・市歌舞団に変更され、その規模が大きくなっていった。

以下では、まずスニド右旗とオンニュート旗についてそれぞれ概述する。次にオンニュート旗に焦点を当てて、同地域におけるウラーンムチル成立以前の文化事業とウラーンムチルについて詳述する。

## 5.1 スニド右旗の概要

スニド右旗はウラーンムチルの創立において、牧畜地域の代表的な地域として、内モンゴルの第一ウラーンムチルが創立された地域である。スニド右旗はシリングル盟の西部に位置している（図 2）。面積は 2.23 万km<sup>2</sup>、人口は 6.9 万人で、モンゴル人、漢人、回人、満洲人の 11 民族から構成される。1953 年における中国の第 1 回人口センサスでは全旗の人口は 10,775 人である。モンゴル人が 7,105 人で 65.94% を占める。漢人が 3,663 人で 33.99% を占める。その他の民族は 7 人で 0.01% を占める。同データから分かるように、1950 年代のスニド右旗ではモンゴル人が多かった。内モンゴル政府がこの地域を選んだ理由は、当時モンゴル人が約 7 割であったことに由来する。また、この地域の人々は牧畜を生業とし、居住は散在で、当時の状況から多くの人々はテレビやラジオなどを聞けないことが問題であった。政府のウラーンムチル成立の目的は、こうした環境下にあった牧畜民に政府の政策・方針を宣伝するためであった。さらに、シリングル盟の数々の牧畜地域からスニド右旗を選んだ理由についてスニド右旗ウラーンムチルの隊員であった BC 氏<sup>37</sup>は、3 つの条件を取り上げて語っている。

第一は、解放以前のことであるが、スニド右旗はほかの牧畜地域と比べ、教育施設が充実していた。内モンゴルの有名な作家ナ・サインチョクト（サイチンガ、賽春嘎）が日本で教育を受けて、帰国し、その女子学校に教師として働いていた。当時、ナ・サインチョクトやブレンサインなど多くの知識人がいて文化と教育的な基盤が充実していた。

第二は、1956 年に、北京からウラーンバートル経由でモスクワにむかう鉄道ができたからである。その以前は、スニド地域には、鉄道がない。実験を行うためには、必ず交通が便利なところでなければならない。当時、フフホト市からシリンホト市までの公路（砂路）ができて、スニド右旗を通過していた。右側から東側へ行く公路があり、南側から北側へ行く鉄道があり、利便性が図られた。

第三は、地理学的な条件が整っているからである。シリングル盟は内モンゴルの真ん中に位置している。もしフルンボイル盟に実験するならば、内モンゴルの最東部に偏り、アラシャー盟とするならば、内モンゴルの最西部に偏るからである。スニド右旗には、以上の 3 つの基本条件が整っていたので、ウラーンムチルの実験を行い、そこで創立されたのである。

<sup>37</sup> 1943 年生まれのモンゴル人男性で、1960 年にスニド右旗ウラーンムチルに隊員として入隊した。1986 年にスニド右旗ウラーンムチルを定年退職している。

BC氏のこの語りは、筆者が2019年8月20日～8月28日までに、アラシャー左旗で行われた「第八回内モンゴル自治区のウラーンムチル芸術祭」（第八届内蒙古自治区烏蘭牧騎芸術節）でインタビューした記録を基に整理したものである。BC氏は第一のウラーンムチルがスニド右旗に創立した理由について、以上の3つの理由を取り上げている。しかし、スニド右旗は徳王の出身地であり、中国成立以前からモンゴル人の政治基盤が強い地域である。中国共産党は牧畜民を統治するには、この地域が最も適切だと考えたのだろう。

## 5.2 オンニュート旗の概要

内モンゴル政府は、スニド右旗と対照的に農業地域のオンニュート旗をもう一つのウラーンムチル創立地域として選んだ。その理由は、スニド右旗と対照的に、この地域には漢人が多いことによる。また多くのモンゴル人は農業をしながら家畜を飼養している。このような地域を半農半牧畜地域ともいう。内モンゴル政府はこの地域に敢えてウラーンムチルを創立し、政府の政策・方針を宣伝することを試みた。

オンニュート旗は内モンゴルの東部地域に位置し、赤峰市の中央部にある（図2）。面積は11.88万km<sup>2</sup>である。オンニュート旗誌（地方誌）によると1953年における中国の第1回人口センサスでは全旗の人口は約19万人で、漢人が17.1万人と圧倒的に多く、約9割（89.88%）を占めていた。次いで多いのがモンゴル人で1.9万人、約1割（9.92%）を占めた。その他に、回人が221人で、朝鮮人が125人、満洲人が36人、チベット人が1人いた。

オンニュート旗はウラーンムチル成立時から漢人が多い農業中心地である。ウラーンムチルが半農半牧地域にも創立された理由には、当時半農半牧畜地域においても、政府の政策・方針を伝達する方法はなかったことが挙げられる。さらに、オンニュート旗にウラーンムチルを創立することについて、内モンゴルの東部地域において圧倒的多数を占める漢人に配慮したと考えられる。

オンニュート旗は1956年まではオンニュート左旗という名前であった。当時、オンニュート左旗の隣に烏丹県が存在していた。1956年にオンニュート左旗が烏丹県と合併し、オンニュート旗政府が誕生した（翁牛特旗志編纂委員会編1993：635）。二つの地域が合併することにより、烏丹県が烏丹鎮に変更され、オンニュート旗政府所在地になった。現在、オンニュート左旗に創立されたものと烏丹県に創立されたものは、全てオンニュート旗に創立されたものとみなされている。そのため、1956年以前に、烏丹県に作られた劇団は、烏丹という名前を使うことが多い。それ以降、烏丹という名前で創立された劇団は徐々にオンニュート旗という名前に改名した。

## 6 オンニュート旗のウラーンムチル創立以前の文化事業

ウラーンムチル創立以前に文化事業を担っていたのが文化館であった。文化館は共産党の指導で、中華人民共和国成立以前からソ連の影響を受けて内モンゴル各旗・県に1940年代から設置されたものである。ソ連では1920年代～1930年代に農村文化

館が創立されていた。農村文化館はソ連の広大な農村地域の政治と文化教育事業の中心であり、倶楽部、図書館、宣伝扇動ステージ（站）という三つの機能をもっていた（王編 2000 : 172）。

オンニュート旗には民衆教育館が 1946 年に設置され、文化館と同様の役割を担っていた。この民衆教育館を 1949 年に文化館と改名した。文化館以外に 1947 年、「烏丹児童劇団」が創立され、1952 年に解散されている。烏丹児童劇団は烏丹県立第一小学校の 40 人の学生と 2 人の指導教員から構成されていた。この劇団は、主に政治闘争をテーマにした歌舞を学校、或いは農業地域を巡回して公演した。

1948 年に「烏丹街道群衆アマチュア劇団」が同年組織された烏丹県民衆教育館の下に創立された。成員は烏丹県民で、最初は 20 人であったが、のちに 100 余人までに増えた。主に共産党の思想を宣伝する劇を町の人に公演する。この劇団は、1961 年に解散されている。

同年の 1948 年、「烏丹工業アマチュア劇団」が烏丹県の土産部（地元商店）や糧食部（糧食局の元名前）、百貨部（百貨店の元名前）の職員で組織された。この劇団は、これらの職場の職員向けに共産党の工業政策を宣伝するオペラを公演していた（翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 652）。

1951 年に文化館をもとに文化ステージ（站）が創立された。1954 年、文化館に社会主義に関する図表や模型を集め、大型展覧会を開き、5.87 万人の観客を集めた。1956 年に、オンニュート旗では倶楽部が 60 余、図書室が 122 余、アマチュア劇団が 160 余あった。1957 年に文化館の指導で、134 回の文芸公演を行った。同年、文化と教育の機構を文教科と改名した（翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 635-636）。

ウラーンムチル隊員であった定年退職者の W 氏 (79)<sup>38</sup>によると、1950 年代のオンニュート旗では、評劇隊もあった。この評劇隊<sup>39</sup>は文化館の所属で漢人向けの文芸活動を行っていたという。資料によると、この評劇隊は、烏丹京評劇団という名前で、1951 年に創立され、職員は 45 人であった。烏丹京評劇団は、1965 年には固定資産が 12 万元にのぼった（翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 644）。

## 7 オンニュート旗ウラーンムチルの概要

こうした多数の劇団の 1 つとして 1957 年に成立したのが、ウラーンムチルである。オンニュート旗ウラーンムチルの創立当時の隊員はわずか 4 名で、隊長 1 人と隊員 3 人から構成されていた。隊長は包文儒、隊員は烏国政、宝音、英格であった（内蒙古自治区文化庁編 1997a : 83）。さらに、辛吉勒図、徳力根の 2 人がいたという記録もある（劉・張編 2012 : 55）。すべてモンゴル人であった。包文儒と烏国政は文化館出身である（劉・張編 2012 : 121、125）。そのほかの隊員も文化館出身である可能性があ

<sup>38</sup> W 氏は 1942 年生まれの漢人男性で、1963 年～1977 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。筆者は W 氏について 2018 年 8 月 6 日、内モンゴル自治区の文化庁でインタビューした。

<sup>39</sup> 評劇は社会を評論することに由来する。大鼓や京劇などの歌調やしぐさを取り入れて発展した（愛知大学中日大辞典編纂所 2010 : 1321）。

るが、資料に掲載されておらず、不明である。オンニユート旗ウラーンムチルは人口の1割にも満たないモンゴル人だけで結成されていた。

設備は馬車1台、ガス灯1つ、幻灯機1つ、民族楽器4つ、12着以上の民族衣装であった。

使用楽器は四胡、二胡、低音胡、バイオリン、馬頭琴であった。

リハーサル室は約20m<sup>2</sup>の文化室を使用していた。

上演は馬車を利用し、旗内の各村を巡回する形で実施された。また、他地域のウラーンムチルと連携し、中国中央宣伝部、文化部の指示に従って、中国全土を巡回することである。

## 8 ウラーンムチルの時期区分

ウラーンムチルに関するこれまでの研究では、ウラーンムチルについて概ね4つの時期区分に分けている(紅 2019)。他方、ウラーンムチル資料に関する政府側の区分では3つに分けている(郭・周編 2017)。本論では、ウラーンムチルに関する先行研究と内モンゴル政府側の区分方法を踏まえつつ、6つに分けて分析する。以下は、まずウラーンムチルに関する時期区分について検討し、そのあとにウラーンムチルの各時期区分における上演作品の特徴を分析する。

### 8.1 時期区分に関する先行研究

紅桂蘭(2019)はウラーンムチルの発展について4つの時期に区分している。紅は、1957年～1965年は草創期で、1966年～1976年は停止期(文革期)と言い、1977年～2001年は回復と改革期で、2002年～現在<sup>40</sup>まではウラーンムチルのブランド化期と指摘した(紅 2019: 50)。

一方、政府側のウラーンムチルの資料である『ウラーンムチル-赤峰市60年図誌(烏蘭牧騎-赤峰市60年図志)』(2017)では、1957年～1976年までをウラーンムチルの草創期であるとしている。つまり、紅桂蘭の区分する草創期に、中国文化大革命期をプラスし、草創期とした。また、『ウラーンムチル-赤峰市60年図誌』では、1977年～1996年を発展期とし、1997年～現在までは創新期<sup>41</sup>とみなした(郭・周編 2017: 29-57)。創新期とは、社会主義文化の強い国を作る政策により新たな作品が強調された時期のことをいう。

### 8.2 ウラーンムチルの草創期(1957-1965年)

ウラーンムチルの草創期は毛澤東の時代である。ウラーンムチルは、中国の知識人が批判の標的になっていた反右派闘争の最中である1957年に創立された。その翌年の1958年に、集団所有制として人民公社が設立した。また1958年から高生産を目指

<sup>40</sup> 紅桂蘭が論文を書いた時期は2018年のことである。

<sup>41</sup> 創新とは、胡錦濤の実施した政策である新農村、新牧畜地域の建設及び新型城鎮化建設と並んで文芸に時代を反映した新たな作品を求めた用語である。

した大躍進という政策が実施された。

### 8.3 ウラーンムチルの停止期（1966-1976 年）

ウラーンムチルの停止期は中国の文化大革命時期（文革）である。文革は、中国指導層の毛澤東が権力闘争のため発動した革命である。文革中にあらゆる歌舞団が一時的に活動を停止したものが、のちに「毛澤東思想宣伝隊」として活躍した。

### 8.4 ウラーンムチルの回復期（1977-1989 年）

1977 年～1989 年はウラーンムチルの回復期である。この時期、1978 年から鄧小平が権力を握り、改革開放政策を打ち出した。改革開放政策の路線により経済が急速に発展した。文芸はこうした政策を讃えた時期である。

### 8.5 ウラーンムチルの改革期（1990-2001 年）

1990 年からなる江澤民の時代は社会主義市場経済や、「三つの代表」が主題になった。あらゆるものが市場化され、文化事業にも市場向けの改革が重要視された。ウラーンムチルは企業と連携し、改名して活動を続けた。例えば、内モンゴル自治区直属ウラーンムチルは水利部と連携し、「水利部ウラーンムチル芸術団」に改名した。

### 8.6 ウラーンムチルの創新期（2002-2012 年）

2002 年に胡錦濤は中国共産党中央委員会総書記に抜擢され、翌年から国家主席になった。胡錦濤は科学的発展観や和諧社会（調和社会）という政策を打ち出した。この時期は、『ウラーンムチル-赤峰市 60 年図誌』（2017）に基づけば、創新期に区分され、また、紅桂蘭の区分方法では、ウラーンムチルのブランド化時期に当たる。

### 8.7 ウラーンムチルの繁栄期（2013 年-現在）

2012 年から第五世代の中国共産党中央委員会の総書記として習近平が抜擢され、翌年に中華人民共和国の主席になった。この時代は習近平の提唱する偉大なる「中国の夢」と「偉大なる中華民族の復興」を賛美する文芸が盛んだ。

## 9 インフォーマント情報

本論の演目の説明に当たり多くのウラーンムチル隊員に聞き取り調査を行った。演目の内容や制作者、演者について、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員、元隊員、ほか歌舞団の団員 11 人にインタビューや聞き取り調査を行った。さらに習近平政権の下でのウラーンムチルの活動についてオンニュート旗ウラーンムチルとスニド右旗ウラーンムチルの現職隊員、元隊員、ほか歌舞団の団員 8 人にインタビューした。最後に観客の 15 人にインタビューした。合わせて 34 人のインフォーマントに情報提供を受けた。以下は 3 つの表でそれぞれインフォーマントの情報をまとめる。個人のプライバシーを守る配慮からすべてのインフォーマントを匿名で表示する。インタビ

ューした内容に基づき、日本語の五十音順に並べる。観客について、名前と生年について、はっきりわからないため、五十音順に合わせ匿名を当て、年齢を年代で表記する。民族について、モンゴル人の場合「モンゴル」と表記し、漢人の場合「漢」と示す。インフォーマントに確認した演目については、カッコの中で匿名と日付を入れる。

表1は草創期から繁栄期までの演目に関するインフォーマントの情報である。表2は習近平時代におけるウランムチルの活動に関するインタビューを回答したインフォーマントの情報である。表3はウランムチルの観客としてインタビューを回答したインフォーマントの情報である。さらにウランムチルの人事変動について責任者の2人にインタビューできたので、合わせて情報を提示する。

表1 草創期から繁栄期までの演目に回答したインフォーマント

名前	民族	生年	性別	元職	現職
ア	モンゴル	1964	女性	オンニユート旗ウランムチル	文化局（文化館）
イ	モンゴル	1963	女性	オンニユート旗ウランムチル	文化局（文化館）
ウ	モンゴル	1961	男性	オンニユート旗ウランムチル	内モンゴル民族芸術劇院所属ウランムチル
エ	モンゴル	1969	男性	—	オンニユート旗ウランムチル
オ	モンゴル	1977	男性	—	オンニユート旗ウランムチル
カ	モンゴル	1990	男性	—	オンニユート旗ウランムチル
キ	モンゴル	1987	女性	—	オンニユート旗ウランムチル
ク	モンゴル	1982	女性	—	オンニユート旗ウランムチル
ケ	モンゴル	1982	男性	—	オンニユート旗ウランムチル
コ	漢	1964	女性	オンニユート旗ウランムチル	文化局（文化館）
サ	モンゴル	1944	男性	内モンゴル歌舞団	内モンゴル民族芸術学院

出典：筆者作成

表1はインフォーマントの匿名、民族、生年、性別、元職、現職に関する情報である。ウランムチルの草創期の演目はほとんど文献資料に依拠し、説明しているが、文革期からはインフォーマントの聞き取り調査と文献資料も利用している。ただし、草創期の演目にしても、文革期の演目にしても、それ以降の時期において上演することがある。そのため、文革期以降にウランムチルの隊員であった場合でも、草創期と文革期の演目を知っている。

表2 習近平時代におけるウランムチルの活動に回答したインフォーマント

名前	民族	生年	性別	元職	現職
シ	モンゴル	1954	男性	オンニユート旗ウランムチル	ウランムチル学会
ツ	モンゴル	1954	男性	オンニユート旗ウランムチル	ウランムチル学会
ス	漢	1942	男性	オンニユート旗ウランムチル	ウランムチル学会
セ	漢	1958	女性	内モンゴル軍区政治部の文工団	ウランムチル学会

ソ	モンゴル	1960	男性	—	スニド右旗ウラーンムチル
タ	モンゴル	1962	男性	—	スニド右旗ウラーンムチル
チ	モンゴル	1937	女性	スニド右旗ウラーンムチル	スニド右旗図書館（定年退職）
金花	モンゴル	1944	女性	ウーシン旗ウラーンムチル	内モンゴル民族芸術学院（定年退職）

出典：筆者作成

表2はインフォーマントの匿名、民族、生年、性別、元職、現職に関する情報である。習近平時代のウラーンムチル活動について、オンニュート旗ウラーンムチルの元隊員とスニド右旗ウラーンムチルの現職隊員にインタビューを行っている。さらに、内モンゴル民族芸術学院定年退職した歌手金花についてもインタビューしている。歌手の金花について本人に許可を取っているため、本名とした。

表3 ウラーンムチルの観客と責任者としてのインフォーマント

名前	民族	年齢	性別	元職	現職
テ	モンゴル	40代	男性	—	牧畜民
ト	モンゴル	60代	女性	—	牧畜民
ナ	漢	40代	男性	—	農民
ニ	漢	40代	男性	—	農民
ヌ	漢	50代	男性	—	農民
ネ	漢	40代	男性	—	農民
ノ	モンゴル	70代	男性	—	内モンゴル・ラジオ・テレビ放送局（定年退職）
ハ	モンゴル	40代	女性	—	内モンゴル日報社
ヒ	モンゴル	30代	男性	—	フリーランス
フ	モンゴル	60代	女性	—	牧畜民
ヘ	モンゴル	60代	男性	—	アラシャー政府職人（定年退職）
ホ	モンゴル	60代	女性	—	無職
マ	モンゴル	70代	男性	—	中学校教師（定年退職）
ミ	モンゴル	50代	男性	—	ウラーンムチル責任者
モ	モンゴル	50代	男性	—	ウラーンムチル責任者

出典：筆者作成

表3はインフォーマントの匿名、民族、年齢、性別、元職、現職に関する情報である。観客は主に牧畜民、農民、定年退職者である。また2人のウラーンムチルの責任者に現在のウラーンムチルの人事変動についてインタビューすることができた。

## 小結

本章では、ウラーンムチルの誕生経緯、創立地域、概念、時期区分について論じた。内モンゴル政府は1950年代初から旗・県には文化館と文化ステージを普及した。しかし、文化館と文化ステージの機能、人員の構造は不十分であった。そのため、1957年に小型的かつ流動的総合性がある文化工作隊としてウラーンムチルを創立した。ウラーンムチルの意味は、馬に乗って社会主義を実践する牧畜民である。つまり、中国共産党は、モンゴル地域の特徴に合わせて政治宣伝を行うことを目指したのである。

また、牧畜地域のスニド右旗に最初のウラーンムチルを創立した理由は、この地域が元々からモンゴル人の政治基盤が強い理由に由来する。さらに、半農半牧畜地域のオンニュート旗にもウラーンムチルを創立した理由は内モンゴルの東部地域の特徴に合わせた可能性が高い。内モンゴルの東部地域は漢人が多く、農業をしながら牧畜する人が多いからである。

## 第四章 毛澤東時代前半期のウラーンムチル（1957-1965 年）

本章では、ウラーンムチルにおける草創期（1957-1965 年）の活動を分析する。ウラーンムチルの草創期は毛澤東時代の 8 年間に相当するものである。本論はこの 8 年間にウラーンムチルの時代背景として毛澤東時代前半期とする。次の章である文化大革命期（1966-1976 年）をウラーンムチルの時代背景として毛澤東時代後半期とする。

以下は、まず毛澤東時代前半期に中国で行われた「反右派闘争」、大躍進政策、人民公社の概念を紹介する。次に、この時代の内モンゴルの文化事業について詳述するとともに、大躍進による被害を概観する。さらに、オンニュート旗ウラーンムチルとはほかの文化事業を説明する。その上で、オンニュート旗ウラーンムチルの上演作品を分析する。

### 1 反右派闘争

中国では、1957 年に知識人を批判した「反右派闘争」が行われている。ウラーンムチルは反右派闘争の最中に創立された。反右派闘争は毛澤東の「百花斉放、百家争鳴」という「双百」の方針によるものである。毛澤東は 1956 年 4 月に中国共産党中央政治局拡大会議で行った「十大関係を論ず」という講話の中で知識人に文学、芸術、学術上において、自由な発言を呼びかけた。こうした発言により、知識人は共産党と政府に対し、不満や提案を多く提出した。結局、知識人は右寄りのブルジョア階級右派分子として批判された。反右派闘争について、中国の新聞学研究者である焦国標はこのように述べている（焦 2004 : 33-34）。

反右派闘争は、中国共産党が毛澤東の主導下に、1957 年から 58 年前半に展開した「ブルジョア右派」に反対する闘争である。ソ連のスターリン批判と毛澤東の「百花斉放、百家争鳴」政策に影響されて、56 年後半に、民主諸党派の指導者及び知識人・学生たちが、中国共産党の急激な農業集団化政策と中共の独裁化に反対する意見を提出した。毛はブルジョア右派分子が共産党の指導を奪おうとするものだととしてこれを徹底的に弾圧、55 万人が右派と断定された。

このように反右派闘争では、「地方民族主義」、「民族右派分子」が主な標的となり、牧畜地域の民族的、地域的特徴に基づくものが、「右寄りの保守思想」と批判された。そのため、「民族融合論」が中国共産党に提示された。民族融合論とは、各民族の間の区別性が少なくなり、共通性が多くなることを指す（リンチン 2015 : 130-131）。反右派闘争の中で、少数民族地域の県（旗と同じレベルの行政区画）以上の民族上層人士（民族幹部）は権力を失った。少数民族地域に実施したこれらの活動（政策）が、少数民族に経済や政治的に被害をもたらした（『当代中国』丛书编辑委员会 1993 : 133）。反右派闘争の後に大躍進と人民公社の政策が実行されている。

## 2 大躍進と人民公社

中国では、1958年から大躍進という政策が実施された。大躍進とは、中国の第2次5ヵ年計画（1958-1962年）の初年度に行なわれた政策で、工業・農業の飛躍的發展をめざして行われた。具体的には、社会主義国家建設のため、15年の間に農工業の生産でイギリスを追い越そうという計画であった。

大躍進は、鉄鋼の大量増産を目指すものであり、中国全人民が総動員された。工業・農業の飛躍的生産のスローガンを叫び、社会全体が熱狂した。しかし、大量の生産を重視した結果、製品の質が悪く、工業と農業のバランスが崩れ、農村は荒廃の極に達した。こうした中、1959年に中ソ対立が表面化し<sup>42</sup>、国境や領土について、意見の対立が深刻化した。1960年にソ連は中国で仕事していた1390人の専門家を引き上げさせ、科学技術協力項目を廃止した（毛里1989a：46-66）。

大躍進は、自然災害やソ連の技術者引き上げも加わって、1959年から1961年の3年間で、数千万人の餓死者を出したとされる（黄2013：51-57）。当時、中国では大躍進による大量餓死事件を「自然災害」としていた（焦2004：35）。毛澤東は大躍進の失敗について「七割は天災、三割は人災」としたが、劉少奇は「七割は人災、三割は天災」という言い方に変えた。このため、1959年毛澤東は国家主席の座を劉少奇に譲ることになる。だが、毛澤東は中国共産党中央委員会主席と中央軍事委員会主席にとどまったのに対し、劉は党内序列が2位であり、事実上に毛を越える地位ではなかった。

また同年、集団所有制として人民公社が設立された。1958年8月、中国共産党中央委員会が河北省の北戴河で会議を開催し、「農村地域に人民公社を設立する決議（关于农村建立人民公社的决议）」が決定され、「政社合一」の政策が全国の農村地域に普及した。「政社合一」とは、政府の行政機構と人民公社の管理機構が一体である状態を指す。また人民公社とは、生産の公有制と集団所有制を基礎とする社会主義の経済体制である（内蒙古自治区人民政府『政府志』弁公室編2001：601）。人民公社は、農業、牧畜業、工業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化事業、さらには軍事機能も担っていた。

内モンゴルの人民公社化は、1958年から始まり1961年に完了し、その体制は1983年まで続いた。しかし、牧畜地域における人民公社は、農業地域の人民公社と異なる点があるという（リンチン2015：112）。「農業人民公社は総じて既に組織されていた農業生産高級協同組合のもとで進められたが、内モンゴルの牧畜業における人民公社化の場合、牧畜業初期協同組合や互助組の次の段階にあたる牧畜業生産高級協同組合が組織されることなく、直接、牧畜業人民公社が組織された」（リンチン2015：112）。

その結果、1958年に牧畜民世帯総数の96.29%に当たる8万1,511世帯の牧畜民が互助組や協同組合に編入され、内モンゴルの人民公社化がほぼ完了した（リンチン

---

<sup>42</sup> 1950年代後半から中ソ両党イデオロギー対立が始めた。きっかけは1956年のフルシチョフのスターリン批判であり、ソ連が平和共存路線をとるようになったことであった。1959年にソ連は57年の「国防新技術についての協定」を廃棄している（毛里1989a：63）。1969年には国境河川で局地紛争さえ起っている（毛里1989b：114）。

2015 : 115)。人民公社のこのような急速な組織化は、政治的イデオロギーの圧力によるものである。従って、人民公社の組合形式を備えれば、少数民族が先進民族（漢人）の発展レベルに追いつき、民族の間の区別がなくなるとみなされたものである（リンチン 2015 : 130-131）。つまり「民族融合論」の理論が導入されたのである。

この二つの政策は中国の社会主義の実現における新たなステップとしての社会主義的改革である。大躍進政策は、内モンゴルにおいては、特に草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与えた。人民公社は、共産主義の利益・財産を共有する目的で実施された政策で、内モンゴルにおいては、家畜の公有制、集団所有制が目立った。

### 3 内モンゴルの文化事業

「毛澤東は大躍進運動推進の一環として大々的な民歌・民謡の創作と収集を提案した」（ミンガド 2016 : 114）。そのため、1959 年に内モンゴルでは、「百万の民歌（民謡）の収集と創作」の活動が始まり、詩、歌のコンクールが行われた。また地方には、一万以上の農村倶楽部（倶楽部）<sup>43</sup>、七千以上のアマチュア劇団、文工団、数千の人民公社文化館、文化ステージ、図書館、図書室、書店が設置された。さらに、民歌・民謡の創作、改編など文芸創作が行われ、言わば文化のブームを招いた（包 1997:30）。しかし、これらの文化事業は大躍進の影響で被害を受けた（郝 1991:279-280）。

### 4 内モンゴルの文化事業における大躍進の被害

反右派闘争は内モンゴルにおいて、自治区の共産党政府を始め、大学、民主党派、新聞出版界、科学技術界、文芸界、衛生界、労働者、農民、商業界、小中学校の教職員まで拡大した。その結果、多くの知識人や愛国者が右派分子とされ、全国的には 55 万余人が右派分子に認定され、内モンゴルでは 3,731 人が右派分子と認定され被害を受けた（郝 1991:159-160）。

1961 年 10 月に内モンゴル群衆芸術館が解散させられた（内モンゴル自治区党委宣传部 2015 : 258）。こうした被害について、『内モンゴル文化五十年』（1997）によれば、1957 年の統計では、内モンゴル全区の文化館の数は 100 にのぼり、文化ステージは 34 であった。これが大躍進を経て、1962 年の統計では、文化館は 80 余までに減少し、わずか 5 年間で 20 余（20%）が減った（包 1997 : 33）。

### 5 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業

この節で、まずこの時期におけるオンニュート旗ウラーンムチルの行った主な活動を紹介し、そのあとにオンニュート旗のほかの文化事業を説明する。

---

<sup>43</sup> 大衆向けの文化・教育の機構である。労働者の文化、娯楽のセンターとして会議、音楽会、映画、講演会などを行う（王編 2000 : 117-118）。

## 5.1 オンニュート旗ウランムチルの活動

1957年10月～12月、オンニュート旗ウランムチルのすべての隊員が内モンゴル自治区首府フフホト市に行われたウランムチル訓練班に参加した（劉・張編 2012：55）。

1959年に、オンニュート旗ウランムチルが「オンニュート旗文化隊」と改名し、隊員が40人になった。同年、「オンニュート旗文化隊」の隊員が吉林省延辺歌舞団に「農楽踊り」、「頂水踊り」、「花傘踊り」を習得し、黎（リー）族からダンス「三月三」は、彝（イ）族自治州文工団からダンス「楽しむ羅蘇」などを習得した（劉・張編 2012：55）。

1960年10月に、「オンニュート旗文化隊」の隊員が新疆ウイグル自治区歌舞団にダンス、歌舞を習得した。さらに青海省歌舞団にダンス「扇子踊り」、「草原の夕方」を習得した。同年12月に、「オンニュート旗文化隊」が「オンニュート旗ウランムチル」という名前を回復した。隊員は12人であった（劉・張編 2012：56）。

1962年、オンニュート旗ウランムチル隊員が朝鮮族のダンス「収穫踊り」を「頂碗踊り」と改編し、オペラ「白毛女」を上演した（劉・張編 2012：57）。

1964年、オンニュート旗ウランムチルは15隊員を派遣し、内モンゴル各ウランムチル代表とともに、北京で行われた「全国少数民族大衆アマチュア芸術公演会」に参加し、毛澤東、劉少奇、周恩来、朱徳など共産党国家リーダーと接近した（劉・張編 2012：58）。

1965年、オンニュート旗ウランムチルは10隊員を派遣し、内モンゴル各ウランムチル代表とともに、中国全国に巡回公演を行った。同年、さらに長春映画製作会社に招かれ、『ウランムチルの歌』というドキュメンタリー映画を製作した（劉・張編 2012：59-61）。

## 5.2 オンニュート旗の他の文化事業

当時、オンニュート旗にはウランムチルと文化館以外に文化ステージもあり、1958年の文化ステージの数は21余にのぼった。オンニュート旗の443村には、528の教歌ステージ（站）を設置し、576の歌唱隊を設けた。教歌ステージとは、漢字と歌を教えるステージで、歌唱隊とは歌を歌うアマチュア音楽のバンドを指している。さらに、244の文芸創作組（文芸を制作する組合）、79の幻灯放映組、26の皮影班が設けられた。皮影とは、中国に伝わる伝統的な影絵である。この年、以上の文芸団体が連合し、3,428回の公演を行い、95万人の観客を集めた（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：637）。

1959年、1957年に設置された文教科を文教局と改名した（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：635）。

1964年、オンニュート旗では、189の倶楽部、205のアマチュア劇団<sup>44</sup>があった。これらの団体は「階級教育」、「模範人に学ぶ」、「計画出産」<sup>45</sup>に関する宣伝を行うため16回展覧会を開き、47,547人の観客を集めた（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：637）。

大躍進・人民公社時代は本論で取り上げるウランムチルにおいて草創期に当たる時期である。以下はこの時期のウランムチルの上演作品を分析する。

## 6 草創期の上演作品

本論文でウランムチルの草創期（1957-1965年）である毛澤東時代から、胡錦濤時代の創新期（2002-2012年）までの上演作品分析では大きく依拠したのは『オンニュート旗ウランムチル誌（翁牛特旗烏蘭牧騎志）』（2012年）である。本誌はオンニュート旗ウランムチルの創立から2012年までの組織の構成、上演作品、上演活動、奉仕、隊員について中国語でまとめられたものであり、主編集者は劉増軍と張仲仁である。劉増軍はオンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局局長で、張仲仁はオンニュート旗地方誌事務局の元主任であり、両氏ともに漢人である。また副編集として、オンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局副局長の王立柱、倣特根、李想、趙国新の4人と文化・体育・ラジオ局・テレビ局における紀律検査委員の隊長董華、ウランムチルの元隊長である張成富が参加している。倣特根だけモンゴル人で、他はすべて漢人である。また、筆者はこの資料にもとづき、ウランムチル隊員や関係者に対し聞き取り調査<sup>46</sup>を行っている。

上演作品名は『オンニュート旗のウランムチル誌』に記載されている漢語名を日本語に翻訳したものである。聞き取りによると、ほとんどの上演作品名にはモンゴル語名があったという。

オンニュート政府は『オンニュート旗ウランムチル誌』を編集する時、何度も会議を開催し、元隊員にも呼びかけ上演作品や上演活動に関する様々な資料を集めた。しかし、それでも記録されてない作品もある。同誌に記録されている上演作品はその年において、最も人気があり、上演率が高い作品であるという<sup>47</sup>。また、重複した作品名がないことから、その年に新規に上演された作品であると思われる。従って、1961年をのぞいて毎年新規の作品が上演されていたと言える（表4）。

表4は草創期における上演作品のリストである。

<sup>44</sup> 1958年からあった歌唱隊、文芸創作組などを指していると考えられる。

<sup>45</sup> 1953年の中華人民共和国の人口センサスで、人口は1億人を超え、予想より多かったことで1954年～1957年間に計画出産が行われた。しかし、1958年から始まる大躍進の被害を受け、政策は停止されている。その後1962年に、人口問題の増加が深刻になり、中央と地方には計画出産指導機構が設けられた。さらに1964年に計画出産弁公室が設置された。当時、政府は文芸を通し、これについての宣伝を行ったものである。

<sup>46</sup> 2018年9月にフィールド調査も行った。フィールド調査後、電話やSNSを通じても確認している。

<sup>47</sup> エ氏のインタビュー（2016年3月中旬）により整理したものである。エ氏は、1969年生まれのモンゴル人で、男性である。1987年にオンニュート旗ウランムチルの隊員として入隊した。2012年にオンニュート旗ウランムチルの隊長になっている。

表4 草創期（1957-1965年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
57	ダンス	搾乳員	導入	振付：高太（シリングル盟歌舞団団員：モンゴル人） 編舞：賈作光（内モンゴル歌舞団団員：満洲人）
58	ダンス	箸の踊り	改変	オルドス民間舞踊
59	ダンス	農楽踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		頂水踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		花傘踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		三月三	導入	黎族
		楽しむ羅蘇	導入	彝族自治州文工団
60	ダンス	タジク族の踊り	導入	ウイグル自治区歌舞団
		打ち鳴らす踊り	導入	ウイグル自治区歌舞団
		扇子踊り	導入	朝鮮族娯楽部→青海省歌舞団
		草原の夕方	導入	壮族の踊り→青海省歌舞団
	歌舞	葡萄の収穫	導入	ウイグル自治区歌舞団
		新疆は素晴らしい	導入	ウイグル自治区歌舞団
		花帽子を縫い取る	導入	ウイグル自治区歌舞団
		アラムハン	導入	ウイグル自治区歌舞団
		ウズベキスタン	導入	ウイグル自治区歌舞団
61	-	-	-	-
62	ダンス	頂碗踊り （収穫の祝い）	改変	編舞：宋正玉（隊員：朝鮮人） 作曲：祈・達林太（団員：モンゴル人）
		狼を狩る	オリジナル	振付：宝音（隊員：モンゴル人） 作曲：？
	オペラ	白毛女	導入	延安魯迅芸術学院
63	ダンス	草原の兵士	？	振付：？ 作詞：郝永生（？：？） 作曲：藩生憲（？：？）
		手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない	オリジナル	振付：朱志会（隊員：漢人） 作曲：？
		苦難の歳月	？	？
		我が故郷	？	振付：？ 原曲：モンゴル民謡 作詞：祈・達林太 <sup>48</sup>
		毛澤東が安源に行く	？	？
		小八路	？	振付：孟慶生（隊員：モンゴル人） 作曲：？
		草打ち歌	オリジナル	振付：李玉珍（隊員：漢人） 作曲：？
		羊毛を刈る	オリジナル	振付：李玉珍 作詞：道爾吉永栄（？：モンゴル人） 作曲：？
		皿の踊り	改変	編舞：李玉珍 作曲：？
64	ダンス	パトロールの夜	導入	振付：祈・達林太 作曲：安柯欽夫（？：モンゴル人）
		良い社員	？	振付：保特斯（？：モンゴル人） 作曲：杜兆植（？：？）
		祖国のために訓練	導入	振付：アラシャー左旗ウラーンムチル

<sup>48</sup> 内モンゴル直屬ウラーンムチルの隊員ウ氏の聞き取りによると祈・達林太はモンゴル人で、内モンゴル文工団（歌舞団）の団員であったという（2020年2月21にウィーチャットで確認した）。

		モンゴル族と漢族は一つの家庭	オリジナル	作曲：普日布（？：モンゴル人） 振付：李玉珍 作詞：フルンボイル市阿榮旗 作曲：？	
		幸福な青年	オリジナル	振付：李玉珍 作曲：？	
		祖国防衛	？	振付：？ 作詞作曲：洗星海（作曲家：漢人）	
	歌	文化軽兵隊の歌	オリジナル	作詞：烏国政（隊員：モンゴル人） 作曲：甘珠爾扎布（？：モンゴル人）	
		内モンゴルは素晴らしい	導入	作詞：阿迪娅（？：モンゴル人） 作曲：図力古爾（隊員：モンゴル人）	
		賛歌	導入	モンゴル民謡 作詞：胡松華（歌手：漢人）	
	65	歌	草原の儿女が延安を愛する	導入	作詞：朱嘉庚（宣伝部：漢人） 作曲：折・達林太
			我々は文化軽兵隊	導入	内モンゴル・ウラーンムチル代表団
			共産党の教育が素晴らしい	？	作詞：達力瑪（？：モンゴル人） 作曲：劉国慶（？：？）
赤旗は世代から世代へ			導入	原曲：オールドス民謡 作詞：那存（？：モンゴル人）	
草原に鋼鉄城が建設された			導入	原曲：モンゴル民謡 作詞：唐葉封（？：？）	
各民族の人民が毛主席の周りに団結する			？	？	
井岡山は赤色の山			？	？	
アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民の解放			？	？	

出典：劉・張編 2012；紀・邱編 1998；内蒙古自治区文化局編 1965；中国民族民間舞踏集成編集部編 1994；金・張・龍編 2015；趙編 2014

表4の演目の種類にはダンス、歌舞、オペラ、歌がある。ダンスは中国語で「舞踏」という。音楽に合わせて舞うことを指す。歌舞は、歌いながら踊ることを指す。オペラは、演劇と音楽の合わせである。歌はリズムやメロディーに合わせて声を出す行為を指す。

由来にはオリジナルと改変と導入の3つがある。オリジナルはオンニュート旗ウラーンムチルが独自に創作したものである。また、すでにある歌に独自にダンスをつけたものについてもオリジナルとした。改変は民間で普及していたダンスを舞台用に編舞した作品をいう。導入とは他の少数民族地域における民間作品や内モンゴルの他の歌舞団の作品を演じたものである。

制作者とは歌やダンスなどについての作詞家、作曲家、振付師<sup>49</sup>、編舞者<sup>50</sup>である。導入の場合は導入元を記した。ダンスにおいては振付師と作曲家だけでなく、作詞家が存在する場合がある。制作者が不明なもの、一部しか分からない作品が少なくない。

由来、制作者／導入元について紀・邱編（1998）、内蒙古自治区文化局編（1965）、中国民族民間舞踏集成編集部編（1994）、金・張・龍編（2015）、趙編（2014）を参考

<sup>49</sup> 振付はオリジナルで創作した場合をいう。

<sup>50</sup> 振付の基にもっとアレンジし、舞台用に編集した人を指す。

にした。由来、制作者について不明の場合、「？」で表記した。以下は演目の内容を分析する。

## 6.1 各年の上演作品

### (1) 1957年の演目

1957年に上演された作品としてダンス「搾乳員」が記録されている（写真2）。



写真2 ダンス「搾乳員」

出典：通遼市ダルハン旗ウラーンムチルの壁写真より（2016年3月，筆者撮影）

「搾乳員」の内容は、牧畜における労働生活を題材に少女たちの労働に熱心な姿を明るく描き（紀・邱編 1998：419）、民族の解放によって牧畜が安定し、繁栄した様子を讃えたものである。民族の解放とは当時国民党や日本などほかの国家の侵略や支配にあった少数民族が共産党の指導によってその抑圧から抜け出せたことをいう。初めて上演された作品は牧畜生業に由来するもので、かつ共産党を賛美したものであった。「搾乳員」は牧畜を題材にした作品であるが、政治宣伝を目的としたものであるといえる。

この作品は1955年に新たに創作された作品を導入したもので、振付は高太、編舞が賈作光である（趙 2014：19）。当時、高太はシリングル盟文工団に所属、賈作光は内モンゴル文工団の団員であった。

高太は1934年生まれ、ジェリム盟（現通遼市）出身のモンゴル人である。1951年に内モンゴル文工団に就職し、1953年にシリングル盟文工団に転職した。1962年に再び内モンゴル文工団に戻っている。内モンゴル文工団は、内モンゴルの首府フフホト市におかれ、内モンゴルにおける歌舞団の中で最も権威の高い団体であった。ウラーンムチルは盟・市や旗・県政府の管轄下にあり、内モンゴル文工団は当時ウラーンムチルを指導教育する立場にあった。

賈作光は、1938年に満洲映画協会（満映協会）に職を得て、舞踊俳優として活躍し、

満洲国が滅亡した後、1946年から内モンゴル文工団で舞踊団員として働いた。満映協会は国策映画会社で、満洲国の首都であった新京（現吉林省長春市）にあり、「チンギス・ハーンの歌」などモンゴルの歴史をテーマにした映画を制作していた（藤澤編 1938）。賈作光は内モンゴル文工団で数多くの作品を手がけ、中国モンゴル族舞踊の父<sup>51</sup>とも言われる（龍 2014 : 116）。賈作光は、現代舞踊家石井漠の門下で、現代舞踊、バレエ、日本の民間舞踊及び朝鮮舞踊を習った（龍 2014 : 119）。当時、内モンゴル文工団で作られた作品は当文工団での上演のみに限らず、ほかの文工団<sup>52</sup>やウラーンムチルに導入されていた。

## (2) 1958年の上演作品

1958年の上演作品はダンス「箸の踊り」が記録されている。「箸の踊り」はオールドス地域でモンゴル牧畜民が余暇な時間や祭りを機にお酒を飲みながら、テーブルにある箸、酒盃、皿などを持ってたたいてリズムを作り、そのリズムに合わせて踊っていたものを改変したものである（中国民族民間舞踏集成編集部 1994 : 85）。作品化した人物については不明である。

## (3) 1959年の上演作品

1959年に記録された上演作品はすべてダンスで5作品があり、他の少数民族の作品を導入したものである。「農楽踊り」、「頂水踊り」、「花傘踊り」は吉林省延辺歌舞団から、「三月三」は黎（リー）族から、「楽しむ羅蘇」は彝（イ）族自治州文工団から導入した。吉林省延辺歌舞団は朝鮮人が主体である。

「農楽踊り」の制作年は1952年である。「頂水踊り」ともいう。水を入れたお碗を頭の上において踊る（紀・邱編 1998 : 336）。この作品は民間の踊りにもとづいたもので、かつて農民軍の演習が終わった際に行われていた。祝祭的な意味があり、のちに祭祀や祝日に踊るようになっていた（紀・邱編 1998 : 310-312）。労働や収穫の喜びとともに、国家の安定と繁栄を表現している（紀・邱編 1998 : 419）。

「花傘踊り」は哈尼（ハニ）族の祖先神の祭りで踊られていたダンスを作品にしたものである。哈尼族とは中国の少数民族の一つで、主に雲南省西南部に暮らす。その由来は以下のとおりである（紀・邱編 1998 : 244-245）。

哈尼族の祖先の命がハッカカン鳥<sup>53</sup>によって救われたという。哈尼族はハッカカン鳥に感謝するため、シュロの木で扇子を作り踊る。ハッカカン鳥の力で安楽で繁栄する生活を送ることを祈る。

<sup>51</sup> モンゴル人には元から舞踊の文化がある。賈作光はむしろそれを発展させたという意味で、モンゴル現代舞踊の父というほうがふさわしいだろう。

<sup>52</sup> 内モンゴルでは、内モンゴル文工団（のちに歌舞団と改名）以外にウリゲル（物語）・モンゴル劇団、モンゴル青年合唱団、京劇団などがある。

<sup>53</sup> 白鷓鴣、キジ目キジ科に分類される鳥類の一種で、中国の南部及びその周辺地域の山地の森や竹藪に暮らしている。餌は草の実や芽、昆虫などである。

「三月三」は黎族のダンスで、制作年は1957年である。黎族とは中国の南部地域の少数民族の一つで、約90パーセント以上が海南島に住む。黎族の祭りに若い男女が集まりダンスで恋愛する様子を表現している。この作品は共産党の革命による民族の解放によって自由自在に恋愛していることを賛美している（紀・邱編1998：421）。

「楽しむ羅蘇」は彝族のダンスで、1959年に制作された。彝族とは中国南部地域の少数民族の一つである。羅蘇は彝族の男性の名前である。彝族の民間祭りのダンス「瓦子嘿」にもとづいて作られた作品である。彝族人民の解放の喜びを描き、解放によってもたらされた幸せな生活を讃えている（紀・邱編1998：417-418）。

#### （4）1960年の上演作品

1960年に記録された上演作品は9作品あり、ダンスが「タジク族の踊り」、「打ち鳴らす踊り」、「扇子踊り」、「草原の夕方」の4作品、歌舞が「葡萄の収穫」、「新疆は素晴らしい」、「花帽子を縫い取る」、「アラムハン」、「ウズベキスタン」の5作品である。この年からダンスだけでなく歌舞が上演されるようになっている。すべて他の少数民族地域の作品を導入したものである。

「タジク族の踊り」はタジク族のダンスの総称である。タジク族は主に新疆ウイグル自治区に居住する少数民族で、主な生業は牧畜である。具体的に「チャブソマイ踊り」や「マイリス踊り」や「馬踊り」などがある。「チャブソマイ踊り」とは、男女の2人組が空飛ぶ鷹の行動を模倣して踊る。鷹のスピード、速さ、力強さを表現する。

「マイリス踊り」は、特定の祝日に踊るもので、娯楽性があるとともに、祝祭の意が含まれている。「馬踊り」は、馬の模型を使って馬の疾走、跳び方、回り方、鳴き方などを表現する（紀・邱編1998：332-333）。これは1960年、オンニュート旗ウラームチルが新疆ウイグル自治区歌舞団に隊員を派遣し、導入したものである。

「打ち鳴らす踊り」も新疆ウイグル自治区歌舞団から導入したものである。その内容などについては不明である。

「扇子踊り」は、解放と幸福生活を描いたダンスである。制作者は吉林省龍井県朝陽川鎮の朝鮮族の娯楽部である（紀・邱編1998：419）。収穫と労働の喜びを表現し、共産党や政府の政策を賛美している。青海省歌舞団に学び、導入している（劉・張編2012：56）。

「草原の夕方」は壮（チワン）族由来であるが、「扇子踊り」と同じく青海省歌舞団から導入したものである。壮族は、中国最大の少数民族で、広西チワン族自治区中西部や雲南省、広東省、貴州省、湖南省などの山間部に分部している。内容などは資料に記載がなく不明である。

歌舞5作品はすべて新疆ウイグル自治区歌舞団から導入されたものである。

歌舞「葡萄の収穫」の制作年は1959年である。内容はウイグル少女の収穫の喜びと労働を表現したものである（紀・邱編1998：419-420）。「搾乳員」と同じく、豊かな収穫が民族の解放によってもたらされたこと、その結果としての労働者の安定した豊かな生活を賛美している。

歌舞「新疆は素晴らしい」は、新疆ウイグル自治区の草地の広さや農業が盛んになったことを賛美した作品である。この作品で描かれる豊かな生活はすべて毛澤東と共産党のおかげであり、各民族<sup>54</sup>と人民が団結し、毛澤東を讃えるべきだ、と歌う。この作品は共産党による民族解放やそれによる安定した生活は毛澤東のおかげとし、毛澤東個人崇拜の歌である。

歌舞「花帽子を縫い取る」、「アラムハン」、「ウズベキスタン」について詳細は不明である。

### (5) 1962 年の上演作品

1962 年に記録された上演作品はダンス「頂碗踊り」、「狼を狩る」とオペラ「白毛女」である。

ダンス「頂碗踊り」は別名「収穫の祝い」ともいう。1959 年からウラーンムチルの隊員として働いていた宋正玉<sup>55</sup>が牧畜を手伝った経験をもとに制作したとされる。宋正玉は 1944 年生まれの朝鮮人女性である。その趣旨は「我々が今日のように新鮮なミルクを生産しているのは、すべて毛主席のお陰であり、このミルクを毛主席に捧げる」といったものである（劉・張編 2012 : 37-38）。ただし、この作品は朝鮮族のダンス「収穫の祝い」をもとにしたものとされ（鳥 2002 : 75）、朝鮮族の宋正玉がこの作品をもとに、牧畜地域にあわせて改変したと思われる。作曲は内モンゴル文工団団員の祈・達林太である（劉・張編 2012 : 38）。祈・達林太<sup>56</sup>は内モンゴル文工団団員とあるが、詳しい記載はない。内モンゴル直属ウラーンムチルの隊員ウ氏（仮名前）への聞き取りによると祈・達林太はモンゴル人という<sup>57</sup>。この作品は、モンゴル民族の牧畜作業を題材に毛澤東崇拜と共産党を讃えたものである。

ダンス「狼を狩る」は狼狩りをモチーフにしたものと思われるが、詳しい記載はない。狼はモンゴル民族の家畜にとって危険な動物であると同時に、モンゴル民族の始祖伝説においては神聖視される（鯉淵 1992 : 144-145）。ウラーンムチル最初のオリジナル作品である。振付は宝音で、創立時からのオンニュート旗ウラーンムチル隊員である<sup>58</sup>。作曲は不明である。

オペラ「白毛女」は鳥丹評劇団と合同で上演した作品である（劉・張編 2012 : 57）。評劇は漢人の戯劇の一種で、中国北方の地方劇名である。評劇は社会を評論することに由来する。大鼓や京劇などの歌調やしぐさを取り入れて発展した（愛知大学中日大辞典編纂所 2010 : 1321）。評劇団は社会を評論した内容を扱う歌舞団を指す。「白毛女」

<sup>54</sup> 漢人（民族）を含む他少数民族を指す。

<sup>55</sup> 1974 年にウラーンムチルを離職している。

<sup>56</sup> 資料によって祈・達林太とも記されている。本稿では祈・達林太に統一する。

<sup>57</sup> 2020 年 2 月 21 にウィーチャットで確認した。隊員のウ氏は 1961 年生まれのモンゴル族である。1978 年にオンニュート旗ウラーンムチルで入職し、1987 年から内モンゴル直属ウラーンムチルへ転職している。

<sup>58</sup> 生年は不明。1961 年に離職している（劉・張編 2012 : 19）にもかかわらず、作品を創作している。ウラーンムチルを離職した後、恐らく文化館で働いていたと考える。ウラーンムチル創立後も文化館は活動しており、文化館とウラーンムチルはお互いに活動の計画と作品の創作などで協力し合っていた。

は共産党の革命を称えたオペラである。白毛女という名の美しい女性が強制的に地主に嫁がされたが、共産党の紅軍により救われるというものである。漢民族による革命を讃えた歌劇「白毛女」をウランムチルと評劇団が合同で演じた。原作は延安魯迅芸術学院とあるが（松浦 2000b : 166）、具体的な制作者は不明である。

## (6) 1963 年の上演作品

1963 年に記録された上演作品は 9 作品で「草原の兵士」、「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」、「苦難の歳月」、「我が故郷」、「毛澤東が安源に行く」、「小八路」、「草打ち歌」、「羊の毛を刈る」、「皿の踊り」である。すべてダンスである。

ダンス「草原の兵士」は同タイトルの歌をもとに作られたと考えられる。その内容は国防のために国境を守る兵士を讃えた内容である。具体的には共産党の教育のもとで国境にある兵士が様々な困難を乗り越えながら国境を警備している様子を表現している。作曲は藩生憲、歌もあり、作詞は郝永生となっている（内蒙古自治区文化局編 1965 : 63）。両者について詳細は不明である。振付は不明である。

ダンス「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」の詳細な内容は不明であるが、タイトルにある階級という言葉から階級闘争を描いたものと思われる。階級闘争とは資本家階級と労働者階級の対立をいう。つまり、反右派闘争の影響を受けていると考えられる。振付は朱志会である。朱志会は 1945 年生まれの漢族男性である。1960 年にオンニュート旗ウランムチルの隊員になり、1971 年にウランムチルを離職している。15 歳で隊員になり、わずか 17 歳でこの作品を制作している。作曲は不明である。

ダンス「苦難の歳月」は制作者と内容は不明である。そのタイトルから解放前の封建社会や階級闘争の苦しみを描いた作品と思われる。振付や作曲は不明である。

ダンス「我が故郷」の内容は、草原に広がる麦畑と新たに建設された工場を讃えて、共産党の指導で祖国や故郷が繁栄していたことを描いている（内蒙古自治区文化局編 1965 : 81）。草原に広がる麦畑から、草原の開墾が推奨されていることが示唆される。

「頂碗踊り」を作曲した祈・達林太がモンゴル民謡のメロディーに作詞している。振付は不明である。

ダンス「毛澤東が安源に行く」は、1921 年に毛澤東が湖南の安源という地方を通過するとき、工場で働いていた労働者と協力し革命を遂行する様子を描いた作品<sup>59</sup>である。制作者は不明である。この作品も毛澤東を讃えたものである。

ダンス「小八路」は中国の抗日戦争を背景にした内容である。タイトルの八路とは、共産党軍、もしくは解放軍を指す。「小」は少年や児童を指している。抗日戦争中、一人の少年の妹が負傷して死亡した。その少年は、八路軍の教育を受けたのち、敵討ちをしたという<sup>60</sup>。共産党の革命と民族解放を賛美した作品である。振付は孟慶生となっている。孟慶生はモンゴル人男性で、1977 年～1990 年までオンニュート旗ウラー

<sup>59</sup> 2003 年には映画化されている。

<sup>60</sup> 1973 年にはアニメ化されている。

ンムチルの隊員である。孟慶生はこの時点でオンニユート旗ウラーンムチルに就職していないにもかかわらず、演目の制作に関わっている。作曲は不明である。

ダンス「草打ち歌」の内容は不明である。作品名から牧畜地域の草刈りの様子を描いたものと思われる。振付はウラーンムチル隊員の李玉珍である。李玉珍は1945年生まれ、漢人女性である。創立翌年の1958年にウラーンムチルの隊員に加わっている<sup>61</sup>。

ダンス「羊毛を刈る」も李玉珍の振付である。内容について『オンニユート旗ウラーンムチル誌』に記載はないが、1960年に中国民間文芸研究会が編集した内モンゴル歌舞に関する資料には「羊毛を刈るの歌」という歌が掲載されている。そこでは、羊毛は牧畜民の財産であり、また、寒さを耐えるために羊毛が使用されていることが描かれている。作詞は道爾吉永栄と書いているが、詳細は不明である（中国民間文芸研究会編1960：253）。この歌をもとにダンスを振付したものと思われる。

「皿踊り」の振付も同じく李玉珍であるが、ウイグル民族のダンスを改変したものである。「皿踊り」はウイグル民族の祝日と祭りを祝うダンスで、男女5人が喜びを表現する。解放の喜びと解放によってもたらされた幸福な生活を讃えた作品である（紀・邱編1998：418）。皿はウイグル民族やモンゴル民族の中で、訪問客を迎える際に出す果物や乳製品、肉食品の入れ物として重要視されている。作曲は詳細不明である。

### (7) 1964年の上演作品

1964年に記録された上演作品はダンス6作品と歌3作品である。ダンス「パトロールの夜」、「良い社員」、「祖国防衛のための訓練」、「モンゴル族と漢族は一家」、「幸福な青年」、「祖国防衛」で、歌が「文化軽兵隊の歌」、「内モンゴルは素晴らしい」、「賛歌」である。

ダンス「パトロールの夜」の内容は社会主義建設のため、国境地域を真夜中にパトロールする兵士を讃えたものである（内蒙古自治区文化局編1965：98）。振付は内モンゴル文工団団員の祈・達林太で、作曲は安柯欽夫である。安柯欽夫について詳細は不明である。

ダンス「良い社員」は人民公社の女性が人民の財産である羊の群れを災害から守る行動を描いた物語である。振付は保特斯、作曲は杜兆植である（内蒙古自治区文化局編1965：94）。この2人について詳細は不明である。この作品は、共産党の教育のもとで育った人民公社の社員の献身的貢献を讃えたものである。

ダンス「祖国のために訓練」の内容はモンゴルのナーダム祭りのために弓矢の訓練の様子を描いたもので、射場に人形を置き、敵の心臓と見立てて矢を放つ。これはその訓練の様子を祖国防衛のための軍事訓練と位置付けた作品である（内蒙古自治区文化局編1965：90）。この作品は祖国防衛とそれに従事する兵士を讃えたものである。振付はアラシャー左旗ウラーンムチル、作曲は普日布である。普日布について詳細は

---

<sup>61</sup> 1997年にウラーンムチルを離職している。

不明である。

ダンス「モンゴル族と漢族は一つの家庭」は、歌「モンゴル族と漢族は一つの家庭」をもとに作られたと考える。内容は一本の木に二輪の花があるようにモンゴル族と漢族は一つの家庭であり、共産党の指導下で永遠に変わらないことを描いたものである（中国民間文芸研究会編 1960：37）。作詞由来はフルンボイル市の阿榮旗と書いているが、詳細は不明である。振付は隊員の李玉珍である（劉・張主編 2012：40）。作曲は不明である。

ダンス「幸福な青年」の内容は不明である。振付は隊員の李玉珍である（劉・張主編 2012：40）。作曲は不明である。

ダンス「祖国防衛」は、歌「祖国防衛」をもとに作られたと考えられる。内容は祖国防衛のために戦っている国境にいる兵士を讃えたものである。作詞作曲は洗星海で、広東省の漢族男性である（音楽出版社編 1965：25）。洗星海は、1905 年生まれで、1945 年に亡くなっている。彼は作曲家でピアノ演奏者でもあった。この作品がいつ作られたのかは不明である。

次に、歌であるが、まず「文化軽兵隊の歌」はウラーンムチルの機能や活動を紹介するものである。この歌の内容は、ウラーンムチルは共産党の宣伝隊であり、一人が多くの技能を持ち、社会主義の新たな文化を牧畜民や農民に宣伝しているというものである（内蒙古自治区文化局編 1965：39）。作詞はオンニュート旗ウラーンムチル隊員の鳥国政で、1934 年生まれのオンニュート旗出身のモンゴル人男性である。1953 年にオンニュート旗文化館で働き、創立時からのウラーンムチル隊員である。作曲は甘珠爾扎布である。甘珠爾扎布については不明である。この作品は共産党や社会主義思想を賛美したものであると考えられよう。

歌「内モンゴルは素晴らしい」の内容は、内モンゴルの自然環境及び包頭鉄鋼業<sup>62</sup>の繁栄とそれをもたらしてくれた共産党と毛澤東を讃えたものである。作詞は阿迪娅で、作曲は図力古爾である（内蒙古自治区文化局編 1965：68）。阿迪娅については詳細は不明である。図力古爾は 1943 年生まれのモンゴル族の男性で、1963 年からジリェム盟（現通遼市）フレイ（庫倫）旗ウラーンムチルの隊員になっている。1966 年に内モンゴル自治区直属ウラーンムチルに転属している。

歌「賛歌」は中国の各兄弟民族が解放されたのはすべて共産党と毛澤東のお陰であると讃えたものである（于・赫編 1997：197-198）。各兄弟民族とは中国の漢民族を含む他少数民族を指す。この作品は、共産党の革命・民族解放や毛澤東崇拝や民族団結などを讃えたものである。作詞は胡松華である。胡松華は 1931 年生まれ、北京出身の満洲人で、歌手であった。1949 年に華北大学の第三文工団で働き、1952 年から中央民族歌舞団団員になっている。作曲はシリソグ盟東ウジムチン旗の民謡「サロール・タル（*sarul tala*, 広々した草原の意）」（巴 2001：484）を改変したものである<sup>63</sup>。

<sup>62</sup> 当時、包頭市を鉄業の重工業都市として開発が進んでいた。

<sup>63</sup> この歌は、2019 年 6 月に中国中央宣伝部が主催した「中華人民共和国成立 70 周年をお祝いする優秀 100 首歌」に選抜されている。

## (8) 1965 年の上演作品

1965 年に記録された上演作品は 8 作品で、すべて歌である。

歌「草原の児女が延安を愛する」の内容は延安における革命を讃えたものである。作詞は朱嘉庚で、作曲は祈・達林太である。朱嘉庚は、オンニユート旗の宣伝部から赤峰市文化局へ転職し、のちに文化局の局長まで昇進した。さらに赤峰市歌舞団へ転職し、団長の職務を担っていた。この作品はオンニユート旗宣伝部から導入したと言えよう。制作者の 2 人が延安に巡回上演に向かう途中で書いたとされる。延安は中国共産党の革命聖地、或いは革命根拠地である。延安への巡回上演は革命精神を学ぶことが目的であった（劉・張編 2012 : 42）。

歌「我々は文化軽兵隊」の内容は、ウラーンムチルを毛澤東や共産党の指導で文化、教育の普及を担う兵士に例え、ウラーンムチルの機能と役割を紹介するものである。作詞作曲は内モンゴル自治区ウラーンムチル代表団となっている（内モンゴル自治区文化局 1965 : 36-37）。この作品も共産党や社会主義思想を賛美したものである。

歌「共産党の教育はすばらしい」の内容は、共産党の教育を太陽の光に例えたものである。太陽の光で万物が育ち繁栄する。同じように、共産党の教育下で、経済、人民公社、教育が繁栄している。作曲はウラーンムチル隊員の達力瑪、作詞は同じく隊員の劉国慶である（内モンゴル自治区文化局編 1965 : 41）。2 人の詳細については不明である。

歌「赤旗は世代から世代へ」は、毛澤東の指導を賛美した作品である。世代がかわっても赤旗、つまり革命の精神が継承されることを歌ったものである。メロディーはオールドス民謡<sup>64</sup>をもとにしており、那存が作詞したものである（内モンゴル自治区文化局編 1965 : 46）。那存について、詳細は不明である。

歌「草原に鋼鉄城が建った」は、内モンゴル自治区の包頭に毛澤東の指導下で建築された鋼鉄工場を讃えたものである。モンゴルと漢族が団結し、鋼鉄を生産し、社会主義を建設していると歌う。モンゴル族の民間歌謡のメロディーに、唐葉封が作詞したものである（内モンゴル自治区文化局編 1965 : 72）。民族団結や共産党や社会主義思想などを讃えている。唐葉封について詳細は不明である。

歌「各民族の人民が毛主席の周りで団結する」の歌詞、作詞作曲者は不明である。タイトルから、民族の団結と毛澤東崇拝を賛美した作品と考えられる。

歌「井岡山は赤色の山」の歌詞および作詞作曲者は不明である。井岡山は延安に並び共産党の革命根拠地と言われる。赤色の山というのは、革命が激しくて血を流したことを意味する。この作品は、共産党革命を讃えたものと考えられる。

歌「アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民の解放」の歌詞および作詞作曲者は不明である。当時の中国は、北朝鮮やベトナムなど社会主義国家を援助し、帝国主義や侵略主義と戦っていた時期であった。こうしたなか、内モンゴルの各地域のウラーンムチルでは「反帝国進行曲」、「ベトナムを支援し、アメリカに反対する」、「英雄ベトナム人が必ず勝利する」などの歌が作られていた（内モンゴル自治区文化局編 1965 : 82、

<sup>64</sup> オールドスはモンゴル地域の地名で、オールドス民謡はモンゴル民謡の一つである。

83、148)。当時の政治情勢に合わせて作られたのであろう。

## 6.2 草創期における上演作品の総括

本節では、草創期ウラーンムチルの上演作品を以下の5つに着目して検討する。

### ① 上演作品数とその種類

資料から判明した上演作品は合計で45作品である。そのうち、ダンスが28作品、歌舞が5作品、オペラが1作品、歌が11作品である。

上演作品数を年毎に見ると、1957年と1958年は1作品のみであるが、1959年からは5作品と急増する。特に多いのが1960年と1963年以降で、毎年8～9作品創作されている。

創立当時の2年間でわずか2作品であったことはそもそも上演作品自体が少なく、かつ、上演のノウハウがなかったためであろう。

ウラーンムチル創立初期において、その上演作品はダンスが中心であった。歌舞は1961年に、オペラは1962年に上演されたのみである。歌はさらに遅く、7年後の1964年からである。しかし、1965年には歌のみとなる。歌はその内容を直接的に伝えるため、よりメッセージ性が強いと言える。

### ② 上演作品の由来

上演作品の由来は導入と改変とオリジナルの3つである。導入が24作品、改変が3作品、オリジナルが7作品、制作者が不明で、由来の判断がつかない作品は11作品である。初期に多いのが導入で、1962年からオリジナルが出現する。

導入は内モンゴルの他の機関の作品と他の少数民族地域の作品を上演したものに分けられる。

内モンゴルの他機関からの作品導入は5作品である。まず1957年の第一上演作品が内モンゴル文工団（歌舞団）から導入したダンス「搾乳員」と1964年のダンス「パトロールの夜」であった。他の3作品は1964年にアラシャー左旗ウラーンムチルからダンス「祖国のための訓練」と1965年に内モンゴル・ウラーンムチル代表団から歌「我々は文化軽兵隊」とオンニュート旗宣伝部から歌「草原の儿女が延安を愛する」であった。

他の少数民族歌舞団から導入した作品は全14作品で、1959年のダンス5作品と1960年のダンス4作品、歌舞5作品である。1959年と1960年の上演作品はすべて他の少数民族歌舞団から導入した作品であった。同時に、導入先の歌舞団において制作されていた作品はすべてダンスであった。創立当時、他の少数民族の歌舞団と積極的に交流していたことがうかがえる。それとともに、こうした文化事業が1950年代後半から既に中国の少数民族地域全体で展開していたことが分かる。

改変は1958年の内モンゴルのオルドス地域の民間舞踊1作品「箸の踊り」と他の少数民族のダンスを編舞した作品2作品、1962年の朝鮮族の「収穫の祝い」と1963年のウイグル族の「皿の踊り」である。それまでの導入とは違い、他の少数民族の

作品をそのまま模倣して上演するのではなく、自分たちで編舞するようになっている。

オリジナルはウラーンムチル隊員自らが制作したもので、創立から5年後の1962年以降7作品が上演されている。ただし、作詞作曲、振付など一部しか分かっていない作品がほとんどである。

創立当初はすでに完成した作品を模倣し、導入した作品を上演していたが、徐々に他地域の作品や民間民謡などを独自に改変するようになる。5年後にはオリジナルの作品を発表するようになっている。

### ③ 上演作品の制作者

制作者について振付、作詞、作曲、編舞に分類する。

#### 振付

振付は高太、宝音、朱志会、孟慶生、李玉珍、祈・達林太、保特斯的の6人と1つの機構のアラシャー左旗ウラーンムチルである。この中で、宝音、朱志会、孟慶生、李玉珍の4人はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

高太はシリングル盟文工団所属のモンゴル人で、1957年のダンス「搾乳員」を振付している。

宝音はモンゴル人で、1962年のダンス「狼を狩る」を振付している。

朱志会は漢人で、ダンス1963年のダンス「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」を振付している。

孟慶生はモンゴル人で、1963年のダンス「小八路」を振付している。

李玉珍は漢人で、ダンス「草打ち歌」、「羊毛を刈る」など5作品を振付している。

祈・達林太は、内モンゴル文工団団員所属のモンゴル人で、1962年「頂碗踊り」の作曲に加え、1963年ダンス「我が故郷」の作詞、1964年ダンス「パトロールの夜」の振付、1965年歌「草原の儿女が延安を愛する」の振付と、多才にオリジナル作品を発表している。

保特斯的は所属不明で、1964年のダンス「良い社員」を振付している。

#### 作詞

作詞は、郝永生、道爾吉永栄、洗星海、鳥国政、阿迪娅、胡松華、朱嘉庚、達力瑪、那存、唐葉封の10人である。また1つの機構としてフルンボイル市阿榮旗とあり、フルンボイル市阿榮旗政府を指していると考えられる。

郝永生について詳細は不明である。1963年のダンス「草原の兵士」を作詞している。

道爾吉永栄について詳細は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1963年のダンス「羊毛を刈る」を作詞している。

洗星海は漢人の作曲家で、1964年のダンス「祖国防衛」を作詞・作曲している。

鳥国政オンニュート旗ウラーンムチル所属のモンゴル人で、1964年の歌「文化軽兵

隊の歌」を作詞している。

阿迪娅について所属は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1964年の歌「内モンゴルは素晴らしい」を作詞している。

胡松華は満洲人の歌手で、1964年の「賛歌」を作詞している。

朱嘉庚はオンニュート旗宣伝部所属の漢人で、1965年の歌「草原の儿女が延安を愛する」を作詞している。

達力瑪について所属は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1965年の歌「共産党の教育が素晴らしい」を作詞している。

那存について所属は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1965年の歌「赤旗は世代から世代へ」を作詞している。

唐葉封について所属と民族は不明である。1965年の歌「草原に鋼鉄城が建設された」を作詞している。

フルンボイル市阿榮旗政府は、1964年のダンス「モンゴル族と漢族は一つの家庭」を作詞している。

## 作曲

作曲は、祈・達林太、藩生憲、安柯欽夫、杜兆植、普日布、洗星海、甘珠爾扎布、図力古爾、劉国慶の9人である。ほかに1963年のダンス「我が故郷」、1964年の歌「賛歌」、1965年の歌「草原に鋼鉄城が建設された」はモンゴル民謡の曲をアレンジして作曲している。また1965年の歌「赤旗は世代から世代へ」はオルドス民謡の曲をアレンジして作曲している。

祈・達林太は内モンゴル文工団所属のモンゴル人で、1962年のダンス「頂碗踊り」、1965年の歌「草原の儿女が延安を愛する」の2作品を作曲している。

藩生憲について所属と民族は不明である。1963年のダンス「草原の兵士」を作曲している。

安柯欽夫について所属は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1964年のダンス「パトロールの夜」を作曲している。

杜兆植について所属と民族は不明である。1964年のダンス「良い社員」を作曲している。

普日布は所属不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1964年のダンス「祖国のために訓練」を作曲している。

洗星海は漢人の作曲家で、1964年のダンス「祖国防衛」を作詞・作曲している。

甘珠爾扎布は所属不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。1964年の歌「文化軽兵隊の歌」を作曲している。

図力古爾は、内モンゴル自治区直属ウラーンムチル所属のモンゴル人で、歌「内モンゴルは素晴らしい」を作曲している。

劉国慶について所属と民族は不明である。1965年の歌「共産党の教育が素晴らしい」を作曲している。

## 編舞

編舞は、賈作光、宋正玉、李玉珍の3人である。

賈作光は内モンゴル文工団所属の満洲人で、満映協会を経て、1957年のダンス「搾乳員」を編舞している。

宋正玉はオンニュート旗ウラーンムチル所属の朝鮮人で、1962年のダンス「頂碗踊り」を編舞している。この作品は、オンニュート旗ウラーンムチル隊員自身の最初の改変した作品である。

李玉珍はオンニュート旗ウラーンムチル所属の漢人で、1963年のダンス「皿の踊り」を編舞している。

### ④ ウラーンムチル隊員構成の変化

創立当時、隊員は6名のみ、すべてモンゴル人であった。そのうち2人が文化館の出身である。創立の翌年の1958年から漢人の李玉珍や朝鮮人の宋正玉などモンゴル人以外も隊員として参加していることが分かる。

創立当時すべてモンゴル人であったことは、モンゴル地域的かつモンゴル文化を重要視しているように見える。しかし、後から漢人や朝鮮人を入れたことは、モンゴル地域において、モンゴル人だけではなく、漢人や他の民族が居住していたことに配慮したと考えられる。さらに、中国の社会主義建設において、多民族の協力が求められたのであろう。

### ⑤ 上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。政治性(シンジルト2010)や社会主義思想の宣伝(紅2013)について、その内容は多岐にわたることが明らかになった。

まず、政治性がないと言い切れる作品はわずかである。内容については、文献の説明によるものであり、とりわけダンスによるメッセージをどのように読み取るのかはむずかしいところがある。とはいえ、参照した文献で政治的といえる内容としていないものは1958年ダンス「箸の踊り」、1959年ダンス「花傘踊り」、1960年ダンス「タジク族の踊り」、1963年ダンス「羊の毛を刈る」のわずか4作品である。また1962年ダンス「狼を狩る」と1963年ダンス「草打ち歌」は政治性がないと思われるが、内容の詳細は不明である。それ以外は、とりわけ、創立初期の上演作品の内容の特徴は労働と収穫を描きつつ、共産党による民族解放とそれによる安定した生活を賛美している。

少数民族を題材にした作品の中には1957年のダンス「搾乳員」や1963年のダンス「草打ち歌」と「羊毛を刈る」のようにモンゴルの牧畜を題材にしている作品もある。とりわけ「草打ち歌」と「羊毛を刈る」は漢人の隊員である李玉珍が振付している。これらは題材を牧畜に求めているが、紅が指摘するように民族文化の普及を目指したものと言えらるかどうかが疑問である。草創期において、遊牧民が好む文化芸術を上

演していた（紅2013）というよりむしろ、「社会主義思想」の宣伝のために観客である牧畜民に身近な題材を取り入れた、というほうが適しているであろう。これは他の少数民族の作品でも同様である。

初期に見られた共産党による民族解放と安定した生活という内容が大きく変化するのが1963年からである。1963年には上演作品数も増えるとともに、共産党による革命と民族解放にくわえ、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争がテーマになってくる。大躍進政策はその後も草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与え続けていた。ただし、毛澤東崇拜は1960年にすでに見られる。上演作品に大躍進の負の側面や飢饉の克服を題材にしたものはない。

また複数のテーマを持つ作品も少なくない。例えば、1960年の歌舞「新疆は素晴らしい」は毛澤東だけでなく、共産党による民族解放も讃えている。1964年の歌「賛歌」は共産党の革命・民族解放、毛澤東崇拜、民族団結などを讃えている。また1965年の歌「草原に鋼鉄城が建設された」は、民族団結や共産党や社会主義思想、大躍進政策などを讃えたものである。

さらに、上述したこうした歌舞は、モンゴル民謡のメロディーを基に振付や歌詞を加えることが多かった。具体的には、1963年のダンス「我が故郷」と1964年の歌「賛歌」はモンゴル民謡に、1965年の歌「赤旗は世代から世代へ」と「草原に鋼鉄城が建設された」はオルドス民謡とモンゴル民謡に振付し、或いは歌詞を加えたものである。

上演の種類で1964年から歌が多く上演されるようになるが、その内容を直接的に伝えるためにとられた手段だったとも言えるのではないか。また、国防に関するものなど、国際的な状況を反映したものとなっている。

最後に、オンニュート旗は半農半牧地域であるが、農業をテーマにした作品はない。オンニュート旗に由来する作品がないのも特徴である。

### 6.3 まとめ

ウランムチル草創期（1957-1965年）の上演作品から政府の当時のあらゆる政策が作品化されていたことが窺える。まさに社会主義思想の宣伝が重要視されていたことが分かる。その社会主義思想とは、いわゆる労働者階級の利益や生産手段の共有を提唱した思想であり、さらに毛澤東思想や共産党や国防警備及び民族団結などを讃えたものであった。他方で、資料による限り、民族文化を扱った作品は少ない。地域をテーマにした作品は皆無であった。上演作品は当時の政策を反映したもので、共産党革命、民族解放、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争など政策宣伝が重要視されていた。民族文化はむしろその目的のために利用されたといえるかもしれない。オンニュート旗という地域性はまったく無かった。

### 小結

本章では、ウランムチルの草創期（1957-1965年）である毛澤東時代前半期に行われた反右派闘争、大躍進政策、人民公社について記述した。さらに、こうした政策

を背景とする内モンゴルの文化事業の状況、オンニュート旗ウラーンムチルの活動及び他の文化事業についても解明した。

この時期、まず中国で「反右派闘争」が実施されていた。「反右派闘争」の影響を受け、牧畜地域の民族的、地域的なものが「右寄りの保守思想」とみなされ、「民族融合論」が提示された。その後、大躍進と人民公社政策が行われ、内モンゴルの牧畜社会には大きな変化がもたらされた。毛澤東は大躍進運動の一環として文芸振興を推薦していたが、そうした結果には至らなかった。その理由として大量の生産により工業と農業のバランスが崩れ、さらに自然災害やソ連の技術者引き上げも加わって大量餓死事件を招いたことによるものである。

毛澤東時代前半期は、ウラーンムチルの草創期であり、ウラーンムチルには社会主義思想としての政治宣伝が重要視されていた。上演作品は当時の政策を反映したもので、共産党革命、民族解放、毛澤東崇拜、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争など社会主義思想的なものであった。民族文化を扱った作品は少ないのは、「反右派闘争」の影響を受けた可能性が高い。上演作品に「大躍進の負の側面」や飢饉の克服を題材にしたものはない。むしろ、大躍進政策と人民公社を讃えた作品が多い。例えば、1964年のダンス「良い社員」や1965年の歌「草原に鋼鉄城が建設された」「各民族の人民が毛主席の周りに団結する」などである。

## 第五章 毛澤東時代後半期のウランムチル（1966-1976 年）

本章では、まず毛澤東時代後半期の 10 年（1966-1976 年）に行った文化大革命（以下は、文革と記す）の発動について説明する。次に、文革の被害を受けた内モンゴルの政治家、芸術家の状態を詳述する。その上で、内モンゴルの文化事業に与えた文革の被害について述べる。

最後に、この時期のオンニュート旗ウランムチル及び他の文化事業における文革の被害とオンニュート旗ウランムチルが上演した演目の特徴について分析する。

### 1 文化大革命の発動

1966 年～1976 年まで中国では、文革が起こった。この文革のことを中国では、無産階級文化大革命ともいう。文革は中国共産党の「極左」路線によるもので（リンチン 2015 : 270）、毛澤東が指導し、発動した（郝 1991:293）。文革は、中国指導層の権力闘争で、実態は毛による劉・鄧ら党・政府官僚からの奪権闘争だった（焦 2004:34）。その背景には毛澤東が推進した大躍進の失敗であった。毛澤東は大躍進の失敗後、国家主席の座を劉少奇に譲る。当時、劉少奇や鄧小平らは毛澤東が推進した大躍進政策を立て直そうと経済調整を行っていた。それに対抗して、毛澤東は劉少奇や鄧小平らを「資本主義の実権派」と非難し、文化大革命を発動させる。それは 1966 年 5 月 16 日のことだった。

こうした中、劉少奇や鄧小平は批判され、失脚し、労働改造が行われた。劉少奇は、労働改造中に当たる 1969 年 11 月に亡くなっている。劉少奇が失脚したのを機に、林彪は 1969 年 4 月に中国共産党第 9 回全国大会で、党中央委員会副主席になった。林彪は、劉少奇に代わって、毛澤東の後継者に指名されるが、政争に敗北して 1971 年 9 月にソ連に亡命する途上でモンゴル人民共和国において搭乗機が墜落し、死亡した。1973 年、鄧小平は労働改造中、自ら毛澤東に手紙を書き、国家のために奉獻していくと意思を伝えた。鄧小平は、文革の被害が大きくなる中、毛澤東の許可を得て病身の周恩来首相を補佐して経済の立て直しに着手した。こうしたことで鄧小平は、毛澤東に党中央委員会副主席に抜擢された。そのあと、1975 年に鄧小平は文革の誤った政策を指摘した。このことがきっかけとなり、林彪の一派である江青、張春橋、姚文元、王洪文の「四人組」とともに毛澤東に走資派、修正主義者として批判され、1976 年に職務を失った。

一方、文革は内モンゴルから始まったという見方もある（郝 1991 ; 楊 2009）。内モンゴル自治区の最高責任者のウランフーは文革前の 1966 年 5 月 1 日には自由が奪われていた。中国共産党中央政府に派遣された華北局（北京、天津、河北、山西、内モンゴル）のリーダー李雪峰は「ウランフーらを排除するための情報収集の活動が早くも 1964 年から極密に始まっていたこと、内モンゴル自治区が中国のほかのどの地域よりも早く動乱に巻き込まれたことなどから判断すると、毛澤東と共産党は内モンゴル自治区から文化大革命を開始させた」とみなしていた（楊 2009 : 22）。

文革中、内モンゴルでは、最高責任者ウランフーを始め、牧畜民・農民などさまざまな人々が被害の対象となった。ウランムチルもその例外ではなかった。以下は政治家、文芸団体を中心に内モンゴルの文化事業とその被害を述べる。

## 2 文革の被害

### 2.1 内モンゴルの政治家に対する迫害

内モンゴル文工団をベースに 1957 年 6 月にウランムチルが創立された。その発展は、1960 年代半ばにピークを迎えた。その理由は政策宣伝の必要性が高まったことによる。1960 年代には、ウランムチルは約 60 団体にまで増加した。しかし、文革が始まるとウランムチルは「ウランフー黒線<sup>65</sup>の産物」（ウランフー悪党）とみなされた。ウランムチルという組織名そのものも、ウランフーの「ウラン」と同じだということで、ウランフーに忠誠を表すために創られたものであると批判された。この結果、ウランムチルの活動はほぼ停止状態となった。一部のウランムチルは「毛澤東思想宣伝隊」や「文工団」に改編され、「革命様板をモデルにし、社会主義宣伝を行う」ようになった（紅 2013 : 157）。

文革中、ウランフーだけでなく、息子のブヘ（布赫）も「反革命修正主義の文芸黒線」として批判された。ブヘは当時、内モンゴル文化局の副局長だった。内モンゴル文化局は当時内モンゴルの文化機構の最高機構であり、その副局長は地位の高い役職（指導者）としてみなされていた。これについて 1967 年 12 月 2 日に内モンゴルで発行された呼三司<sup>66</sup>ニュースでは以下のように記事にしている（楊編 2015 : 489）。

歴史に空前のプロレタリア文化大革命の中で、内モンゴルの文芸界を 20 年に渡って統治した活閻魔大王であるブヘを攫み出す。これは毛主席の革命路線の偉大な勝利である。ウランフーの犬の皇太子であるブヘが長期に渡って毛主席の革命文芸路線に抵抗してきた。息子のブヘはウランフーの民族分裂文芸者を大量に買収し、修正主義の文芸黒質（物）を宣揚している。内モンゴルの文芸界をウランフーの反党、叛国、資本主義への復辟の本拠地とした。内モンゴルの文芸界を中国のフルシチョフに変更した。

ブヘは様々な手段を使い、彼らの犬の党である周戈と賈作光らを「雲澤文工団（ウランフーの文芸工作団）」<sup>67</sup>に入らせ、チンギス・ハーンの演劇プログラムを作り、「ウランフー思想」を鼓吹する。歌曲や舞踊に「ウランフー思想」を鼓吹する「雲澤の歌」、「内モンゴル青年進行曲」、「内モンゴル騎兵進行曲」、『血案』、「モン

<sup>65</sup> 資本主義・修正主義路線を指す（愛知大学中日大辞書編纂所 2010 : 695）。

<sup>66</sup> 呼三司とは、内モンゴル自治区・呼和浩特市紅衛兵第三司令部のニュースの事である（楊海英編 2015 : 488）。

<sup>67</sup> ウランフーの出生時の名前は慶春で、4 歳から雲澤という名前を付けた。さらに雲時雨という名前も使っていた。1949 年に中国が成立する際、ウランフーという名前で変更した。

ゴル舞」を次々と作った。こうしてウランフーの民族分裂主義の文芸路線に作品を提供していた。

文革中、内モンゴルの最高指導者だったウランフーと息子のブヘがこのようにして批判され、政治権力が降格されている。内モンゴルのナンバーツウの指導者であったハーフンガーも「内モンゴル人民革命党」として批判され、1970年に亡くなっている。ブヘは降格されたことで、文化局は活動が停止させられた。その後1971年から活動を再開した（『内蒙古大辞典』編委会1991：111）。

文革によって、内モンゴルの指導者は全て漢人に代わった。文革が始まった3ヵ月後の1966年8月から内モンゴル自治区の共産党書記は漢人の解学恭に、主席は1967年11月から漢人の滕海清になった。

当時の内モンゴルの人口1,300万人のうち、モンゴル人は150万人弱を占めていた。しかし、文革において、34万6,000人のモンゴル人が「反党叛国集団」か、「民族分裂主義者政党」の「内モンゴル人民革命黨員」とみなされ、そのうち2万7,900人が殺害された。拷問にかけられて身体的な障害が残った者は12万人に達するとされている。ほかに5万人や10万人が殺害されたとの説がある（楊2009：1）。

## 2.2 内モンゴル歌舞団の芸術家に対する迫害

文革中、歌舞団の芸術家も激しい迫害を受けた。当時、文革の被害を受けた内モンゴル歌舞団の芸術家チ・ボラグは自伝でこのように述べている（斉2001：413）。

「命にかけても党中央を守れ！」、「毛主席を守れ！」、「プロレタリア文化大革命を死守せよ！」、「ウランフーを打倒せよ！」、「王鐸を打倒せよ！」、「王逸倫を打倒せよ！」、「プロレタリア文化大革命万歳！万々歳！」紅衛兵はみな、毛澤東語録を手にし、緑色の偽造の軍服を着ていた。師範学院の紅衛兵は凶暴だった。何台ものトラックの荷台にウランフー時代の内モンゴル党委員、内モンゴル政府の年配の幹部を乗せていた。彼らは1メートルもある紙帽子を被らせていた。それには「民族分裂分子、反革命分子、修正主義分子」などと書かれていた。

チ・ボラグは文革中の1967年にアマチュア労働者文芸宣伝隊に入らせられ、隊員たちの指導を担当した。それから一年後、「文化大革命が始まって2年、すでに3人の馬頭琴演奏の先輩方が亡くなっていた。巨匠セーラシ先生、バインノール歌舞団の演奏家だったバラガン先生、私の師匠のサンドーロン先生である。次は私がやられる番かもしれない。そんな気がしていた」（斉2001：426）。チ・ボラグは1968年のある日の夜に12時過ぎ、家で作曲していたところ、十数人の歌劇団肅清派のメンバーがきて、作曲していた彼を捕まえたという。その罪は、「内モンゴルの革命党」、「内モンゴル民族革命党中央委員、秘密連絡員、民族分裂主義者」であった。

このように政治家、芸術家以外の文化事業もまた、文革の被害を受けた。

### 3 内モンゴルの文化事業における文革の被害

1961年に解散させられた群衆芸術館は、1965年に再び組織され、内モンゴル文化館と名称を変更していた。だが、文革により、多くの職員が下放<sup>68</sup>され、労働改造が行われた。このようにして文化館の活動が完全に停止させられた。名誉が回復され、活動が再開するのは1979年である（内蒙古自治区党委宣传部2015：258）。1958年に創立された内モンゴル映画制作会社（内蒙古电影制片厂）も、1966年から活動が停止させられ、1972年からモンゴル語の吹き替え映画を少しずつ制作し始めた。映画を制作できるようになるのは、1979年2月からである（内蒙古自治区党委宣传部2015：260）。

文化事業はこのように文革の大きな被害を受け、文革開始以前の1965年に芸術歌舞団が86団体あったものが、文革終結2年後の1978年の統計では、70団体しか残っていなかった。団員（隊員）は3,500人から3,006人となり、14.1%減少した。劇場・映画館は43余から8余となり、81.4%減少した。その職員は335人から143人となり、57.3%減少した。文化館は同時期に81余から54余となり、33.3%減少した。その職員は576人から506人となり、12.2%減少した。文化ステージは同時期に31余から3余となり、90.3%減少した。その職員は34人から15人となり、55.9%減少した。このように文革の被害を受け、芸術歌舞団に関する機構はほとんど減少した。こうした状況の中、唯一群衆芸術館だけが同時期に1余から4余まで増え、職員は26人から95人まで増えた（内蒙古自治区文化庁編1997b）。群衆芸術館には大衆のアマチュア文芸活動を指導するという需要があったためと考えられる。当時、文化館、歌舞団は「毛澤東思想宣伝隊」に変更されていたことから、大衆の文芸活動を指導する団体が少なかった。そのため、群衆芸術館を拡大していた。

### 4 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業の被害

#### 4.1 オンニュート旗ウラーンムチルの被害

オンニュート旗では1966年5月から文革が始まり、ウラーンムチルの指導者と隊員が粛清された。また車庫が破壊され、隊員の活動は完全に停止した（劉・張編2012：63）。1968年、オンニュート旗ウラーンムチルは活動を再開した。同年の10月から1969年1月にかけてオンニュート旗ウラーンムチルは「毛澤東思想の宣伝ステージ（毛澤東思想宣传站）」に名称が変更されていた。メンバーの変更詳細は不明である。活動の停止、再開の中、1976年9月9日、毛澤東が亡くなった。オンニュート旗ウラーンムチルは哀悼の意をささげるため、公演活動を一時的に停止した。2日後の9月

<sup>68</sup> 共産党と政府機関の幹部および知識人を農民や牧畜業の生活と仕事を体験することによって大衆と結びつき、みずからの世界観を改造することを目的とし、長期にわたり農村、あるいは共産党幹部学校に派遣し、農業労働に参加させることを指す。

11日にオンニュート旗ウランムチルの隊員ハスは、毛澤東を記念し、オペラ「悲痛の日」を創作した（劉・張 2012：75）。

オンニュート旗ウランムチルは文革期において、上述した作品の制作や公演活動、巡回を含む以外に映画製作活動にも参加していた。

1972年、オンニュート旗ウランムチルは中国中央テレビ局国際番組監督、遼寧省の画報記者、瀋陽テレビ局のカメラマンらと連携し、『草原の軽騎』<sup>69</sup>と『草原の上の文芸軽騎兵隊』<sup>70</sup>という映画を制作している（劉・張編 2012：70）。これらの映画について、資料に名称は記載されているが、具体的な内容は記載されていない。

#### 4.2 オンニュート旗の他の文化事業の被害

文革中にウランムチル以外には、1968年に10年前の1959年に設置された文教局が停止させられ、1973年に回復した。1975年に文教局を解散し、文化局を設置した（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：635）。

1968年、文化館も停止され、「毛澤東思想宣伝隊」に変更され、「革命样板劇」を普及した。

1969年、1951年に創立された烏丹京評劇団が文革の被害を受け、解散させられた（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：644）。

1975年にオンニュート旗でアマチュア文芸大会が開かれ、26のアマチュア団体が参加し、800人の隊員で120の演目を披露した（翁牛特旗志編纂委員会編 1993：637）。

以下では、文革期に上演された演目を分析する。

### 5 文革期の上演作品

ウランムチルは、上述のように文革の大きく被害を受けたため、1966年と1967年には上演された作品も制作された作品もない。2年後の1968年から活動が再開し、演目を作成、上演し始めた。ただし、実際には1966年と1967年だけでなく、1969年、1970年、1971年、1973年の演目も記録されていない。

表5は文革期における上演作品のリストである。

表5 文革期（1966-1976年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
68	歌	歌唱英雄李長順	オリジナル	オンニュート旗ウランムチル
69	—	—	—	—
70	—	—	—	—
71	—	—	—	—
72	ダンス	一回の訓練	オリジナル	振付：姜桂環（隊員：漢人） 宋正玉（隊員：朝鮮人） 薩仁（隊員：モンゴル人） 作曲：王正義（隊員：漢人）
73	—	—	—	—

<sup>69</sup> 軽い設備で、移動に便利な文芸宣伝隊を軽騎兵と例えている。

<sup>70</sup> ウランムチルの特徴から付けた名前で、「移動に便利な文芸宣伝隊」を意味する。

74	ダンス	一つの弾丸の袋	オリジナル	振付：宋正玉
		愉快的な労働	？	？
75	ダンス	収穫の踊り	オリジナル	振付：宋正玉
		子羊の出産踊り	オリジナル	振付：宋正玉、薩仁、 王艶軍（隊員：漢人） 作曲：王正義
		民族の大団結	オリジナル	振付：宋正玉、薩仁、 烏国政（隊員：モンゴル人）
76	ダンス	老夫婦にご飯を送る	導入	？
		長い白の雄鷹	導入	？
	小戯	岷山の春風	導入	？
	ホルボー	楊子榮が虎を撃つ為に山に登った	導入	？
	オペラ	悲痛の日	オリジナル	振付：ハス（隊員：モンゴル人）

出典：『オンニュート旗ウラーンムチル誌』（2012）により（筆者作成）

表5の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。

演目の種類には歌、ダンス、小戯、ホルボー、歌舞がある。小戯は、民謡や民間舞踊やラップなどで構成されるストーリーのある小型総合性のパフォーマンス芸術を指す。

由来にはオリジナルと導入の2つがあり、改変はない。

## 5.1 文革期の各年の上演作品

### (1) 1968年の上演作品

1968年に記録されている上演作品は、歌「歌唱英雄李長順」のみである。文化・ラジオ局や地方誌事務局の職員である劉増軍と張仲仁編の『オンニュート旗ウラーンムチル誌』（2012）は、この歌の創作背景について詳しく説明している。

1968年4月に馬家溝門という人民公社<sup>71</sup>で軍務に勤しんでいた兵士の李長順が、驚き走る馬を引き留めて、踏まれそうな民衆を救った。李長順は国家の模範兵士として政府に賛美された。この話に基づき、「歌唱英雄李長順」という歌を作った。この歌はウラーンムチルでの上演で、地域の兵士や大衆に多いに歓迎された（劉・張編 2012：104）。この歌の宣伝内容は英雄的、模範的な人物に学ぶことである。また国防兵士や革命精神を讃えている。制作者はオンニュート旗ウラーンムチルになっているが、具体的な制作者の詳細は不明である。

### (2) 1972年の上演作品

1972年に記録された上演演目は、ダンス「一回の訓練」のみである。このダンスについて振付は、姜桂環と宋正玉と薩仁の3人で、作曲は王正義である。振付の姜桂環は、1949年生まれの漢人女性で、1966年から1974年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員だった。宋正玉については、草創期の演目で説明したように朝鮮人で1958

<sup>71</sup> 農業の集団化を中心に、従来の農業生産共同組合である「合作社」を指す。

年～1974年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員だった。薩仁はモンゴル人女性で、1960年～1964年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。薩仁はこの時期ウラーンムチルから離れているが、ウラーンムチルの仕事に携わっている。王正義は漢人男性で、1963年～1977年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。内容は不明である。しかし、訓練という言葉から兵士の訓練を指していると考えられる。

### (3) 1974年の上演作品

1974年に記録された上演作品は、ダンス「一つの弾丸の袋」と「愉快的労働」である。この二つの作品の内容は不明である。「愉快的労働」の制作者について、不明である。「労働」という言葉から労働を讃えた作品であると考えられる。ダンス「一つの弾丸の袋」は宋正玉が振り付けている。ただ、「弾丸の袋」ということから兵士を讃えた作品と考えられる。

### (4) 1975年の上演作品

1975年に記録された上演作品は、ダンス「収穫の踊り」、「子羊の出産踊り」、「民族の大団結」の3つである。これらの演目についても説明されていない。ウラーンムチル隊員ア氏のインタビューによると「収穫の踊り」と「子羊の出産踊り」はモンゴルの文化、生活、技術、収穫を讃えたもの、「民族の大団結」は中国の各民族の団結を呼びかけた作品であるという（ア氏 2021.2.23）。

「収穫の踊り」の振付は朝鮮人の宋正玉である。収穫という言葉から社会主義思想を讃えたものと考えられる。つまり、社会主義思想の下で収穫したという草創期からあったものである。

「子羊の出産踊り」の振付は宋正玉と薩仁と王艶軍であり、作曲は王正義である。王艶軍だけ漢人女性で、1971年～1978年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員だった。

「民族の大団結」の振付は宋正玉と薩仁と烏国政である。烏国政はモンゴル人男性で、1957年～1977年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。このような民族の団結を呼びかけた作品は草創期からあったものである。

### (5) 1976年の上演作品

1976年に記録された上演作品は、ダンス「老夫婦にご飯を送る」、「長い白の雄鷹」、小戯「岷山の春風」、ホルボー「楊子栄が虎を打つ為に山に登った」、オペラ「悲痛の日」の5作品である。

「老夫婦にご飯を送る」は延辺歌舞団から導入した演目である。ストーリーは、朝鮮人の老夫婦が公共施設建設のために働いていた労働者にご飯を送っていた事実に基づいて作られたものである（エ氏 2020.2.21）。制作者については不明である。

ダンス「長い白の雄鷹」については説明されていない。制作者についても不明であ

る。

小戯「岷山の春風」の岷山は甘肅省から四川省まで伸びる山脈を指す。作品内容については、不明である。

ホルボー「楊子栄が虎を撃つ為に山に登った」は、山東省の楊子栄という八路軍（紅軍）の若手戦士が国民党軍の基地にスパイとして入り、少人数で多くの敵を滅ぼしたことに由来する。彼は、敵とのこの戦いの中に犠牲となっている。本来は漢人地方の出来事であるが、モンゴル人がこのストーリーにある犠牲精神に基づいてホルボーを作った。制作者は不明である。

オペラ「悲痛の日」は、1976年に中国国家最高の指導者であった毛澤東が亡くなったため、隊員のハス（ハス）が彼のことを悲しく思い作った作品である（劉・張編 2012: 75）。ハスはモンゴル人男性で、1964年～1984年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

## 5.2 文革期の上演作品の総括

本節では、文革期の上演作品を以下の4つに着目して検討する。

### ① 上演作品数とその種類

資料から判明した作品数は、わずか12作品であった。その中、歌が1作品、ダンスが8作品、小戯が1作品、ホルボーが1作品、歌劇が1作品である。文革期は、それ以前と比べて作品と種類が少ないものの、小戯、ホルボーという新しいジャンルの演目が導入されている。

### ② 上演作品の由来

上演作品の由来はオリジナルと導入の2種類がある。文革期において、オリジナルは7作品があり、導入が4作品と1つの作品が由来不明である。導入は内モンゴルの他機関から、或いは他の少数民族歌舞団から導入したものである。しかし、この中で、ほとんどの作品については、導入元が判明していない。

導入元が分からない演目は1976年のダンス「老夫婦にご飯を送る」と「長い白の雄鷹」、小戯「岷山の春風」、ホルボー「楊子栄が虎を撃つ為に山に登った」の4作品である。

オリジナルはウラーンムチルの隊員が自ら作っていた作品で7作品がある。具体的には、歌「歌唱英雄李長順」、ダンス「一回の訓練」、「一つの弾丸の袋」、「愉快的労働」、「収穫の踊り」、「子羊の出産踊り」、「民族の大団結」である。

### ③ 上演作品の制作者

制作者について、振付、作曲、作詞で分類する。

### (1) 振付

振付は、姜桂環、宋正玉、薩仁、烏国政、ハスの5人である。5人と共にオンニユート旗ウラーナムチルの隊員であるが、この中、モンゴル人の隊員が薩仁と烏国政、ハスの3人である。姜桂環は漢人隊員で、朝鮮人の隊員は宋正玉である。

姜桂環は1972年のダンス「一回の訓練」を振付している。

宋正玉は1972年のダンス「一回の訓練」と1974年のダンス「一つの弾丸の袋」、1975年のダンス「収穫の踊り」、「子羊の出産踊り」、「民族の大団結」を振付している。

薩仁は1972年のダンス「一回の訓練」と1975年のダンス「子羊の出産踊り」を振付している。

烏国政は1975年のダンス「民族の大団結」を振付している。

ハスは1976年のダンス「悲痛の日」を振付している。

ダンスの「一回の訓練」、「一つの弾丸の袋」、「民族の大団結」は複数の隊員で振付している。

### (2) 作曲

作曲は、王正義と王艶軍の2人で、2人と共に漢人で、オンニユート旗ウラーナムチルの隊員である。

王正義は1972年のダンス「一回の訓練」を作曲している。

王艶軍は1975年のダンス「子羊の出産踊り」を作曲している。

### (3) 作詞

作詞者は、この時期においてすべて不明である。

## ④ 上演作品のテーマとその変遷

文革の作品について資料ではほとんど記載されていない。そのため、内容の不明作品が多い。上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。文献の説明によるものであり、とりわけダンスによるメッセージをどのように読み取るのかはむずかしいところがある。まず、政治性がないと言い切れる作品は1975年のダンス「子羊の出産踊り」のみである。インタビューからこのダンスはモンゴルの文化、生活、技術を讃えているという。

上述以外、すべての演目に政治的要素がある。模範人物を讃えた作品として1968年歌「歌唱英雄李長順」と1976年のダンス「老夫婦にご飯を送る」がある。民族の団結を呼びかけた作品として1975年のダンス「民族の大団結」がある。兵士を讃えた作品として、1976年のホルボー「楊子栄が虎を打つ為に山に登った」がある。またタイトルから1972年のダンス「一回の訓練」と1974年のダンス「一つの弾丸の袋」も兵士を讃えた作品と考えられる。社会主義思想や労働と収穫を讃えた作品は1974年のダンス「愉快的労働」と1975年のダンス「収穫の踊り」がある。また1976年のオペラ「悲痛の日」は毛澤東の死を悼んで作られた作品である。

### 5.3 まとめ

文革期は、演目は少ない。ウランムチルは文革の被害を受け、活動が2年ほど停止され、1968年に再開した。ウランムチルは再開を機に「歌唱英雄李長順」という歌を作った。この時期、演目の種類も少ない。また演目「子羊の出産踊り」以外の演目は、政治宣伝を反映している。政治宣伝的な演目とは、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、革命精神、民族団結などを指す。一方で、草創期になかった小戯、ホルボーなど演目のジャンルが増加している。

ウランムチルの資料や、ほか資料からオンニュート旗ウランムチルの隊員が文革の被害を受けた記録があるが、具体的な被害について記録されていない。演目が少ないことから、ウランムチルは文革の被害を相当受けたのだろうと考えられる。またオンニュート旗ウランムチルの演目から、文革中に標的になっていた「資本主義の実権派」や権力闘争、内モンゴル人民革命党、及びウランフーに関する批判などについては見てとれなかった。

#### 小結

本章では、毛澤東時代後半期の10年におけるウランムチルの活動について述べた。つまり文革期(1966-1976年)のウランムチルの活動である。1966年5月16日に中国では、共産党の「極左」路線により文化大革命が発動された。文革は、中国指導層の権力闘争で毛澤東による実態は劉少奇と鄧小平ら党、政府官僚からの奪権闘争だった。だが、内モンゴルでは、内モンゴル自治区の最高責任者のウランフーは文革前の1964年から極密に調査され、1966年5月1日に自由を失ったことから文革は内モンゴルから始まっていた。

文革により、内モンゴルでは、内モンゴル共産党のリーダーであったウランフーを始め、息子のブヘ、及び内モンゴルのナンバーツーのハーフンガーが「内モンゴル人民革命党」として政治レッテルを貼られ、迫害対象となった。さらに政治家だけでなく、文学者、芸能人、牧畜民、労働者など多くの人々が批判の対象になった。また多くの文化事業が停止され、職員が労働改造の対象となった。

文革前の1965年の統計データと文革後の1978年の統計データを比べると芸術歌舞団が16(18.6%)団体に減少し、職員が494(14.1%)人減少した。劇場・映画館は35(81.4%)余減少し、職員が192(57.3%)人減少した。文化館は27(33.3%)余減少し、職員が70(12.2%)人減少した。文化ステージが28(90.3%)余減少し、職員が19(55.9%)人減少した。他方で群衆芸術館は3(400%)余増え、職員が69(365.4%)人増加した。文革の被害を受けほとんどの文化事業が減少したにもかかわらず、唯一群衆芸術館が増えたことは、政治宣伝をする上で、必要とされたためと考えられる。

文革期は、ウランムチルの活動も当然停止され、隊員と指導者が粛清された。オンニュート旗ウランムチルは1968年に活動が再開され、一時的に専ら毛澤東を宣伝する「毛澤東思想の宣伝ステージ」に変更となった。こうした中で、ウランムチ

ルの上演作品は少なく、ほとんどの演目が、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、革命精神、民族団結など政治宣伝的なものであった。

だが、草創期にはなかった小戯、ホルボーなどが新しいジャンルとして加わっている。演目には文革中に標的になっていた「資本主義の実権派」や権力闘争、内モンゴル人民革命党、及びウラーンフーに関する批判的なものは見てとれなかった。マイナスなもの、攻撃対象を批判するものは演目としてないのも1つの特徴である。

## 第六章 鄧小平の改革開放時代のウランムチル（1977-1989年）

本章では、まず改革開放政策の実施経緯を説明し、その次に内モンゴルの文革の回復状況を概観する。さらに、内モンゴルの文化事業の復活状況と新たに設けられた文化事業を述べる。またこの時期において、文芸コンクールや文化学会が作られたことから、文化政策の促進についても紹介する。最後にこれらをまとめた上で、具体的な事例としてオンニュート旗ウランムチルを述べ、この時期の上演作品を分析する。

### 1 改革開放政策の実施と文革回復

1976年に文化大革命が終結するとともに、文革期において批判されたものが徐々に回復した。文化活動が再組織され、破壊された文化事業も徐々に回復した。回復は1970年代末から始まる。しかし、大幅に回復するのは、1980年から1980年代中頃までである。

中国では、文革の終結は毛澤東の死去後、1976年10月に四人組が逮捕されたことによる。文革終結後、華国鋒は毛澤東の残した遺書及び中央政治局決議により、1977年10月7日に党中央委員会主席および党中央軍事委員会主席に就任した。華国鋒は1977年10月には文化大革命の是々非々の立場を表明するため、「二つのすべて（两个凡是）」<sup>72</sup>の方針を示したが、文革で実権派として失脚・迫害した鄧小平からの強い批判を浴びた。鄧小平は、この「二つのすべて」はマルクス主義に合わない、一人のいう言葉は絶対的に正しいとはありえない、と主張した。鄧小平のこの主張は党内において、多数派の支持を得た。鄧小平は中共中央副主席や中国人民政治協商会議の主席などを経て1978年12月に行われた中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議で、「社会主義近代化建設への移行」、すなわち改革開放路線（政策）を提起した。改革開放とは、主に人民公社の解体による農村の体制改革と対外開放を指す。また工業化、産業化の政策ももり込まれた。

鄧小平は、改革開放政策を進めると同時に、文革の被害を調査し、名誉回復を行った。内モンゴルにおける文革被害の調査は1985年まで続いた。1978年から8年をかけて内モンゴル自治区の数十万の被害者の名誉が回復された。この結果、7,000名以上の幹部が党の資格や職務を回復し、6,000名以上の殺害された幹部に名誉回復した。計2万件以上の文化大革命に関する歴史案件を処理した。また文革中、漢人の地域に分割した内モンゴルの行政区画を回復した（郝1991：369-370）。

文芸の分野で、鄧小平は自らが1979年に行われた「中国の文芸工作者・第四回代表大会」において、文芸工作者はマルクス・レーニン主義と毛澤東の思想を勉強し、生活に役立つように認識を高める必要があると発言した（総政治部文化部1995：59）。また鄧小平は、1980年の「目の前の情勢と任務（目前的形勢和任務）」において、文芸は、政治を離れない。いかなる進歩的、革命的な文芸工作者であっても、作品を制作

<sup>72</sup> 一つは、毛主席の行った全ての決定を変えてはいけぬ。二つは、毛主席の指示は全て従う。中国語では、「凡是毛主席做出的决定，我们都坚决维护，凡是毛主席的指示，我们都始终不渝地遵循」という。

するには社会的影響を考えなければならない。それは、人民の利益、国家の利益、共産党の利益であると発言した（中共中央宣伝部 2012 : 35）。このようにして、文芸は改革開放時代においても、政治性が重要視された。

内モンゴルの指導者については、批判された人々の名誉が回復されたが、内モンゴル自治区の共産党書記ウランフーの権力は完全には回復されなかった。1978 年からウランフーの妹婿の孔飛（クンペイ）が内モンゴル自治区の主席に就いたが、書記は周恵という漢人が就任した。このようにして内モンゴル自治区における共産党書記は文革期から現在に至るまで、すべて漢人が就任している。

## 2 内モンゴルの文化事業の復活

1979 年 3 月 20 日に内モンゴル自治区共産党委員会が内モンゴル自治区の文聯や、歌舞団及び雑誌『花の原野』、『草原』、『党の教育』、『鷹』、『ホンガール』などについて名誉回復を決定し、復刊を行った（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015 : 53）。

こうした中、芸術歌舞団数は、1978 年に 70 団体があったものが、1980 年に 176 団体まで増加し、団員（隊員）は 3,006 人から 6,356 人にまでと 2 倍以上に増加した。

さらに、劇場・映画館は、同年代の 1978 年に 8 余あったものが、19 余まで増加し、職員は 143 人から 268 人まで増加した。

文化館は、同年の 1978 年に 54 余あったが、105 余まで増加し、職員は 506 人から 1,156 人まで 2 倍以上に増加した。

同年の 1978 年、文化ステージも 3 余あったものが、457 余まで増加し、職員は 15 人から 635 人まで増加した。公共文化プロジェクトとして文化ステージの創立は、「村々まで繋がる」（村村通）というスローガンの下で行われた（李 2015 : 47）。

群衆芸術館が同年（1978 年）に 4 余から 10 余まで増え、職員が 95 人から 282 人まで、3 倍に増えた（内モンゴル自治区文化庁 1997b）。

このように文化事業が復活するとともに、1979 年 10 月に「内モンゴル文学芸術研究所（内モンゴル文学芸術研究所）」がフフホト市に創立された。のちに、1984 年 2 月に内モンゴル文化庁にあった文化処（課）が廃止され、『北国映画劇』というモンゴル人と漢人による編集の雑誌の編集部と合併し「内モンゴル芸術研究所（内モンゴル芸術研究所）」となった。この研究所には、モンゴル人、ダウール人、朝鮮人などの少数民族幹部が 54% を占め、大学学歴を持つ者が 22% を占め、専門学校の卒業者が 30% を占めていたという。さらに、この研究所から『内モンゴル民族民間舞踏』や『内モンゴル戯曲資料汇编』、『二人台伝統劇目集成』、『二人台伝統劇目選』、『東路二人台音楽』、『内モンゴル芸術研究文集』などが出版された。1989 年には中国成立 40 周年をきっかけに『白樺樹下的眼睛』という抗日戦争を題材にしたドラマを制作した。これ以外にも内モンゴルの民族・民間芸術遺産を基に、『中国民族・民間舞踏集成・内モンゴル巻』、『中国民族・民間器楽集成・内モンゴル巻』、『中国民族・民間戯曲音楽集成・内モンゴル巻』、『中国民族・民間音楽集成・内モンゴル巻』などを編纂した。こうしたことにより、この研究所は内モンゴル文化庁に「優秀共産党支部」として二度表彰されている（馬 1990 : 31-32）。

ウラーンムチルは1980年初頭までに80団体以上に増加する。それが、1984年12月に内モンゴル自治区文化庁で開催された「芸術パフォーマンス団体の調整と改革案」及び「ウラーンムチル条例」の法案に基づいて、ウラーンムチルは46団体だけを残し、約半分を旗・県の劇団として改編された(内モンゴル自治区文化庁編1997a:173)。だが、1989年に、再び66団体にまで増加した。この時の隊員数は1,813人であった(内モンゴル自治区文化庁1997b)。

1981年8月、中国共産党中央が発布した「人民大衆の文化生活に関する指示(关于关心人民群众文化生活的指示)」で、各地地域は集団経済を依頼し、田舎に農村文化センターを創立する活動を承認した。中国中央文化部は、さらに数回の全国的な会議を開き、『大衆文化の創立について国家、集団、個人が力を合わせる(群众文化社会办, 国家、集体、个人一起上)』という指示を出し、大衆文化事業の新たな発展を促した(包1997:34)。

1986年の内モンゴルにおける文化事業の統計では、芸術歌舞団は143団体があり、団員(隊員)は6,813人である。

劇場・映画館は、37余あり、職員は810人である。

文化館は、104余あり、職員は1,831人である。

文化ステージは1,635余あり、職員は2,278人である。群衆芸術館は、13余あり、職員は479人である(内モンゴル自治区文化庁1997b)。

1980年より芸術歌舞団の数は減少したが、職員は増えた。劇場・映画館、文化館、文化ステージ、群衆芸術館数は全て増加し、職員も大幅に増えている。特にアマチュアな文芸創作において、文化ステージが重要な役割を果たした。こうした中で、移動文化ステージ(流动文化站)も作られた。移動文化ステージは牧畜地域を回り雑誌、写真、映画、ビデオディスク、宣伝材料などを配付し、ビデオの放映などを行う組織である(包1997:35-36)。

### 3 文化政策の促進

文化政策促進の一環として、農業や牧畜地域においては文芸コンクール<sup>73</sup>活動が大きな役割を果たした。1986年に内モンゴル自治区は各盟・市の農業・牧畜地域では初めてアマチュア歌舞・小劇のコンクールを開催した。その結果、137の歌舞演目と15の小劇が披露された。この中から11の演目が全国の民間音楽・舞踊コンクールに推薦され、その全国大会で優秀賞1つ、準優秀賞2つ、二等賞5つ、三等賞9つを受賞したという(包1997:40)。

1980年代、群衆芸術館には、内モンゴル群衆撮影学会、内モンゴル群衆文化学会、内モンゴル社会舞踏学会、内モンゴル漫画研究会、内モンゴル社会書道(書画)学会、内モンゴル民間美術学会などが創立された(内モンゴル自治区党委宣传部2015:258)。

---

<sup>73</sup> 農業・牧畜地域における民間的な芸能人を激励するために行った文学・芸術のコンクールである。

1980年代以降の芸術歌舞団に対する文化政策について、中国共産党の少数民族文化政策研究に取り組んだ劉（2014）は以下のように述べている（劉2014：178）。

改革開放後、わが国の少数民族文化建設（政策）ははっきりと異なった時代環境を迎えた。経済社会が急速に発展し、少数民族の文化に対する要求が強まった。また一方では、民族の往来により、外来文化と接触する機会が多くなり、各少数民族の文化が衝撃を受けた。これにより、中国共産党と政府は、各民族の共同繁栄を前提に、少数民族の文化建設や変化する客観的環境と合わせ、民族地域の経済社会の発展及び生活による少数民族文化政策を作成する。

これが内モンゴルを含む、各民族地域の文化事業の発展に関する一要因になった。これ以外に共産党が文芸を通し、各民族に党の主導性を訴えるのがより大きな要因になったと考えられる。共産党のこうした主導性について、劉はさらに以下のように論じている（劉2014：181）。

1990年代は、わが国の社会主義現代化における決定的な時期である。さらに各民族の共同発展を促す時期でもある。この時期、民族工作における共産党の主導性を必ず発揮し、民族地域の自治制度を完成させる。また少数民族と民族地域の経済社会事業を発展させる。

劉の指摘通り民族地域の自治制度は共産党に主導され、文芸も当然共産党の政治宣伝の担い手だった。

## 4 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業

### 4.1 オンニュート旗ウラーンムチルの活動

1976年10月に文革が終息すると、オンニュート旗ウラーンムチルは四人組（江青・張春橋・姚文元・王洪文）を批判する演目を創作した（劉・張2012：75）。

1977年2月に遼寧省の瀋陽市テレビ局に要請され、春節晩会に参加し、1976年に創作したホルボー「楊子栄が虎を打つ為に山に登った」と1965年の歌「草原の児女が延安を愛する」を披露した。

1978年、オンニュート旗ウラーンムチルは、赤峰市歌舞団で話劇「声の届かない処がない」を学習した。この作品をオンニュート旗俱樂部（大衆向けの文化・教育の機構）から料金を徴収して8回の公演を行い、すべて観客を満席にしたという（劉・張2012：76）。

1979年オンニュート旗宣伝部はウラーンムチルに2万元支給し、「甘たるい事業」を公演させた。1979年、オンニュート旗ウラーンムチルは農民を手伝い32日間労働

を行った。また新華書店の代理として 736 の冊の本をオンニュート旗で販売した(劉・張 2012 : 76-77)。

1981 年、オンニュート旗財政部はオンニュート旗ウラーンムチルに 3 万元の支援を行った(劉・張 2012 : 78)。

1984 年に中国人民政治協商会の副主席の費孝通がオンニュート旗ウラーンムチルを訪れ、「ウラーンムチルは我が国の民族芸術の花」という揮毫を贈った(劉・張 2012 : 80)。この揮毫は内モンゴルの全てのウラーンムチルを激励する言葉として引用されている。

#### 4.2 オンニュート旗の他の文化事業

ウラーンムチル以外、1978 年に文化館の機能が拡張された。文化館には、図書閲覧室、貸出し室、文物陳列室、美術展覧室が新たに設けられた。また館長責任制が導入され、図書の制作、文芸指導、美術撮影、文芸創作、文物、後方勤務(支援)部を設けた。1980 年にオンニュート旗には、文化ステージが 31 余に増加し、各村には 217 の文化室を設置した。文化室の普及率は 66%に達した(翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 635)。

さらに 1981 年にオンニュート旗文化局の下で、農村文化工作隊が組織された。この組織は文化局の活動方針を農民・牧畜民に伝えるため農村地域で活動を行い、評劇を主とする演目を公演する。農村文化工作隊は、最初 8 人であったが、1985 年に 18 人にまで増えている。

1985 年、オンニュート旗の農村における「農村アマチュア劇団」は 49 余あった。これらの農村アマチュア劇団は、農民自らが組織した団体で、農民の収穫や祝日に合わせて、主に評劇を演じる。これ以外に、牧畜地域には、「牧畜地域アマチュア文芸宣伝隊」が 24 余あった。牧畜地域アマチュア文芸宣伝隊は、牧畜民自らが組織した団体で、牧畜民の休みの時や、祝日などに合わせて歌舞を披露する(翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 651-652)。

改革開放時代はウラーンムチルの回復期に当たる時期である。以下はこの時期におけるウラーンムチルの上演作品を分析する。

### 5 回復期の上演作品

回復期は文革期において批判されたものが徐々に回復した時期である。資料では 1982 年と 1987 年の演目が記録されていない。

表 6 は回復期における上演作品のリストである。

表 6 回復期(1977-1989 年)の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作(所属:民族)/導入元
77	ホルボー	楊子栄が虎を打つ為に山に登った	導入	?
	歌	草原の儿女が延安を愛する	オリジナル	作詞:朱嘉庚(宣伝部:漢人) 作曲:祈・達林太(団員:モンゴル人)

78	ダンス	草原の楽しみ	オリジナル	振付：孟慶生（隊員：モンゴル人）
	話劇	声の届かない処がない	導入	？
79	大型評劇	甘たるい事業	導入	赤峰県ウラーンムチル
	大型話劇	あの人を助けて	導入	？
80	ダンス	赤い旗を縫う	導入	振付：宋正玉（隊員：朝鮮人）
	話劇	英雄の牧畜工人双喜	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル
	オペラ	嫁を奪い取る	改変	モンゴル民歌
	オペラ	嫁を争い娶る王氏の虎	導入	？
	大型評劇	愛情の審判 二人の伯母の病気を治す	導入	？
81	評劇	近隣	導入	？
82	—	—	—	—
83	ダンス	オルドス踊り	導入	振付：賈作光（団員：満洲人）
84	群舞	絨毯を織る女性労働者の喜び	オリジナル	振付：李玉珍（隊員：漢人） 作曲：李信（隊員：漢人）
	歌	シラムロン母なる河	？	？
	ダンス	ホジャの狩猟曲	オリジナル	振付：李玉珍
		悔恨	オリジナル	振付：張勇（団員：？） 作曲：ハス
		モンゴル馬	オリジナル	振付：張勇
		幸せな青年	？	？
		ホリハ支隊	オリジナル	振付：張勇
		各族の人民の心と心がつながる	オリジナル	振付：李玉珍
		愉快的祝日	オリジナル	振付：孟慶生
延安を愛する	オリジナル	振付：ハス凶雅（隊員：モンゴル人）		
85	戯劇	銀海の赤い花	翻訳	翻訳者：烏日娜（隊員：モンゴル人）、 道・巴雅爾（？）、 查干・巴特爾（隊員：モンゴル人）
	ダンス	ナルカジドマ	改変	チベット民間舞踊
		豊かな生活へ歩む	オリジナル	振付：孟慶生
		緑葉の情け	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅 作曲：宋滙霖（隊員：漢人）
		柳木の愛	オリジナル	振付：李玉珍
	愛が深い	オリジナル	振付：李玉珍	
86	戯劇	ノルグロマ	改変	モンゴル民歌
87	—	—	—	—
88	オペラ	ハンシュウイン	改変	モンゴル民歌
89	ダンス	ブレイクダンス	導入	振付：特木其楽（隊員：モンゴル人）
		蠟燭	？	？
		運命	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅
		出征	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅

出典：『オンニユート旗ウラーンムチル誌』（2012）により筆者作成

表6の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。

演目の種類にはホルボー、歌、ダンス、話劇、大型評劇、大型話劇、歌舞、オペラ、群舞、モンゴル・オペラ、モンゴル戯劇がある。

話劇とは、新劇・現代劇、歌を主とする旧戯に対していう（愛知大学中日大辞典編纂所2010：737）。会話や身体動作の表現を基礎とする。

大型評劇とは、評劇を大型で修辞することは、より多くの演者が参加することを意

味する。評劇と大型評劇の違いは人数である。評劇は数人の参加者がいることに對し、大型評劇の場合は、数十人から数百人の参加者がいる。

大型話劇は話劇より多くの演者が参加することをいう。話劇は2人以上の対話者や演者が参加することに對し、大型話劇はより多くの対話者や演者が参加する。場合によって数十人の演技者がいる。話劇と大型話劇の違いも人数である。

群舞は、多くのダンサーにより踊ることを指す。

モンゴル・オペラは、モンゴル生活・文化をテーマに制作したオペラを指す。

戯劇は会話、身体動作、舞踊、音楽に加えて人形を使って表現する演劇である。モンゴル戯劇は、モンゴル生活・文化をテーマに制作したオペラである。

由来にはオリジナル、導入、改変、翻訳、由来不明の5つがある。翻訳は新しい由来として登場した。漢人にモンゴル語で制作した演目を見せるため、モンゴル語の演目を中国語に翻訳し、モンゴル人に中国語の演目をモンゴル語に翻訳し演じることを指す。

## 5.1 回復期の各年の上演作品

### (1) 1977年の上演作品

1977年に記録された上演作品は1作品のみで歌「草原児女延安を愛する」である。

歌「草原の児女が延安を愛する」は、新しいものではなく、ウラーンムチル草創期の1965年に制作されている（第四章を参照）。作詞は朱嘉庚で、作曲は祈・達林太である。前述したように朱嘉庚は、オンニュート旗の宣伝部から赤峰市文化局へ転職し、のちに文化局の局長まで昇進した。さらに赤峰市歌舞団へ転職し、団長の職務を担っていた。祈・達林太は内モンゴル文工団団員とあるが、詳細はない。この年、演目がわずか1作品なのは、文革期が終わったばかりの時期であったからであろう。或いはほかにもあったが、記録されていない可能性もある。

### (2) 1978年の上演作品

1978年に記録されている作品は2作品で、ダンス「草原の楽しみ」と話劇「声の届かない処がない」である。

ダンス「草原の楽しみ」は改革開放政策により、牧畜民が豊かで楽しい生活を送っている状況を描いた作品である（イ氏 2020.2.8）。振付は孟慶生である。孟慶生はモンゴル人男性で、1977年～1990年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。作曲は不明である。

話劇「声の届かない処がない」は、1976年に鄧小平が文革中、第三回に渡って被害を受けた事実を基に作られた作品である（ウ氏 2020.2.8）。この作品の内容は、共産党中央委員会の政治思想に最も協力したもので（劉・張編 2012: 102）、毛澤東批判を行い、文革の被害を是正するために作ったとウ氏はいう。制作者は不明である。

### (3) 1979 年の上演作品

1979年に記録された作品は2作品で、大型評劇「甘たるい事業」（甜蜜的事業）と大型話劇「あの人を助けて」がある。

大型評劇「甘たるい事業」の内容は改革開放政策で、生活が良くなり、より多くの人に経済的な恩恵を与えたことを賛美したものである（イ氏 2020.2.8）。この作品は、他方で、牧畜民に共産党の一人っ子政策（計画生育政策）を宣伝した作品でもある（劉・張編 2012：102）。文革中、周恩来が主導する共産党リーダーは大躍進時代の食糧危機をきっかけに、出生抑制を主張し、「計画出産指導小組」を設立していた。しかし、この計画は、文革中は政策として進められず、鄧小平時代の改革開放政策に入ってから、現代化（改革開放路線による現代的な改革、当時のスローガン）を早期に進めていくための人口管理の必要性から導入された。一人っ子政策に関する当時のスローガンとして、「一人っ子政策を実施すれば、国家が強くなり、家庭が幸福になる」がある。つまり、経済発展や現代化には、一人っ子政策そのものが甘い事業であるとする。この作品の制作者は赤峰県ウラナムチルであるが、詳細な説明はなく、不明である。

大型話劇「あの人を助けて」は、青少年の犯罪を防ぐために作られた教育目的の演目である（劉・張編 2012：77）。オンニュート旗ウラナムチルは北京でこの話劇を見て学習し、導入したという。内容の詳細や制作者は不明である。

### (4) 1980 年の上演作品

1980年に記録された作品は6作品で、ダンス「赤い旗を縫う」、話劇「英雄の牧畜工人双喜」、オペラ「ダナバラ」、オペラ「嫁を奪い取る王氏の虎」、大型評劇「愛情の審判」と「二人の伯母の病気を治す」である。

ダンス「赤い旗を縫う」の赤い旗は、中国の国旗を指す。このダンスは、1961年の羅广斌と楊益言の小説『紅岩』を中国の空軍政治部歌劇団がオペラ「江姉」として改編し、その劇中歌「赤い旗を縫う」に振り付けしたダンスである。『紅岩』は、中国の内戦時代、地下に組織された共産党が国民党に弾圧された物語である。物語では、共産党が国民党に弾圧されても屈しない、英雄的に戦って犠牲になったことが描かれている。「赤い旗を縫う」の内容は、国民党に政治犯として刑務所に入れられていた共産党員が中華人民共和国成立の際、五つ星の赤い旗を国旗にした事を聞き、刑務所の中で国旗を縫ったという物語である。振付はウラナムチル隊員の宋正玉である。宋正玉は朝鮮人で1962年にダンス「頂碗踊り」を振付している（第四章を参考）。

話劇「英雄の牧畜工人双喜」は、公社の牧畜出身の労働者の双喜という人物が羊の群れを守るために、嵐と戦って犠牲となった物語である（劉・張 2012：104）。制作者はオンニュート旗ウラナムチルと記載されているが、詳細はない。

オペラ「嫁を奪い取る」は、モンゴル民歌（民謡）「ダナバラ」をオペラに改変した作品である。ダナバラは女性の名前である。このオペラについて注目される点は、資料では特にモンゴルという語を強調し、「モンゴル・オペラ」の「嫁を奪い取る」と記録していることである。ダナバラの歌詞は、若者の恋愛で、恋人である男性が強制的

にジリェム盟地域で徴兵され、女性が両親の意志で別の男性と強制的に結婚させられたことを描いたものである（Ünen2007:2）。オペラの内容は、民歌の内容と同じものである。ウラーンムチル隊員のウ氏によれば、この作品は内モンゴルのウラーンムチル演目の中で、初めて作られたモンゴル・オペラであるという（ウ氏 2020.2.8）。

オペラ「嫁を争い娶る王氏の虎」は、宋朝時代を背景とする物語である。虎（官僚）が廟に行き、友達とゲームを行っていた女のなりをした男性を捕まえ、強制的に結婚しようとした。結果的に、その男性は虎の妹と恋愛する。共産党の下で変わりゆく新たな社会と自由恋愛を賛美したものとみられる（ウ氏 2020.2.8）。このオペラは、元々漢人の制作した作品で、オンニュート旗ウラーンムチルが導入した。原作に関する詳細は不明である。

大型評劇「愛情の審判」は、恋に落ちた少女が様々な人に騙されて苦労し、その後一人の青年に救われ正しい道を歩むというストーリーである（ア氏 2020.2.23）。制作者に関する詳細は不明である。

同じく、大型評劇「二人の伯母の病気を治す」は、封建社会を舞台にした物語である。内容は、二人の伯母が姪の自由恋愛を阻止していたが、親戚に説得され姪の恋愛を理解してあげたというものである（エ氏 2020.2.21）。制作者について詳細は不明である。

#### (5) 1981 年の上演作品

1981 年に記録された作品は 1 作品で、評劇「近隣」である。内容は不明である。制作者についても詳細は不明である。

#### (6) 1983 年の上演作品

1983 年に記録された上演作品は 1 作品で、ダンス「オールドス踊り」である。

ダンス「オールドス踊り」の振付は、1954 年に内モンゴル文工団の団員賈作光である。このダンスは、オールドス地域における伝統婚姻儀礼を基に新たな中国成立以降の内モンゴル人民の幸福な生活を描いたものである。このダンスについて、『中国少数民族舞踏史』では、労働・収穫の題材として分類している（紀・邱編 1998 : 418）。つまり、共産党の指導下で、牧畜民が安定な生活を送り、労働で収穫し、婚姻が順調に行われていることを賛美したものと考えられる。

#### (7) 1984 年の上演作品

1984 年に記録された上演作品は 10 作品で、群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」、歌「シラムロン母なる河」、ダンス「ホジャの狩り曲」、「悔恨」、「モンゴル馬」、「幸せな青年」、「ホリハ支隊」、「各族の人民の心と心がつながる」、「愉快的祝日」、「延安を愛する」である。

群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」は、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員がオンニュート地域の絨毯工場を見学し、その絨毯の制作過程を基に作った作品である。

振付は李玉珍で、作曲は李信である。李信は漢人男性で、1980年～2002年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。李玉珍は草創期にダンス「草打ち歌」、「羊毛を刈る」などを振付している（第四章を参考）。この工場の絨毯は品質的に優れており、日本、アメリカを始め様々な国に輸出されていたという（劉・張編2012:38）。この演目は国家政策の下で労働者の生活が豊かになっていることを讃えたものである。

歌「シラムロン母なる河」は、通遼市における遼河を指す。遼河が農業や家畜の水源地として多くの命を育んでいることを讃えた作品である。この歌は、モンゴルの山河の賛歌であり、政治的要素はない。制作者に関する詳細は不明である。

ダンス「ホジャの狩猟曲」は、ウラーンムチルの隊員李玉珍が牧畜民の前で公演した時、牧畜民から「古代のモンゴル人は狩猟する際、竹で作った笛の特殊な音声を使い、野生動物を身近なところに誘導していた」ことを聞いて作った作品である（劉・張編2012:38）。ホジャは息を横笛のような木管楽器を指す。モンゴル語でモドン・チョールと言ひ、中国語で胡笳と表記する。ホジャは胡笳の中国語の読み方である。このダンスはモンゴルの生業技術を讃えた作品である。

ダンス「悔恨」は、一人の女性が無頼漢の青年と恋に落ち、暴力や詐欺的手法を駆使し青年を騙した罪で、刑務所に入れ、教育を受けて反省し甦生する物語である。教育目的から制作された（ア氏2020.2.23）。振付は張勇であり、作曲はハスである。張勇は内モンゴル歌舞団（元の内モンゴル文工団）の隊員である（劉・張2012:80）。ほか詳細は不明である。ハスはモンゴル人男性で、1964年～1984年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

ダンス「モンゴル馬」はモンゴル馬の忍耐力とスピードを讃えたダンスである（イ氏2020.2.8）。振付は前作同様、張勇である。

ダンス「各族の人民の心と心がつながる」の原作は1965年の歌で、その内容は各族の人民が共産党と毛澤東の下で団結するエピソードを描いたものである（内蒙古自治区文化局編1965:42）。振付はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員李玉珍である。李玉珍は、草創期においてダンス「草打ちの歌」や「羊毛を刈る」などを振付している。

ダンス「愉快的祝日」は、改革開放政策の下で、生活が安定し、牧畜民の生活が豊かになったことを祝ったものである（イ氏2020.2.8）。振付はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員孟慶生である。孟慶生は草創期において、ダンス「小八路」を振付している。

ダンス「延安を愛する」は、共産党の革命根拠地である延安を愛し賛美した作品である（ア氏2020.2.23）。振付はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅である。

ダンス「幸せな青年」と「ホリハ支隊」については不明である。だが、「愉快的祝日」の説明から「幸せな青年」は国家政策の下で、幸せで豊かな生活を送っている青年のことを讃えたのであろうと考えられる。「ホリハ支隊」地域における軍隊を賛美したもので、ホリハは興安盟や通遼市、赤峰市を通るシラムロン河（遼河）とチャガン河

の接近したところを指す地域名である。「ホリハ支隊」の振付は、ダンス「悔恨」と「モンゴル馬」を振付した張勇である。

#### (8) 1985 年の上演作品

1985 年に記録された上演作品は 6 作品で、戯劇「銀海の赤い花」、ダンス「ナルカジドマ」、「豊かな生活へ歩む」、「緑葉の情け」、「柳木の愛」、「愛が深い」である。

戯劇「銀海の赤い花」は改革開放政策で个体戸<sup>74</sup>が多くなり、个体戸の中で裕福になった模範的な人物を讃えた作品である（劉・張編 2012 : 51）。中国共産党の第 12 期中央委員会第 3 回全体会議（共産党第 12 期 3 中全会）後、商品の生産が促され、牧畜民が共産党の指導下で豊かになったことを描いている（劉・張編 2012 : 102）。この演目については、資料にモンゴルを強調し、モンゴル・オペラ「銀海の赤い花」と記録され、さらに漢語（中国語）に翻訳し、オンニユート旗の様々な地域で演じられたという。翻訳者は烏日娜と查干・巴特爾と道・巴雅爾である。烏日娜はモンゴル人女性で、1974 年～1982 年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員であった。查干・巴特爾は、モンゴル人男性で、1959 年～1966 年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員であった。道・巴雅爾に関する詳細はない。

ダンス「ナルカジドマ」はチベット仏教における密宗（チベット密教）の祭神の舞踊がもとになっている。赤峰市のハラチン旗王府の所在地で流行していた舞踊で、200 年の歴史を持っている。ナルカジドマ（Rnal mkha' gro ma）は人の名前であり、また女神と言う。中国語で娜若・卡吉徳瑪と記す。その意味は、宇宙の邪悪を追い払い、人間の幸福や善を保護する機能を持っているという。このダンスは仏教の経典『ナルカジドマ』の法会（読会）で踊られていた宗教的な内容に基づく演目である（中国民族民間舞踏集成編 1994 : 160）。これは、つまり文革中に迷信として禁じられていた宗教活動が少しずつ復活したことを示す。改変者について、不明である。

ダンス「豊かな生活へ歩む」は改革開放政策や市場経済主義政策により人民の生活が豊かになったというエピソードを描いている（イ氏 2020.2.8）。振付は孟慶生である。

ダンス「緑葉の情け」は砂漠化の深刻な問題を反映し、環境保護の呼びかけを目的とした作品である（劉・張編 2012 : 39）。振付は李玉珍とハス凶雅で、作曲は宋滙霖である。宋滙霖は漢人で赤峰市バーリン右旗ウラーンムチルの隊員である。ほか詳細は不明である。

ダンス「柳木の愛」は契丹（キタイ帝国）民族文化に基づいて制作された。契丹の文物である銅鏡がオンニユート地域で発見された。その銅鏡に青年男女の舞者（ダンサー）が踊る様子が描かれていた。ウラーンムチル隊員は銅鏡に描かれていた青年男女の弓矢を持ち、柳木を振り回す様子を模倣したダンスを制作した（劉・張 2012 : 38）。キタイ帝国は、満洲から中央アジアの地域に存在した半農半牧の民族である。10 世紀初頭に遼という国を建設し、1125 年に女真人に滅ぼされた。資料では、発見された地

<sup>74</sup> 生産隊と対比している。毛澤東時代、生産隊があったものが、徐々に分散した。

域の詳細やウラーンムチル隊員について不明である。振付は李玉珍である。

ダンス「愛が深い」の内容は不明である。タイトルから青年男女の自由恋愛を賛美したものであると考えられる。振付は李玉珍である。

#### (9) 1986 年の上演作品

1986年に記録された上演作品は、戯劇「ノルグロマ」である。

モンゴル戯劇「ノルグロマ」はモンゴル民歌をもとに作られた演目である。民歌のノルグロマはモンゴル人女性の名前である。ノルグロマは興安盟のトシエト旗の牧畜民の娘で、旗の裕福な牧畜民の息子と結婚した。しかし、当時に若者たちは強制的に軍隊に徴兵させられたため、結婚したばかりの夫が軍隊に徴兵された。ノルグロマは夫がいない間、姑にいじめられ、毎日つらい生活を送っていたという物語である (Rinčin 他編 1979: 135-136)。家庭内暴力や虐待への批判と貧富の格差を是正する視点から、教育の目的で制作した作品と考えられる。民歌と戯劇の内容は同じものである。改変者は不明である。

#### (10) 1988 年の上演作品

1988年に記録された上演作品は、モンゴル・オペラ「ハンシュウイン」である。

モンゴル・オペラ「ハンシュウイン」もモンゴルの民歌をもとに作られた演目である。民歌の「ハンシュウイン」はモンゴル人女性の名である。ハンシュウインは恋人がいるにもかかわらず、封建婚姻制度の下で強制的に別の男性と結婚させられた悲劇的な物語である (Ünen2007: 52)。民歌とオペラと共に同じ内容で、封建社会の搾取や迫害を訴え、自由・民主的な社会制度導入の呼びかけである。民間で流行していたものを共産党や政府の政策と合わせて新たに改変している。改変者は不明である。

#### (11) 1989 年の上演作品

1989年に記録された上演作品は4作品で、ダンス「ブレイクダンス」、「蠟燭」、「運命」、「出征」である。

ダンス「ブレイクダンス」は、西洋で流行していたものを、オンニュート旗ウラーンムチルに導入し、アレンジした作品である。つまり中国では、この時代に改革開放政策により国際的な交流が頻繁になっていたことを意味する。ブレイクダンスはストリートダンスの一つで、主にトップロック (エントリー)、ダウンロック (フットワーク)、パワームーブ、フリーズの四つの要素から成る。ダンサーに即興性が求められる。一度に全ての要素を盛り込む必要はなく、どの動きに重点を置くかはそれぞれのダンサーにより異なる。振付は特木其楽である。特木其楽はモンゴル人男性で、1983年～2012年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。

ダンス「蠟燭」は、医者や蠟燭と例え、彼らの犠牲精神を賛美した作品である。教育目的から制作した作品である (ア氏 2020.8.11)。この演目は由来不明である。

ウラーンムチルは外国から輸入された DJ 音楽に合わせてダンス「運命」と「出征」

を作った（ア氏 2020.8.11）。これら演目の具体的な内容については聞き取りでもわからなかった。「運命」と「出征」の振付は李玉珍とハス図雅である。

## 5.2 回復期の上演作品の総括

本節では、回復期ウラーンムチルの上演作品を以下の4つに着目して検討する。

### ① 上演作品数とその種類

資料から判明した作品数は、36 作品である。その中で、歌が 2 作品、ダンスが 20 作品、話劇が 2 作品、ホルボーが 1 作品、大型話劇が 1 作品、評劇が 1 作品、大型評劇が 3 作品、群舞が 1 作品、オペラが 4 作品、戯劇が 1 作品である。

回復期でも、ダンスが圧倒的に多い。他方で、演目のジャンルが増えている。話劇や評劇については、大型話劇や大型評劇というような形でより多くの演者を参加させている。民歌、オペラ、戯劇にモンゴルという修辞語を使い演目のジャンルを増加させている。

### ② 上演作品の由来

上演作品の由来はオリジナルと導入と改変と翻訳と由来不明の五種類がある。この中で、オリジナルは 17 作品があり、導入が 11 作品で、改変が 4 作品と翻訳 1 作品である。オリジナルはウラーンムチルの隊員が自ら作った作品である。

導入は 11 作品で、内モンゴルの他機関から、或いは他の少数民族歌舞団から導入したものである。大型評劇「甘たるい事業」は赤峰県ウラーンムチルから、ダンス「オールドス踊り」は内モンゴル文工団から、「ブレイクダンス」は西洋から導入している。ほか 8 作品について導入元は不明である。

改変は 4 作品で、チベット舞踊とモンゴル民歌の改変に由来する。ダンス「ナルカジドマ」はチベット舞踊に由来し、赤峰市で流行していた。残りの 3 作品は、オペラ「嫁を奪い取る」と「ハンシュウイン」、及び戯劇「ノルグロマ」はモンゴル民歌を改変している。この 3 作品とともに、封建社会を舞台にした物語で、封建社会・封建制度を批判し、自由・民主社会を讃えた作品である。

翻訳は 1 作品で、戯劇の「銀海の赤い花」である。この作品は、モンゴル語のオペラを中国語に翻訳し、演じたものである。この演目の翻訳から、ウラーンムチルはオニュート旗では漢人人口が多いことに配慮したものであろう。

由来不明は 1984 年の歌「シラムロン母なる河」とダンス「幸せな青年」、1989 年のダンス「蠟燭」の 3 作品である。

ダンスについて振付と作曲があり、時には作詞もある。ただし、資料から、作詞が判明した作品は歌「草原児女延安を愛する」の一つのみである。

### ③ 上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲、翻訳者で分類する。

### (1) 振付

振付は、孟慶生、宋正玉、賈作光、李玉珍、ハス図雅、特木其樂、張勇の7人である。この中、孟慶生、宋正玉、李玉珍、ハス図雅、特木其樂の5人はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。さらに孟慶生、宋正玉、李玉珍は草創期からいる隊員である。ハス図雅、特木其樂は1980年代からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員になっている。賈作光は、内モンゴル文工団に所属する。賈作光の作品は、ウラーンムチルに草創期から導入されている。張勇は内モンゴル歌舞団の所属で、ほか詳細は不明である。

孟慶生はモンゴル人で、1978年のダンス「草原の楽しみ」と1984年のダンス「愉快な祝日」と1985年のダンス「豊かな生活へ歩む」を振付している。

宋正玉は朝鮮人で、1980年のダンス「赤い旗を縫う」を振付している。

李玉珍は漢人で、1984年の群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」、ダンス「ホジャの狩猟曲」、「各族の人民の心と心がつながる」、1985年のダンス「緑葉の情け」、「柳木の愛」、「愛が深い」、1989年のダンス「運命」、「出征」を振付している。

ハス図雅はモンゴル人で、1984年のダンス「延安を愛する」と1985年のダンス「緑葉の情け」と1989年のダンス「運命」、「出征」を振付している。

特木其樂はモンゴル人で、1989年のダンス「ブレイクダンス」を振付している。

賈作光は満洲人で、内モンゴル文工団の団員である。彼の創作した「オールドス踊り」は1954年にオールドス地域における伝統婚姻儀礼を基に制作した。ウラーンムチルは彼の作品を導入し、演じている。

張勇は1984年のダンス「悔恨」、「モンゴル馬」、「ホリハ支隊」を振付している。

### (2) 作詞

作詞は朱嘉庚の1人で、1977年の歌「草原児女延安を愛する」を作詞した。この歌を内モンゴル文工団の祈・達林太とともに1965年に制作した。朱嘉庚はオンニユート旗の宣伝部の人でありながらも、オンニユート旗ウラーンムチルの草創期から作品制作に携わっている。

### (3) 作曲

作曲は、祈・達林太、李信、ハス、宋滙霖の4人である。この中で、李信とハスはオンニユート旗ウラーンムチルの隊員で、李信は1980年代からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。ハスは草創期からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員になり、文革期の1976年にオペラ「悲痛の日」を振付している。祈・達林太は内モンゴル文工団の所属である。オンニユート旗ウラーンムチルは彼の作品を創造期から導入している。

祈・達林太はモンゴル人で、1977年の歌「草原の児女が延安を愛する」を作曲している。この歌をオンニユート旗の宣伝部の朱嘉庚とともに1965年に制作した。

李信は漢人で、1984年の群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」を作曲している。

ハスはモンゴル人で、1984年のダンス「悔恨」を作曲している。

宋滙林は漢人で、赤峰市バーリン右旗ウラームチルの隊員である。1985年のダンス「緑葉の情け」を作曲している。

#### (4) 翻訳

翻訳者は、烏日娜、道・巴雅爾、查干・巴特爾である。この中、烏日娜と查干・巴特爾はモンゴル人で、烏日娜は文革期からオンニュート旗ウラームチルの隊員で、查干・巴特爾は回復期からオンニュート旗ウラームチルの隊員である。道・巴雅爾の所属は不明である。3人と共に1985年の戯劇「銀海の赤い花」を翻訳している。

#### (5) まとめ

上演作品の制作者から、一人の隊員が複数の上演作品の制作に携わっていることが分かる。また、一つの作品の制作にモンゴル人や漢人の隊員が参加していることがある。

#### ④ 上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。これまでと同じく政治性がないと言い切れる作品はわずかである。1984年の歌「シラムロン母なる河」、及びダンス「ホジャの狩猟曲」、「モンゴル馬」は牧畜技術や自然を主題にしたものがある。また1985年のラマ法会のダンス「ナルカジドマ」は民族文化、宗教信仰に基づいて作られている。

上述以外の演目には政治的要素がある。なかでも明らかなのが1984年のダンス「ホリハ支隊」で、社会主義や兵士を讃えたものである。1984年のダンス「各族の人民の心と心がつながる」は民族の団結を呼びかけている。1978年の話劇「声の届かない処がない」と1979年の大型評劇「甘たるい事業」と1985年のダンス「豊かな生活へ歩む」は鄧小平の行った文革の被害を是正する政策及び改革開放政策を讃えたものである。1980年の話劇「英雄の牧畜工人双喜」は模範的人物を英雄として讃えたものである。

新しいテーマもある。1979年の大型話劇「あの人を助けて」及び1980年の大型評劇「愛情の審判」は青少年の教育目的で作られた作品である。

さらに環境保護をテーマにした1985年のダンス「緑葉の情け」もある。

愛情や歴史をテーマとして1985年のダンス「柳木の愛」がある。

医者 of 事業をテーマにした1989年のダンス「蠟燭」がある。

国際化やグローバル化の影響を受けて、1989年から「ブレイクダンス」も導入されている。

### 5.3 まとめ

回復期においては演目の種類が多様化している。新たに評劇、話劇、戯劇のジャンル

が加わった。

演目のテーマも多様で、社会主義や兵士、民族の団結、改革開放政策、模範人物、教育、環境問題、愛情や歴史、医者、国際化と幅広い。この中で、話劇「声の届かない処がない」と大型評劇「甘たるい事業」とダンス「豊かな生活へ歩む」は鄧小平の改革開放政策を明確に讃えている。政治性が継続されている中で、多様性が注目されている。

さらに、モンゴル民歌、オペラ、戯劇という演目の種類にモンゴルという修辭語を使い、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けている。それらは、モンゴル民歌をもとにオペラや戯劇を制作したものである。こうしてモンゴル民歌を改変することは草創期からあった。その目的は、モンゴル人に馴染み、身近なものを取り入れ、より多くの観客を集めるためである。一方で、国際的な頻繁交流により、他国の演目が登場している。オンニュート旗という地域性はまったく無かった。

## 小結

本章では、鄧小平の改革開放時代のウラーンムチル（1977-1989年）の状況を明らかにした。1976年、毛澤東の死を機に文化大革命が終結した。1978年から鄧小平が権力を握り、中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議で、「社会主義近代化建設への移行」、すなわち改革開放政策を提起した。鄧小平は、改革開放政策を進める同時に、文革の被害を調査し、名誉回復を行った。つまり、この時期はウラーンムチルの回復期に当たる。

こうした政策を受け、内モンゴルでは、文革中に批判された指導者の名誉は回復されるが、自治区のモンゴル人による共産党書記の権力は完全には回復しなかった。文化事業はほとんど復活した。

1978年から1980年の短い2年で、芸術歌舞団が106（251.4%）団体増え、職員は3,350（211.4%）人増加した。

劇場・映画館は11（237.5%）余増え、職員は125（228.4%）人増加した。

文化館は51（194.4%）余増え、職員も650（187.4%）人増加した。

文化ステージは3余あったものが、457（15233.3%の約152倍）余に増え、職員は15人から635（4233.3%の約42倍）人まで増加した。

群衆芸術館が6（250%）余増え、187（296.8%）人増加した。文化ステージが大幅に増加したことは、文化ステージは「村々まで繋がる」（村村通）という政策によるものである。こうして文化事業が復活した背景には、文化政策の促進も行われていたことに由来する。文化政策の促進として、農業や牧畜地域における文芸コンクールを行い、群衆芸術館には文芸に関するさまざまな学会が設けられた。大衆の文化生活を活性化するため、農村文化センターが創立され、移動文化ステージも作られた。

改革開放時代はウラーンムチルの回復期で、オンニュート旗ウラーンムチルは文革が終息後、林彪の派である四人組（江青・張春橋・姚文元・王洪文）を批判する演目を創作したという（劉・張 2012：75）。しかし、資料には具体的な演目は記録されて

いない。この時期、ウランムチルはまた新華書店を手伝い、本を販売していた。さらに中国人民政治協商会の副主席の費孝通は「ウランムチルは我が国の民族芸術の花」という揮毫を贈った。

オンニュート旗ウランムチルの上演作品からウランムチルは改革開放政策のもとで、演目の種類が多様化した。草創期と文革期になかった評劇、話劇、戯劇のジャンルが加わった。だが、鄧小平の「文芸は政治を離れない」という思想により社会主義や兵士、民族の団結、改革開放政策、模範人物を讃えた作品は、草創期と文革期と変わらず、見られた。一方で、教育、環境問題、愛情や歴史、医者、国際化と演目のテーマが多様化した。さらに、モンゴル民歌、オペラ、戯劇という演目の種類にモンゴルという修辭語を使い、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けるようになった。モンゴル人に馴染み、身近なものを取り入れ、より多くの観客を集めるためであると考えられる。

## 第七章 江澤民の社会主義市場経済時代のウランムチル（1990-2001年）

本章では、まず江澤民が打ち出した社会主義市場経済政策の実施経緯について解説する。次に、この政策下での内モンゴルの文化政策と文化事業を概観する。続いて、この時期におけるオンニュート旗ウランムチルの活動状況と他の文化事業を概観する。その上で、オンニュート旗ウランムチルの上演作品を分析する。

### 1 社会主義市場経済の実施

鄧小平に続いて、江澤民は1990年3月に行われた第7期全国人民代表大会第3回会議で、中国中央軍委員会主席になり、さらに1992年10月の中国共産党第14期中央委員会第1回全体会議（第14期第1中全会）において中央委員会書記になった。

翌年の第8期全国人民代表大会第1回会議では、中華人民共和国の主席になり、党中央軍事委員会主席・総書記・国家主席を兼任し、権力を一元化した。

江澤民は1992年の第14期第1中全会で、鄧小平の「特徴ある社会主義理論」を推進することを強調し、社会主義市場経済体制を改革する目標を掲げた。この社会主義市場経済とは、鄧小平の1992年春の華南視察後の「南巡講和」によるものである。1993年に鄧小平のこの社会主義市場経済に関する講話が、江澤民によって中華人民共和国憲法を改憲した際に盛り込まれた。江澤民は、つまり資本主義の体制と対照的に社会主義の体制下でも市場経済を導入し、経済発展を進めることを可能とする鄧小平の理論を新たな憲法に取り入れた。

社会主義市場経済では、生産計画、流通などを市場メカニズムに委ねる「市場化」が核となっている。さらに中央に集中していた決定権の多くを地方政府、個別農家などに移す「分権化」が行われた。

江澤民は、また第14期第1中全会で、民族政策について三つのことを強調した。

一つには、社会主義における民族関係を安定し、発展させる。

二つには、民族地域の自治制度を維持し、完成させる。

三つには、民族地域の経済と社会の発展を強化する。

具体的に言えば、民族の特徴と差異はあるものが、意図的に拡大する必要はない。民族団結と民族の共同発展のため、社会主義初期段階における民族事業の綱領を作る。中華民族の振興は、つまり56民族の振興である（劉2014：183）。

江澤民は、また「三つの代表」という思想を打ち出した。「三つの代表」とは、一つ目は、中国の先進的な社会生産力の発展の要求を代表する。二つ目は、中国の先進的文化の前進の方向を代表する。三つ目は、中国の最も広範な人民の根本的利益を代表する。のちにこの「三つの代表」が江澤民の政治キャッチフレーズとして定着した。

江澤民は、1994年の「中国全国の思想工作の宣伝会議」では、文芸工作者向けにこのように述べている（総政治部文化部編1995：94）。

文化事業における改革を重要し、積極的に推進するべきである。文化事業の改革を社会主義市場経済に合わせて行うべきである。

江澤民は、また 2000 年から西部大開発という大規模開発プロジェクトを実施し、このプロジェクトの会議において、民族地域の文化資源の優勢を發揮し、民族文化を宣伝し、積極的に民族の文化産業を發展していこうと述べている（中共中央宣伝部 2012 : 41）。つまり、この時期は市場向けの文化事業の改革が重要視された。

## 2 内モンゴルの文化政策

内モンゴルでは、こうした政策を受け、早速 1992 年 10 月から「虹の計画（彩虹计划）」という文化インフラ設備プロジェクトが始まった（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015 : 71）。このプロジェクトの目的は、農村・牧畜地域における文化のネットワークを建設し、そうしたネットワークを四級レベル<sup>75</sup>まで持ち上げる計画である。具体的には、農村・牧畜地域での文化ステージの建設を強化し、さらに内モンゴル自治区の辺境地域における市と旗を開放し、隣接国家と交流を促す。そのため、1994 年 11 月に内モンゴルの国境の長さから、「万里フロンティアの長い文化建設の企画（万里边疆文化长廊建设规划）」を実施した（包 1997 : 48）。

農村・牧畜地域には、この「虹の計画」と「万里フロンティアの長い文化建設の企画」により文化ステージ以外に加えて文化室が作られた。文化室には、党幹部、民兵、女性、青年、或いは文化、科学技術に関わる人達が参加し、図書、娯楽、映画、ビデオの閲覧や放送などを設けることとした（包 1997 : 37）。

1995 年 1 月に自治区共産党政府に「全区的に社会主義市場経済に関する理論を勉強し、討論する通知（关于在全区开展社会主义市场经济理论大学习、大讨论的通知）」が実施され、内モンゴル自治区共産党の宣伝部がこの通知を宣伝し、実行していくことを決定した（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015 : 74）。

ほかに、1998 年に「2131 プロジェクト」も実施された。「2131 プロジェクト」とは、21 世紀初の農村において、一つの村に一月に一回映画を上映する三つの一を意味するプロジェクトである。このプロジェクトが実施されてから内モンゴルでは年間 16 万回以上の映画が上映され、全国の中で真先に「2131 プロジェクト」を完成した（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015 : 290-291）。

さらに、内モンゴル自治区の宣伝部と文化庁は 2000 年 11 月に「「百県の文化センターの宣伝」に関する文化事業の実施意見（关于“百县宣传文化中心”建设工作的实施意见）」を發布し、自治区の文化センターの建設に明確な指導を行った（内モンゴル自治区党委宣伝部 2015 : 83）。

しかし、市場経済化導入以降、国家による積極的措置が必要であるマイノリティー権利保証の分野に市場経済の競争原理を持ちこもうとする論調が現れた（岡本 2001 :

<sup>75</sup> レベルについて、中国では、数字が上がるほど、低くなる印象があるが、この場合は逆で、よりよくなっていることを示している。ネットワークのレベルが上がるということは、それだけ、農村・牧畜地域で文化インフラが普及することを意味している。

110)。結果的に、効率や利益を重視せず、商売の競争、民族地域と沿海地域の格差など民族間の経済文化上の格差をもたらした。これについて岡本はこのように述べている（岡本 2001 : 111）。

実際中国では、1990年代、急激な物価上昇と市場経済を名目とした「自力」路線の中で、政府の資金で出されてきた各種の民族関係・民族文字による出版物が発行困難になり、廃刊になった定期刊行物もある。マイノリティー言語による出版物が市場競争の中に放り込まれば、漢語による出版物に太刀打ちできるわけではなく、たちまち淘汰されてしまうのは目に見えている。

岡本によれば、こうした市場経済化の競争に伴い、民族地域では民族教育の費用が減少し、民族文字による教材の供給が困難に陥り、「辺境」牧畜地域の民族学校の学生が就学経費負担により退学者が多くなったとしている（岡本 2001 : 111）。

市場経済が進行する中、江澤民は 1993 年の「政治協商会の文学芸術界委員の座談会」で、社会主義の文芸事業を発展させるには、千百万人を動員し、この事業に取り入れる必要があると発言した（総政治部文化部 1995 : 185）。

一方で、内モンゴルでは、市場経済化の影響を受け、1994年6月に文化庁は、「芸術パフォーマンス団体の体制改革に関する強化意見」を実施した。これにより、文化芸術団体に独立法人制を導入し、法人代表の責任制を決定し、芸術パフォーマンス団体の公演が市場化された（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 73）。ここでいう「意見」とは、実際に政策として実施されたものである。中国で実際の政策を実施する前に、政策の受け入れについて「意見」や「通知」のような形で試すことが多い。「芸術パフォーマンス団体の体制改革に関する強化意見」を実施したことによって、芸術パフォーマンス団体は政府からの予算措置が少なくなり、上演費用、人件費の一部を自力で賄わなければ、ならなくなったのである。つまり、芸術パフォーマンス団体は市場経済に向け、体制改革を行ったということである。

### 3 内モンゴルの文化事業

こうした政策により、鄧小平時代の 1986 年から 10 年後の 1996 年の内モンゴルにおける文化事業の統計をみると、芸術歌舞団は 117 団体で、10 年前より 26 団体も減少した。団員（隊員）は 5,613 人で、10 年前より 1,200 人減少している。

劇場・映画館は、29 余で、10 年前より 8 余減少した。職員は 713 人で、10 年前より 97 人減少している。

文化館は 102 余あり、10 年前より 2 余減少した。職員は 1,682 人で、10 年前より 149 人減少している。

文化ステージは 1,500 余で、10 年前より 135 余減少した。職員は 2,371 人で、10 年前より 93 人増加している。

群衆芸術館は13余で、10年前と比べ変わっていない。ただし、職員は428人で、10年前より51人減少している（内蒙古自治区文化庁1997b）。

以上データから1990年代を1980年代と比べると芸術歌舞団を始め劇場・映画館などは全て減少していることが分かる。文化ステージも135余減少している。ただし、職員はやや増えた。

これらのデータからは、1990年代の文化事業は江澤民が推進した社会主義市場経済化の影響を強く受けていることがわかる。つまり、文化事業に関わる予算が減少した影響が窺える。1986年の内モンゴルの文化事業の総収入は604万元に国家から予算支援が4,546万元で、総支出が4,251万元で、899万元は文化事業の資金として残る。これと対照的に1996年の文化事業における総収入は2,189万元で、国家から予算支援が10,297万元、総支出が12,464万元で、20万元は文化事業の資金として残る（内蒙古自治区文化庁1997b）。この数字から、1996年の国家からの予算支援は増えているものの、総支出が1986年より大きく、実際の文化事業の資金は1986年より低い。こうした様子からも、1990年代の内モンゴルの文化事業は、社会主義市場経済化の影響を強く受けていたといえる。

#### 4 オンニュート旗のウラーンムチルと他の文化事業

ウラーンムチルの改革期は社会主義市場経済の時代である。「計画経済時代、ウラーンムチル隊員の給料や機材などに関わる経費は全て地方自治体の財政から賄われていた。しかし、市場経済の時代に入ってから、多くの地方自治体が財政難の問題を抱え、ウラーンムチルはむしろ重荷となり、解散するところも出た」（シンジルト2010：205）。財政難という問題を解決するために、「民族の文化ブランド」（シンジルト2010）という文化商品を提唱し、市場のニーズに対応するようになった。また地域内外の大手企業と連携し、その活動を維持するように努力していた。ウラーンムチルに「管理運営」（紅2019）が求められた。例えば、オンニュート旗ウラーンムチル隊員の中から数人の隊員を1997年から中国の深圳市、広州市、北京などに派遣し、他地域の企業と連携し、最も短いのは2ヶ月、最も長いのは3年間の契約で働かせたという。

オンニュート旗ウラーンムチルはこの時期、国家の政策やオンニュート旗政府の指示とともにさまざまな活動を行っている。以下は文献資料からまとめたものである。

オンニュート旗ウラーンムチルは1990年に赤峰市歌舞団から話劇「頼寧」を導入し、リハーサルを行い、オンニュート旗の小中学校で公演した。またモンゴル文学作品に基づき戯劇「シャグデル」を創作し、国家の文化部の審査を得てバーリン右旗ウラーンムチルとともにオンニュート旗をはじめ、さまざまな地域で公演した。

1991年、オンニュート旗ウラーンムチルは政府から「旗レベルの精神文明機構」と表彰され、赤峰市文化局からは「先進ウラーンムチル」として表彰された。オンニュ

ート旗ウランムチルの党支部が赤峰市共産党委員会に「全市の雷鋒を学ぶモデル団体」<sup>76</sup>と表彰された（劉・張 2012：85-86）。

1992年、ウランムチル成立35周年を機に、オンニュート旗ウランムチルの10名の臨時隊員を正式隊員に編入した（劉・張 2012：89）。

1993年、オンニュート旗ウランムチルが赤峰市の北方薬屋（工場）で公演を行った（劉・張 2012：90）。資料には、資金の提供について記録されていないが、この時期は、企業と連携し、公演を行うのはよくあることであった。

1997年、香港がイギリスから中国に帰還したことと、内モンゴル自治区成立50周年を機に、ウランムチルは「香港の帰還」、「香港を祝福する」など多くの作品を制作し、旗の農業地域や牧畜地域で巡回公演を行った。この年、オンニュート旗財政部がオンニュート旗ウランムチルに12万円の施設・設備更新費の支援を行った。

また1998年、内モンゴル自治区の文化庁とオンニュート旗財政部が6万元を提供し、オンニュート旗ウランムチルに28人乗りのバスを購入した。同年、オンニュート旗ウランムチルは舞踏訓練班を設け、36人の学生を訓練し、この中から6人をウランムチルの隊員として採用した。さらに1999年、澳門（マカオ）返還を機に、オンニュート旗ウランムチルが旗におけるアマチュア歌手を集め、歌唱コンクールを行った（劉・張 2012：95-97）。

2001年、内モンゴル自治区文化庁の副庁長達・阿拉坦巴干がオンニュート旗ウランムチルを訪問し、オンニュート旗ウランムチルを内モンゴル自治区の「一級ウランムチル」と評価した。また同年、オンニュート旗ウランムチルの隊員10人が赤峰市の草原興発グループ会社に招かれ、甘肅省の蘭州市で10日間に渡り、20回の公演を行った。同年、オンニュート旗ウランムチルは、山東省の済南市の大明湖公園に招かれ、37日間、136回の商業公演を行った（劉・張 2012：99）。

上述のようにウランムチルはこの時期、社会主義市場経済政策の影響を受けて企業と連携し、商業的に公演を行っていた。

この時期のオンニュート旗における他の文化事業についての資料は見つかっていない。社会主義市場経済時代はウランムチルの改革期に当たる時期である。

## 5 改革期の上演作品

以下はオンニュート旗ウランムチルのオンニュート旗に残された隊員たちが地元で公演した演目である。

表7は改革期における上演作品のリストである。

表7 改革期（1990-2001年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
90	話劇	頼寧	導入	創作：朱嘉庚（団員：漢人） 翻訳：孟合（？）

<sup>76</sup> 中国語では「全市学习雷锋标兵集体」という。雷鋒は中国共産党兵士で、模範人物である。

				監督：孫普（隊員：漢人）
	戯劇	シャグデル	改変	モンゴル民間文学作品
	ダンス	响水の中の愛	オリジナル	振付：李玉珍（隊員：漢人）
91	ダンス	祝福	オリジナル	振付：呼和格日樂（？）、 ハス図雅（隊員：モンゴル人）
		雲騎	オリジナル	振付：呼和格日樂、 道爾基（隊員：モンゴル人）
92	歌	辺境兵士を見る	オリジナル	オンニュート旗ウラーンムチル
		服を洗う	オリジナル	オンニュート旗ウラーンムチル
93	戯劇	妻を交換する老人と若者	導入	漢人の戯劇
94	—	—	—	—
95	—	—	—	—
96	ホルボー	英雄王建哲	オリジナル	オンニュート旗ウラーンムチル
	オペラ	虹	翻訳	創作：朱嘉庚、 蒙和巴特爾（？） 翻訳：查干巴特爾（隊員：モンゴル人） 振付：李玉珍 作曲：道爾基 監督：白榮延（？）
	ダンス	千歌万曲を覚に捧げる	オリジナル	振付：李玉珍
		先生に捧げる歌	オリジナル	振付：李玉珍
		シンシン学生の情け	オリジナル	振付：李玉珍
明日の太陽を迎える		オリジナル	振付：李玉珍	
97	ダンス	香港の帰還	オリジナル	振付：ハス図雅
		香港を祝福する	オリジナル	？
		喜び祝う	オリジナル	？
		愛する我が中華	オリジナル	作詞：喬羽（北京大学：漢人） 作曲：徐沛東（芸術界連合会：漢人）
		綺麗な故郷のオンニュート	オリジナル	振付：ハス図雅（隊員：モンゴル人） 作詞：範郁森（？） 作曲：李信（？）
		草原人民の希望	？	？
	歌	放牧場の喜びの歌	？	？
		祖国を歌う	オリジナル	？
		あの日とこの日	？	？
		草原の夜	導入	作詞：張加毅（映画監督：漢人） 作曲：田歌（音楽協会理事：漢人）
		回帰の喜びで祖国を讃えよう	オリジナル	？
ホルボー	早く走る馬	？	？	
98	ダンス	吉祥の草原	？	振付：扎那（内モンゴルの歌舞団：モンゴル人）
99	—	—	—	—
00	舞劇	生命の歌	導入	振付：内モンゴル直属ウラーンムチル
	ダンス	天使の情け	オリジナル	？
01	ダンス	太陽を追う	オリジナル	振付：烏日嘎（隊員：モンゴル人）
		相撲の踊り	オリジナル	振付：ハス図雅

出典：『オンニュート旗ウラーンムチル誌』（2012）により筆者作成

表7の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。

演目の種類には話劇、戯劇、ダンス、歌、ホルボー、舞劇がある。新しく加わった

のは舞劇である。舞劇は舞踊を主とする舞台劇のことを指し、舞踊、戯劇、音楽を合わせて表現する演劇の種類である。

由来にはオリジナルや導入、改変、翻訳、由来不明の5つがある。

1994年、1995年、1999年の演目は記録されていない。

## 5.1 改革期の各年の上演作品

### (1) 1990年の上演作品

1990年に記録された上演作品は3作品で、話劇「頼寧」、戯劇「シャグデル」、ダンス「响水中の愛」である。

話劇「頼寧」は漢人の漢語の教科書に掲載されていた実話に由来する。タイトルの頼寧とは、四川省雅安市の石綿県生まれの男の子の名前を指す。頼寧は15歳の時、地元石綿山岳地域に火災が起こり、消火活動に参加し犠牲者となった。この実話は赤峰市歌舞団に導入され、さらに改変を経て話劇として誕生した。改変した人物は赤峰市歌舞団の団員朱嘉庚である。オンニュート旗ウラーンムチルは赤峰市歌舞団からこの話劇を導入し、中国語からモンゴル語に翻訳している。最初の翻訳者は孟合である。孟合の詳細は不明である。振付は、オンニュート旗ウラーンムチル隊員孫普である(劉・張編 2012: 85、103)。孫普は漢人男性で1968年～1984年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

戯劇「シャグデル」はシャグデル (*Shagder*) という人物名に由来する。モンゴル戯劇ともいう。シャグデルは1869年にバーリン右旗の貧乏な牧畜民の家庭で生まれた。7歳でギリバル・ジョ (*yilbar jayuu*) 廟のラマになった。20歳までチベット語の本を読み、モンゴル民間の口承ホルボー、詩歌、英雄叙事詩、諺に優れた人物として有名になった。30代から封建官僚、地主の搾取を暴き、生涯官僚と戦った人である(T.Ürgen編 2017: 3)。シャグデルの物語は実話に基づいて作られたものである。シャグデルの物語は社会主義中国の提唱する無産階級的な人物としてのプロレタリア対ブルジョアという階級闘争の典型的モデルである。オンニュート旗ウラーンムチルはシャグデルについての物語をアレンジし、創作した。改変者に関する詳細は不明である。

ダンス「响水の中の愛」は、オンニュート旗の响水という地域にある滝を賛美した作品である。この滝の水が長年に渡って地域の農業を支えてきたことから滝は村民に深く愛されている。さらに、地域の人は滝に遊びに行くことがある。こうした中で、青年男女の恋愛ストーリーが生まれた。ウラーンムチルはこの恋愛ストーリーに基づき、ダンス「响水の中の愛」を作った(ア氏 2020.2.11)。振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員李玉珍である。

### (2) 1991年の上演作品

1991年に記録された上演作品は2作品で、ダンス「祝福」と「雲騎」である。

ダンス「祝福」は新年の喜びを祝う意味を込めた演目である(ア氏 2020.2.11)。振付は呼和格日樂とハス図雅である。呼和格日樂について不明である。名前からモンゴ

ル人と考える。ハス図雅はオンニユート旗ウラーンムチル隊員である。ハス図雅は1983年から2012年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員であった。

ダンス「雲騎」は牧畜民の青年たちが馬に乗り自由自在に走り競う光景を表現した作品である（ア氏 2020.2.11）。モンゴルの馬と文化を讃えたものである。振付は呼和格日楽と道爾基である。呼和格日楽はハス図雅とともに「祝福」を振付しているが、詳細は不明である。道爾基はモンゴル人男性で1983年～1996年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

### (3) 1992 年の上演作品

1992年に記録された上演作品は2作品で、歌「辺境兵士を見る」と「服を洗う」である。

歌「辺境兵士を見る」の内容は不明である。タイトルから辺境にいる兵士の奉仕精神を讃えた作品であると考えられる。

歌「服を洗う」は、人民解放軍の功労を讃えた作品である。人民解放軍が人民にとって救いの星であるとし、人民は感謝の気持ちを表すために兵士の服を洗ってあげた。この作品は「辺境兵士を見る」とともにウラーンムチルに元々からあった演目であるという（劉・張編 2012 : 88）。制作者はオンニユート旗ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。

### (4) 1993 年の上演作品

1993年に記録された上演作品は1作品のみで、戯劇「妻を交換する老人と若者」である。

戯劇「妻を交換する老人と若者」は封建社会を背景とする物語である。一人の王公の地主が、ある年に干ばつで貧しくなって、奴隷たちを売却した。奴隷売買では、若い女性が売買されるが、年寄の女性は対象にならないため、地主は女性たちの頭を布で隠し、売買方法を変更した。結果的に売買された若い女性が老人に与えられ、年寄の女性は若者に与えられた。老人と若者はそれぞれの妻を交換した。封建社会の旧風俗を批判した作品である。この演目は元々漢人の戯劇からモンゴル語に翻訳したものである（エ氏 2020.2.17）。制作者は不明である。

### (5) 1996 年の上演作品

1996年の記録された上演作品は6作品で、ホルボー「英雄王建哲」、オペラ「虹」、ダンス「千歌万曲を党に捧げる」、「先生に捧げる歌」、「シンシン学生の情け」、「明日の太陽を迎える」である。

ホルボー「英雄王建哲」は、町を歩いていた学生の中に暴走車が突っ込んできたとき、王建哲が身を犠牲にし、学生を救った事実に基づいて作られた作品である（劉・張編 2012 : 104）。この作品は、英雄の人物、模範的人物を讃え、教育を目的としている。制作者はオンニユート旗ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。

オペラ「虹」は牧畜地域の小学校で働く女性教員の物語である。女性教員は病気があるにもかかわらず、長い時間をかけて遠いところまで通勤していた。しかし、ある日、勤務中に体調不良で倒れた。共産党の教育事業に献身した彼女の事例をもとにオンニュート旗ウラーンムチルが赤峰市歌舞団の団員とともにこの演目を作った（劉・張編 2012：51-52）。物語の創作者は朱嘉庚と蒙和巴特爾である。蒙和巴特爾については、名前からモンゴル人であると考えられるが、詳細は不明である。1990年の話劇「頼寧」を中国語からモンゴル語に翻訳している孟合（モンヘ）は、蒙和巴特爾であると考えられる。モンゴル人は知り合いの名前を省略して呼ぶ習慣がある。蒙和巴特爾の「蒙和」と「孟合」は、漢字は異なるが、中国語（漢語）の発音は同じである。1990年の話劇「頼寧」は朱嘉庚が改変したものであり、孟合は1990年から朱嘉庚と協力し、歌舞団の演目を制作している。朱嘉庚は赤峰市歌舞団の団員である。このオペラは当初は中国語で作られて、その後にモンゴル語で翻訳されている。翻訳者は查干巴特爾である。振付は李玉珍で、作曲は道爾基である。查干巴特爾はモンゴル人男性で1959年～1966年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。查干巴特爾は1960年代にウラーンムチルを離れているが、1990年代においてもウラーンムチルの活動に関わっている。李玉珍と道爾基はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。監督は白栄延である。白栄延について詳細は不明である。

ダンス「先生に捧げる歌」と「シンシン学生の情け」は小学生向けの演目であり、大変な人気を博したという（劉・張編 2012：39）。内容の詳細は不明である。この二つの演目の振付は李玉珍である。

ダンス「千歌万曲を党に捧げる」と「明日の太陽を迎える」は共産党と政府の事業を讃えた作品である（ア氏 2020.2.11）。この二つの演目の振付は李玉珍である。

## (6) 1997年の上演作品

1997年に記録された上演作品は12作品と多く、ダンス「香港の帰還」、「香港を祝福する」、「喜び祝う」、「愛する我が中華」、「綺麗な故郷のオンニュート」、「草原人民の希望」、「放牧場の喜びの歌」、歌「祖国を歌う」、「あの日とこの日」、「草原の夜」、「回帰の喜びで祖国を讃えよう」、ホルボー「早く走る馬」である。

1997年に香港がイギリスから中国へ返還された。この年は、また内モンゴル自治区の成立50周年でもある。ウラーンムチルはこれを記念して、ダンス「香港の帰還」、「香港を祝福する」、「喜び祝う」、歌「祖国を歌う」、「あの日とこの日」、「回帰の喜びで祖国を讃えよう」を創作した（劉・張編 2012：65、103）。ダンス「香港の帰還」はオンニュート旗ウラーンムチル隊員ハス図雅が振付した。それ以外のダンス「香港を祝福する」、「喜び祝う」、歌「祖国を歌う」、「回帰の喜びで祖国を讃えよう」の制作者に関する詳細はない。

ダンス「愛する我が中華」は、歌「愛する我が中華」を基に作ったダンスと考えられる。歌「愛する我が中華」は、1991年に北京大学の歌劇研究院の喬羽の作詞で、中国文学・芸術界連合会所属の徐沛東が作曲したものである。歌の内容は、中国に56民

族が暮らし、兄弟姉妹のように祖国を建設している、つまり「民族共栄」を讃えた作品である。ダンスの振付について不明である。

ダンス「綺麗な故郷のオンニユート」は、オンニユート地域の山水を讃えた作品である（ア氏 2020.2.11）。振付はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅である。作詞は範郁森、作曲は李信である。範郁森の詳細は不明である。李信は漢人で、1980年～2002年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

ダンス「草原人民の希望」と「放牧場の喜びの歌」は、牧畜民の労働で家畜を増やした喜びを表現した作品である（ア氏 2020.2.11）。制作者は不明である。

歌「草原の夜」は、1959年に映画監督の張加毅が書いた詞に中国音楽協会の理事の田歌が作曲したものである。内容は、若い兵士が恋人を思い、静かな草原で琴を弾いている様子が表現されている。ある意味でラブソングに近い作品である。張加毅（1925-2004）は漢人男性で、ドキュメンタリー映画監督と作詞家である。田歌（1933-2019）は漢人男性で、作曲家である。新疆軍区文工団の団員を経て中国音楽協会の第3回、第4回理事である。

ホルボー「早く走る馬」は、馬の走りを讃えた作品である（ア氏 2020.2.11）。制作者は不明である。

#### (7) 1998 年の上演作品

1998年に記録された上演作品は1作品のみで、ダンス「吉祥の草原」である。

ダンス「吉祥の草原」は、草原の安楽と平和な生活、及び自由自在な生活を描いた作品である（ア氏 2020.2.11）。制作者は不明である。

#### (8) 2000 年の上演作品

2000年の記録されていた作品は舞劇「生命の歌」とダンス「天使の情け」の2作品である。

舞劇「生命の歌」は草原の鷹を描いた作品である。この舞劇では、卵から生まれた小鷹が成鷹まで成長する過程を表現している。草原では鷹が多かったが、近年は環境の原因で少なくなっており、環境保護意識を高めるために作られたという（ア氏 2020.2.11）。制作者は内モンゴル直属ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。

ダンス「天使の情け」は医者をも讃えた作品である。蠟燭のように身を犠牲にし、人々に光を与える精神を讃えたものである（ア氏 2020.2.17）。制作者は不明である。

#### (9) 2001 年の上演作品

2001年に記録された作品はダンス「太陽を追う」と「相撲の踊り」の2作品である。

ダンス「太陽を追う」は、草原に暮らす牧畜民の太陽が昇る時から太陽が沈むまで忙しく生活している様子を描いた作品である（ウ氏 2020.2.11）。モンゴル文化・牧畜

生業の賛歌である。振付は内モンゴル直属ウラーンムチル隊員の烏日嘎である。烏日嘎は、オンニュート旗ウラーンムチル隊員を指導し、振り付けしたという。

ダンス「相撲の踊り」は、モンゴル相撲を讃えた作品である（ア氏 2020.2.17）。振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅である。

## 5.2 改革期の上演作品の総括

改革期におけるウラーンムチルの上演作品を以下の4つに着目して検討する。

### ① 上演作品数とその種類

資料から判明した作品は31作品である。その中では、ダンスが18作品、歌が6作品、戯劇は2作品、ホルボーが2作品、話劇が1作品、オペラが1作品、舞劇1作品である。

上述の作品数と種類から改革期の作品は、回復期と同じように演目のジャンルが多様であることが分かる。さらに「响水の中の愛」や、「綺麗な故郷のオンニュート」のようなオンニュート地域を讃えた作品が制作されている。

### ② 上演作品の由来

上演作品の由来はオリジナルと導入と改変と翻訳と由来不明の5種類がある。オリジナルには20作品があり、導入が4作品である。改変1作品と翻訳1作品で由来不明は5作品がある。

オリジナルはウラーンムチルの隊員が自ら積極的に作った作品であり、草創期からあったものである。ただし、作詞作曲、振付など一部しか判明されていない作品が多い。制作者が不明な作品もある。

導入は内モンゴルの他機関から、或いは他の民族や歌舞団から導入したものである。具体的に、漢人の地域からは1990年の話劇「頼寧」と1993年の戯劇「妻を交換する老人と若者」が導入された。1997年の歌「草原の夜」は漢人が作詞・作曲したものである。また2000年の舞劇「生命の歌」は内モンゴル直属ウラーンムチルから導入している。

改変された作品には、1999年の戯劇「シャグデル」があり、これはモンゴル文学作品に由来する。

翻訳は1作品であり、中国語の1996年オペラ「虹」をモンゴル語に翻訳したものである。

### ③ 上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲、創作、監督、翻訳者で分類する。

#### (1) 振付

振付は、李玉珍、呼和格日樂、ハス図雅、道爾基、扎那、烏日嘎の6人である。こ

の中で、所属分かっているのは、李玉珍、ハス図雅、道爾基、烏日嘎の4人で、4人と共にオンニュート旗ウラーンムチルの所属であった。

李玉珍は漢人で、1990年のダンス「响水の中の愛」、1996年のオペラ「虹」、ダンス「千歌万曲を党に捧げる」など6作品を振付している。草創期からダンス「羊毛を刈る」と「皿の踊り」などを振付している。

呼和格日樂は、1992年のダンス「雲騎」を振付している。呼和格日樂について所属不明であるが、名前からモンゴル人であると、考えられる。

ハス図雅はモンゴル人で、1991年のダンス「祝福」、1997年のダンス「香港の帰還」、2001年のダンス「相撲の踊り」を振付している。回復期からダンス「延安を愛する」、「緑葉の情け」、「運命」、「出征」などを振付している。

道爾基はモンゴル人で、1991年のダンス「雲騎」を呼和格日樂と共に振付している。

扎那は内モンゴル歌舞団の団員で、2000年のダンス「吉祥の草原」を振付している。名前からモンゴル人であると考えられる。

烏日嘎はモンゴル人で、2001年にダンス「太陽を追う」を振付している。烏日嘎は1978年～1987年までオンニュート旗ウラーンムチルで勤務していた。1987年に内モンゴル自治区直属ウラーンムチルに転勤している。烏日嘎は2001年のこの時点で臨時的にオンニュート旗ウラーンムチルに派遣され、新たな作品を制作したと考えられる。

2000年の舞劇「生命の歌」の振付は内モンゴル直属ウラーンムチルである。具体的な振付師は不明である。

## (2) 作詞

作詞は、喬羽、範郁森、張加毅の3人である。

喬羽は漢人で北京大学の歌劇研究院の所属で、1997年にオンニュート旗ウラーンムチルが作ったダンス「愛する我が中華」の歌の作詞者である。

範郁森は、1997年のダンス「綺麗な故郷のオンニュート」に作詞している。所属と民族は不明である。

張加毅は漢人の映画監督で、1997年にオンニュート旗ウラーンムチルに導入された歌「草原の夜」の作詞者である。

## (3) 作曲

作曲は、道爾基、徐沛東、李信、田歌の4人である。4人の中で、道爾基と李信はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

道爾基は、1996年のオペラ「虹」に作曲している。ダンス「雲騎」を振付もしている。

徐沛東は漢人で中国文学・芸術界連合会所属で、1997年にオンニュート旗ウラーンムチルが作ったダンス「愛する我が中華」の歌の作曲者である。

李信は漢人でオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。1997年のダンス「綺麗

な故郷のオンニユート」に作曲している。

田歌は漢人で中国音楽協会の理事で、1997年にオンニユート旗ウラーンムチルに導入された歌「草原の夜」の作曲者である。

#### (4) 創作

創作は、朱嘉庚と蒙和巴特爾の2人である。

朱嘉庚は漢人で、オンニユート旗歌舞団の所属で、1990年の話劇「頼寧」と1996年のオペラ「虹」を創作している。

蒙和巴特爾は所属不明で、朱嘉庚とともに1996年のオペラ「虹」を創作している。名前からモンゴル人と考えられる。

#### (5) 監督

監督は、孫普と白榮延の2人である。

孫普は漢人で、1968年～1984までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員であった。1990年に話劇「頼寧」を監督している。

1996年のオペラ「虹」を監督している白榮延の所属と民族は不明である。

#### (6) 翻訳

翻訳者は孟和と查干巴特爾の2人である。

孟合は蒙和巴特爾で、所属不明である。1990年の話劇「頼寧」を中国語からモンゴル語に翻訳している。この作品は朱嘉庚が改変したものであり、孟合が翻訳している。さらに1996年のオペラ「虹」は朱嘉庚と蒙和巴特爾の2人が創作し、蒙和巴特爾が翻訳している。

查干巴特爾はモンゴル人で、1959年～1966年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員で、1996年にオペラ「虹」を翻訳している。

以上の分析から喬羽、徐沛東、張加毅、田歌はウラーンムチルと関係ない人物である。ウラーンムチルは彼らの作品を導入している。

上演作品の制作者からウラーンムチルは漢人の制作した歌や話劇、戯劇などの作品をもとに新たな作品を改変し、或いは導入していることが分かる。

また民族の割合から草創期においては、朝鮮人もいたものが、草創期以降はモンゴル人、漢人以外の他民族はいない。制作者の作品の割合から、主にモンゴル人が中心に上演作品を制作していることが分かる。

#### ④ 上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。まず、これまでと同様、政治性がないと言い切れる作品はわずかである。1991年のダンス「雲騎」、1997年の歌「草原の夜」、2000年の舞劇「生命の歌」、2001年のダンス「太陽を追う」、「相撲の踊り」である。

社会主義や国防兵士や労働者の革命精神を讃えた作品は、1990年の戯劇「シャグデル」、1992年の歌「辺境兵士を見る」と「服を洗う」、1993年の戯劇「妻を交換する老人と若者」、1996年のダンス「明日の太陽を迎える」、1998年のダンス「吉祥の草原」などである。

共産党の事業や民族団結を呼びかけた作品として1996年のダンス「千歌万曲を党に捧げる」、1997年のダンス「香港の帰還」、「香港を祝福する」、歌「愛する我が中華」と「祖国を歌う」、「あの日とこの日」、「回帰の喜びで祖国を讃えよう」である。

模範的な人物を讃え、教育の目的を謳った演目は、1990年の話劇「頼寧」、1996年の「英雄王建哲」である。

教師を讃えた作品は、1996年のホルボー「虹」、ダンス「先生に捧げる歌」である。恋愛をテーマにしたラブソングとして1997年の歌「草原の夜」である。

医者をも讃えた作品として2000年のダンス「天使の情け」である。

環境をテーマに環境保護の目的で作った演目は、2000年の舞劇「生命の歌」である。

新しく、地域を讃えた作品が登場した。1990年のダンス「响水の中の愛」、1997年のダンス「綺麗な故郷のオンニユート」である。

ウラーンムチルの上演作品のテーマとその変遷から、改革期における演目の特徴は、草創期・文革期・回復期の継続であるとともに、地域の特徴、環境問題などを表現した作品が制作されるようになったことが分かる。

### 5.3 まとめ

改革期では、回復期を続いて、演目のジャンルが多い。共産党の事業や民族団結の演目、社会主義や国防兵士や労働者の革命精神を讃えた演目、模範的な人物及び教育事業を讃えた演目、ラブソング、医者の精神、環境問題、地域の特徴を表現した演目がメインになっている。

改革期は、先行研究の指摘通り主にウラーンムチルの「管理運営」（紅2019）に改革がみられるが、演目から明確な改革は見られない。「管理運営」の改革というのは、主にウラーンムチルは財政難問題を巡り、地域内外の大手企業と連携し、活動を維持したことを指摘していると考えられる。隊員たちを他地域に行かせ、他団体や企業と連携し公演を行っていた。つまり、ウラーンムチルの組織・制度における改革である。

### 小結

本章は、江澤民の社会主義市場経済時代のウラーンムチル（1990-2001年）の活動である。鄧小平に続いて、江澤民は国家の権力を握り、鄧小平の「特徴ある社会主義理論」を推進し、社会主義市場経済の政策を実施した。文化事業に対して市場向けの改革が行われた。つまり、この時期はウラーンムチルの改革期に当たる。

こうした政策を受け、内モンゴルでは、芸術パフォーマンス団体の体制改革が行われ、公演が市場化された。「虹の計画」が実施され、農村・牧畜地域における文化のネットワークが強化された。また「万里フロンティアの長い文化建設の企画」のプロジ

エクトが行われ、辺境地域の市と旗を開放し、隣接国家との交流を促した。「2131 プロジェクト」が実施され、一つの村に一月に一回の映画を上映された。内モンゴルでは、中国の中で真っ先に「2131 プロジェクト」が実現された。一方で、市場経済化の影響を受け、芸術パフォーマンス団体の体制改革が行われ、文化芸術団体の独立法人制を導入し、芸術パフォーマンス団体の公演が市場化された。

1986年の統計データと1996年の10年間の統計データを比べると、芸術歌舞団、劇場・映画館、文化館は減少し、職員も減少した。また群衆芸術館は10年前と比べ変更してないが、職員は減少した。文化ステージは減少したが、職員は少々増加した。さらに1986年の文化事業の資金が899万元であることに對し、1996年の文化事業の資金が20万元である。こうした状況からこの時期、文化事業は市場経済政策の影響を強く受けたことが分かる。

江澤民の社会主義市場経済時代はウラナムチルの改革期で、オンニュート旗ウラナムチルは市場のニーズに對應し、企業と連携し、活動を行った。財政難を解決するためにウラナムチルは体制改革を行ったのである。オンニュート旗ウラナムチルは具体的に1997年から隊員を派遣し、中国の深圳市、広州市、北京市などに行かせ、他地域の企業と連携し公演を行った。

この時期におけるオンニュート旗ウラナムチルの上演作品から、回復期を續いて、演目のジャンルに舞劇が加わり、種類は増加した。草創期と文革期にあったテーマとして共産党の事業や民族団結、社会主義や国防兵士や労働者の革命精神を讃えた演目、模範的な人物及び教育事業を讃えた演目が続けられた。さらに回復期にあった演目としてラブソング、医者や精神、環境問題などもある。新たに地域の特徴を表現した演目が増えた。一方で、草創期にあった毛澤東の個人崇拜のような演目はなかったが、江澤民の時代を表現した「香港の帰還」、「香港を祝福する」「喜び祝う」、「回帰の喜びで祖国を讃えよう」など作品が多かった。

## 第八章 胡錦濤の科学的発展観時代のウランムチル（2002-2012年）

本章では、まず胡錦濤が打ち出した科学的発展観政策の実施内容について記述する。続いて、この政策の下での内モンゴルの文化政策と文化事業を概観する。さらに、この時期におけるオンニュート旗ウランムチルの活動状況と他の文化事業を述べた上で、オンニュート旗ウランムチルの上演作品を分析する。

### 1 科学的発展観の実施

2002年に胡錦濤は中国共産党中央委員会総書記に抜擢され、翌年の2003年から国家主席になる。いわゆる胡錦濤と温家宝（第6代国務院総理、2003-2013年）の時代である。また「胡温時代」ともいう。

2002年の中国共産党第16期中央委員会では、江澤民が自ら「三つの代表」に加えて「小康社会（ややゆとりのある生活ができる社会）」など政治、経済、文化、国際、国防において報告を行った。江澤民の報告である「三つの代表」における「中国共産党が中国の先進的文化の前進の方向を代表する」という発言と「小康社会を実現するには、社会主義文化を発展し、社会主義の精神文明を建設する必要がある」という発言が、中国の文化事業の発展に大きな影響をもたらした。

胡錦濤は江澤民のこの理論を宣伝し、2003年の中国共産党第16期中央委員会第3回全体会議（第16期3中全会）で「科学的発展観」を提起し、翌年の2004年の中国共産党第16期中央委員会第4回全体会議（第16期4中全会）で「社会主義調和社会（和諧社会）」を提起した。

「科学的発展観」と「社会主義調和社会」というのは、「人を基本」とし、社会の各分野の「全面的な発展」で、さらに社会の各分野が協調した「持続可能な発展」観である。その目的は、政治、経済、文化、生態環境及び官僚の腐敗と民族の対立などの社会の各分野における格差を是正することを目指すものである。その後、2006年の第16期6中全会では、社会主義調和社会建設に関する討議がなされた。

胡錦濤の「科学的発展観」の時代は、社会主義現代化を新たな段階に移すため、新農村、新牧畜地域の建設及び新型城鎮化建設<sup>77</sup>を実現する政策が打ち出された（郭・周編 2017: 46）。「科学的発展観」は、のちに胡錦濤の政治キャッチフレーズとして定着した。

胡錦濤は、文化事業では、文化を国家の凝集力として強調してきた。胡錦濤は2008年の「全国宣伝思想における会議」でこのように発言した（中共中央宣伝部 2012: 12-13）。

国家のソフト・パワーを強調し、国内においては民族の凝集力を向上させ、対外的には国家の親和力と影響力を向上することである。これは、国家の総合力を向上す

<sup>77</sup> 農民・労働者（工業雇用者）に都市戸籍を与え、都市戸籍保有者と同等の教育や社会保障などの基本的な公的サービスを提供する政策を指す。

る条件であり、我が国の平和的な発展の戦略である。また経済社会の発展における重要な柱でもある。

胡錦濤の述べる国家のソフト・パワーとは文化を指し、文化をもって民族の凝集力と総合力を向上させることを狙いとする。

## 2 内モンゴルの文化政策

中国共産党第16期中央委員会の影響を受け、内モンゴルでは、まず2002年10月14日に内モンゴル自治区共産党宣伝部が「民族文化大区」建設に関する座談会を開催した。この座談会では、当時の内モンゴル自治区共産党委員会の副書記であった陳光林が報告を行った。陳光林は報告において、江澤民の「三つの代表」の思想を基に内モンゴル自治区の文化事業を発展させ、先進的文化を宣伝し、内モンゴルを「民族文化大区」として建設する目標を掲げた（内モンゴル自治区党委宣伝部2015：85）。先進的文化とは、つまり江澤民の「三つの代表」の思想の一つである「中国の先進的文化の前進の方向を代表する」ことに由来する。

同年の11月22日に内モンゴル自治区共産党宣伝部にまた、「中国共産党第16期中央委員会の精神宣伝報道に関する意見（关于党的十六大精神宣传报道意见）」がなされた（内モンゴル自治区党委宣伝部2015：85）。この意見に関する具体的な内容が資料に掲載されていないが、タイトルから胡錦濤が進める江澤民の「三つの代表」と「小康社会」について宣伝したと考えられる。

2003年6月、内モンゴル自治区共産党委員会が「三つの代表の重要思想を勉強する綱領の通知（「三个代表」重要思想学习纲要的通知）」を發布し、内モンゴルの各地域が中国共産党第16期中央委員会の会議内容を勉強することを要求した（内モンゴル自治区党委宣伝部2015：85）。

さらに2003年8月26日に内モンゴル自治区政府に「文化事業と文化産業の発展に関する若干政策の通知（关于支持文化事业和文化产业发展若干政策的通知）」が發布された。この通知には、文化事業に対する財政支援の強化、文化インフラ建設のレベルアップ、文化産業化の支援、文化事業に関する税の優遇政策、文化事業の料金徴収の標準化、文化資金に関する制度の制定、文化事業への寄付活動の支援など7つの方面から文化事業に関する政策が決定されたという（内モンゴル自治区党委宣伝部2015：85-86）。

同年11月11日～12日に、内モンゴル自治区共産党委員会及び政府は「文化発展の加速化に関する決定（关于进一步加快文化发展的决定）」を發布し、文化発展における思想、基本原則、事業方針、総目標を規定した。さらに、同年の11月21日に、内モンゴル自治区共産党委員会と政府は自治区の文化事業に関する会議を開き、内モンゴルに「民族文化大区」を建設する方針を決めた。この会議は内モンゴルの文化史における一番規模の大きな会議であったという。また、同年の12月18日に内モンゴル自治区人民政府は「内モンゴル自治区の民族文化大区建設の綱領（内モンゴル自治区民族

文化大区建设纲要〔试行〕」を發布し、自治区を「民族文化大区」に建設する目標や任務などを定めた（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 86）。

「民族文化大区」の目標は、「小康社会」の建設と経済社会の調和的な発展に合わせ、民族的特徴の強い文化や地域文化を強調し、人材、施設、文化体制及び文化市場、文化遺産、文化産業などを新たなレベルに達成させることである。具体的には 2010 年までに行う。その任務は、「九大文化プロジェクト（九大文化工程）」で、以下の 9 つのプロジェクトの実施である（内蒙古自治区党委宣传部 2004 : 28-42）。

- 1、人材育成プロジェクト
- 2、文化創作プロジェクト
- 3、基層の大衆文化プロジェクト
- 4、チームを組織するプロジェクト
- 5、草原文化の芸術ブランドのプロジェクト
- 6、文物の保護と開発と利用のプロジェクト
- 7、文化産業開発の重点プロジェクト
- 8、基礎施設の建設プロジェクト
- 9、文化交流プロジェクト

これらの政策下で、2004 年 12 月に内モンゴル自治区文聯の第 6 回代表大会が開かれた。大会では、「文芸事業の創作を新たなレベルに達成し、民族文化大区の建設に貢献する」というテーマで報告が行われた（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 87）。

また調和社会について、2005 年 4 月、内モンゴル自治区共産党委員会の宣伝部に「社会主義調和社会の建設に関する宣伝と報道の意見（关于构建社会主义和谐社会的宣传报道意见）」が發布され、各地域の宣伝部やメディア部に調和社会に関する宣伝の義務が決定された。

さらに、同年の 12 月に自治区政府は「ソム・郷鎮の文化ステージの建設プロジェクト（苏木乡镇文化站建设工程）」を実施し、2011 年末まで自治区のソム・郷鎮に 910 の文化ステージが創立された（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 88-90）。

また 2006 年 7 月に内モンゴル自治区共産党委員会の宣伝部らはシリンホト市に共産党中央、国務院決定の「社会主義の新農村の建設に関する若干意見（关于推进社会主义新农村的若干意见）」について座談会を開き、全自治区に新農村・新牧畜地域を建設する意見交換を行った。同年の 9 月に自治区政府には「中国共産党中央、国務院の文化体制の改革に関する若干意見（中共中央、国务院关于深化文化制度改革的若干意见）」についての会議が行われ、「小康社会」の建設や科学的発展観に基づき、自治区の文化事業や文化産業の体制の改革を決定した（内蒙古自治区党委宣传部 2015 : 91）。

こうした中、「草原文化の祭り」、「草原文化のシンポジウム」、「公共文化サービスの建設」、「文明村の表彰」、「イメージの草原」、「草原の書房」など様々な文化事業やプロジェクトが盛んになった。

### 3 内モンゴルの文化事業

内モンゴルにおける 2012 年の統計データでは、芸術歌舞団は 137 団体で、隊員（隊員）は 6,330 人である（賀 2019 : 372）。16 年前、江澤民時代であった 1996 年と比較すると、117 団体から 20 団体増え、5,613 人から 717 人増加した。この時期、ほかの文化事業についての統計データは見つかっていないため、中国少数民族自治区<sup>78</sup>の文化事業全体のデータをみてみたい。2006 年に中国少数民族自治区における文化事業は 7,423 余あり、これが 1979 年から 27 年で 3.75 倍増加したという。文化館が 631 余、文化ステージが 6,710 余、1979 年よりはそれぞれ 113 余と 4,686 余の増加という（張・他編 2009 : 8）。

2010 年に中国少数民族自治区における文化館は 576 余、文化ステージは 7,842 余である（恵・張編 2013 : 3）。このデータから 2000 年代に入り中国少数民族自治区では、文化館は減少し、代わりに文化ステージが普及していることが分かる。

### 4 オンニュート旗のウラーンムチルと他の文化事業

オンニュート旗ウラーンムチルはこの時期、国家政策やオンニュート旗政府の指示のもとに行ったさまざまな活動について文献資料から検討する。

2002 年、内モンゴル自治区の元主席で、中国全国人民代表大会の常務委員会の副委員長ブヘ（ウラーンフーの息子）は北京でオンニュート旗ウラーンムチルの隊長メディグと会い、ウラーンムチルに「民族芸術を発展し、先進文化を宣伝する」という揮毫を贈った。同年、7 月 19 日、オンニュート旗政府はオンニュート旗ウラーンムチル成立の 45 周年を祝うイベントを開催し、中国共産党中央宣伝部や国家文化部などさまざまな機構から多数の共産党幹部らが参加した（劉・張 2012 : 100）。

2003 年、春に中国でサーズウイルス（SARS）が流行し、オンニュート旗ウラーンムチルは 4 月 23 日～6 月 5 日まですべての活動を停止している。活動再開後、医者や讃えた「忘れない貴方の微笑み」や「一番可愛い人」、「天使賛」など作品を制作した。

2004 年 5 月、毛澤東の 1942 年 5 月の延安における「文芸講話」の記念と赤峰市で内モンゴル・ウラーンムチル学会の分会成立を祝うために革命を讃えた草創期の演目を中心に公演を行った（劉・張 2012 : 101-103）。

2005 年 1 月末、オンニュート旗ウラーンムチルはオンニュート旗人民政府の要請を受け、はじめて旗で「春祭り連携公演会（春節聯歡晩会）」を主催した。同年 6 月、赤峰市財政局はオンニュート旗ウラーンムチルに設備更新費として 20 万元援助した。オンニュート旗ウラーンムチルは、9 月に 12 名隊員が深圳市に派遣し公演を行った。11 月に、オンニュート旗ウラーンムチルは社会人向けに芸術訓練班を設けた（劉・張 2012 : 104）。

---

<sup>78</sup> 中国少数民族自治区とは、内モンゴル自治区（内蒙古自治区）、広西チワン族自治区（広西壮族自治区）、チベット自治区（西藏自治区）、新疆ウイグル自治区（新疆維吾爾自治区）、寧夏回族自治区を指す。

2007年、内モンゴル自治区成立60周年とウラナムチル成立50周年を祝う「内モンゴル自治区第4回ウラナムチル芸術祭」がシリントグ盟のスンド右旗に行われ、オンニュート旗ウラナムチルが準優秀賞で表彰された（劉・張2012：109）。

2009年、赤峰市宣伝部、赤峰市文化局の主催した中国成立60周年を祝うコンクール公演会に参加し優秀賞で表彰された（劉・張2012：113）。

2010年4月、青海省玉樹チベット自治州に地震が発生し、オンニュート旗ウラナムチルは、歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」、「大愛と大善の大中国」、「満足だから楽しい」など作品を制作し、オンニュート旗の広場で公演し、募金活動を行った（劉・張2012：113-114）。

2011年、中国共産党の成立90周年を機に、オンニュート旗ウラナムチルはオンニュート旗の政務局、交通運輸局、病院、小学校などさまざまな機構に文芸演目を指導した。同年、『オンニュート旗ウラナムチル誌』を編集するため、オンニュート旗の文化・体育・広報・テレビ局<sup>79</sup>の副会長はオンニュート旗ウラナムチルの定年退職の隊員を集めて、何度も座談会を開いた（劉・張2012：116-117）。

2012年、内モンゴル自治区ウラナムチル協会、内モンゴル自治区文化庁、中国共産党中央事務室、江蘇テレビ局、赤峰市ウラナムチル協会、赤峰市文化局が協力し、「小康中国（ゆとりのある社会の中国）」というタイトルのドラマ制作プロジェクトにオンニュート旗ウラナムチルが参加した。

この時期、オンニュート旗における他文化事業に関する資料は見つかっておらず、詳細は不明である。ただし、フィールド調査からこの時期は、オンニュート旗の定年退職者により組織された「老幹部老年芸術団」、「梅林組合（バンド）」など非政府組織の団体も組織されていたことが明らかとなっている。

この時代はウラナムチルにおいて、創新期に当たる。以下はこの時期のオンニュート旗ウラナムチルに制作された上演作品を分析する。

## 5 創新期の上演作品

赤峰市文化新聞出版広電局編の『ウラナムチル-赤峰市60年図誌』では、1997年～現在までは創新期<sup>80</sup>と時期区分した（郭・周編2017：29-57）。本論では、2012年以降、さらに詳細に分析するため、2002年～2012年を区切りに創新期とした。

表8は創新期における上演作品のリストである。

表8 創新期（2002-2012年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
02	ダンス	ジャスミン	オリジナル	振付：ハス図雅（隊員：モンゴル人）
		天国	オリジナル	振付：ハス図雅
		緑の春	オリジナル	振付：ハス図雅
03	歌	忘れない貴方の微笑み	オリジナル	作詞：王玉民（?）

<sup>79</sup> 本来はそれぞれの異なる部門であるが、中国では、近い部門をまとめて一つの局として管理し、新たな部門として設ける。

<sup>80</sup> 社会主義文化の強い国を作る政策により新たな作品が強調されたことをいう。

				作曲：張成富
		一番可愛い人	オリジナル	作詞・作曲：張成富
	サクセス演奏	ゴーイング・ホーム	導入	作曲：ケニー・G ウォルター・アフアナシェフ
	ダンス	モンゴル族の結婚式	オリジナル	振付：ハス図雅
		天使賛	オリジナル	振付：ハス図雅
		草原の春	オリジナル	振付：ハス図雅
04	歌	辺境兵士を見る	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル
		服を洗う	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル
	ダンス	吉祥の草原	?	?
05	歌	お祝い	?	?
		チンギス・ハーン	?	?
	馬頭琴曲	草原は北京と連なる	導入	作曲：チ・ボラグ (団員：モンゴル人)
		初めて昇った太陽	導入	作曲：チ・ボラグ
	ダンス	草原を祝福する	オリジナル	振付：ハス図雅 ボラグ (隊員：モンゴル人)
		キタイの狩人	オリジナル	振付：李玉珍 (隊員：漢人) ハス図雅 作曲：宋滙林 (隊員：漢人)
		鳳凰の踊りと龍の声	オリジナル	振付：ハス図雅 作曲：宋滙林
		赤い刺繍の踊り	オリジナル	振付：斯琴巴特爾 (隊員：モンゴル人)
		草原人民の挨拶	オリジナル	振付：李玉珍 ハス図雅
		扇子踊り	オリジナル	振付：李玉珍 ハス図雅
06	ダンス	少女のカバン	オリジナル	振付：陳玉華 (文化館職員：漢人) ハス図雅 作曲：宋滙林
		母乳を飲める歌	オリジナル	振付：ハス図雅 作曲：宋滙林
		横立ちの兄嫁	改変	振付：ハス図雅 作曲：宋滙林
		吉祥の三つの宝	改変	振付：ハス図雅 作詞：布林・バヤル (歌手：モンゴル人) 作曲：布林・バヤル
		喜び祝う	オリジナル	振付：ハス図雅
		帰る	オリジナル	振付：ハス図雅 作曲：宋滙林
07	ダンス	マランホワー	オリジナル	振付：ハス図雅
08	ダンス	八匹馬の賛	オリジナル	振付：鮑青海 (隊員：モンゴル人) 巴特爾 (隊員：モンゴル人) 作曲：多建平 (?)
	歌	四渡の赤水に強い兵士がいる	導入	作詞：賀緑汀 (音楽家：漢人) 作曲：賀緑汀
		内モンゴルを喝采する	導入	作詞：孫義勇 (会社員：漢人) 作曲：張宏光 (院長：朝鮮人)
09	ダンス	刺繍	オリジナル	振付：扎那 (内モンゴル歌舞団：モンゴル人) 作曲：宋滙林
10	歌	兄弟姉妹と一緒に暮らす	オリジナル	作詞：秦錦屏 (作家：漢人) 作曲：烏恩 (隊員：モンゴル人)
		大愛と大善の大中国	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル
		満足だから楽しい	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル

		美しい	オリジナル	作詞：色・烏日吉巴音（教師：モンゴル人） 作曲：烏恩（隊員：モンゴル人）
		私の根は草原にある	導入	作詞：催富（広東省作家協会：モンゴル人） 作曲：趙金宝（団員：モンゴル人）
	マジック	変身する人間	導入	パフォーマンス：徐国梁（赤峰市群衆芸術館：漢人） 張燕（赤峰市群衆芸術館：漢人）
		刀剣が通る身体	導入	パフォーマンス：同上
	ダンス	心の声	オリジナル	振付：巴特爾 作曲：岱欽（？：モンゴル人）
		祈願	オリジナル	振付：哈斯図雅 巴特爾 作曲：岱欽
11	歌	復興に向かう	導入	歌詞：李維福（教育部：漢人） 作曲：印青（中共政治部歌舞団：漢人）
	快板	タバコ製造者の心は共産党に向かう	導入	作詞：タバコ製造会社 指導：盧艷萍（隊員：漢人） 卒武華（隊員：漢人）
	ダンス	鷹（生命の歌）	改変	振付：哈斯図雅、 巴特爾
		草原の娘	オリジナル	オンニユート旗ウラーンムチル
		太陽の頌	オリジナル	振付：哈斯図雅
12	歌	オンニユートは私の可愛い故郷	オリジナル	作詞：張濤（退職者：漢人） 郭秀英（退職者：漢人） 作曲：張成富（隊員：漢人）
		草原は我が美しい故郷	オリジナル	作詞：宝星（？） 作曲：張成富
		私の馬頭琴	オリジナル	作詞：白立平（団員：満洲人） 作曲：烏恩
		遠方の親戚	？	？
		歌おう我が祖国	オリジナル	作詞：孫岫嶺（？：漢人） 作曲：張成富
		龍の故郷の歌	オリジナル	作詞：高明朱（？） 張濤 作曲：張成富
	合奏曲	白塔	導入	作曲：岱欽
		黒い駿馬	導入	作曲：岱欽
	ダンス	お母さん、私が行くよ	改変	？
	馬頭琴曲	遠征	？	？

出典：『オンニユート旗ウラーンムチル誌』（2012）により筆者作成

表8の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。演目の種類にはダンス、歌、サックス演奏、馬頭琴曲、マジック、快板、合奏曲などである。新たに増えたのは、サックス演奏、馬頭琴曲、マジック、快板と合奏曲である。サックス演奏はサックス楽器を演奏することを指す。馬頭琴曲は馬頭琴による演奏を指す。マジックはマジックをするパフォーマンス術を指す。

快板は、竹板を鳴らしながら語り謡う漢人の民間芸能である（愛知大学中日大辞典編纂所2010：981）。合奏曲は、さまざまな楽器の演奏である。

由来にはオリジナル、導入、改変、由来不明の4つがある。

## 5.1 創新时期の各年の上演作品

### (1) 2002 年の上演作品

2002 年に記録された上演作品は 3 作品で、ダンス「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」である。

ダンス「ジャスミン」は、江蘇省の民歌（民謡）「ジャスミン」をもとに作ったダンスである。人生と花を連想し、花咲く人生を描いたものである。民歌の制作者は不明である。ダンス「ジャスミン」の振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅である。ハス図雅は 1983 年から 2012 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。ハス図雅は回復期の 1984 年にダンス「延安を愛する」を振付している。

ダンス「天国」は、歌「天国（天堂）」に振付したダンスである。歌の作詞・作曲はモンゴル人の歌手テンゲル（騰格爾）である。歌は草原の美しさと静かな生活、羊の群れ、山水を賛美し、放牧する少女を描いた。同時に故郷への思いを描いた作品である。テンゲルは 1960 年生まれのモンゴル人男性で、音楽家であるとともに俳優である。1997 年に歌「天国」を発表し、中国で有名になった。ダンスの振付は「ジャスミン」と同じ隊員ハス図雅である。

ダンス「緑の春」は草原の春の様子を讃えた作品である。春の緑と川の音が詩的で、人々に希望を与える目的で制作した作品であるという（ア氏 2020.2.17）。振付は「ジャスミン」、「天国」と同じ隊員ハス図雅である。作曲は不明である。

### (2) 2003 年の上演作品

2003 年に記録された作品 6 作品で、歌「忘れない貴方の微笑み」、「一番可愛い人」とサックス演奏「ゴーイング・ホーム」、ダンス「モンゴル族の結婚式」、「天使賛」、「草原の春」である。

歌「忘れない貴方の微笑み」は、医者や看護師を讃えた作品である。当時、中国ではサーズ (SARS) が流行していた。サーズの中、最前線で働いていた医療従事者を忘れないという歌である（イ氏 2020.2.8）。作詞は王玉民で、作曲は張成富である。王玉民について所属と民族は不明である。張成富は漢人男性で、1971 年～2012 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

歌「一番可愛い人」もサーズで戦っていた医者や看護師を讃えた作品である（イ氏 2020.2.8）。作詞と作曲は「忘れない貴方の微笑み」と同じく隊員張成富である。

サックス「ゴーイング・ホーム」は、1989 年にアメリカのサックスミュージシャンのケニー・G とウォルター・アフアナシェフが作曲した。ウラーンムチルは 1980 年の後半からこうした歌舞演目を積極的に取り入れている。この曲は中国全土に広まった曲で、特に長距離バスや鉄道など交通機関で流されていた。演奏者はウラーンムチルの隊員であるが、誰かは不明である。

ダンス「モンゴル族の結婚式」は、モンゴルの伝統結婚儀礼を基に制作された作品

である（ア氏 2020.2.17）。振付は「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」と同じく隊員ハス図雅である。

ダンス「天使賛」は 2003 年のサーズで戦っていた医師のことを天使として讃えた踊りである（ア氏 2020.2.17）。振付は「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」、「モンゴル族の結婚式」と同じく隊員のハス図雅である。

ダンス「草原の春」は、草原に春が来て、雪が解け植物が繁茂し、花が咲き、動物や人間に喜びを与えたという内容である（ア氏 2020.2.17）。振付は、「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」、「モンゴル族の結婚式」、「天使賛」と同じく隊員ハス図雅である。

### (3) 2004 年の上演作品

2004 年に記録された演目は 3 作品で、歌「辺境兵士を見る」と「服を洗う」、ダンス「吉祥の草原」である。

歌「辺境兵士を見る」は、内容は不明である。タイトルから辺境地域にいる国防兵士の奉仕精神を讃えた作品であると考えられる。制作はオンニュート旗ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。

歌「服を洗う」は、共産党の解放軍の功労を讃えた作品である。解放軍が人民にとって救い星であるとし、人民は感謝の気持ちを表すために兵士の服を洗っている。この歌は、「辺境兵士を見る」と共にウラーンムチルの元々からあった演目である（劉・張編 2012 : 88）。作詞と作曲は不明である。この二つの演目は 1992 年にも上演されている。

ダンス「吉祥の草原」は内容不明である。この作品はオンニュート旗が初めて「龍鳳の文化旅行祭」を行ったことを祝うために制作されたという（劉・張 2012 : 103）。制作者は不明である。

### (4) 2005 年の上演作品

2005 年に記録された演目は 10 作品で、歌「お祝い」、「チンギス・ハーン」、馬頭琴曲「草原は北京と連なる」、「初めて昇った太陽」、ダンス「草原を祝福する」、「キタイの狩人」、「鳳凰の踊りと龍の声」、「赤い紬の踊り」、「草原人民の挨拶」、「扇子踊り」である。

歌「お祝い」は、オンニュート地域の鉦山の開鉦を祝いして制作された作品である（イ氏 2020.2.8）。制作者は不明である。

歌「チンギス・ハーン」は、内容不明である。タイトルからモンゴル帝国を築き上げた偉人チンギス・ハーンの実業を讃えた作品であると考えられる。制作者は不明である。

馬頭琴曲「草原は北京と連なる」は、モンゴル人は元朝時代に北京を大都とし、首都をおいていたことを讃えた作品である。この曲の作曲はチ・ボラグである。チ・ボラグは 1944 年生まれ、モンゴル人男性で、1958 年に内モンゴル実験劇団（のちに内モンゴル歌舞団に改名）に入り、現在は内モンゴル民族芸術劇院の副院長である。文

革中の 1968 年に内モンゴル人民革命党や民族分裂主義者として刑務所に入っていた。この曲の由来は「私が文革中牢獄の中で制作した作品である。モンゴル人は元朝時代から北京を大都とし、北京と距離を感じはしない。なぜ私を内モンゴル人民革命党とし、私が北京を裏切ったというのか」とサ氏は語っている（サ氏 2020.2.15）。チ・ボラグのこの曲をオンニュート旗ウラーンムチルが上演作品として導入した。演奏者は不明である。

馬頭琴曲「初めて昇った太陽」は、草原で朝一番に昇る太陽の静かで美しい動きを描いた作品である。この馬頭琴曲の作曲はチ・ボラグである。チ・ボラグが 1970 年代、文化大革命が終わる時、フルンボイル盟で制作した作品である。チ・ボラグがフルンボイル盟にいた時、ある日朝起きると、イミンという川に昇る太陽の赤い光に魅了されて嬉しく感動して即興で作曲した。サ氏は「こうして昇る美しい太陽をこれまでどこでも見てない。私がこの曲を即興で作った。メロディーはブリヤートのある民謡の基にアレンジして制作した」という（サ氏 2020.2.15）。この曲をオンニュート旗ウラーンムチルが導入した。演奏者は不明である。

ダンス「草原を祝福する」は、草原の安楽で穏やかな生活が永遠に続くことを祝福する内容であるという（ア氏 2020.2.17）。振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅とボラグである。ボラグはモンゴル人女性で 1983 年から 2012 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。

ダンス「キタイの狩人」は、1984 年に制作したダンス「ホジャの狩猟曲」を改名したものである。ダンスの名を改名した理由は、当時このダンスを制作する際、古代のモンゴル人を対象にモンゴル人の狩猟技術を讃えるためであった。しかし、その後「ホジャの狩猟曲」の由来である狩猟技術はモンゴル帝国時代のものではなく、キタイ人の遼朝（916～1125 年）時代のものであったことが分かり、「ホジャの狩猟曲」を「キタイの狩人」と改名した（ア氏 2020.7.13）。振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員李玉珍とハス図雅で、作曲は宋滙林である。李玉珍は草創期でダンス「草打ち歌」「羊毛を刈る」を振付している。李玉珍とハス図雅は回復期からダンス「緑葉の情け」、「運命」、「出征」を協力し振り付けている。宋滙林は漢人で赤峰市バーリン右旗ウラーンムチルの隊員である。

ダンス「鳳凰の踊りと龍の声」は、オンニュート旗のシンボルの龍を讃えた作品である。オンニュート旗で紅山文化期にある龍の形の玉が発見された。そのため、オンニュート旗は龍をシンボルにしている（ア氏 2020.2.17）。振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員ハス図雅で、作曲はダンス「キタイの狩人」を作曲した宋滙林である。

ダンス「赤い刺繍の踊り」は、新年を迎える人々の喜びを讃えた作品である。「オンニュート旗は刺繍が有名で、刺繍に関する文化が根強い。私はこの演目以外に最近、もう一つの刺繍に関する踊りを振付している」とオ氏は語った（オ氏 2018.8）。振付は斯琴巴特爾である。斯琴巴特爾は、モンゴル人男性で、1995 年からオンニュート旗ウラーンムチルで隊員として働いている。

ダンス「草原人民の挨拶」は、オンニユート旗を宣伝するため、観光客向けに制作した作品である。このダンスは大型広場舞踏として 600 人の学生が踊った（劉・張 2012：104）。大型広場舞踏の「広場舞踏」とは、中国で定年退職者を中心に広場で集まり、ダンスをすることをいう。大型広場舞踏は、少なくとも数百人の参加者がある。このダンスの詳細内容は不明である。振付はオンニユート旗ウランムチルであるが、詳細は不明である。

ダンス「扇子踊り」は、踊り子は扇子を使い、雉や孔雀の姿を模倣し、自由自在な生活や収穫を象徴したものである（ア氏 2020.7.13）。このダンスも大型広場舞踏として 600 人の学生が踊った（劉・張 2012：104）。振付はオンニユート旗ウランムチルであるが、詳細は不明である。

### (5) 2006 年の上演作品

2006 年に記録された演目は 6 作品で、ダンス「少女のカバン」、「母乳を飲める歌」、「横立ちの兄嫁」、「吉祥の三つの宝」、「喜び祝う」、「帰る」である。

ダンス「少女のカバン」は、モンゴルの少女が作ったカバン (*Qabtoyai*) が大変立派で数多くの青年男性を魅力したことを表現している。このカバンは誰でも欲しいと考え、争いを始めたところ、少女自らが自分の好きな青年に渡すという物語である（ア氏 2020.2.17）。振付は陳玉華とハス図雅で、作曲はダンス「キタイの狩人」を作曲した宋滙林である。ハス図雅は 1997 年のダンス「香港の帰還」と「綺麗な故郷のオンニユート」及び「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」、「モンゴル族の結婚式」を振付している。陳玉華は漢人でオンニユート旗文化館職員である。

ダンス「母乳を飲める歌」は、仔羊に乳をのませる歌を基に制作した作品で、モンゴル人の家畜を養う技術を讃えたものである（ア氏 2020.2.10）。振付は前作品と同じくハス図雅で、作曲も前作品と同じく宋滙林である。

ダンス「横立ちの兄嫁」は、青年男女の恋愛物語である。具体的には、青年男性が恋愛相手の両親に結婚が反対され、結婚できなかった。女性は両親に強制的にお金持ちの男性と結婚させられた。女性と結婚できなかった青年が 2 人の結婚式に参加し、女性を両親の家から出られないように阻止したことが村人を感動させたという物語である。モンゴル結婚式における伝統文化に基づいて作ったものである（ア氏 2020.2.10）。振付と作曲は、前作品と同じくハス図雅と宋滙林である。

ダンス「吉祥の三つの宝」は、歌「吉祥の三つの宝（吉祥三宝）」をもとに制作されたダンスである。歌の内容は自然を大切にすることと家族を大事にすることを表現したものである。歌の作詞と作曲はモンゴル人の歌手布林・バヤルである。布林・バヤル（1960-2018 年）は 2005 年に「吉祥三宝」を制作し、有名になった。ダンスの振付はハス図雅である。

ダンス「喜び祝う」は、1997 年に制作された作品である。当時、香港がイギリスから中国へ返還された。この年は、また内モンゴル自治区の成立 50 周年でもある。ウランムチルはこれを記念して「喜び祝う」を制作した（イ氏 2020.2.8）。振付はハス

図雅である。作曲は不明である。

ダンス「帰る」は、一人の牧畜民青年が都会で労働収入を稼ぎ、実家に戻ったストーリーに基づいて制作した作品である（ア氏 2020.2.17）。振付はハス図雅で、作曲は宋滙林である。

#### (6) 2007 年の上演作品

2007 年に記録された演目は 1 作品のみで、ダンス「マランホワー」である。

「マランホワー」は、アヤメ科・アヤメ属のアイリスである。ア氏によると、この花は「私が小さいころ放牧していた時、草原の当たるところまで広がっていたものが現在はあまり見当たらない。環境問題と深く関わっているだろう。当時はこの花をみて力と喜びをもらっていた。この花は根が強い。水がないところでも咲いたりする。この花の性質から学ぶことが多い」と作品を制作した意図について語った（ア氏 2020.2.17）。ダンスの振付はハス図雅である。作曲は不明である。

#### (7) 2008 年の上演作品

2008 年に記録された演目は 3 作品で、ダンス「八匹馬の賛」と歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」と「内モンゴルを喝采する」である。

ダンス「八匹馬の賛」は、漢人に人気な八匹馬の図案を基に制作された作品である。その内容は馬を讃えたものである（ア氏 2020.2.17）。振付は鮑青海と巴特爾である。鮑青海はモンゴル人男性で、1995 年から 1998 年まで、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。鮑青海は、この時点でウラーンムチルを離れながら、ウラーンムチルの活動に携わっていた。巴特爾の全名称は斯琴巴特爾と言い、モンゴル人男性で、1995 年からオンニュート旗ウラーンムチルで隊員として働いている。作曲は多建平である。多建平について詳細は不明である。

歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」は、紅軍（中国人民解放軍の前身）賛歌である。その内容は、紅軍がさまざまな苦難を乗り越え長征することができたが、それは毛澤東の正しい指導によるものであると讃える作品である。長征とは 1934 年から 1936 年にかけて、中華ソビエト共和国の「首都」江西省瑞金から陝西省北部まで、紅軍が国民党軍と戦闘を交えながら 1 万 2500 キロメートル（2 万 5 千華里という）を歩いて移動した遠征のことを指す。作詞と作曲は賀緑汀である。賀緑汀（1903-1999 年）は音楽家で教育家である。上海音楽学院の院長や中国音楽協会の副主席などを歴任している。

歌「内モンゴルを喝采する」は、内モンゴルの発展を讃えた歌である。この歌では、新世紀における内モンゴルの発展は素晴らしいと讃え、各民族が団結し、内モンゴルを祝福するという共産党政策を讃えた歌である。この歌は、2002 年に制作され、2003 年の内モンゴル・テレビ局の新年会（春節晚会）にて披露されている。作詞は孫義勇で作曲は張宏光である。孫義勇は漢人男性で作詞・作曲家として中国人民解放軍の総政治部文工団を経て、現在は北京の勇者善歌文化メディア会社で働いている。張宏光

は朝鮮人の男性で、作曲家である。現在は北京电影学院の中国电影音楽研究院院長である。2人の生年は不明である。

#### (8) 2009 年の上演作品

2009年に記録された演目は1作品のみで、ダンス「刺繍」である。

ダンス「刺繍」は、オンニュート旗は、刺繍が有名なため、刺繍の技術を讃えたダンスである。複数の舞者が長いスカーフを持ち表現する（ア氏 2020.2.17）。振付は扎那で、作曲はダンス「キタイの狩人」を作曲した宋滙林である。扎那は内モンゴル歌舞団の団員で、名前からモンゴル人と考えられるが、ほか詳細は不明である。

#### (9) 2010 年の上演作品

2010年に記録された演目は9作品で、歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」、「大愛と大善の大中国」、「満足だから楽しい」、「美しい」、「私の根は草原にある」、マジック「変身する人間」、「刀剣が通る身体」、ダンス「心の声」、「祈願」である。

歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」は災害支援の歌である。2010年4月に青海省玉樹チベット自治州で地震が起こり、大きな災害をもたらした。歌の内容は被災者に対する文芸界からの慰めを描いたものである。その主旨は歌を通し、被災者を応援する気持ちである（劉・張 2012 : 43）。作詞は秦錦屏で、作曲は烏恩（呉恩・ウエン）である。秦錦屏は漢人の作家で、中国詩歌学会の理事である。烏恩は1969年生まれのモンゴル人男性で、1987年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員として参加し、2012年にウラーンムチルの隊長になっている。

歌「大愛と大善の大中国」と「満足だから楽しい」は、モンゴルと漢民族の団結、中国の発展、人民の豊かな生活を讃えた作品である（劉・張 2012 : 114）。この2つの歌の制作者はオンニュート旗ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。

歌「美しい」は、モンゴル少女の素朴な性格を描いた作品である。作詞は色・烏日吉巴音である。彼はモンゴル人男性で、オンニュート旗中学校のモンゴル語教師である。作詞者の色・烏日吉巴音がシリントール盟で詩のコンクールに参加する際、駅でモンゴル少女に迎えられ、その美しさと素朴な性格に魅了されて作詞した（劉・張 2012 : 43）。作曲は歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」を作曲した烏恩である。

歌「私の根は草原にある」は、モンゴル人が故郷を懐かしく思い制作した作品である。歌詞はモンゴル人の根は草原にあり、どこに行っても草原が一番美しくて忘れられないことを描いている。作詞は催富で、作曲は趙金宝である。催富は1952年生まれのモンゴル人男性で、出身は吉林省松原市（元郭爾羅斯モンゴル族自治州）である。モンゴル名はテムルバガナという。現在は広東省作家協会の会員である。趙金宝は1962年生まれのモンゴル人男性で、郭爾羅斯歌舞団の副団長を務めている。

マジック「変身する人間」は、人間を木箱に入れて変身させるマジックである。このマジックは赤峰市群衆（大衆）芸術館の徐国梁と張燕の制作である。オンニュート旗ウラーンムチルは2人からこのマジックを導入し演じた（劉・張 2012 : 114）。徐国

梁と張燕に関するほか詳細は不明である。演技者について不明である。

マジック「刀剣が通る身体」は、箱の中の人間を刀で切り離す演技である。このマジックは同様赤峰市群衆（大衆）芸術館の徐国梁と張燕の制作である。演技者について不明である。

ダンス「心の声」は、親子の感情を描いた作品で、生活が貧しく息子が出稼ぎに出かけることになり、親と会えなくて悲しく思う心を描写した作品である（ア氏 2020.2.17）。振付は2008年のダンス「八匹馬の賛」を振付した巴特爾で、作曲は岱欽（ダイチン）である。岱欽はモンゴル人でシリンゴル盟出身の音楽制作者である（劉・張 2012：116）が、所属は不明である。

ダンス「祈願」は、牧畜民の生活や生業が順調であることをお祈り、将来的に健康で豊かになることを願って制作された作品である（ア氏 2020.2.17）。振付はハス図雅と巴特爾で、作曲はダンス「心の声」を作曲した岱欽である。

#### （10）2011 年の上演作品

2011年に記録された演目5作品で、歌「復興に向かう」、快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」、ダンス「鷹」、「草原の娘」、「太陽の頌」である。

歌「復興に向かう」は、中国の経済的かつ文化的な繁栄を讃えた作品である。この歌は中華人民共和国が成立60周年を祝って2009年に制作された。作詞は李維福で、作曲は印青である。李維福は漢人男性で深圳市出身である。現在は教育部の管理の下である『中国情報技術教育』雑誌社の社長を務めている。生年は不明である。印青は1954年生まれの漢人男性で北京市の出身である。現在は中国共産党中央軍事委員会の政治工作部歌舞団の団長を務めている。

快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」は、煙草会社の社員が共産党に謝意を表すために制作された作品である。つまり、煙草会社が共産党のお陰で順調に経営されているという主旨の作品である（ア氏 2020.2.17）。作詞はタバコ製造会社で、指導は盧艷萍と卒武華で、演者は不明である。タバコ製造会社とはオンニュート旗のタバコ製造会社を指す。盧艷萍と卒武華の2人は漢人女性で、2007年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員として働いている。

ダンス「鷹」は、2000年の舞劇「生命の歌」の別名である。舞劇「生命の歌」をダンスに改変した作品である（ア氏 2020.2.17）。内容は草原の鷹を描いた作品で、このダンスでは、卵から生まれた小鷹が成鷹まで成長した過程を表現している。草原では鷹が多かったが、近年は環境が悪化し、鷹は少なくなっている。ひとえに環境の保護意識を高めるために作ったという。制作者は内モンゴル直属ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。振付はダンス「祈願」を振付したハス図雅と巴特爾である。

ダンス「草原の娘」は、オンニュート旗ウラーンムチルが制作した（劉・張 2012：118）が、内容は不明である。タイトルから草原の少女の勤勉さや優しさを讃えた作品であろう。具体的な制作者の詳細は不明である。

ダンス「太陽の頌」は、中国共産党を太陽と例えて讃えた作品である。この作品は

中国共産党が建党 90 周年を祝うために制作された（ア氏 2020.2.17）。中国共産党は 1921 年 7 月に組織された。2011 年は中国共産党の建党 90 周年である。振付は哈斯図雅である。

#### （11）2012 年の上演作品

2012 年に記録された演目は 10 作品で、歌「オンニュートは私の可愛い故郷」、「草原は我が美しい故郷」、「私の馬頭琴」、「遠方の親戚」、「歌おう我が祖国」、「龍の故郷の歌」、合奏曲「白塔」、「黒い駿馬」、ダンス「お母さん、私が行くよ」、馬頭琴曲「遠征」である。

歌「オンニュートは私の可愛い故郷」は、オンニュート地域を賛美した作品である。歌詞は、オンニュートは中華文明が発見された地域で、紅山文化が栄えた地域であることと、山川が豊富で、响水の滝が有名であるという内容である。紅山文化とは、赤峰市オンニュート旗で、1935 年に紅山遺跡が発見され、考古学者により 1954 年に紅山文化と命名されたことに由来する。さらに 1971 年に大量の C 型の龍の形に似た玉が発見され、中国の玉に関する彫刻文化発祥の地と認められた。歌の作詞は張涛と郭秀英で、作曲は張成富である。張涛と郭秀英は夫婦で、張涛はオンニュート旗文化館を定年退職し、郭秀英はオンニュート旗図書館を定年退職した。2 人は漢人である。張成富は漢人男性で、1971 年～2012 年までオンニュート旗ウランムチルの隊員である。

歌「草原は我が美しい故郷」は、草原にある羊、モンゴル・ゲル、花、湖など自然環境に溢れた豊かさを讃えた作品である（ア氏 2020.2.17）。この歌の作詞は宝星で、作曲は歌「オンニュートは私の可愛い故郷」を作曲した張成富である。宝星について詳細は不明である。

歌「私の馬頭琴」は、馬頭琴はモンゴル人にとって本や道のように大切な存在であると褒め讃えた作品である。作詞は白立平で、作曲は烏恩である。白立平は 1958 年生まれの満洲人男性で、赤峰市民族歌舞団の副団長を務めている。

歌「遠方の親戚」は、遠いところに出かけた息子と娘が長い歳月を経て、親のことを懐かしく思い歌った歌である（ア氏 2020.2.17）。この歌の制作者の詳細は不明である。

ダンス「お母さん、私が行くよ」は、歌「遠方の親戚」を改変して制作された作品である（ア氏 2020.2.17）。ダンスの内容は、歌「遠方の親戚」と同じものである。制作者は不明である。

馬頭琴曲「遠征」の内容と制作者は不明である。

歌「歌おう我が祖国」の内容は不明である。タイトルから祖国の中国の繁栄を讃えた作品であると考えられる。作詞は孫岫嶺で、作曲は歌「オンニュートは私の可愛い故郷」と歌「草原は我が美しい故郷」を作曲した張成富である。孫岫嶺について詳細は不明である。

歌「龍の故郷の歌」は、オンニュート地域のシンボルである龍をもとに制作された

作品である。オンニュート旗は龍の故郷である（エ氏 2020.2.17）。作詞は高明朱と歌「オンニュートは私の可愛い故郷」を作詞した張涛である。作曲は張成富である。高明朱について詳細不明である。

合奏曲「白塔」の内容は不明である。制作者はダンス「心の声」を作曲した岱欽である。

合奏曲「黒い駿馬」の内容は不明である。タイトルから馬を讃えた作品と考えられる。制作者は同じく岱欽である。

## 5.2 創新期の上演作品の総括

創新期におけるウラーンムチルの上演作品を以下の4つに着目して検討する。

### ① 上演作品数とその種類

資料から判明した作品は57作品である。その中では、ダンスが28作品、歌は20作品、馬頭琴曲が3作品、マジックが2作品、合奏曲が2作品、サクソ演奏が1作品、快板が1作品である。

上述の作品数と種類から創新期の作品は、回復期・改革期と同じように演目のジャンルが多様であることが分かる。この時期は、前期と比べ戯劇、ホルボー、話劇、評劇、オペラ、舞劇がなくなり、新たに馬頭琴曲、マジック、合奏曲、サクソ演奏が加わった。

### ② 上演作品の由来

上演作品の由来はオリジナルと導入と改変、及び由来不明の4種類がある。オリジナルには36作品があり、導入が12作品である。改変が4作品と由来不明は5作品である。

オリジナルはウラーンムチルの隊員が自ら積極的に作った作品である。草創期からあったものであるが、より活発に創作されている。オリジナル作品が60%を超えている。

導入では具体的に、2003年にサクソ演奏「ゴーイング・ホーム」を他国のアメリカから、2005年に内モンゴル歌舞劇団から馬頭琴曲「草原は北京と連なる」、「初めて上った太陽」を導入している。2008年の歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」と「内モンゴルに喝采する」は漢人が制作した作品を導入したものである。2010年の歌「私の根は草原にある」はモンゴル人創作の歌で、ほかの歌舞団から導入している。2010年のマジック「変身する人間」、「刀剣が通る身体」は赤峰市群衆芸術館から導入している。2011年の歌「復興に向かう」は中国共産党中央軍事委員会の政治工作部歌舞団から導入し、快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」をオンニュート旗タバコ製造会社から導入した。2012年の合奏曲は「白塔」と「黒い駿馬」はシリンゴル盟音楽制作者から導入した。

改変した作品は元々あった作品のジャンルを変える、或いは内容を変えるものであ

る。2006年のダンス「横立ちの兄嫁」はモンゴル民歌をダンスとしてアレンジした作品である。2006年のダンス「吉祥の三つの宝」は歌「吉祥の三つの宝」をダンスに改編した。2011年の「鷹」は2000年の舞劇「生命の歌」をダンスとして改編した。2012年のダンス「お母さん、私が行くよ」は歌「遠方の親戚」にダンスを付けたものである。

由来不明は制作者や導入元が不明の作品である。2004年のダンス「吉祥の草原」、2005年の歌「お祝い」と「チンギス・ハーン」及び2012年の歌「遠方の親戚」と馬頭琴曲「遠征する」である。

演目の導入や改変から、馬頭琴曲が多く導入されたことが分かった。またアメリカからサクソ演奏「ゴーイング・ホーム」が導入されたことはオンニユート旗ウラーンムチルにグローバル化の影響が広がったことが見て取れる。

### ③ 上演作品の制作者

制作者については、振付、作詞、作曲、指導、パフォーマンスに分類する。

#### (1) 振付

振付はハス図雅、ボラグ、李玉珍、斯琴巴特爾、陳玉華、鮑青海、扎那の7人である。この中で、ハス図雅、ボラグ、李玉珍、斯琴巴特爾、鮑青海の5人はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

ハス図雅はモンゴル人で、ダンス「ジャスミン」、「天国」など17の作品に振付をしている。

ボラグはモンゴル人で、ダンス「草原を祝福する」をハス図雅と共に振付している。

李玉珍は漢人で、2005年のダンス「キタイの狩人」と「草原人民の挨拶」、「扇子踊り」の3作品をハス図雅とともに振付している。

斯琴巴特爾はモンゴル人で、2005年のダンス「赤い紬の踊り」を振付している。2008年のダンス「八匹馬の賛」、2010年のダンス「心の声」、「祈願」の4作品を鮑青海とハス図雅とともに振付している。

鮑青海はモンゴル人で、ダンスの「八匹馬の賛」を巴特爾と共に振付している。

陳玉華は文化館退職者の漢人で、2006年ダンス「少女のカバン」をハス図雅と共に振付している。

扎那は内モンゴル歌舞団の所属で、2009年のダンス「刺繍」を振付している。

#### (2) 作詞

作詞は王玉民、張成富、布林・バヤル、賀緑汀、孫義勇、秦錦屏、色・烏日吉巴音、催富、李維福、張涛、郭秀英、宝星、白立平、孫岫嶺、高明朱の15人と1つの機構としてタバコ製造会社がある。この中で、張成富だけがオンニユート旗ウラーンムチルの所属である。

王玉民は所属不明で、2003年の歌「忘れない貴方の微笑み」を作詞している。

張成富は漢人で、2003年の歌「一番可愛人」を作詞・作曲している。

布林・バヤルはモンゴル人の歌手で、2006年のダンスの歌である「吉祥の三つの宝」を作詞・作曲している。

賀緑汀は漢人の音楽家で、2008年の歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」を作詞・作曲している。

孫義勇は漢人の会社員で、2008年の歌「内モンゴルに喝采する」を作詞している。

秦錦屏は漢人作家で、2010年の歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」を作詞している。

色・烏日吉巴音はオンニュート旗中学校の所属のモンゴル人で、2010年の歌「美しい」を作詞している。

催富はモンゴル人の作家で、2010年の歌「私の根は草原にある」を作詞している。

李維福は教育部の『中国情報技術教育』雑誌社所属の漢人で、2011年の歌「復興に向かう」を作詞している。

張涛はオンニュート旗文化館の定年退職者の漢人で、2012年の歌「オンニュートは私の可愛故郷」を郭秀英とともに作詞している。

郭秀英はオンニュート旗図書館の定年退職者の漢人で、2012年の歌「オンニュートは私の可愛故郷」を張涛とともに作詞している。

宝星は所属と民族は不明で、2012年の歌「草原は我が美しい故郷」を作詞している。

白立平は赤峰市民族歌舞団所属の満洲人で、2012年の歌「私の馬頭琴」を作詞している。

孫岫嶺は所属と民族は不明で、2012年の歌「歌う我が祖国」を作詞している。

高明朱は所属と民族は不明で、2012年の歌「龍の故郷の歌」を作詞している。

タバコ製造会社は、2011年の快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」を作詞している。

### (3) 作曲

作曲は張成富、ケニー・G、ウォルター・アフアナシェフ、チ・ボラグ、宋滙林、布林・バヤル、多建平、賀緑汀、張宏光、烏恩、趙金宝、岱欽、印青の13人である。張成富と烏恩のみオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

張成富は漢人で、歌「忘れない貴方の微笑み」、「一番可愛い人」など5つの作品を作曲している。

烏恩はモンゴル人で、2010年の歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」と「美しい」の2作品を作曲している。

ケニー・Gとウォルター・アフアナシェフはアメリカ人で、2003年のサックス演奏「ゴーイング・ホーム」(1989)を作曲している。

チ・ボラグはモンゴル人で、2005年の馬頭琴曲の「草原は北京と連なる」と「初めて上った太陽」を作曲している。

宋滙林はバーリン右旗ウラーンムチルのモンゴル人隊員で、ダンス「キタイの狩人」や「鳳凰の踊りと龍の声」など6作品に作曲している。

グリーン・バヤルはモンゴル人の歌手で、2006年のダンスの歌である「吉祥の三つの宝」を作詞・作曲している。

多建平は所属と民族は不明で、2008年のダンス「八匹馬の賛」を作曲している。

賀緑汀は漢人の音楽家で、2008年の歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」を作詞・作曲している。

張宏光は中国电影音楽研究院の所属の朝鮮人で、2008年の歌「内モンゴルに喝采する」を作曲している。

趙金宝は旧郭爾羅斯歌舞団所属のモンゴル人で、2010年の歌「私の根は草原にある」を作曲している。

岱欽はモンゴル人の音楽制作者で、2010年のダンス「心の声」と「祈願」、及び2012年の合奏曲「白塔」と「黒い駿馬」の4作品を作曲している。

印青は中国共産党中央軍事委員会の政治工作部歌舞団所属の漢人で、2011の歌「復興に向かう」を作曲している。

#### (4) 指導

指導は盧艷萍と卒武華の2人の漢人で、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。2人はタバコ製造会社の作った快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」を指導している。

#### (5) パフォーマンス

パフォーマンスは徐国梁と張燕の漢人の2人で、赤峰市群衆芸術館の職員である。2010年のマジック「変身する活人」、「刀剣が通る身体」を創作し、パフォーマンスしている。

#### まとめ

創新时期における上演作品の制作者と作品から、ウラーンムチルはオリジナル作品だけでなく、多くの人気作品を導入し、演じていたことが分かる。

#### ④ 上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。この時期は、政治性がない作品はほとんどである。例えば、2002年のダンス「ジャスミン」、「天国」、「緑の春」、2003年のサクソ演奏「ゴーイング・ホーム」、ダンス「モンゴル族の結婚式」、「草原の春」、2005年の「チンギス・ハーン」、馬頭琴曲「初めて上った太陽」、ダンス「草原を祝福する」、「キタイの狩人」、「鳳凰の踊りと龍の声」、2006年のダンス「少女のカバン」、「母乳を飲み進める歌」、「吉祥の三つの宝」、2007年のダンス「マランホワー」、2008年のダンス「八匹馬の賛」、2009年のダンス「刺繍」、2010年の歌「美しい」、「私の根は草原にある」、マジック「変身する人間」、「刀剣が通る身体」、2012年の「草原は我が綺麗な故郷」、「私の馬頭琴」、合奏曲「白塔」、「黒い駿馬」、ダンス

「お母さん、私が行くよ」である。以下はテーマごとに分類する。

共産党や兵士を讃えた作品として、2004年の歌「辺境兵士を見る」、「服を洗う」、2008年の歌「四渡の赤水に強い兵士がいる」、「内モンゴルに喝采する」、2011年の快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」と歌「太陽の頌」などがある。

社会主義社会とその政策、民族の団結を讃えた作品として、2010年の歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」、「大愛と大善の大中国」、2011年の歌「愛する中華」、「復興に向かう」、2012年の歌「歌おう我が祖国」などである。

続いて、政治性のない作品は以下である。

地域・故郷・草原を賛美した作品は、2002年のダンス「天国」、2004年のダンス「吉祥の草原」、2005年のダンス「草原を祝福する」、ダンス「鳳凰の踊りと龍の声」、2009年の歌「私の根は草原にある」、2011年のダンス「草原の娘」、2012年の歌「オンニュートは私の可愛い故郷」、「龍の故郷の歌」である。

医者 の 事業 を 讃 えた 作品 は、2003年の歌「一番可愛い人」、ダンス「天使賛」である。

季節・植物・動物・大地・自然を讃えた作品は、2002年のダンス「緑の春」、2003年のダンス「草原の春」、2007年のダンス「マランホワー」、2010年の歌「美しい」、ダンス「鷹（生命の歌）」、2012年の歌「草原は我が綺麗な故郷」である。

家庭・親戚・生活を讃えた作品として、2003年のダンス「モンゴル族の結婚式」、2006年のダンス「吉祥の三つの宝」、2010年のダンス「心の声」、2012年の歌「遠方の親戚」、ダンス「お母さん、私が帰るよ」である。

モンゴル歴史や伝統・文化・技術・民俗を賛美した作品として2005年の歌「チンギス・ハーン」、馬頭琴曲「初めて上った太陽」、2006年のダンス「少女のカバン」、「母乳を飲み進める歌」、2009年ダンス「刺繍」、2012年の歌「私の馬頭琴」である。

家畜を讃えた作品は2008年のダンス「八匹馬の賛」と2012年の合奏曲「黒い駿馬」である。

グローバル化の影響を受け、2003年にサックス演奏「ゴーイング・ホーム」が導入されている。

全く新たな演目ジャンルとして2010年にマジック「変身する人間」、「刀剣が通る身体」が導入された。

ウラーンムチルの上演作品のテーマとその変遷から、創新期における演目の特徴は、草創期・文革期・回復期・改革期の継続であるとともに、地域の特徴プラスモンゴル人の伝統・文化・技術・家庭・生活を表現した作品を多く制作するようになったことが分かる。

### 5.3 まとめ

上演作品については、演目の種類は増えている。馬頭琴演奏やサックス演奏のような楽器及びマジックなどの新たなプログラムが取り入れた。さらに、「チンギス・ハーン」や「キタイの狩人」など歴史人物や伝統文化の要素を積極的に取り入れている。

まさしく、胡錦濤の提唱する社会の各分野の「全面的」で、かつ「持続可能な発展」観によるものと考えられる。ウランムチルは胡錦濤の行ってきた政策を確実に実行している。また、サクソ演奏「ゴーイング・ホーム」はアメリカのサクソミュージシャンのケニー・G の作った曲であり、ウランムチルは 1980 年の後半からこうした作品を積極的に取り入れている。さらに、「綺麗な故郷のオンニュート」、「オンニュートは私の可愛故郷」というようにオンニュート旗の地域性を表現し、作品化している。モンゴル人の伝統・文化・歴史・民俗・技術を讃えた作品が注目される。

## 小結

本章は、胡錦濤の科学的発展観時代のウランムチル（2002 年～2012 年）の実態である。江澤民に続いて、胡錦濤時代に代わり、「科学的発展観」と「社会主義調和社会」の政策を打ち出した。つまり社会の各分野の「全面的」で、協調した「持続可能な発展」観による政策である。胡錦濤は社会主義現代化の発展を新たな段階に加速化するため、新農村、新牧畜地域の建設及び新型城鎮化建設という政策を行っている。一方で、文化を国家のソフト・パワーとして強調し、民族の凝集力をアップさせ、経済成長を図った。つまり、この時期はウランムチルの創新期である。

こうした政策を受け、内モンゴルでは、2002 年から「民族文化大区」建設に関する目標が決められた。さらに 2003 年に文化事業における財政支援が強化され、文化インフラの建設をレベルアップし、文化事業に関する税の優遇政策などが実施された。

2005 年に内モンゴル自治区政府には「ソム・郷鎮の文化ステージの建設プロジェクト」が実施された。こうした政策を受け、2011 年末まで自治区のソム・郷鎮に 910 の文化ステージが創立された。しかし、この時期の文化ステージの数は、江澤民時代の 1996 年の 1,500 余の文化ステージと比べ 590 余少ない。このことは、内モンゴルの文化事業が江澤民の社会主義市場経済政策に強く影響をうけ、長い時間をかけて回復していたことを示す。

2006 年から胡錦濤の新農村、新牧畜地域の建設及び新型城鎮化建設の政策を受け、内モンゴルでは、社会主義の新農村の建設に関する会議やシンポジウムなどが行われた。

この時期の内モンゴルにおける文化事業の統計データについて 2012 年の芸術歌舞団の数が 16 年前の 1996 年より 20 団体増え、職員は 717 人増加した。データから、胡錦濤時代の芸術歌舞団は江澤民時代より増加したことが分かった。また中国少数民族自治区における 2006 年と 2010 年のデータから文化館が 55 余（8.7%）減少し、文化ステージが 3,156 余（167.3%）増加したことが分かった。このことから、中国少数民族自治区において、文化館より文化ステージが重要視されていたことが窺える。

胡錦濤の科学的発展観時代はウランムチルの創新期で、オンニュート旗ウランムチルは胡錦濤の掲げていた「小康中国（ゆとりのある社会の中国）」というテーマでドラマを制作した。また、オンニュート旗ウランムチルには、内モンゴル自治区の元主席のブへは「民族芸術を発展し、先進文化を宣伝する」と揮毫を贈った。2003

年、春に中国でサーズウイルスが流行し、ウラーンムチルは医者を讃えた作品を中心に制作した。さらに、2010年に青海省玉樹チベット自治州に地震が発生し、ウラーンムチルは募金を行ったとともに被災者に向け、励ます演目を制作した。

この時期におけるオンニュート旗ウラーンムチルの上演作品から、改革期を続けて、演目の種類は馬頭琴演奏とサクソ演奏とマジックが増えた。演目のテーマとしては、草創期・文革期・回復期・改革期を続いて、共産党や兵士、社会主義社会思想、民族の団結などを讃えている。一方で、地域・故郷・生活などテーマの作品が増えた。さらに、これらにプラス、モンゴル歴史・伝統・文化・技術・民俗などテーマの作品も増えた。この時期は、ウラーンムチルの「創新期」(郭・周編 2017: 29-57)と言われているが、演目の内容には創新的なものは見つかっていない。演目のジャンルの的にはマジック、サクソ演奏が新しい演目ジャンルとして加わっている。

## 第九章 習近平の中国夢の新時代のウランムチル（2013年-現在）

本章では、まず習近平が打ち出した「中国夢」と「新時代の中国の特色ある社会主義」政策の実施経緯について記述する。次に、この政策下での内モンゴルの文化政策と文化事業を概観する。続いて、この時期におけるオンニュート旗ウランムチルの活動状況を述べる。その上で、オンニュート旗ウランムチルの上演作品を分析する。

### 1 「新時代の中国の特色ある社会主義」政策の実施

2012年、習近平は中国共産党第18期中央委員会第1回全体会議（第18期1中全会）において第五世代の中国共産党中央委員会の総書記に抜擢され、翌年の第12期全国人民代表大会第1回会議において国家主席・国家中央軍事委員会の主席になった。習近平は2012年「復興の道」という展覧会を見学した時の講話で以下のように述べている（中共中央文献研究室編2013：123）。

今は、皆が中国の夢を討論している。中華民族の復興を実現することは、中華民族の近代以来最大の夢である。

つまり「中華民族の偉大なる復興」である。第12期全国人民代表大会第1回会議でさらに中国の夢を以下のように強調した（中共中央文献研究室編2013：138-139）。

中国の夢を実現するには、中国の力を凝集する必要がある。それは、中国の各民族人民の大団結による力である。中国の夢は民族の夢であり、すべての中国人の夢である…。中国の夢は結局のところ人民の夢であり、人民の依頼によって実現するものであり、人民に絶えず福を作るべきだ。

習近平は2014年11月に中国北京市で開催されたアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会議で「一帯一路」を提唱した。中国からユーラシア大陸を經由してヨーロッパにつながる陸路を「一帯」とし、中国沿岸部から東南アジア、南アジア、アラビア半島、アフリカ東岸を結ぶ海路を「一路」とする二つの路線に沿った地域で、インフラ整備、貿易、資金の往来を促進する計画である。

習近平は、さらに2017年10月18日の中国共産党第十九次全国代表大会（以下は党の十九大）では、「中国の特色のある社会主義が新時代に進入した」と発言した。習近平の発言した「中国の特色のある社会主義が新時代に進入した」では、「立ち上がる（站起来）」、「豊かになる（富起来）」、「強くなる（強起来）」という三つの政治思想が強調された。以下は遠藤誉のまとめを参考に習近平の三つの政治思想について説明する<sup>81</sup>。

<sup>81</sup> 習近平「新時代の中国の特色ある社会主義」思想とは？—ヤフーニュースを参考（2021年9月6日閲覧）<https://news.yahoo.co.jp/byline/endohomare/20171022-00077240>

「立ち上がる」とは中華民族が長い屈辱の歴史（アヘン戦争以来の）から遂に立ち上がったことを意味し、それが 1949 年 10 月 1 日に新中国（中華人民共和国）が誕生した日を指す。この時代は毛澤東時代で、文化大革命（1966-1976 年）が終息までである。

「豊かになる」とは、1978 年 12 月に鄧小平が「改革開放」を唱えてから中国が豊かになり始めた時期を指す。つまり鄧小平時代である。

「強くなる」とは毛澤東時代と鄧小平時代も終わり、新たに中国が経済強国、軍事強国として「強国化」した時代である。

習近平の報告である「中国の特色のある社会主義が新時代に進入した」とは、つまり中国が強くなる「強国化」した時代である。この報告の中で、「豊かになる」鄧小平時代を江澤民時代、胡錦濤時代まで続け、「強くなる」のは、自らの時代であることを主張した。習近平のこの発言は中国共産党トップの政治キャッチフレーズとして普及した。このキャッチフレーズは、毛澤東思想、鄧小平理論、江澤民の「三つの代表」思想、胡錦濤の「科学的発展観」と同じように「習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想（習近平新時代中国特色社会主義思想）」と言われている。

文化事業において、習近平は 2014 年 10 月 15 日の文芸工作者の座談会に参加し、講話を行った。習近平の講話内容は以下のようなものである（中共中央文献研究室編 2016：198-202）。

「中華民族の偉大なる復興」を実現するためには、中華文化を繁栄させる必要がある。文芸工作者には社会主義の核心的な価値観を広める独特の機能がある。社会主義の核心的な価値観の根本的で永遠に守るべきものは愛国主義である。さらに共産党の指導は社会主義文芸発展の基本的な保証である。

習近平のこの講話を 2015 年に中国中央政府は「中共中央の社会主義文芸の繁栄発展に関する意見」という形で公文書として全国に配り学ばせた。

## 2 内モンゴルの文化政策

習近平の文芸に関する講話を受け、内モンゴル自治区政府の宣伝部は 2016 年に内モンゴルの文芸工作者に習近平の文芸講話を実施する通知（公文書）を下した。通知の内容はこのようなものである。

各旗県・市のウラーンムチルや、専門的な芸術団体は習近平総書記の文芸工作講話である「中共中央の社会主義文芸の繁栄発展に関する意見」を実施する。文芸団体は、習近平の講話内容をもとに演目を創作し、公演や奉土を行う。また自治区共

産党委員会及び政府の中心工作である「十カ全覆蓋」プロジェクト<sup>82</sup>や「内モンゴル自治区文化庁の2016年の事業計画」に沿って文化活動を行う。そのため、「草原文芸の毎日の公演－民衆向けの公演プロジェクト」を主旨に、具体的に「民衆向け公演を村の隅々にまで（惠民演出全覆蓋）」、「百の芸術団が千回に渡って公演する（百団千場下基层）」、「草原の音楽週末（草原音乐周末）」、「草原芝居公演の月（草原戏剧演出月）」、「内モンゴルの舞踊の四季祭り（四季内蒙古舞蹈季）」、「一带一路のウラーンムチル公演旅（一带一路-乌兰牧骑行）」という6つの公演プロジェクトを設ける。こうした活動を通じて、地域と都市と農村を協力させ、文化の発展を促す。習近平総書記の重要講話内容の精神を堅持し、「中国の夢」と「社会主義の核心的な価値観」を巡り活動を広めるべきである。

通知には、さらに民族文化の強い区域を建設することを促し、祖国の北疆では文化の繁栄した地域をつくるべきであると書かれている。この祖国の北疆とは、内モンゴル自治区を指している。

6つの公演プロジェクトである「民衆向け公演を村の隅々にまで」とは、「十カ全覆蓋」プロジェクトを宣伝し、内モンゴルのすべての芸術団体が農村、牧畜地域を主とし、1年に合わせて7,000回以上の公演を行い、1つの芸術団体が平均100回以上の公演を行うプロジェクトである。

「百の芸術団が千回に渡って公演する」とは、内モンゴルのすべての芸術団体が元旦から春祭り<sup>83</sup>まで、農村・牧畜地域の基層地域で合わせて1,000回以上の公演を行い、1つの芸術団体が平均10回以上の公演を行うプロジェクトである。

「草原の音楽週末」は、都市に直属する歌舞団が内モンゴル民族芸術劇院と各盟・市における文化局の指示とともに週末の時間を利用し、決められた場所に公演を行うことで、「草原の音楽週末」というブランドを立ち上げるプロジェクトである。

「草原芝居公演の月」とは、自治区政府が全区の歌舞団から優秀な演目を選び、内モンゴルの演芸連盟を組織し、1ヵ月間に巡回公演を行うプロジェクトである。

「内モンゴルの舞踊の四季祭り」とは、各盟・市の歌舞団がその地域の文化局の指導下で毎年、季節ごとに、一回優秀舞踊の公演を行うプロジェクトである。

「一带一路のウラーンムチル公演旅」とは、ウラーンムチルは国家の芸術基金の基で、「一带一路」の戦略とともに内モンゴルを宣伝し、「一带一路」地域に巡回公演を行うプロジェクトである。

---

<sup>82</sup> 2014年から内モンゴルに実施した郷村建設プロジェクトである。主に十カ項目を建設する事を指す。1.危険家屋を修繕する。2.飲み水を安全に使用する設備の設置である。3.郷村と町のインフラ整備の建設である。4.村に給電所を設置する。5.村に広報テレビ通信設備の設置である。6.寄宿舎の建設と安全改造である。7.郷村に標準化した衛生室の設置である。8.郷村に文化活動室の設置である。9.村民に利便なスーパーマーケットの設置である。10.農村、牧畜地域に長期的に住む人々の医療保険と社会保障を実現する。—中国人民のネットを参照（2016年12月9日閲覧）。  
<http://tv.people.com.cn/GB/28140/399095/>

<sup>83</sup> 中国で旧正月になると芸術歌舞団が連携し共演することを「春祭り連携公演会（春節連歡晚会）」という。歌舞団が旧正月の夜に行う公演のことをいう。

上述以外、鄧小平時代からあった公共文化プロジェクトとして文化ステージの創立は、「村々まで繋がる」（村村通）というスローガンとして再び強調され、内モンゴルの各地域に「中国民間文化芸術の村」の一環として「村の文化大院」が設置された。

以上の政策に続いて、さらに 2017 年 8 月、ウラーンムチル創立 60 周年を機にスニド右旗ウラーンムチルは習近平にウラーンムチルの活動に関する報告を行っている。ウラーンムチルが習近平の手紙の返信を受け取ったのは 2017 年 11 月 21 日という。以下は、その内容を中国語から翻訳したものである。

スニド右旗ウラーンムチルの隊員たちへ：あなた達の手紙からウラーンムチルの発展と党と人民に対する愛や事業に対する並々ならぬ熱心さが伝わってきて、たいへんうれしく思う。ウラーンムチルは全国文芸戦線の旗印である。第一ウラーンムチルがあなた達の故郷に誕生して、60 年以來、ウラーンムチル隊員は、風雪をものともせず、寒暑をいとわず、長くゴビや草原を転々跋涉して、天をテントと為し、地を舞台と為し、広大なる農牧民たちに歡樂と文明をもたらし、党の声と配慮を伝えてきた。ウラーンムチルが絶えず明らかにしてきたことは、人民は芸術を必要とし、芸術もまた人民を必要とすることである。新たな時代、あなたたちに希望することは、党の十九大精神を手本に、ウラーンムチルの優秀な伝統を継承し、生活の土壤に根差し、牧畜民大衆に奉仕する。新たな文芸を創作し、地域に根差した文芸創作にさらに努め、継承に値する優秀な作品を作り、永遠に草原の「紅色文芸輕騎兵」たらんことである。 習近平（自署）2017 年 11 月 21 日

習近平のウラーンムチルに送ったこの返信がウラーンムチルのブームを招いた。その例として、内モンゴル全区でウラーンムチルから学ぶ活動を行い、内モンゴル政府が各ウラーンムチルに、大型バスを一台送った。また、ウラーンムチルの活動が例年より多くなった。ウラーンムチルは、繁栄期を迎えた。

習近平の手紙の返信を受け、中国中央宣伝部は 2017 年 12 月 17 日に「習近平書記の重要指示精神である新時代の「紅色文芸輕騎兵」を勉強し、実施する通知」を全中国の文芸界の人々に下した<sup>84</sup>。この通知を受け、さらに各領域がウラーンムチルから学ぶことになった。

### 3 内モンゴルの文化事業

内モンゴルにおける 2018 年の統計データでは、芸術歌舞団は 226 団体で、団員（隊員）は 7,993 である（賀 2019 : 372）。これは胡錦濤時代の 2012 年の統計データより、89 団体が増加し、1,663 人の団員（隊員）が増加している。また文化館は 120 余で、1,918 人の職員である。文化ステージは 1,093 で、3,066 人の職員である（内モンゴル統計局 2019 : 353）。胡錦濤時代は、内モンゴルの文化館について統計データが見つかって

<sup>84</sup> 中国中央宣伝部の通知—中国人民共和国中央政府ネット（2021 年 9 月 19 日閲覧）  
[http://www.gov.cn/xinwen/2017-12/17/content\\_5247892.htm](http://www.gov.cn/xinwen/2017-12/17/content_5247892.htm)

いないため、比較できない。ただし、文化ステージは2011年の910余より、183余増加している。このように芸術歌舞団と文化ステージの統計データから習近平時代における内モンゴルの文化事業が繁栄している傾向が窺える。

#### 4 オンニュート旗ウランムチルと他の文化事業

オンニュート旗ウランムチルは習近平の時代、国家の政策やオンニュート旗政府の指示とともにさまざまな活動を行っている。大きなイベントとして2017年の内モンゴル自治区成立70周年、烏蘭牧旗成立60周年を記念する活動が注目される。内モンゴル自治区は1947年5月に成立し、2017年5月に70周年を迎えた。ウランムチルは1957年6月に成立し、2017年6月に60周年を迎えている。オンニュート旗ウランムチルはこの2つを記念するため、2017年6月25日と26日の2日間オンニュート旗演芸センターとオンニュート旗の海拉蘇鎮において、ウランムチル活動に関する報告公演を行った。この公演では、ウランムチルの定年退職の隊員も参加し、オンニュート旗ウランムチルの草創期から現在までの演目である「頂碗踊り」、「パトロールの夜」、「楊子榮が虎を打つ為に山に登った」、「緑葉の情け」、「刺繍」など演目を披露した<sup>85</sup>。

また同年の2017年11月21日、スニド旗ウランムチルは中国国家主席習近平の返信を受けたことで、2017年11月25日、元内モンゴル自治区主席（2016年6月～2021年8月）の布小林（ブへの娘）がオンニュート旗ウランムチルを訪問し、習近平がスニド右旗ウランムチルに返信した指示を実施するように強調した。布小林は、以下のように述べた<sup>86</sup>。

総書記がウランムチルを配慮していることは、ウランムチルは全国の文芸界の旗印であることを肯定しているのと等しいものだ。これは、総書記によるウランムチルに対する激励と希望である。今は新時代に入り、我々の国が力強くなっている。そのため、文芸事業も必ず強化しなければならない。みなには、文化に自信をもって、ウランムチルという旗印を新時代の新目標にして、もっと輝かしい成果を出してほしい。

布小林のいう「新時代の新目標」とは、習近平時代において新たな実績を出すことを意味する。オンニュート旗ウランムチルは布小林の指示を受け、早速ウランムチルのリハーサル室において、これまでの写真や楽器や服装などを展示し、約1カ月間の展覧会を行った。ウランムチルの公演活動が例年より2倍ぐらい増えたという。さらにウランムチルの活動に関するシンポジウムや座談会も開かれている。

<sup>85</sup> オンニュート旗ニュース（2021年9月19日閲覧）—ウランムチル60周年を祝う活動 <https://mp.weixin.qq.com/s/hB0jMr4oRqNQFUUsu3k4okw>

<sup>86</sup> オンニュート旗ニュース（2021年9月19日閲覧）—布小林のウランムチルに対する講話内容 [https://mp.weixin.qq.com/s/1D\\_OVB4Z7-pLw\\_QkIEZoGg](https://mp.weixin.qq.com/s/1D_OVB4Z7-pLw_QkIEZoGg)

2019年10月、中華人民共和国が成立70周年を迎えるため、オンニュート旗ウラーンムチルは同年8月に、オンニュート旗の街及び農業、牧畜地域を巡回し、「中華人民共和国70周年の祝う文芸公演」を行った。その中で、特徴的な公演は、8月7日に中国人民銀行のオンニュート旗支店、オンニュート旗金融と投資促進局の主催の下、「オンニュート旗金融ウラーンムチル」という名称で行われたオンニュート旗の演芸センターに中国成立70周年を祝う公演である<sup>87</sup>。

2019年の8月中旬から9月末まで、オンニュート旗ウラーンムチルは習近平が約30年前から掲げていた「脱貧困」プロジェクトとして農業や牧畜地域を巡回し、公演を行った。習近平は1992年に『脱貧困』という本を書いている。習近平は2013年から中国国家主席になり、彼のこれまでのあらゆる思想的実業が宣伝された。

2020年1月末から3月末まで、オンニュート旗は中国で拡散したコロナ・ウイルスの影響で封鎖された。こうした中、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員は、オンニュート旗の街である団地の封鎖に従事した。隊員は街の様々な団地に行き、1人毎日少なくとも8時間の警備を担当したという。

ウラーンムチル以外の他の文化事業に関してはデータや資料がないため、省略する。以下はこの時期のウラーンムチルの上演作品を分析する。

## 5 繁栄期の上演作品

繁栄期は2013年から現在（2021年）までの時期を指す。この時期の上演作品について、演目パンフレットを参考にした。その理由は、『オンニュート旗ウラーンムチル誌』には、2012年以降の記載がないからである。そのため、筆者がフィールド調査で収集した演目パンフレットを分析する。ウラーンムチルは毎年多くの演目パンフレットを制作している。ここで取り上げる演目パンフレットは以下の4つで、3～4年の間隔で制作されたものであり、この時期の演目の変化を見る上で必要とされる。

①は、2013年のオンニュート旗春祭り（旧正月・春節晩会）の演目パンフレット。

②は、2013年の赤峰市誕生30周年を祝うイベントの演目パンフレット。

③は、2016年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット。

④は、2020年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット（電子版）。

以下では、まずオンニュート旗ウラーンムチルの2013年春祭り演目を分析する。

### 5.1 オンニュート旗ウラーンムチルの2013年春祭り演目

#### 5.1.1 ウラーンムチルの公演形態

ウラーンムチルは、通常は牧畜地域や農業地域を巡回し、公演する。それとは別に旗における春祭りや祝日など大きなイベントでは単独、もしくはほかの歌舞団と連携し、別途会場や劇場を設けて公演を行う。ほかの歌舞団とは、私立の民営歌舞団のこ

---

<sup>87</sup> オンニュート旗ニュース（2021年9月19日閲覧）—オンニュート旗ウラーンムチルの金融機関と連携した公演  
<https://mp.weixin.qq.com/s/VD6OCaimQuyjrkmGc5p2aQ>

とである。こうした民営歌舞団には、小学生を始め大人まで参加できる。例えば、オンニュート旗には、小学生向けのダンス訓練班として「芸娃娃舞踏訓練班」と「小天駝芸術団」が存在し、定年退職した老年を中心とした「老幹部局龍郷芸術団」が存在する。また音楽が好きな人がバンドを組織することもある。

赤峰市<sup>88</sup>のような大都市におけるイベントでは、ほかの旗の歌舞団や大都市の歌舞団と連携し共演することが多い。こうした際、公演パンフレットはウラーンムチルが自ら制作することもあれば、ほかの歌舞団が制作する場合もある。

赤峰市には、赤峰市民族歌舞劇院がある。赤峰市民族歌舞劇院は、京劇団、話劇団、モンゴル民族楽団を含みウラーンムチル（約 40 人の隊員）より人数的に約 100 人を超え、規模が大きい歌舞団である。赤峰市民族歌舞劇院は主に赤峰市の市庁所在地で活動を行う。赤峰市の市庁所在地は 3 つの区に分類されている。赤峰市には、1 つの民族歌舞劇院（赤峰市民族歌舞劇院）とオンニュート旗ウラーンムチルを含む 11 のウラーンムチルが存在する。これらの歌舞団が赤峰市の市庁所在地で行う大きなイベントであれば、すべてが集まることになる。具体的には、2013 年の赤峰市成立 30 周年を記念するイベントでは、これらの歌舞団が集まり 3 日をかけて公演を行った。

以下はオンニュート旗ウラーンムチルの連携公演をみることによって、ウラーンムチルの大きなイベントでの活動状況と立ち位置を分析する。さらに地域政府と文化局が芸術団体と芸能人に行った方針とコントロールについて考察する。

### 5.1.2 2013 年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

2013 年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットは一枚の A3 サイズの紙で両面印刷されている。パンフレットの表面の真ん中には、「演目表」という文字がモンゴル語と中国語の縦文字で書かれている。その上に横書きのデザインでモンゴル語と中国語で「オンニュート旗 2013 年の春祭り連携公演会（翁牛特旗 2013 年春節連歡晚会）」と公演のタイトルとして書かれている。中国で旧正月になると芸術歌舞団が連携し共演することを「春祭り連携公演会（春節連歡晚会）」と言い、あるいは「春祭り（春晚）」という。その意味は新年を迎え、新年の喜びを祝うためである。

さらに春祭りでは、主にその年に一番人気だった作品を披露する。パンフレットの「2013」という数字は龍で表現されている。パンフレットの裏面の頂上には、表面に書かれていた公演のタイトルが中国語で書かれている。その下には、演目の順番、演目名、振付、演者などの情報が中国語で書かれている。最後の演目の下には、公演日として「2013.02.01」と書かれている。パンフレットの裏面のデザインではモンゴル模様とオンニュート旗のシンボルとしての玉が使われている。

オンニュート旗春祭りのパンフレットの作成過程として、まずオンニュート旗の文化局がウラーンムチルの隊員とともに演出に関する参加者を決める。参加者を決めたら、演出の順番を決め、オンニュート旗政府にパンフレット作成に関する許可を取る。

<sup>88</sup> 内モンゴル自治区の東南部に位置する。面積は約 9 万 k m<sup>2</sup>で、人口は約 400 万人である。内モンゴルの第一人口の多い大都市である。赤峰市の行政区画は、3 つの区、2 つの県、7 つの旗で構成する。

オンニュート旗政府が許可を出したら、オンニュート旗ウラーンムチルが印刷会社を探し、パンフレットをデザインして印刷する流れである。

### 5.1.3 2013年のオンニュート旗春祭りの主催と観客

イベントの主催や場所についてはパンフレットには書かれていない。オンニュート旗ウラーンムチルの隊員によると、オンニュート旗春祭りはオンニュート旗演芸センター（演芸中心）で行われたという。この演芸センターの観客席は、一階と二階に分かれ、約500人の観客が入る。さらに、春祭りはテレビで放送された。主催はオンニュート旗ウラーンムチル及び旗政府で、オンニュート旗広報・テレビ局の協力で行われたという。



図3 左表



図4 右裏

図3と図4 2013年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

出典：2019年4月 筆者収蔵

図3と図4は2013年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットである。このパンフレットの演目に関する制作者や演者について、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員カ氏（モンゴル人男性）に2021年8月10日にウィーチャットで確認している。その演目を表にしたものが表9である。

表9 2013年のオンニュート旗春祭りパンフレットの演目

2013年のオンニュート旗春祭りの演目			
順番	種類	演目名	制作者/演者
1	ダンス	玉龍が春を叩く	振付：巴特爾、照格蘇垓 作曲：烏恩 編曲：宋滙林 演者：ウラーンムチル、 小天駝芸術団
2	歌	吉祥の草原	演唱：メディグ
3	ダンス	紅い灯を高く掲げる	演者：芸娃娃舞踏訓練班
4	歌	出会うのは一番美しい	作詞：秦錦屏 作曲：烏恩 演唱：轍迹組合（バンド）

5	戯劇	皮影の伝説	演者：趙江、陳子榮、盧燕萍
6	歌	紅い歌の連唱	演唱：満宝紅、王勝、薄宇樹など
7	ダンス	ミルクティーの香	振付：ハス凶雅 演者：陳海燕など
8	歌舞	愛する草原とあなたのこと	演唱：陳婷婷 演者：芸娃娃舞踏訓練班
9	歌	私の馬頭琴	作詞：白立平 作曲：烏恩 演唱：李双双
10	ダンス	ストリートダンス	演者：舞托郭
11	歌舞	伝説	演唱：徳力格爾 振付：巴特爾 演者：ウラーンムチル
12	歌	私の両親	作詞：杭蓋 作曲：烏恩 演唱：烏英嘎
13	馬頭琴曲	黒駿馬	編曲：烏恩 演者：照格蘇拉
14	ダンス	八匹馬の賛	振付：巴特爾 演者：巴特爾、興安など
15	歌	龍の故郷	作詞：阿古拉泰 作曲：斯琴朝格図 演唱：梅林組合
16	戯劇	顔の変化	演者：丁思達
17	歌舞	夏の出会い	作詞：敖・朝洛蒙 作曲：烏恩 演唱：陶古斯 振付：巴特爾 演者：烏日古木拉、 朝格図
18	歌舞	龍の歌	作詞：朱嘉庚 作曲：烏恩 演者：小天駝芸術団、 演唱：馬天天、馬紅妍
19	歌舞	紫城の新たな面貌	作詞：孫普 作曲：烏恩 演者：巴特爾、 格日勒凶雅
20	歌	モンゴルと漢人の心は繋がる	作曲：張成富 演唱：メディグ、満宝紅、王桂平
21	歌舞	私の故郷オンニユート	作詞：白立平 作曲：烏恩 演唱：藍哈達組合 振付：巴特爾、照格蘇拉 演者：ウラーンムチル、 小天駝芸術団

出典：オンニユート旗ウラーンムチル演目パンフレットにより筆者作成

表9は演目の順番、種類、演目名、制作者/演者から構成している。

演目の順番はパンフレットにある演目の順番を指す。

種類は、ダンス、歌、戯劇、歌舞、馬頭琴曲で構成する。

演目名は、パンフレットにある演目名を指す。

制作者は演目の制作に関わった振付師、作詞者、作曲者を指し、演者は歌や、ダンスや、戯劇や、曲のパフォーマンスに関わった演唱者、演奏者などを指す。歌を歌う場合は演唱者とし、ダンスや戯劇、オペラに参加した人を演者とした。曲を演奏する人を演奏者とした。

#### 5.1.4 各演目の内容

##### 表9 順番1 ダンス「玉龍が春を叩く」

ダンス「玉龍が春を叩く」は、玉や龍をメインに新春を迎えるオンニュート旗の人々を表現したものである。振付はバ特爾と照格蘇垓である。バ特爾の全名称は斯琴巴特爾と言い、1978年生まれのモンゴル人男性である。同氏は1995年からオンニュート旗ウラーンムチルで隊員として働いている。照格蘇垓は、50代のモンゴル人女性で、1983年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。作曲は烏恩であり。烏恩は1969年生まれのモンゴル人男性で、1987年からオンニュート旗ウラーンムチルで隊員として入り、2012年からこのウラーンムチルで隊長を務めている。音楽制作は宋滙林である。宋滙林はバーリン右旗ウラーンムチルの隊員である。編曲とは、中国では作曲を基に、様々な電子曲を合成する技術を指す。演者はオンニュート旗ウラーンムチルと小天駝芸術団である。

##### 表9 順番2 歌「喜祥の草原」

歌「喜祥の草原」の内容は不明である。タイトルから草原の安楽な生活を讃えたものと考えられる。演唱はメディグである。メディグは1977年からウラーンムチルの隊員になった。現在はオンニュート旗の文化局で働いている。作詞、作曲は記載がなく、不明である。

##### 表9 順番3 ダンス「紅い灯を高く掲げる」

ダンス「紅い灯を高く掲げる」の内容は不明である。タイトルから新年の喜びを讃えたものと考えられる。さらに、紅いという文言から共産党の政策を讃えたものとも言えよう。演者は芸娃娃舞踏訓練班である。芸娃娃舞踏訓練班はオンニュート旗の子ども向けの舞踏訓練班である。振付、作曲は不明である。

##### 表9 順番4 歌「出会うのは一番美しい」

歌「出会うのは一番美しい」の内容は不明である。タイトルからラブソングであると考えられる。作詞は秦錦屏で、作曲は烏恩である。秦錦屏は創新期(2002-2012年)に歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」を作詞し、創新期からオンニュート旗ウラーンムチ

ルの演目の制作に携わっている。秦錦屏は漢人の作家で、中国詩歌学会の理事である。烏恩はダンス「玉龍が春を叩く」と同じくオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。演唱は轍迹組合（バンド）である。轍迹組合（バンド）はオンニユート旗地元の若手歌手二人により組織されたバンドで、2012年に中国中央テレビ局 CCTV3の「星光大道」という番組の歌コンクールに参加しデビューした。二人は、オンニユート旗ウラーンムチルに隊員として参加した経歴があるという<sup>89</sup>。

#### 表9 順番5 戯劇「皮影の伝説」

戯劇「皮影の伝説」は、白い布を照明で照らして、影絵人形を芸人達がシルエットを操りながら音楽・リズムに合わせて歌い物語を語る芝居である。中国語で皮影戯（ピーインシ）と言い、中国に伝わる伝統的な影絵である。影絵人形は、ロバや牛・馬などの動物の皮をなめし彫刻を施し、繊細に彩色したものに桐油を塗って乾かした色彩豊かに表現する人形である。「皮影の伝説」は2008年の中国中央テレビ局 CCTV1の春祭り「春節連歡晚会」で披露されている。内容は影絵人形が、実際の間人間になったという伝説の物語である。ただし、この物語は文化大革命で批判されていたものが、改革開放政策を経て社会的に大活躍した。物語は、元々は漢人の民間における伝統的な影絵の技術が、共産党政策を讃える素材として利用された。オンニユート旗ウラーンムチルはこの演目を他の歌舞団から導入した。パンフレットに制作者は書かれていない。演者は趙江、陳于榮、盧燕萍である。趙江は漢人男性で、2007年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。陳于榮は漢人の女性で、2007年から2011年まで、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。盧燕萍（または盧艶萍）は漢人女性で、2007年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表9 順番6 歌「紅い歌の連唱」

歌「紅い歌の連唱」の内容は不明である。中国では、「紅い歌」は、一般的に革命や労働や軍人を讃えた歌である。つまり、共産党や社会主義を讃えた紅い歌数曲を連唱したものと考えられる。演唱は満宝紅、王勝、薄宇樹などである。満宝紅は漢人の女性で、1990年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。王勝、薄宇樹について、詳細不明である。

#### 表9 順番7 ダンス「ミルクティーの香」

ダンス「ミルクティーの香」の内容は不明である。タイトルからモンゴル人が通常飲むミルクティーを讃えた作品と考えられる。振付はハス図雅で、演者は陳海燕などである。ハス図雅はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。陳海燕は、40代のモンゴル人女性で、1995年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

<sup>89</sup> オンニユート旗ウラーンムチルの隊員チョクトによるインタビューである。チョクトはモンゴル人男性で、2006年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。インタビューは2021年8月10日にウェイチャットで行ったものである。

**表 9 順番 8 歌舞「愛する草原とあなたのこと」**

歌舞「愛する草原とあなたのこと」の内容は不明である。タイトルから草原や自然を讃えた作品であると考えられる。演唱は陳婷婷で、演者は芸娃娃舞踏訓練班である。陳婷婷について、詳細不明である。

**表 9 順番 9 歌「私の馬頭琴」**

歌「私の馬頭琴」は、創新期に作られた作品である。作詞は白立平で、作曲は烏恩である。演唱は李双双である。白立平は 1958 年生まれの満洲人男性で、赤峰市民族歌舞劇院の副団長を務めている。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。李双双は、1986 年生まれの漢人男性で、2012 年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

**表 9 順番 10 ダンス「ストリートダンス」**

ダンス「ストリートダンス」は、街中の路上で踊られるダンスである。中国の若者に人気がある。振付は不明である。演者は舞托郭であるが、詳細は不明である。

**表 9 順番 11 歌舞「伝説」**

歌舞「伝説」は、歌「伝説」をもとに制作した作品であると考えられる。歌「伝説」は、2005 年に制作された。チンギス・ハーンを讃えた作品で、中国中央テレビ CCTV1 のドラマ『チンギス・ハーン』の主題歌である。作曲は張千一で、作曲はテンゲルである。張千一は、1959 年生まれの朝鮮人男性で、中国音楽家協会の副主席である。テンゲルはモンゴル人の音楽家である。歌舞「伝説」の演唱は徳力格爾で、振付は巴特爾である。徳力格爾は 50 代のモンゴル人男性で、牧畜民歌手である。巴特爾は斯琴巴特爾でオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。演者はウラーンムチルである。このウラーンムチルというのは、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員を指す。

**表 9 順番 12 歌「私の両親」**

歌「私の両親」の詳細は不明であるが、両親への恩返しをテーマに制作した作品と考えられる。作詞は杭蓋で、作曲は烏恩である。演唱は烏英嘎である。杭蓋は 2006 年から 2007 年までにオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。烏英嘎は 30 代のモンゴル人女性で、2012 年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。

**表 9 順番 13 馬頭琴曲「黒駿馬」**

馬頭琴曲「黒駿馬」は、馬を讃えた作品で、創新期の「黒い駿馬」と別の曲である。編曲は烏恩で、演者は照格蘇垓である。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。照格蘇垓はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 9 順番 14 ダンス「八匹馬の賛」

ダンス「八匹馬の賛」は、馬を讃えた作品である。振付は巴特爾で、演者は巴特爾、興安などである。巴特爾は斯琴巴特爾で、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。興安は、モンゴル人男性で、2006 年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 9 順番 15 歌「龍の故郷」

歌「龍の故郷」は、オンニユート旗の山水を讃えた作品である。作詞は阿古拉泰で、作曲は斯琴朝格図である。演唱は梅林組合（バンド）である。阿古拉泰はモンゴル人男性である。同氏は内モンゴル人民出版社の職務を経て、現在は内モンゴル作家協会の所属で、兼中国作家協会会員である。斯琴朝格図は、モンゴル人男性で、中央民族大学音楽学院教授である。梅林組合（バンド）は、2007 年に 3 人のモンゴル人男性に組織されたバンドである。2009 年に江西テレビの『中国の紅歌会』という番組に参加した際に、優秀賞を受賞し、デビューした。

#### 表 9 順番 16 戯劇「顔の変化」

戯劇「顔の変化」は漢人の京劇の中に表現される技である。面類（面具）を使い、顔を何度も変化させる技であるが、具体的な内容の詳細は不明である。制作者は不明である。演者は丁思達である。丁思達は、40 代の漢人男性で、1999 年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。現在はオンニユート旗図書館の館員である。

#### 表 9 順番 17 歌舞「夏の出会い」

歌舞「夏の出会い」はラブソングである。作詞は敖・朝洛蒙で、作曲は烏恩である。演唱は陶古斯で、振付は巴特爾で、演者は烏日古木垠と朝格図である。敖・朝洛蒙について名前からモンゴル人と考えられるが、詳細は不明である。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。陶古斯はモンゴル人女性で、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。巴特爾は斯琴巴特爾で、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。烏日古木垠は、1989 年生まれのモンゴル人女性で、2006 年から、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。朝格図は、1990 年生まれのモンゴル人男性で、2006 年から、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 9 順番 18 歌舞「龍の歌」

歌舞「龍の歌」の内容は不明である。タイトルからオンニユート旗のシンボルである「龍」を讃えた作品と考えられる。作詞は朱嘉庚で、作曲は烏恩である。演者は小天駝芸術団で、演唱は馬天天と馬紅妍である。朱嘉庚は赤峰市歌舞団の団員で、オンニユート旗ウラーンムチルの演目の制作に草創期（1957-1965 年）から携わっている。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。小天駝芸術団はオンニユート旗の小学生向けの歌舞訓練班である。馬天天と馬紅妍について詳細は不明である。

### 表 9 順番 19 歌舞「紫城の新たな面貌」

歌舞「紫城の新たな面貌」の内容は不明である。ただ、紫城はモンゴル語でボルホーター (*boruqota*) と言い、オンニュート旗の別の名称である。紫城を鳥丹ともいう。鳥丹という名称は清朝嘉慶年間 (1796~1820) のもので、モンゴル語では「宝日浩特」と言い、中国語で「紫城」と訳する。皇帝の「紫禁城」と区別する為に「紫城」とした。ある人が紫色を「鳥丹」と解釈した。「鳥」は黒色で、「丹」は赤色で、合わせると紫色になる。そして、「鳥丹」ができた (翁牛特旗志編纂委員会編 1993 : 75)。だが、別の説では、鳥丹は東胡の子孫である鳥桓族に由来するという。鳥桓族の鳥桓は元々鳥蘭 (ウラーン) 色であり、中国語の発言を基に鳥蘭、鳥桓、鳥丹、鳥延、鳥丸、鳥迈というように記してきたという。この作品はタイトルから地域を讃えたものと考えられる。作詞は孫普で、作曲は烏恩である。演者は巴特爾と格日勒図雅である。演唱者について、記録されていない。孫普は、1948 年生まれの漢人男性で、1968 年から 1998 年までオンニュート旗ウラーンムチルで隊員、隊長として働いていた。烏恩はオンニュート旗ウラーンムチルの隊長である。巴特爾は斯琴巴特爾で、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。格日勒図雅は、1987 年生まれのモンゴル人女性で、2003 年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

### 表 9 順番 20 歌「モンゴルと漢人の心は繋がる」

歌「モンゴルと漢人の心は繋がる」の内容は不明である。だが、タイトルから草創期のダンス「モンゴル族と漢族は一つの家庭」と似た内容であると考えられる。作曲は張成富で、演唱はメディグ、満宝紅、王桂平である。張成富は、1953 年生まれの漢人男性で、1971 年~2012 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。メディグは、オンニュート旗ウラーンムチル隊員から、オンニュート旗文化館に転職した人である。王桂平 (王桂萍) は、1964 年生まれの漢人女性で、1983 年~2012 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。2013 年からオンニュート旗文化局の職員である。満宝紅は漢人女性で、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

### 表 9 順番 21 歌舞「私の故郷オンニュート」

歌舞「私の故郷オンニュート」は、オンニュートは玉龍があつた伝説的な地域であると讃えた作品である。作詞は白立平で、作曲は烏恩である。白立平は赤峰市民族歌舞劇院の副団長を務めている。烏恩はオンニュート旗ウラーンムチルの隊長である。演唱は藍哈達組合 (バンド) で、振付はバートルと照格蘇垓である。藍哈達組合は赤峰市の一人のモンゴル人男性と二人のモンゴル人女性で組織されたバンドである。演者はウラーンムチルと小天駝芸術団である。ウラーンムチルはオンニュート旗ウラーンムチルである。

## 5.1.5 演目の総括

### ①上演作品数とその種類

2013年のオンニユート旗の春祭りには、21の演目が披露された。演目の種類は、ダンス、歌、戯劇、歌舞、馬頭琴曲の5種類ある。この中、ダンスが5作品、歌が7作品、戯劇2作品、歌舞6作品、馬頭琴曲1作品である。

## ②春祭りの上演作品とウラーンムチルの関係

春祭りは「連携公演会」として行い、オンニユート旗ウラーンムチル以外にオンニユート旗の芸娃娃舞踏訓練班、轍迹組合（バンド）、藍哈達組合、小天駝芸術団など地元の民営歌舞団やバンド、芸能人が参加している。

その結果、21作品の中、16作品はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。ほかの5作品であるダンス「紅い灯を高く揚げる」、歌「紅い歌の連唱」、歌舞「愛する草原とあなたのこと」、ダンス「ストリートダンス」、歌「龍の故郷」はオンニユート旗のほかの民営歌舞団やバンドが披露している。公演比例から、オンニユート旗の芸術団体の中で、ウラーンムチルが主としていることがわかる。

## ③上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲、編曲の順番で分類する。

### (1) 振付

振付は、巴特爾、照格蘇垵、哈斯図雅の3人である。3人はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。巴特爾は、ダンス「玉龍が春を叩く」を始め6作品に振付をしている。照格蘇垵は、巴特爾とともにダンス「玉龍が春を叩く」を始め3作品に振付をしている。哈斯図雅はダンス「ミルクティーの香」の1作品に振付している。

### (2) 作詞

作詞は、秦錦屏、白立平、杭蓋、阿古垵泰、敖・朝洛蒙、朱嘉庚、孫普の7人いる。杭蓋と孫普はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員であった。秦錦屏と阿古垵泰は作家で、白立平と朱嘉庚は赤峰市民族歌舞劇院の所属である。敖・朝洛蒙について所属不明である。秦錦屏は歌「出会うのは一番美しい」を作詞し、白立平は歌「私の馬頭琴」と歌舞「私の故郷オンニユート」の2作品を作詞している。杭蓋は、歌「私の両親」を作詞し、阿古垵泰は歌「龍の故郷」を作詞している。敖・朝洛蒙は歌舞「夏の出会い」を作詞し、朱嘉庚は歌舞「龍の歌」を作詞している。孫普は歌舞「紫城の新たな面貌」を作詞している。

### (3) 作曲

作曲は、烏恩、斯琴朝格図、張成富である。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの現職隊長で、ダンス「玉龍が春を叩く」を始め9作品を作曲している。斯琴朝格図は、中国中央民族大学の音楽学院教授で、歌「龍の故郷」の1作品を作曲している。

張成富はオンニュート旗ウラーンムチルの定年退職者で、歌「モンゴルと漢人の心は繋がる」の1作品を作曲している。

#### (4) 編曲

編曲は、宋滙林の1人である。宋滙林はバーリン右旗ウラーンムチルの隊員で、ダンス「玉龍が春を叩く」の音楽を編曲している。

#### ④上演作品のテーマ

パンフレットに載せてある演目をインターネットや演目名(タイトル)から推測し、テーマが似ているものと同じカテゴリーに分類した。

オンニュート旗の2013年の春祭りでは、まず共産党や社会主義思想を讃えた演目として、ダンス「紅い歌の連唱」がある。また民族の団結を強調した演目として、歌「モンゴルと漢人の心は繋がる」がある。戯劇「皮影の伝説」は、漢人の伝統的な影絵文化に基づいているが、共産党の改革開放政策を讃えたものである。歌「喜祥の草原」は演目名から、モンゴル生活・草原の良さを讃えた作品だと考えられる。内容の詳細は不明であるため、共産党の政策を讃えた内容も含まれている可能性がある。さらに、ダンス「紅い灯を高く揚げる」も共産党の政策を讃えた可能性の演目であろう。

注目したいことは、21演目の内5演目名が地域のシンボルを題材にしていることである。具体的にダンス「玉龍が春を叩く」、歌「龍の故郷」、歌「龍の歌」、歌舞「紫城の新たな面貌」、歌舞「私の故郷オンニュート」である。

またモンゴル文化的に根差したものとしてダンス「ミルクティー」、歌「私の馬頭琴」、馬頭琴曲「黒駿馬」とダンス「八匹馬の賛」がある。歌舞「伝説」はチンギス・ハーンを讃えた作品であり、モンゴル歴史を基に制作した。

ほかの内容として、家族に捧げる演目として歌「私の両親」及びラブソングとして歌「出会うのは一番美しい」と歌舞「夏の出会い」がある。若者に人気のダンス「ストリートダンス」も披露された。戯劇「顔の変化」は漢人の京劇の中で表現される技である。面頬(面具)を使い、顔を何度も変化させる技であるが、具体的な内容の詳細は不明である。歌舞「愛する草原とあなたのこと」についても演目名から内容の詳細は判明できない。ただ、このパンフレットから分かるのは、オンニュート旗ウラーンムチルでは、地域のシンボルである龍とモンゴル文化的な要素が圧倒的に表現されていることである。

## 5.2 オンニュート旗ウラーンムチルの2013年のほか演目

次に、オンニュート旗ウラーンムチルが同年に行った別のイベントを取り上げる。それは2013年8月10日から12日までの3日間行われた赤峰市誕生の30周年を祝うイベントである。赤峰市は1983年にジョーオダ盟から赤峰市に変更された。このイベントにはオンニュート旗ウラーンムチルを含む赤峰市における様々な歌舞団が参加している。以下の図5と図6は、このイベントに参加したオンニュート旗ウラーン

ムチルの演目パンフレットである。



図5 演目の表面



図6 演目の裏面

図5と図6 赤峰市30周年を祝うイベントのオンニェウト旗ウラーンムチルの演目

出典：2016年3月 筆者収蔵

### 5.2.1 オンニェウト旗ウラーンムチルの演目パンフレット

ウラーンムチルの演目パンフレットは一枚のA3サイズの紙で表面と裏面で構成されている。表面はイベントのテーマで、モンゴル語と中国語で書かれている。それが、また左側と右側に分けられ、右上には、イベントのタイトルで「赤峰市誕生の30周年を祝う2013年の全市のウラーンムチルの集会公演」と書かれている。真ん中には、モンゴル服を着て馬頭琴や四胡を背負い、騎馬し歌を歌うウラーンムチルの隊員の写真がデザインされている。その下には、主催と共催、及び公演機関が書かれている。さらに一番下には、日付は2013年8月10日であると書かれている。左側には、このイベントに関わった企画者や監督、及びオンニェウト旗ウラーンムチルの隊員の名前が書かれている。

演目パンフレットの裏面には、公演のタイトル、振付、作曲、作詞、演奏、演唱、演者についての名前が書かれている。しかし、それぞれの所属や民族などの詳細はない。

公演のタイトルは、「故郷の賛」である。演目は三つの部に分けられている。第一部のタイトルは「草原の美しいリズム」で、3つの演目がある。第二部のタイトルは「龍の故郷」で、6つの演目がある。第三部のタイトルは「調和の故郷」で、5つの演目がある。演目のタイトルのみで、内容は不明である作品が多い。

### 5.2.2 赤峰市誕生30周年を祝うイベントの主催と観客

演目パンフレットには、イベントの主催や共催、演出機関の記載がある。しかし、公演の場所は書かれていない。主催は「紅山文化祭組織委員会・赤峰市文化局」で、共催は「オンニェウト旗文化局」である。演出機関は「オンニェウト旗ウラーンムチル」である。

公演場所についてはパンフレットに記載はないものの、赤峰市の国際展示会センタ

一大劇院である<sup>90</sup>。観客については一日の観客数が約1万人に達していたという記事がある<sup>91</sup>。このイベントは3日間続き、オンニユート旗ウラーンムチルは一日で公演が終わっている。

図5と図6は赤峰市30周年を祝うイベントにおけるオンニユート旗ウラーンムチルの演目パンフレットである。このパンフレットの演目に関する制作者や演者について、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員キ氏（モンゴル人女性）に2021年8月12日にウィーチャットで確認している。その演目を表にしたものが表10である。

表10 赤峰市30周年を祝うオンニユート旗ウラーンムチルの演目

赤峰市30周年を祝うオンニユート旗ウラーンムチルの演目			
順番	種類	演目名	制作者/演者
第一部 草原の美しいリズム			
1	合奏曲	黒駿馬	編曲：烏恩 演者：照格蘇拉
2	歌	小黄馬（内モンゴル民謡）	演唱：烏英嘎
3	ダンス	雅韻	振付：斯琴巴特爾 作曲：劉彤 演者：哈斯図雅、陳海燕など
第二部 龍の故郷			
4	ホーミー	私のモンゴル	演唱：薩楚拉
5	歌	夏の出会い	作詞：敖・朝洛蒙 作曲：烏恩 演唱：陶古斯
6	ダンス	生命の歌	振付：斯琴巴特爾 演者：烏日古瑪拉、興安など
7	歌	龍の故郷	作詞：阿古拉泰 作曲：斯琴朝格図 作曲：演唱：満宝紅
8	歌	思念	作詞：陶古斯 作曲：烏恩 演唱：図布新、陶古斯
9	ダンス	緑葉の根の情け	振付：牧其爾、陳海燕 作曲：鮑海鴻 演者：朝格図、其力格爾など
第三部 調和の故郷			
10	原生態	聖山	作詞：色・烏力吉巴雅爾 作曲：烏恩 演者：ハス高娃、烏英嘎 孟和、吉仁太など
11	歌	草原、私の母親	作詞：張涛 作曲：烏恩 演唱：李双双

<sup>90</sup> 赤峰市庆祝建市30周年乌兰牧骑汇演（2021年8月10日閲覧）

<http://roll.sohu.com/20130812/n383966539.shtml>

<sup>91</sup> 红山文化节开幕式晚会联排现场吸引万余名市民（2021年8月10日に閲覧）

<http://www.anhuinews.com/zhuyeguanli/system/2013/08/16/005996953.shtml>

12	ダンス	私の馬の鞍	振付：斯琴巴特爾 作曲：那日森 演者：斯琴巴特爾、海日罕 斯琴毕力格など
13	歌	セロリの花	演唱：メディグ
14	歌	私の故郷オンニュート	作詞：白立平 作曲：烏恩 演唱：満宝紅、胡達古拉、 李双双、烏英嘎

出典：オンニュート旗ウラーンムチル演目パンフレットにより筆者作成

表 10 は演目の順番、種類、演目名、制作者/演者から構成している。

演目の順番はパンフレットにある演目の順番を指す。

種類は合奏曲、歌、ダンス、ホーミー、原生态、歌舞がある。ここで新しく加わった種類には、合奏曲とホーミーと原生态である。

合奏曲はさまざま楽器の組み合わせで表現する曲である。

ホーミーはモンゴルの伝統的な歌唱法である。低い声と甲高い声の2つの音を同時に発声する歌唱法である。喉を詰めた声による喉頭音源の生成、舌や口唇の形状を調音運動によって調節し声道の共鳴周波数を制御することによって実現される。

原生态はウラーンムチル隊員によると、古代からあった楽器や歌唱法を組み合わせるものであるという。例えばモンゴルの伝統楽器である馬頭琴を伴奏にホーミーやオルティン・ドー（長い歌）を歌うというものである。

### 5.2.3 各演目の内容

#### 表 10 順番 1 合唱曲「黒駿馬」

合唱曲「黒駿馬」の原曲は馬頭琴曲「黒駿馬」で、馬を讃えた作品である。この曲は2013年オンニュート旗春祭りにも演奏されている演目である。内モンゴルでは、このタイトルで数多くの音楽作品がある。元の作曲は不明である。編曲は烏恩で、演者は照格蘇拉である。照格蘇拉はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 2 歌「小黄馬」

歌「小黄馬」は、仔馬を讃えたオルティン・ドーである。「小黄馬」についてパンフレットでは内モンゴル民謡と記しているが、正確的にはシリングル盟の民謡である。演唱は烏英嘎である。烏英嘎は30代のモンゴル人女性で、2012年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 3 ダンス「雅韻」

ダンス「雅韻」の詳細は不明である。タイトルを直訳すると「美しいメロディー」である。振付は斯琴巴特爾で、作曲は劉彤である。斯琴巴特爾は、40代のモンゴル人男性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルで隊員として働いている。劉彤に

ついて、詳細不明である。演者はハス図雅、陳海燕などである。ハス図雅はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。陳海燕は40代のモンゴル人女性で、1995年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 4 ホーミー「私のモンゴル」

ホーミー「私のモンゴル」の詳細は不明である。タイトルからモンゴル生活・文化を讃えた作品であると考えられる。制作者について不明である。演唱は薩楚垓である。薩楚垓は1989年生まれのモンゴル人男性で、2013年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 5 歌「夏の出会い」

歌「夏の出会い」はラブソングである。この歌は、2013年の春祭りでも披露されている。作詞は敖・朝洛蒙で、作曲は烏恩である。演唱は陶古斯である。敖・朝洛蒙について名前からモンゴル人と考えられるが、詳細は不明である。烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長である。陶古スは1985年生まれのモンゴル人女性で、2012年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 6 ダンス「生命の歌」

ダンス「生命の歌」の詳細は不明である。オンニユート旗ウラーンムチルでは、このタイトルで2000年に舞劇「生命の歌」が作られている。また舞劇「生命の歌」は、2011年にダンス「鷹」として改名されている。この改名からダンス「鷹」をダンス「生命の歌」とし、元の演目名である「生命の歌」を復元した可能性が高い。元の制作者は内モンゴル直属ウラーンムチルであるが、詳細は不明である。編舞はスチン・バートルである。スチン・バートルは、40代のモンゴル人男性で、1995年からオンニユート旗ウラーンムチルで隊員である。

#### 表 10 順番 7 歌「龍の故郷」

歌「龍の故郷」はオンニユート旗の山水を讃えた作品である。作詞は阿古垓泰で、作曲は斯琴朝格図である。阿古垓泰はモンゴル人男性である。同氏は内モンゴル人民出版社の職務を経て、現在は内モンゴル作家協会の所属で、中国作家協会の会員である。斯琴朝格図はモンゴル人男性で、中央民族大学音楽学院教授である。演唱は満宝紅である。満宝紅は漢人の女性で、1990年からオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 8 歌「思念」

歌「思念」は青年男女のラブソングである。作詞は陶古斯で、作曲は烏恩である。陶古スはモンゴル人女性で、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。演唱は図

布新と陶古斯である。図布新は布和図布新という。30代のモンゴル人男性で、2009年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 9 ダンス「緑葉の根の情け」

ダンス「緑葉の根の情け」の詳細は不明である。タイトルから、1985年のダンス「緑葉の情け」（第六章の回復期）と同じく環境保護問題を内容にした演目と考えられる。振付は牧其爾と陳海燕で、作曲は鮑海鴻である。牧其爾はモンゴル人女性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。陳海燕はモンゴル人女性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。鮑海鴻について詳細不明である。演者は朝格図と其力格爾などである。朝格図はモンゴル人男性で2006年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。其力格爾はモンゴル人女性で、2003年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 10 原生态「聖山」

原生态「聖山」の詳細は不明である。タイトルからオンニュート旗の山水を讃えた作品であると考えられる。作詞は色・烏力吉巴雅爾で、作曲は烏恩である。色・烏力吉巴雅爾（色・烏日吉巴音）はモンゴル人男性で、オンニュート旗中学校のモンゴル語教師である。演者はハス高娃と烏英嘎と孟和、吉仁太などである。ハス高娃はモンゴル人女性で、1999年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。烏英嘎はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。孟和は額爾敦孟和で、1976年生まれ、1997年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。吉仁太は、モンゴル人男性で、2003年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 11 歌「草原、私の母親」

歌「草原、私の母親」の詳細は不明である。タイトルから草原やモンゴルの大自然を讃えたものと考えられる。作詞は張涛で、作曲は烏恩である。張涛は漢人で、オンニュート旗文化館の定年退職者である。演唱は李双双である。李双双は、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 12 ダンス「私の馬の鞍」

ダンス「私の馬の鞍」の詳細は不明である。タイトルから馬具である鞍を讃えたものと考えられる。牧畜民の生活で、馬やラクダが乗り物として使われることから、鞍は大事なものとみなされている。振付は斯琴巴特爾で、作曲は那日森である。斯琴巴特爾はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。那日森（那日蘇）は、モンゴル人1998年7月～1998年12月までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。演者は斯琴巴特爾、海日罕、斯琴毕力格などである。斯琴巴特爾はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。海日罕は、モンゴル人男性で、2004年からオンニュート旗

ウラーンムチルの隊員である。斯琴毕力格はモンゴル人男性で、2004年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 10 順番 13 歌「セロリの花」

歌「セロリの花」は、オンニュート旗の民謡（民謡）である。セロリは少女の名前で、故郷を懐かしく思い歌った歌である。演唱はメディグである。メディグは、オンニュート旗ウラーンムチル隊員から、オンニュート旗文化館に転職した人である。

#### 表 10 順番 14 歌「私の故郷オンニュート」

歌「私の故郷オンニュート」は、2013年のオンニュート旗春祭りで歌舞の演目として披露されている。赤峰市誕生の30周年を祝うイベントでは、歌に改変されている。その内容は、同じく伝説的な地域であるとオンニュート旗を讃えた作品である。作詞は自立平で、作曲は烏恩である。演唱は満宝紅、胡達古拉、李双双、烏英嘎である。満宝紅、李双双、烏英嘎はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。胡達古拉は、1983年生まれのモンゴル人女性で、2012年から2016年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

### 5.2.4 演目の総括

#### ①上演作品数とその種類

2013年の赤峰市誕生30周年を祝うイベントにおけるオンニュート旗ウラーンムチルの演目パンフレットでは、14の演目が披露された。演目の種類は、合奏曲、歌、ダンス、ホーミー、原生态の5種類がある。この中、合奏曲が1作品、歌が7作品、ダンスが4作品、ホーミーが1作品、原生态が1作品である。

#### ②祝祭の上演作品とウラーンムチルの関係

「赤峰市誕生30周年を祝う2013年の全市のウラーンムチルの集会公演」はそもそも赤峰市直属の歌舞団や赤峰市におけるすべてウラーンムチルが参加したイベントである。このイベントは「2013年のオンニュート旗春祭り」の公演と異なって、オンニュート旗ウラーンムチルの公演演目が独自で編集したもので、すべての演目の上演にオンニュート旗ウラーンムチルの隊員が参加している。

だが、上演演目の編集では、歌「小黄馬」はシリングル盟民謡で、歌「セロリの花」はオンニュート旗の民謡で、歌「龍の故郷」以外、ほかは全てオンニュート旗ウラーンムチルが制作している。作詞・作曲以外、振付・演唱・演者は全てオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### ③上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲、編曲の順番で分類する。

### (1) 振付

振付は、斯琴巴特爾、牧其爾、陳海燕の3人である。3人は、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。斯琴巴特爾は、ダンス「雅韻」を始め3作品に振付をしている。牧其爾と陳海燕はとともにダンス「緑葉の根の情け」の1作品に振付している。

### (2) 作詞

作詞は、敖・朝洛蒙、阿古拉泰、陶古斯、色・烏力吉巴雅爾、張濤、白立平の6人いる。敖・朝洛蒙と張濤について詳細不明である。阿古拉泰は作家である。陶古斯はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。色・烏力吉巴雅爾はオンニュート旗中学校の教師である。白立平は赤峰市民族歌舞劇院の所属である。敖・朝洛蒙は歌「夏の出会い」を作詞し、阿古拉泰は歌「龍の故郷」を作詞している。陶古斯は歌「思念」を作詞し、色・烏力吉巴雅爾は原生态「聖山」を作詞している。張濤は、歌「草原、私の母親」を作詞し、白立平は「私の故郷オンニュート」を作詞している。

### (3) 作曲

作曲は烏恩、劉彤、斯琴朝格図、鮑海鴻、那日森の5人である。烏恩はオンニュート旗ウラーンムチルの隊長で、歌「夏の出会い」を始め5作品に作曲している。劉彤は、ダンス「雅韻」に作曲しているが、所属は不明である。斯琴朝格図は、中央民族大学の所属で、歌「龍の故郷」に作曲している。鮑海鴻は、ダンス「緑葉の根の情け」に作曲しているが、所属は不明である。那日森は、オンニュート旗ウラーンムチルの経験者で「私の馬の鞍」に作曲している。

### (4) 編曲

編曲は、烏恩で合奏曲「黒駿馬」である。「黒駿馬」というタイトルで数多くの歌があるため、元々の作曲は不明である。

## ④上演作品のテーマ

表9と表10から赤峰市誕生30周年を祝うイベントの演目と2013年のオンニュート旗春祭りの演目は4作品が重複している。それぞれ、歌舞「私の故郷オンニュート」、歌「龍の故郷」、合奏曲「黒駿馬」、歌「夏の出会い」である。またオンニュート旗と地域のシンボルである龍について、創新期(2002-2012年)で歌「オンニュートは私の可愛い故郷」、「龍の故郷の歌」があった。

演目の内容についてパンフレットからしか情報がなく、多くの作品の詳細は不明であるものの、まず共産党と社会主義を讃えた作品は見当たらない。その要因として、このイベントでは、さまざま歌舞団が参加しているから、ほか歌舞団がそうした演目を披露した可能性がある。

地域性とモンゴル文化をテーマにした作品は、歌「龍の故郷」、歌舞「私の故郷オンニュート」、ホーミー「私のモンゴル」、原生态「聖山」、歌「草原、私の母親」がある。

歌「セロリの花」はオンニュート旗の民謡である。セロリは少女の名前で、故郷を懐かしく思い歌った歌である。牧畜民向けの家畜を讃えた演目は合奏曲「黒駿馬」と歌「小黄馬」がある。またダンス「私の馬の鞍」は牧畜民の家畜道具を讃えた演目である。

ラブソングとして歌「夏の出会い」と「思念」がある。ダンス「緑葉の根の情け」は、1985年のダンス「緑葉の情け」と同じく環境保護問題を内容にした演目と考えられる。ダンス「生命の歌」は環境保護問題を背景に制作した2000年の舞劇「生命の歌」に由来する可能性が高い。ダンス「雅韻」については演目名から、どのような内容を表現したかは判明できない。

このパンフレットから、これまでの演目と異なってジャンルの的にホーミーや原生態などを取り入れたことが特徴である。これは、つまりウラーンムチルは徐々に地域的な特徴やモンゴル文化的な特徴を大胆に取り入れるようになったことを意味する。さらに、このパンフレットと「2013年のオンニュート旗春祭り」の演目から、オンニュート旗ウラーンムチルの演目は多くの公演において、重複していることが分かった。

### 5.3 オンニュート旗ウラーンムチルの2016年春祭り演目

次に取り上げるのは、オンニュート旗ウラーンムチルの2016年の春祭りの演目である。以下は、まずオンニュート旗春祭りの演目パンフレットを紹介し、その後に主催と観客について記述する。

図7と図8は2016年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットである。



図7 演目の表面

図8 演目の裏面

図7と図8 2016年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

出典：2016年3月 筆者収蔵

#### 5.3.1 2016年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

2016年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットは一枚のA3サイズの紙で表面と裏面で印刷されている。表面はイベントのタイトルで、モンゴル語と中国語で書かれている。それが、また左側と右側に分かれ、右上には、イベントのタイトルで「オンニュート旗2016年の春祭り文芸演出会」と書かれている。真ん中には、縦書きモ

ンゴル語と中国語で「演目単 (プログラム)」と書いている。その右下には、中国語で「祝福する 2016 新年」と書かれている。表面の左側には、このイベントに関わった企画者、監督及びオンニュート旗ウラーンムチルの隊員の名前が書かれている。また主催機関と共催機関が書かれている。左下には、2016年1月27日と公演日が書かれている。

演目パンフレットの裏面には、公演のタイトル、振付、作曲、作詞、演奏、演唱、演者について名前は書かれているが、所属や民族などほか詳細はない。公演のタイトルは、「オンニュート旗 2016 年春祭り文芸演出会」である。パンフレットには、18の演目名がある。しかし、演目の内容について一切説明していない。パンフレットの表面と裏面は赤色と黄色で、モンゴル模様でデザインされている。

### 5.3.2 2016年のオンニュート旗春祭りの主催と観客

演目パンフレットには、公演の場所は書かれていない。オンニュート旗ウラーンムチルの隊員によると、2016年のオンニュート旗春祭りは2013年の春祭りと同じくオンニュート旗演芸センター (演芸中心) で行われたという。さらに、2016年のオンニュート旗春祭りも2013年と同じくテレビ放送が行われた。主催機関はオンニュート旗共産党委員会とオンニュート旗人民政府である。共催はオンニュート旗文化・広報・テレビ・体育局とオンニュート旗広報・テレビセンターである。

図7と図8のパンフレットの演目に関する制作者や演者について、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員ク氏 (モンゴル人女性) に2021年8月17日にウィーチャットで確認している。その演目を表にしたものが表11である。

表11 2016年のオンニュート旗春祭りパンフレットの演目

2016年のオンニュート旗春祭りの演目			
順番	種類	演目名	制作者/演者
1	ダンス	吉祥の草原	振付：斯琴巴特爾 編曲：烏恩 演者：ウラーンムチル、 小天駝芸術団
2	歌	龍の故郷	作詞：阿古拉泰 作曲：斯琴朝格図 演唱：梅林組合 (バンド)
3	ファッションショー	オンニュート賛	演唱：宝力格 振付：斯琴巴特爾 作曲：烏恩 演者：新蘇莫蘇木滿都海斯琴服飾 パフォーマンス隊
4	歌	共に中国の夢を築きあげよう	作詞：芷父、劉恒 作曲：印青 演唱：李双双
5	歌舞	愛の旋律	作詞：孟宝力格 作曲：烏恩

			演唱：図布新、陶古斯 振付：斯琴巴特爾、 演者：陶格陶、金吉瑪
6	歌	母親	作詞：孟根 作曲：孟根 演唱：孟根
7	合奏曲	春の喜び	作曲：宋滙林 演奏：照格蘇垠、雪梅、白依垠
8	歌	気随気促	演唱：蒙Dバンド・金光
9	ダンス	のびのびと振る舞う	演者：小天駝芸術団
10	歌	天辺	作詞：吉日格楞 作曲：烏蘭図嘎 演唱：博締バンド
11	ダンス	刺繍	振付：哈斯図雅 作曲：帯欽 演者：老幹部局龍郷芸術団
12	歌	私は信じる	演唱：李驥、羅佳、王東偉 振付：斯琴巴特爾 演者：烏日古木垠、 朝格図など
13	馬頭琴曲	スペイン闘牛士の行進曲	演奏：烏芸罕、 巴音青和樂、 烏雲畢力格など
14	歌	賛歌（モンゴル民謡）	演唱：メディグ
15	ダンス	我々の幸福と喜び	振付：斯琴巴特爾 作曲：烏恩 演者：牧其爾、 陶格陶、烏日古木垠、 畢力格など
16	歌	心から愛する故郷	作詞：色・烏力吉巴雅爾 作曲：烏恩 演者：轍迹組合（バンド）
17	合唱	復興に向かう	指揮：張成富 アコーディオン演奏：烏恩 演唱：老幹部局龍郷芸術団
18	歌舞	平和と繁栄	作詞：徐立軍 作曲：烏恩 演唱：司大利、李双双、 宝力格、金光 振付：斯琴巴特爾 演者：興安、其力格爾、 同垠嘎など

出典：オンニユート旗ウラーナムチル演目パンフレットにより筆者作成

表 11 は演目の順番、種類、演目名、制作者/演者から構成している。

演目の順番はパンフレットにある演目の順番を指す。

種類はダンス、歌、ファッションショー、歌舞、合奏曲、馬頭琴曲、合唱である。

ここで新しく加わった種類は、ファッションショーと合唱である。ファッションショーは地域の服飾を宣伝するため、地域のコミュニティや服飾店の店員に服を着せて観客に見せるショーである。合唱は、複数の声部をそれぞれ複数の歌い手がリズムやメロディーに合わせて歌うことを指す。

### 5.3.3 各演目の内容

#### 表 11 順番 1 ダンス「吉祥の草原」

ダンス「吉祥の草原」の詳細は不明である。タイトルから草原の自由自在で安楽な生活を讃えた作品と考えられる。振付は斯琴巴特爾で、編曲は烏恩である。斯琴巴特爾はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員で、烏恩はオンニユート旗ウラーンムチルの隊長で、2013年同様多くの作曲を担当している。演者はウラーンムチルと小天駝芸術団である。ウラーンムチルとは、オンニユート旗ウラーンムチルをいう。小天駝芸術団はオンニユート旗における民営の小学生向けのダンス訓練班である。

#### 表 11 順番 2 歌「龍の故郷」

歌「龍の故郷」は、オンニユート旗の山水を讃えた作品である。作詞は阿古拉泰で、作曲は斯琴朝格図である。演唱は梅林組合（バンド）である。この演目は2013年のオンニユート旗春祭りで取り上げられている。

#### 表 11 順番 3 ファッションショー「オンニユート賛」

ファッションショー「オンニユート賛」は、オンニユート旗のモンゴル人に伝承された服飾を展示するために行われたショーである。内モンゴルでは、モンゴルの伝統的服飾は地域によって異なることが多い。例えば、オルドス服飾、ウジムチン旗服飾（シリンゴル盟の旗）、シンバラホ旗服飾（フルンボイル市の旗）などである。演唱は宝力格で、振付は斯琴巴特である。宝力格は30代のモンゴル人男性で、2015年から2016年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。ほか詳細は不明である。斯琴巴特はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。作曲は烏恩で、演者は新蘇莫蘇木満都海斯琴服飾パフォーマンス隊である。新蘇莫蘇木・満都海斯琴服飾パフォーマンス隊はオンニユート旗の新蘇莫蘇木（鎮・郷）におけるモンゴル服飾店の従業員である。

#### 表 11 順番 4 「共に中国の夢を築きあげよう」

歌「共に中国の夢を築きあげよう」は、中国国家主席習近平の「偉大なる中華民族を復興する中国の夢」を讃えた作品である。この歌は、2014年に制作され、中国で大ヒットした歌である。2015年の中国中央テレビ局「春祭り」に取り上げられた。その内容は、幸福は人民の夢で、隆盛は中国の夢であるという主旨である。作詞は芷父と劉恒である。芷父について詳細は不明である。劉恒は漢人女性で、歌手である。2011年に『四季空城』というアルバムを発行している。作曲は印青で、演唱は李双双であ

る。印青は 1954 年生まれの漢人男性で北京市在住である。現在は中国共産党中央軍事委員会の政治工作部歌舞団の団長を務めている。李双双はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 5 歌舞「愛の旋律」

歌舞「愛の旋律」の詳細は不明である。タイトルからラブソングであると考えられる。作詞は孟宝力格で、作曲は烏恩である。孟宝力格は 30 代のモンゴル人男性で、2015 年から 2016 年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。ほか詳細は不明である。演唱は図布新と陶古斯である。二人はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。振付は斯琴巴特爾で、演者は陶格陶と金吉瑪である。斯琴巴特爾はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。陶格陶は小天賦芸術団のダンス教師である。ほか詳細は不明である。金吉瑪は 1992 年生まれのモンゴル人女性で、2010 年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 6 歌「母親」

歌「母親」の詳細は不明である。タイトルから母親への恩返しを表現した作品であると考えられる。作詞、作曲、演唱は孟根である。孟根はオンニュート旗のモンゴル人歌手で、馬頭琴演奏者である。

#### 表 11 順番 7 合奏曲「春の喜び」

合奏曲「春の喜び」の詳細は不明である。タイトルから春節がきた喜びを表現して制作した作品であると考えられる。作曲は宋滙林で、演奏は照格蘇垵と雪梅と白依垵である。宋滙林はバーリン右旗ウラーンムチルの隊員である。照格蘇垵は、モンゴル人女性で、1983 年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。雪梅は、1979 年生まれのモンゴル人女性で、1997 年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。白依垵は、モンゴル人男性で、2009 年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 8 歌「気随気促」

歌「気随気促」は、若者に対する応援ソングである。若者には、社会や生活でさまざまな悩みがあるものが、自由に生きていけば、なんとか道が広げられるという内容である。この歌は漢人のバンドである指南針バンドが 1996 年に制作した歌である。指南針バンドは 1994 年に北京、重慶など内モンゴル以外地域の 6 人の漢人男性に組織された。演唱は蒙 D バンドの金光である。蒙 D バンドは、2014 年にオンニュート旗地元の 6 人のモンゴル人が組織した。2017 年に名前を「無疆バンド」に変更した。金光はモンゴル人女性で、蒙 D バンドのメンバーとともにオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 9 ダンス「のびのびと振る舞う」

ダンス「のびのびと振る舞う」は、子どもが跳ねまわるダンスである。演者は、小天駝芸術団である。

#### 表 11 順番 10 歌「天辺」

歌「天辺」は、草原、緑の草、馬、星などを表現したものである。この歌は、2005年にモンゴル人歌手布林・バヤルのアルバム収録として誕生し、中国で人気を博した歌である。オンニュート旗ウラーンムチルは、この歌を導入している。作詞は吉日格楞で、作曲は烏蘭図嘎である。吉日格楞はモンゴル人男性で、画家である。烏蘭図嘎はモンゴル人男性で、作曲家である。演唱は博締バンドである。博締バンドは2003年にオンニュート旗の2人のモンゴル人男女で組織されたバンドである。

#### 表 11 順番 11 ダンス「刺繍」

ダンス「刺繍」は、2009年にオンニュート旗ウラーンムチルで制作された演目である。振付はハス図雅で、作曲は帯欽である。演者は老幹部局龍郷芸術団である。この芸術団は、オンニュート旗の定年退職した老年幹部たちに組織されたアマチュア芸術団体である。

#### 表 11 順番 12 歌「私は信じる」

歌「私は信じる」は、青年への応援ソングである。夢を持って努力すれば、夢は必ず実現できるという内容の作品である。この歌は2006年に台湾で制作され、中国で大ヒットした歌である。作詞は劉虞瑞で、作曲は陳国华である。劉虞瑞は台湾の作詞家である。陳国华は台湾の作曲家である。振付は斯琴巴特爾で、演唱は李驥、羅佳、王東偉である。斯琴巴特爾はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。李驥は、30代の漢人男性で、オンニュート旗政府職員である。ほか詳細は不明である。羅佳は、漢人女性で、2016年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。王東偉は30代の漢人男性で、オンニュート旗熱力会社（電力会社）の職員である。ほか詳細は不明である。演者は烏日古木垠と朝格図である。烏日古木垠と朝格図はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 13 馬頭琴曲「スペイン闘牛士の行進曲」

馬頭琴曲「スペイン闘牛士の行進曲」は、スペインの国技である闘牛祭りで演奏される名曲である。この曲は1921年にスペインの有名な作曲家パスカル・マルキーナ・ナロ（Pascual Marquina Narro 1873-1948年）の作曲である。演奏は烏芸罕、巴音青和樂、烏雲畢力格などである。烏芸罕はモンゴル人女性で、赤峰市の藍哈達組合（バンド）のメンバーである。ほか二人について詳細は不明である。

#### 表 11 順番 14 歌「賛歌」

歌「賛歌」は、中国の各兄弟民族が解放されたのはすべて共産党と毛澤東のお陰であると讃えたものである（于・赫編 1997：197-198）。この歌はオンニュート旗ウラーンムチルで草創期（1957-1965 年）に導入された歌である。作詞は胡松華である。胡松華は 1931 年生まれ、北京出身の満洲人で、歌手である。演唱はメディグである。メディグは、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 表 11 順番 15 ダンス「我々の幸福と喜び」

ダンス「我々の幸福と喜び」の詳細は不明である。タイトルからモンゴル人の幸福で安楽な生活を讃えた作品であると考えられる。振付は斯琴巴特爾で、作曲は烏恩である。斯琴巴特爾はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員で、烏恩はオンニュート旗ウラーンムチルの隊長である。演者は牧其爾、陶格陶、烏日古木垵、畢力格などである。牧其爾と烏日古木垵は、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。陶格陶は小天賦芸術団のダンス教師である。畢力格は、1987 年生まれのモンゴル人男性で 2004 年からオンニュート旗ウラーンムチル隊員である。

#### 表 11 順番 16 歌「心から愛する故郷」

歌「心から愛する故郷」の詳細は不明である。タイトルから故郷オンニュート旗を賛美した作品であると考えられる。作詞は色・烏力吉巴雅爾で、作曲は烏恩である。色・烏力吉巴雅爾は、オンニュート旗中学校のモンゴル語の教師である。演者は轍迹組合（バンド）である。轍迹組合は、オンニュート旗地元の若手歌手 2 人により組織されたバンドである。2 人について、オンニュート旗 2013 年の春祭り演目で紹介している（5.1.4 を参考）。

#### 表 11 順番 17 合唱「復興に向かう」

合唱「復興に向かう」は、中国の経済的かつ文化的な繁栄を讃えた作品である。この歌は中華人民共和国が成立 60 周年を祝いに 2009 年に制作された。オンニュート旗ウラーンムチルは、2011 年の演目でこの歌を導入した。指揮は張成富で、アコーディオン演奏は烏恩である。張成富は漢人で、オンニュート旗ウラーンムチルの元隊長である。演唱は老幹部局龍郷芸術団である。

#### 表 11 順番 18 歌舞「平和と繁栄」

歌舞「平和と繁栄」は、歌「平和と繁栄」を基にし、国家が安定で、平和であることから、文明が栄え、民族が復興し、国家繁栄を讃えた作品である。このタイトルで多くの歌が制作されている。作詞は徐立軍で、作曲は烏恩である。徐立軍について詳細は不明である。演唱は司大利、李双双、宝力格、金光である。李双双、金光はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。司大利は、オンニュート旗の都市管理執行局の職員である。宝力格は 30 代のモンゴル人男性で、2015 年から 2016 年までオン

ニュート旗ウラーンムチルの隊員である。ほか詳細は不明である。振付は斯琴巴特爾で、演者は興安、其力格爾、同垓嘎などである。興安は、モンゴル人男性で、2006年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。斯琴巴特爾と其力格爾はオンニュート旗隊員である。同垓嘎は、額爾敦同垓嘎と言い、モンゴル人男性で、2003年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

#### 5.3.4 演目の総括

##### ①上演作品数とその種類

2016年のオンニュート旗の春祭り演目パンフレットでは、18の演目が披露された。演目の種類は、ダンス、歌、ファッションショー、歌舞、合奏曲、馬頭琴曲、合唱の7種類がある。この中、歌が8作品、ダンスが4作品、歌舞が2作品、ファッションショーが1作品、合奏曲が1作品、馬頭琴曲が1作品、合唱が1作品である。

##### ②春祭りの上演作品とウラーンムチルの関係

2016年のオンニュート旗の春祭りは「連携公演会」として行い、オンニュート旗ウラーンムチル以外にオンニュート小天駝芸術団、新蘇莫蘇木滿都海斯琴服飾パフォーマンス隊、老幹部局龍郷芸術団、轍迹組合（バンド）など地元の民営歌舞団やバンド、芸能人が参加している。

その結果、18作品の中で、13作品はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。ほかの5作品である歌「龍の故郷」、歌「母親」、ダンス「のびのびと振る舞う」、歌「天辺」、馬頭琴曲「スペイン闘牛士の行進曲」ほかの民営歌舞団やバンドが披露している。公演比例から、オンニュート旗の歌舞団の中で、ウラーンムチルが主としているものの、他の民営歌舞団も加わっていることが分かった。

##### ③上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲、編曲の順番で分類する。

###### (1) 振付

振付は、斯琴巴特爾と哈斯図雅の2人で、2人ともオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。斯琴巴特爾は、ダンス「吉祥の草原」を始め、ファッションショー「オンニュート賛」など6作品に振付をしている。哈斯図雅はウラーンムチルの創新期（2002-2012年）に多くの作品に振り付けしていたが、ダンス「刺繡」の1作品のみ振付している。

###### (2) 作詞

作詞は、阿古垓泰、芷父、劉恒、孟宝力格、孟根、吉日格愣、色・烏力吉巴雅爾、徐立軍の8人いる。阿古垓泰は作家で、歌「龍の故郷」に作詞している。芷父について詳細不明である。劉恒は漢人歌手である。2人は歌「共に中国の夢を築きあげよう」

を作詞している。孟宝力格は歌舞「愛の旋律」を作詞しているが、ほか詳細不明である。孟根はオンニュート旗の歌手で、歌「母親」を作詞している。吉日格楞は画家で、歌「天辺」を作詞している。色・烏力吉巴雅爾は、オンニュート旗中学校の教師で、歌「心から愛する故郷」を作詞している。徐立軍は歌舞「平和と繁栄」を作詞しているが、ほか詳細は不明である。

### (3) 作曲

作曲は、斯琴朝格図、烏恩、印青、孟根、宋滙林、烏蘭図嘎、帯欽の7人である。この中、烏恩は、オンニュート旗ウラーンムチル所属で、ファッションショー「オンニュート賛」を始め5作品を作曲している。斯琴朝格図は中央民族大学所属で、「龍の故郷」を作曲している。印青は中国共産党中央軍事委員会の政治工作部歌舞団の所属で、歌「共に中国の夢を築きあげよう」を作曲している。孟根はオンニュート旗の歌手で、歌「母親」を作曲している。宋滙林は赤峰市バーリン右旗ウラーンムチル所属で、合奏曲「春の喜び」を作曲している。烏蘭図嘎は作曲家で、歌「天辺」を作曲している。帯欽はシリソゴル盟の音楽制作者で、ダンス「刺繡」を作曲している。

### ④上演作品のテーマ

パンフレットから判断したもので、多くの作品の詳細は不明である。だが、インターネットや演目名（タイトル）から推測すると、まず共産党と社会主義を讃えた作品は歌「共に中国の夢を築きあげよう」と「復興に向かう」、「平和と繁栄」、歌「賛歌」がある。歌「共に中国の夢を築きあげよう」は、習近平の掲げる「偉大なる中華民族を復興する中国の夢」を基に制作した作品である。歌「復興に向かう」は、2009年に漢人に制作された歌で、オンニュート旗ウラーンムチルが2011年から導入している。歌「平和と繁栄」は国家が安定で、平和であることから、文明が栄え、民族が復興し、国家繁栄を讃えた作品である。さらに、このタイトルで漢人に多くの歌が制作されている。民族の団結や毛澤東を讃えた作品には、歌「賛歌」がある。これはオンニュート旗ウラーンムチルに草創期（1957-1965年）から導入された演目である。

またダンス「吉祥の草原」は2013年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットにもあった。このダンスの演目名から草原を賛美した作品であると考えられるが、共産党の政策を賛美した可能性も高い。歌「心から愛する故郷」は演目名からオンニュート故郷、地域を表現した演目と考えられるが、共産党の指導や政策を讃えた可能性も高い。さらに合奏曲「春の喜び」とダンス「我々の幸福と喜び」も共産党の指導や政策を讃えた可能性の高い演目と考えられる。

地域を主とする演目は歌「龍の故郷」とファッションショー「オンニュート賛」で、ダンス「刺繡」である。

モンゴル文化の演目は、歌「天辺」である。「天辺」は、2005年にモンゴル人歌手布林・バヤルのアルバムの収録曲として誕生し、モンゴル人に人気を博した歌である。ほかモンゴル文化を表現した演目は見当たらない。モンゴル楽器の馬頭琴でアレ

ンジした演奏曲は「スペイン闘牛士の行進曲」である。

ほかテーマの演目では、応援ソングとして歌「気随気俥」と「信じる」がある。子ども向けの演目は、「のびのびと振る舞う」である。男女の恋愛を讃えたラブソングは歌舞「愛の旋律」である。母親に捧げた演目は歌「母親」である。

さらに、モンゴル服をアレンジしてファッションショーの演目を作っている。こうしたことからウランムチルは積極的に外部的な要素を導入している動きが窺える。

### ⑤2013年のオンニュート旗春祭りの演目との比較

まず2013年のオンニュート旗春祭りの演目は21作品があるに対し、2016年のオンニュート旗春祭りの演目は18作品がある。2016年は、演目数が3作品少なくなったが、演目の種類が2種類多くなった。この中で、ダンス、歌、歌舞、馬頭琴曲の4種類は重複している。2013年は、重複の4種類にプラス戯劇という種類がある。2016年は、重複の4種類にプラスにファッションショー、合奏曲、合唱の種類がある。

次に、2013年は、21演目の中で、ダンス「紅い歌の合唱」をはじめ5作品が共産党や民族の団結など社会主義思想を讃えた可能性が高い。地域を主とする演目が5作品である。ほかは、モンゴル文化、歴史、応援ソングなどである。2016年は、18演目の中で、歌「共に中国の夢を築きあげよう」をはじめ8作品が共産党や民族の団結など社会主義思想を讃えた可能性が高い。地域を主とする演目は3作品である。ほかは、モンゴル文化、歴史、応援ソングなどである。

## 5.4 オンニュート旗ウランムチルの2020年春祭り演目

次に、オンニュート旗ウランムチルの2020年の春祭りの演目を分析する。そのため、まずオンニュート旗春祭りの演目パンフレットの紹介し、その後に公演について記述する。

図9と図10は2020年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットである。



図9 演目の表面



図10 演目の裏面

図9と図10 2020年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

出典：2020年1月 オンニュート旗文化局の王桂平に提供

#### 5.4.1 2020年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレット

2020年のオンニュート旗春祭りの演目パンフレットは一枚のA3サイズの紙で表面と裏面で印刷されている。表面はイベントのタイトルで、モンゴル語と中国語で書かれている。それが、また左側と右側に分かれ、右上には、福という字が円に囲まれて書かれて、その下にはイベントのタイトルが書かれている。イベントのタイトルは「幸福のオンニュート旗、感情が溢れる玉龍の郷—2020 オンニュート旗の春祭り連合演出会」と書かれている。さらにその下には、演目単と中国語で書かれている。表面の左側には、「2020 鼠年の吉祥で、万事が順調である」と中国語とモンゴル語で書かれている。この年、2013年と2016年と異なって、中国語がメインに大きくデザインされているのが特徴である。パンフレットのデザインには、北京の天安門広場にある「華表」という中国の伝統建築様式に用いられる標柱と石ライオンが素材として使われている。2013年にあった龍と2016年にあったモンゴル模様のデザインはない。

演目パンフレットの裏面には、イベントのタイトル、振付、作曲、作詞、演奏、演唱、演者について名前は書かれている。所属や民族などほか詳細はない。公演のタイトルは、「幸福のオンニュート旗、感情が溢れる玉龍の郷—2020 オンニュート旗の春祭り連合演出会」である。パンフレットには、25の演目が書かれている。演目の内容について一切説明していない。だが、この年の演目録画が、インターネットで公開されている。パンフレットの表面は赤色に金色の文字で裏面は白生地に赤色の文字で、デザインされている。演目はオープニングと4部に分かれている。4部には、それぞれ小タイトルがある。1部のタイトルは「歓楽・吉祥」で、2部のタイトルは「ゆとりのある社会へ」、3部のタイトルは「龍の郷の夢を実現」、4部のタイトルは「出帆して遠くへ航海する」である。

#### 5.4.2 2020年オンニュート旗春祭りの主催と観客

演目パンフレットには、イベントの主催や共催が書かれていない。公演の場所も書かれていない。オンニュート旗ウラーンムチルの隊員によると、オンニュート旗春祭りはオンニュート旗演芸センター（演芸中心）で行われたという。この演芸センターは、満席で500人の観客が入り、さらに春祭りはテレビ放送が行われた。主催機関は、オンニュート旗共産党委員会とオンニュート旗人民政府である。共催は、オンニュート旗文化・広報・テレビ・体育局とオンニュート旗広報・テレビセンターである。

図9と図10のパンフレットの演目に関する制作者や演者について、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員ケ氏（モンゴル人男性）とオンニュート旗文化局（文化館）の職員コ氏（漢人女性）に2021年8月18日にウィーチャットで確認している。その演目を表にしたものが表12である。

表12 2020年のオンニュート旗春祭りパンフレットの演目

2020年のオンニュート旗春祭りの演目			
順番	種類	演目名	制作者/演者
オープニング			

1	歌舞	紅紅で新年を向かう	演唱：司大利、李双双、何丹丹、王艶娟 演者：紅舞舞踏芸術団、姉妹舞踏隊、女人花舞踏隊 振付：孟根陶婭、牧其爾
第一部 歓楽・吉祥			
2	ダンス	新年を賀する	演者：ウラーンムチル 振付：牧其爾
3	歌	祖国のため乾杯	演者：劉静怡 作詞：劉麟 作曲：関峽
4	ファッションショー	オンニユート部落	演者：徳日蘇ガチャ牧畜民 振付：劉臻、孟根陶婭
5	歌	夢の中のオアシス	作詞：哈斯巴根 作曲：鉄木爾 演唱：鉄木爾
6	歌	お茶の歌	作詞・作曲：鉄木爾 演唱：鉄木爾
第二部 ゆとりのある社会へ			
7	ダンス	モンゴル馬	演者：小天駝芸術団
8	歌	村に住む幹部	作詞：龍瀑、李旭東 作曲：張成富 演者：呉艶波、楊曉彤
9	ダンス	箸の踊り	振付：巴達瑪 演者：格日樂図雅
10	戯劇	脱貧困の良い時期	制作：旗の朗読協会 演者：趙海霞、李旭峰、繆文龍、王婷
11	歌	綺麗なオンニユート	作詞・作曲・演唱：哈桑
12	歌	奇妙な縁	作詞・作曲・演唱：哈桑
第三部 龍の郷の夢を實現			
13	ダンス	母親の作ったミルクティー	演者：オンニユート旗の共産党委員会組織部の老幹部の龍郷芸術団
14	評劇	『花為媒』の一部「喜びの一刻」	演者：陳子榮、史学峰
15	歌	新春	作詞・作曲：鉄木爾 演唱：娜布其
16	歌	恋しがる	作詞：倉央嘉措 作曲：娜布其 演唱：娜布其
17	原生態	吉祥の祝詞	演者：オンニユート旗ウラーンムチル
18	歌	私は草原の子ども	作詞：崔富 作曲：斯琴朝克図 演者：梅林組合（バンド）
19	歌	龍の故郷	作詞：阿古垃泰 作曲：斯琴朝格図 演者：梅林組合（バンド）

第四部 出帆して遠くへ航海する			
20	ダンス	頂碗踊り	振付：牧其爾 演者：文化システム職員、 オンニュート旗ウラーンムチル、 紅舞舞踏芸術団
21	歌	私は信じる	演唱：無疆楽隊（バンド）の金光
22	原生态	馬	演者：オンニュート旗のモンゴル 族に幼稚園
23	歌	母親	作詞・作曲：扎木查干 演者：青格勒
24	歌	祝福	作詞：鋼胡日勒 作曲：敖特根巴雅爾 演者：青格勒、薩仁高娃
25	合唱	壮大な旅	演者：オンニュート旗の共産党委 員会組織部の老幹部の龍郷芸術 団、高紅梅、孫秀峰

出典：オンニュート旗ウラーンムチル演目パンフレットにより筆者作成

表 12 は演目の順番、種類、演目名、制作者/演者から構成されている。

演目の順番はパンフレットにある演目の順番を指す。

種類は歌舞、ダンス、ファッションショー、戯劇、評劇、原生态、合唱で構成されている。新しく加わった種類はなかった。

この年の演目はインターネットで公開されている。インターネットでの検索タイトルは『幸福翁牛特情满王龙乡—翁牛特旗 2020 年春节联欢晚会』<sup>92</sup>である。筆者はこの年の演目をインターネットで見ているため、以下はそれに基づき演目内容を紹介する。

#### 5.4.3 各演目の内容

##### 表 12 順番 1 オープニング 歌舞「紅紅で新年を向かう」

歌舞「紅紅で新年を向かう」は、ワクワクした気持ちで新年を向かうという内容で、新年の喜びを讃えた作品である。振付は孟根陶婭と牧其爾で、演唱は司大利、李双双、何丹丹、王艶娟である。孟根陶婭はモンゴル人女性で、1987年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。牧其爾は、モンゴル人女性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。演唱の司大利、何丹丹、王艶娟について詳細は不明である。李双双は漢人男性で、2013年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。演者は紅舞舞踏芸術団、姉妹舞踏隊、女人花舞踏隊である。紅舞舞踏芸術団はオンニュート旗地元の子供向けのダンス訓練班である。姉妹舞踏隊と女人花舞踏隊はオンニュート旗地元の大人向けの娯楽と健康のためのダンス訓練班である。

##### 表 12 順番 2 第一部「歓楽・吉祥」 ダンス「新年を賀する」

ダンス「新年を賀する」は、新年の喜びを讃えた作品である。振付は牧其爾で、演

<sup>92</sup> オンニュート旗ウラーンムチルの 2020 年春祭り（2021 年 7 月 23 日閲覧）  
<https://v.qq.com/x/page/f3057p808he.html>

者はオンニュート旗ウラーンムチルである。牧其爾はモンゴル人女性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。オンニュート旗ウラーンムチルとは、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員ことを指す。

#### 表 12 順番 3 歌「祖国のため乾杯」

歌「祖国のため乾杯」は、祖国の中国は壮大で輝かしいことにみんなで乾杯しようという共産党の愛国主義を宣伝した歌である。習近平の掲げる「偉大なる中華民族の復興の夢」に合わせて制作された作品である。この歌は、2019年に中国で大ヒットになった。作詞は劉麟で、作曲は関峽である。劉麟は漢人男性で、中国の有名なギター演奏者とともに流行音楽のヒットメーカーである。関峽は満洲人男性で、中国の東方歌舞団などを経て、現在は中国の国家オーケストラの団長である。演者は劉静怡である。劉静怡は1993年生まれの漢人女性で、オンニュート旗信用連社職員である。

#### 表 12 順番 4 ファッションショー「オンニュート部落」

ファッションショー「オンニュート部落」は、オンニュート旗の伝統服飾と服飾に関する飾りを表現したショーである。振付は劉臻と孟根陶婭で、演者は徳日蘇ガチャの牧畜民である。劉臻は漢人男性で、1998年から2004までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。ほか詳細は不明である。孟根陶婭はモンゴル人女性で、1987年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。演者の徳日蘇ガチャの牧畜民とは、オンニュート旗に紫城町管区という行政区画があり、その村にいる牧畜民を指す。

#### 表 12 順番 5 歌「夢の中のオアシス」

歌「夢の中のオアシス」は、モンゴルの大地、草原、緑を讃えた作品である。環境を保護する視点から作成した作品であると考えられる。作詞はハ斯巴根で、作曲と演唱は鉄木爾である。ハ斯巴根について詳細は不明であるが、名前からモンゴル人と考えられる。鉄木爾はモンゴル人男性で、鉄締バンドのメンバーである。鉄締バンドは、内モンゴルで1993年に4人のモンゴル人男性に組織されたバンドである。

#### 表 12 順番 6 歌「お茶の歌」

歌「お茶の歌」は、幼馴染の友情が長く続いたことに感謝するという内容の作品である。お茶を飲みながら、こうした友情を讃えようという主旨である。作詞・作曲・演唱は上述と同じく鉄木爾である。

#### 表 12 順番 7 第二部「ゆとりのある社会へ」 ダンス「モンゴル馬」

ダンス「モンゴル馬」は、モンゴルの草原に自由自在に走る馬を表現するダンスである。馬の草を食べる様子や遊ぶ様子、走る様子が表現されている。演者は小天駝芸術団である。振付と作曲など詳細は不明である。

#### 表 12 順番 8 歌「村に住む幹部」

歌「村に住む幹部」は、ゆとりある社会を実現するため、農民と一緒に働く、共産党の勤勉な幹部を讃えた作品である。作詞は龍瀑と李旭東で、作曲は張成富である。龍瀑について詳細は不明である。李旭東は、40代の漢人男性で、オンニュート旗のフリー司会者である。張成富は漢人男性で、1971年から2012年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員であった。演者は呉艶波と楊曉彤である。呉艶波は30代の漢人男性で、オンニュート旗の中学校教師である。楊曉彤は40代の漢人女性で、オンニュート旗の中学校教師である。

#### 表 12 順番 9 ダンス「箸の踊り」

ダンス「箸の踊り」は、箸を持ち、モンゴル女性の牧畜生活を表現するダンスである。「箸の踊り」はウラーンムチルの草創期（1957-1965年）の1958年にオルドス地域からオンニュート旗ウラーンムチルの演目として導入されている。元々は、オルドス地域の民間踊りである。2020年オンニュート旗春祭りの「箸の踊り」の振付は巴達瑪で、演者は格日樂図雅である。巴達瑪は1954年生まれのモンゴル人女性で、1970年からオルドス市の烏審旗ウラーンムチルの隊員である。巴達瑪は「箸の踊り」を1982年に再び振り付けている（内蒙古人民出版社1997：398）。格日樂図雅はモンゴル人女性で、2003年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。格日樂図雅は巴達瑪が振り付けた「箸の踊り」を踊った。

#### 表 12 順番 10 戯劇「脱貧困の良い時期」

戯劇「脱貧困の良い時期」は、一人の農民が村に移住した共産党の派遣幹部に励まされ貧困から脱した物語である。歌「村に住む幹部」と内容が重複している。習近平が1992年に掲げた「脱貧困」という思想を讃えた作品である。歌「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」も、習近平が掲げた「脱貧困」の影響を受けて制作されたものである。制作は旗の朗読協会、演者は趙海霞、李旭峰、繆文龍、王婷である。趙海霞、李旭峰、繆文龍、王婷はオンニュート旗の朗読協会のメンバーで、ほか詳細は不明である。

#### 表 12 順番 11 歌「綺麗なオンニュート」

歌「綺麗なオンニュート」は、オンニュート旗の山水の風景を讃えた作品である。作詞・作曲・演唱は哈桑である。哈桑は1974年生まれの漢人男性、赤峰市の歌手である。

#### 表 12 順番 12 歌「奇妙な縁」

歌「奇妙な縁」は、モンゴルの自然や家畜などを描写し、モンゴル人として草原に生まれたのは、奇妙な縁があるからだとする作品である。作詞・作曲・演唱は上述した哈桑である。

**表 12 順番 13 第三部「龍の郷の夢を実現」 ダンス「母親の作ったミルクティー」**

ダンス「母親の作ったミルクティー」は、子どもたちが碗を持ち母親が作ってくれたミルクティーを幸せな感じで受け取り、母親に感謝の気持ちを表現した作品である。演者はオンニュート旗の共産党委員会組織部の老幹部の龍郷芸術団である。振付は不明である。

**表 12 順番 14 評劇「喜びの一刻」**

評劇「喜びの一刻」は、1963年に漢人に制作された『花為媒』という評劇の一部である。その内容は、封建社会の習俗である親の意思で結婚する制度を批判したもので、共産党の指導で自由恋愛ができることになったことを讃えたものである。この評劇は、当初は河北省の漢人成兆才（1874-1929年）が中国の古典小説『聊齋志異』を舞台劇として改変したものである。その後、呉祖光（1917-2003）が、1963年に成兆才の改変した舞台劇を評劇として改変したものである。演者は陳子榮と史学峰である。陳子榮は、1972年生まれ、漢人男性で、オンニュート旗図書館の館員である。史学峰は40代の漢人の男性で、フリーランスである。

**表 12 順番 15 歌「新春」**

歌「新春」は、新年の喜びを讃えた作品である。新年がきて、人々は希望と自信が満々で新しい生活を迎えているという内容である。作詞・作曲は鉄木爾で、演唱は娜布其である。鉄木爾はモンゴル人男性で、鉄締バンドのメンバーである。娜布其は、モンゴル人女性で、オンニュート旗出身の歌手である。

**表 12 順番 16 歌「恋しがる」**

歌「恋しがる」は、若者がはるか遠くにいる恋人に会えないことは我慢しても、それでもなお思いは止まらぬという内容である。この歌は詩人としても名高かった第六世ダライ・ラマ倉央嘉措（Tshangs-dbyangs-rgya-mtsho 1683-1706年）の詞に曲をつけたもので、作曲・演唱は娜布其である。娜布其は上述と同じくモンゴル人歌手である。

**表 12 順番 17 原生态「吉祥の祝詞」**

原生态「吉祥の祝詞」は、馬頭琴と三線と太鼓の合奏曲である。時に馬の疾走、時に自然の様々な音を表現する曲である。演者はオンニュート旗ウラーンムチルである。作曲は不明である。

**表 12 順番 18 歌「私は草原の子ども」**

歌「私は草原の子ども」は、草原のモンゴル人女性が漢人の孤児を育てあげたことで、孤児は自分は草原の子どもであり、どこ行ってもモンゴルを忘れないという内容の作品である。1960年代初に中国は飢餓の危機に陥り、上海から3,000名孤児を内モンゴルに送った。こうした中、シリンドル盟のドグイマという女性が28名の孤児

を育てあげた。このことをきっかけに、2019年9月に中国国家主席習近平がドグイマに「人民の模範」という栄誉を与えた。この歌は、漢人孤児がモンゴル人のお母さんに恩返しのために制作したものである。その主旨は、共産党が指名した模範人を讃えることである。作詞は催富で、作曲は斯琴朝格図である。演唱は梅林組合である。

**表 12 順番 19 歌「龍の故郷」**

歌「龍の故郷」は、オンニュート旗の山水を讃えた作品である。この歌は2013年のオンニュート旗春祭りや2016年のオンニュート旗祭りで披露されている。作詞は阿古拉泰で、作曲は斯琴朝格図である。演唱は梅林組合（バンド）である。

**表 12 順番 20 第四部「出帆して遠くへ航海する」 ダンス「頂碗踊り」**

ダンス「頂碗踊り」は、牧畜作業を基に共産党を讃えた作品としてウラーンムチルの草創期（1957-1965年）の1962年に制作されている。振付は牧其爾で、演者は文化システム職員、オンニュート旗ウラーンムチル、紅舞舞踏芸術団である。牧其爾はモンゴル人女性で、1995年からオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。文化システム職員は、オンニュート旗の文化館や文化局の職員をいうが、具体的な詳細は不明である。

**表 12 順番 21 歌「私は信じる」**

歌「私は信じる」は、2016年のオンニュート旗ウラーンムチル春祭りで歌っている。作詞は刘虞瑞で、作曲は陈国华である。振付は斯琴巴特爾で、演唱は無疆楽隊（バンド）の金光である。

**表 12 順番 22 原生态「馬」**

原生态「馬」は、馬の鳴き声や走りを表現した作品である。原生态「吉祥の祝詞」と同じく馬頭琴、三線、太鼓とともに馬を讃えた詩を読んで表現した作品である。演者はオンニュート旗のモンゴル幼稚園である。

**表 12 順番 23 歌「母親」**

歌「母親」は、育ててくれた母に感謝するという内容の作品である。この歌は、元々はブリヤートのモンゴル人の母親に捧げる歌である。作詞・作曲は扎木查干で、演唱は青格勒である。扎木查干は、ブリヤート共和国のモンゴル人歌手である。青格勒はオンニュート旗の出身で、内モンゴル大学芸術学院准教授である。

**表 12 順番 24 歌「祝福」**

歌「祝福」は、新年の喜びを讃えた作品である。新年がきて、親戚と会い、集まって挨拶することはモンゴル人の伝統礼儀であるという内容の作品である。作詞は鋼胡日勒で、作曲は敖特根巴雅爾である。鋼胡日勒と敖特根巴雅爾はモンゴル国の HURD

バンドのメンバーである。この歌はモンゴル国から導入した歌である。演唱は青格勒と薩仁高娃である。青格勒は上述と同じく内モンゴル大学芸術学院准教授である。薩仁高娃は赤峰市の伊澤舞踏芸術訓練学校の校長である。

#### 表 12 順番 25 合唱「壮大な旅」

合唱「壮大な旅」は、共産党の指導で国家が強くなり、人民の生活は豊かで、幸福であるという主旨の作品である。中国国家主席習近平の「偉大なる中華民族復興の夢」を讃えて制作した作品である。2017年に制作され、中国で大ヒットした歌である。作詞は朱海で、作曲は印青である。朱海は1958年生まれの漢人男性で、詩、詞、劇作者である。印青は歌「復興に向かう」と「共に中国の夢を築きあげよう」を同じく作曲した人物である。演唱は、オンニュート旗の共産党委員会組織部の老幹部の龍郷芸術団、高紅梅、孫秀峰である。オンニュート旗の共産党委員会組織部の老幹部の龍郷芸術団は、オンニュート旗の定年退職した老年幹部たちに組織された芸術団体である。高紅梅、孫秀峰は龍郷芸術団のメンバーであるが、詳細は不明である。

### 5.4.4 演目の総括

#### ①上演作品数とその種類

2020年のオンニュート旗の春祭りでは、25の演目が披露された。演目の種類は、歌舞、ダンス、歌、ファッションショー、戯劇、評劇、原生态、合唱の8種類がある。歌が13作品、ダンスが5作品、原生态が2作品、歌舞が1作品、ファッションショーが1作品、戯劇が1作品、評劇が1作品、合唱1である。

#### ②春祭りの上演作品とウラーンムチルの関係

2020年のオンニュート旗の春祭りは「連携公演会」として行い、オンニュート旗ウラーンムチル以外に紅舞舞踏芸術団、姉妹舞踏隊、女人花舞踏隊、徳日蘇ガチャ牧民、小天駝芸術団、老幹部の龍郷芸術団、文化システム職員、オンニュート旗のモンゴル族に幼稚園など地元の民営歌舞団やバンドが参加している。さらに鉄木爾、娜布其、青格勒、薩仁高娃など地元出身の歌手（芸能人）も参加している。

その結果、25作品の中で、7作品だけがオンニュート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。16作品である歌「祖国のため乾杯」、歌「夢の中のオアシス」、歌「お茶の歌」、ダンス「モンゴル馬」、歌「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」、歌「綺麗なオンニュート」、歌「奇妙な縁」、歌「新春」、評劇「喜びの一刻」、歌「恋しがる」、歌「私は草原の子ども」、歌「龍の故郷」、歌「母親」、歌「祝福」、合唱「壮大な旅」については、オンニュート旗地元の民営歌舞団、バンド、歌手が携わっている。またダンス「母親の作ったミルクティー」、原生态「馬」について振付と作曲は不明であることからオンニュート旗ウラーンムチルとの関係が不明である。

公演演目の比例から、ウラーンムチルが7作品披露し、地元の民営歌舞団や芸能人より多いことがわかる。つまり、オンニュート旗の歌舞団の中で、オンニュート旗ウ

ラーンムチルが主としている。しかし、2013年のオンニユート旗春祭りと2016年のオンニユート旗春祭りでの公演演目と比べると、2020年のオンニユート旗春祭りでのオンニユート旗ウラーンムチルの公演演目は少なくなっていることがわかる。

### ③上演作品の制作者

制作者について、振付、作詞、作曲の順番で分類する。

#### (1) 振付

振付は、孟根陶婭、牧其爾、劉臻、巴達瑪の4人である。孟根陶婭と牧其爾はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。劉臻はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員経験者である。巴達瑪は1970年からオルドス市の烏審旗ウラーンムチルの隊員であったが、ほか詳細は不明である。

孟根陶婭は牧其爾と歌舞「紅紅で新年を向かう」に振付しているとともに劉臻とファッションショー「オンニユート部落」の2作品に振付している。

牧其爾は歌舞「紅紅で新年を向かう」を孟根陶婭とともに振付し、ダンス「新年を賀する」と「頂碗踊り」の3作品に振付している。

劉臻はファッションショー「オンニユート部落」を孟根陶婭と振付している。

巴達瑪はダンス「箸の踊り」に振付している。

#### (2) 作詞

作詞は、劉麟、哈斯巴根、鉄木爾、龍瀑、李旭東、哈桑、倉央嘉措、崔富、阿古拉泰、刘虞瑞、扎木查干、鋼胡日勒の12人である。

劉麟は流行音楽の創作者で、歌「祖国のため乾杯」に作詞している。

哈斯巴根は所属不明で、歌「夢の中のオアシス」に作詞している。

鉄木爾は鉄締バンドのメンバーで、歌「お茶の歌」と「新春」の2作品に作詞している。

龍瀑は所属不明で、歌「村に住む幹部」を李旭東とともに作詞している。

李旭東はフリー司会者で、歌「村に住む幹部」を龍瀑とともに作詞している。

哈桑は音楽制作者で、歌「綺麗なオンニユート」と「奇妙な縁」の2作品に作詞している。

倉央嘉措は第六世ダライ・ラマで、歌「恋しがる」の詞は、六世親下の古詩である。

崔富は作家で、歌「私は草原の子ども」に作詞している。

阿古拉泰は作家で、歌「龍の故郷」に作詞している。

刘虞瑞は台湾の作詞家で、歌「私は信じる」に作詞している。

扎木查干はブリヤート共和国の歌手で、歌「母親」に作詞している。

鋼胡日勒はモンゴル国のHURDバンドのメンバーで、歌「祝福」を作詞している。

### (3) 作曲

作曲は、関峽、鉄木爾、張成富、哈桑、娜布其、斯琴朝克図、陈国华、扎木查干、敖特根巴雅爾の9人である。

関峽は中国の国家オーケストラ所属で、歌「祖国のため乾杯」に作曲している。

鉄木爾は鉄締バンドのメンバーで、歌「夢の中のオアシス」と「お茶の歌」、「新春」の3作品に作曲している。

張成富はオンニユート旗ウラーンムチルの経験者で、歌「村に住む幹部」に作曲している。

哈桑は音楽制作者で、歌「綺麗なオンニユート」と「奇妙な縁」の2作品に作詞・作曲している。

娜布其は歌手で、歌「恋しがる」に作曲している。

斯琴朝克図は中央民族大学所属で、歌「私は草原の子ども」と「龍の故郷」の2作品に作曲している。

陈国华は台湾の作曲家で、歌「私は信じる」に作曲している。

扎木查干はブリヤート共和国の歌手で、歌「母親」に作詞・作曲している。

敖特根巴雅爾はモンゴル国の HURD バンドのメンバーで、歌「祝福」に作曲している。

### ④上演作品のテーマ

まず共産党と社会主義を讃えた作品は、歌「祖国のため乾杯」、歌「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」、評劇「喜びの一刻」、歌「私は草原の子ども」、ダンス「頂碗踊り」、合唱「壮大な旅」である。この中で、歌「祖国のため乾杯」、歌「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」、合唱「壮大な旅」は習近平の掲げる「偉大なる中華民族復興の夢」を讃えたものである。さらに、新年の喜びを表現した作品である歌舞「紅紅で新年を向かう」、ダンス「新年を賀する」も共産党と社会主義を讃えた傾向がある。

地域性を強調し、オンニユート地域を賛美した作品は、歌「綺麗なオンニユート」と「龍の故郷」である。2つの作品と共にオンニユート旗の山水の風景を讃えた作品である。一方でダンス「オンニユート部落」も地域の文化を表現している。モンゴルの文化を讃えた作品としてファッションショー「オンニユート部落」、「箸の踊り」、原生態「吉祥の祝詞」、歌「祝福」である。モンゴルの草原、自然、家畜を讃えた作品は、歌「夢の中のオアシス」、ダンス「モンゴル馬」、歌「奇妙な縁」、原生態「馬」、歌「新春」である。母親に捧げた作品としてダンス「母親の作ったミルクティー」、歌「母親」である。

青年男女の恋愛をテーマにした作品は、歌「恋しがる」である。

友情をテーマにした作品は歌「お茶会の歌」である。

応援ソングとして歌「私は信じる」である。その内容は、夢を持って頑張れば、必ず夢が実現するという主旨の流行歌曲である。

表 12 のオンニユート旗ウラーンムチルの 2020 年春祭り演目パンフレットから、共産党や社会主義思想を讃えた演目が増えたことが分かる。この年の演目がすべて 25 作品あり、演目名から 9 作品が共産党や社会主義思想を讃えている。またこの年の春祭りにおいて、オンニユート旗ウラーンムチルの隊員が参加する割合が減少している。

### ⑤2013 年、2016 年のオンニユート旗春祭りの演目との比較

2013 年のオンニユート旗春祭りの演目は 21 作品で、2016 年のオンニユート旗春祭りの演目は 18 作品である。2020 年のオンニユート旗春祭りの演目は 25 作品である。演目の種類は 2013 年 5 種類あったものが、2016 年に 7 種類がある。2020 年は 8 種類がある。このデータから、まずオンニユート旗春祭りの演目が 2016 年は減少したが、2020 年は 2013 年より増加していることが窺える。次に、演目の種類は年々増加している。

その次に、2013 年は、5 作品が政治宣伝として共産党や民族の団結など社会主義思想を讃えた可能性が高い。地域を主とする演目が 5 作品である。ほかは、モンゴル文化、歴史、応援ソングなどである。2016 年は、8 作品が共産党や民族の団結など社会主義思想を讃えた可能性が高い。地域を主とする演目は 3 作品である。ほかは、モンゴル文化、歴史、応援ソングなどである。2020 年は、歌「祖国のため乾杯」をはじめ 9 作品が共産党や民族の団結など社会主義思想を讃えている。この 9 作品の中で、特に歌「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」、合唱「壮大な旅」は習近平の政策を讃えている。オンニユート地域を主とする作品が 3 作品である。ほかはモンゴル文化、歴史、応援ソングなどである。

最後にオンニユート旗春祭りにおけるオンニユート旗ウラーンムチルと地元の民間歌舞団と芸能人との連携公演会から政治宣伝について考察する。

2013 年のオンニユート旗春祭りは 21 作品で、16 作品はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。政治宣伝に関する 5 作品の中で、歌「モンゴルと漢人の心は繋がる」、戯劇「皮影の伝説」、歌「吉祥の草原」の 3 作品はオンニユート旗ウラーンムチルが携わっている。残りの 2 作品であるダンス「紅い灯を高く揚げる」と歌「紅い歌の連唱」は地域の民間歌舞団や芸能人が披露している。

2016 年のオンニユート旗春祭りは 18 作品で、13 作品はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。政治宣伝に関する作品の中で、歌「共に中国の夢を築きあげよう」と「復興に向かう」、「平和と繁栄」、歌「賛歌」の 4 作品は明確に共産党と社会主義を讃えた作品である。またダンス「吉祥の草原」と合奏曲「春の喜び」、ダンス「我々の幸福と喜び」、歌「心から愛する故郷」4 作品も共産党と社会主義を讃えた可能性が高い作品である。この 8 作品がすべてオンニユート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。

2020 年のオンニユート旗春祭りは 25 作品で、7 作品だけがオンニユート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。こうした中で、政治宣伝に関する作品では 9 作品の中で、歌舞「紅紅で新年を向かう」、ダンス「新年を賀する」と「頂碗

踊り」の3作品はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。残りの6作品である歌「祖国のため乾杯」と「村に住む幹部」、戯劇「脱貧困の良い時期」、評劇「喜びの一刻」、歌「私は草原の子ども」、合唱「壮大な旅」は地域の民営歌舞団や芸能人が披露している。このことから、地方政府は地元の民営歌舞団や芸能人についても共産党の政治宣伝に参加させ、コントロールしている狙いが窺える。

## 5.5 まとめ

本節では、2013年から2020年までのオンニュート旗ウラーンムチルの演目を分析するため、オンニュート旗春祭りの演目パンフレットを中心に取り上げた。従って、内モンゴルでは、地域（地方）の春祭りは、連携公演として地元のウラーンムチル及び民営歌舞団や芸能人などが参加し、当時の最も注目していた演目を披露するからである。こうした公演の演目から、ウラーンムチルの当時の注目していた演目の特徴をみることができる。また参考のため、赤峰市誕生30周年を祝うイベントにおけるオンニュート旗ウラーンムチルの演目についても分析した。

これらの分析から、オンニュート旗ウラーンムチルの2013年の演目では、共産党や社会主義を讃えた作品が少なかったことが分かった。特に赤峰市誕生30周年を祝うイベントにおける公演の演目では、共産党政策を讃えたものが見当たらなかった。これらの演目では、ほとんどモンゴルの文化や地域性が表現されている。特にモンゴルのなものとしてホーミー、原生态という種類の演目が導入された。

一方、2016年の春祭りでは、「共に中国の夢を築きあげよう」を始め、習近平の政策を讃えた作品が増えた。2020年になるとそうした演目はさらに増えた。

## 小結

本章では、習近平の中国夢の新時代のウラーンムチル（2013年-現在）の活動を記述した。胡錦濤に続いて、習近平になり、「中国の夢」、「中華民族の偉大なる復興」の政策を打ち出し、文芸工作者には中華文化を繁栄させる責任と社会主義の核心的な価値観を広める機能、及び愛国主義を広める任務があると強調した。さらに、「新時代の中国の特色ある社会主義思想」の政策（スローガン）を打ち出し、経済と軍事的には「強くなる」ことを宣言した。つまり、この時期はウラーンムチルの繁栄期である。

こうした影響を受け、内モンゴルの文化事業は繁栄している。具体的に、2018年の芸術歌舞団の統計データは胡錦濤時代の2012年の統計データより、短い6年で89団体増え、団員（隊員）は1,663人増加している。また、文芸団体は習近平の講話内容である「中国の夢」と「社会主義の核心的な価値観」のもとに演目を創作し、公演を行った。自治区共産党委員会及び政府の中心工作である「十カ全覆蓋」プロジェクトや「内モンゴル自治区文化庁の2016年の事業計画」に沿って文化活動を行った。さらに、文化庁の事業計画の下では、「草原文芸の毎日公演－民衆向けの公演プロジェクト」、「民衆向け公演が村の隅々まで」など6つの公演ブランドが公演プロジェクトとして設けられた。

こうした中で、2017年、ウランムチルが創立60周年を迎え、習近平に活動の報告を行い、返信を受けたことで、全内モンゴルがウランムチルから学ぶブームが起こった。言わば、ウランムチルが繁栄期を迎えた。

習近平の返信をきっかけに、内モンゴルの主席であった布小林がオンニュート旗ウランムチルを訪問した。布小林の訪問を受け、オンニュート旗ウランムチルがウランムチルに関する展覧会を行い、公演活動が例年より2倍も増加したという。さらに、オンニュート旗ウランムチルは、2017年に内モンゴル自治区成立70周年、烏蘭牧旗成立60周年を記念するイベントを組織し、2日間定年退職した隊員とともに公演を行った。公演では、草創期から現在までの演目を披露した。

この時期におけるオンニュート旗ウランムチルの上演作品について4つのパンフレットを中心に分析した。具体的には、2013年、2016年、2020年の春祭りの演目パンフレットと2013年の赤峰市誕生30周年を祝うイベントのパンフレットである。

分析した結果、2013年の演目では、共産党や社会主義を讃えた作品が少なかった。特に赤峰市誕生30周年を祝うイベントの演目では政策を讃えたものが全くない。これらの演目では、ほとんどモンゴルの文化や地域性が表現されている。演目のジャンルとしては、これまでの時期になかったホーミー、原生态という種類の演目が導入された。しかし、2016年の春祭りでは、「共に中国の夢を築きあげよう」を始め、習近平の政策を讃えた作品が増えた。2020年になるとこうした演目はもっと増えた。ウランムチルは鄧小平時代から胡錦濤時代まで緩やかにしていたものが、習近平時代に政策宣伝という本来の目的に引き戻されている。その兆しとしてオンニュート旗ウランムチルが参加した2013年と2016年のオンニュート旗春祭りでの公演演目は、2020年のオンニュート旗春祭りでの公演演目と比べると、少なくなっている。こうしたことから、地方政府にはウランムチル以外の地元の民営歌舞団と芸能人についても共産党の政治宣伝に参加させ、コントロールしている狙いが窺える。

## 第十章 ウラーンムチル歌舞団の政治宣伝のプロセス

ウラーンムチルは中国共産党の政治宣伝の担い手として作られた団体である。本章では、ウラーンムチルが如何に政治宣伝の演目を制作しているか、そのプロセスの詳細をみる。まず、筆者が2018年8月～2019年9月までフィールド調査中、ウラーンムチル隊員にインタビューした資料に基づき、習近平が返信以降のウラーンムチル学会の活動を紹介する。その次にウラーンムチル隊員による演目制作プロセスについて記述する。

### 1 ウラーンムチル学会

ウラーンムチル創立30周年を迎える1987年になり、内モンゴル自治区共産党委員会の宣伝部や文化庁の指導下でウラーンムチル学会が創立された。

ウラーンムチル学会はウラーンムチルと共に1990年代以降、「民族文化の商品化」（紅2013）や「計画経済時代」（シンジルト2010）に入り、地方自治体の財政難という問題が出てくるにつれて、その組織力は弱くなっていた。書籍や雑誌のような出版物は、2004年5月に学会の名前で初めて『ウラーンムチル研究』という雑誌が創刊されたが、わずか一年後の2005年10月に第三期で終刊している。それ以降、2007年に『民族文化ブランド・ウラーンムチル賛』を出版し、2009年に『我々のウラーンムチル』という本を出版したものの、それ以降は学会の名義で出版物が出されなくなった。そして、2010年、ウラーンムチル学会はウラーンムチル協会に改称した。その理由は「全区のウラーンムチル事業の発展と創新における新たなニーズに応じた」からだという（達・他編2017:81）。学会は研究者の集まりという特別な意味を持つのに対し、協会は一般人を含むという潜在意識を利用し、その名を拡大するつもりであったのだろう。のちにウラーンムチル学会の名称は公の場で見られなくなった。代わりに、ウラーンムチル協会の名義で2014年『周恩来総理とウラーンムチル』という本が出版された。ところで、2017年11月21日に「中国国家主席たる習近平のウラーンムチルに送る手紙」を受けて、2017年12月4日に内モンゴル文化庁ではウラーンムチルの「老隊員」であったシ氏とツ氏、ス氏と内モンゴル軍区政治部の元文工団の「老団員」であったセ氏によりウラーンムチル学会が再び組織された。

#### 1.1 シ氏とウラーンムチル学会

「老隊員」のシ氏（67歳、男性）はモンゴル人で、17歳の時、中学時代にウラーンムチルの隊員になり、1972年～1978年までオンニュート旗ウラーンムチルで働き、その後ジョーオダ盟公安局や赤峰市公安局に警察官として転職した。さらに内モンゴル自治区の政府事務室の検察組の組長などを経ている。シ氏は既に定年退職したが、2017年11月末に内モンゴル自治区党委宣伝部、文化庁に呼ばれ、ウラーンムチル学会の会長就任を打診された。その後、2017年12月4日にウラーンムチル学会が再び成立した。シ氏は、2018年3月1日に文化庁に事務室をもらい、ウラーンムチル学会の

会長として正式に仕事を始めた。事務室は2つの部屋があり、2人で1部屋を利用する。2018年5月4日にウランムチル創立60周年を祝うために展覧会を行う計画を立て、写真の収集と編集に約1ヶ月を掛け各ウランムチルや内モンゴル文史研究館などから集めた。それら写真は1000枚以上になり、その中から430枚の写真を展示したという。シ氏はウランムチル学会における自身の立ち位置についてこのように語った。

去年（2017）、習近平総書記がウランムチルに手紙を送ってきたことをきっかけに、内モンゴル自治区党委宣传部、文化庁、内モンゴル自治区政府事務室が、私にウランムチル学会の会長になるよう、との白羽の矢を立てた。ウランムチル学会の会長になる者は必ずウランムチルの関係者であり、自治区における庁以上の行政部門で働いた経験がある者でなければならない。また私がモンゴル族であることで、ウランムチルの隊長に選ばれたと考える。今後は新時代のウランムチルを率いてもっと具体的な仕事をしたいと考えている。例えば、その看板にある計画を見てほしい（写真3）。モンゴル語で「毎年の11月21日をウランムチルの記念日にする計画」と書いてある。これはウランムチルが創立60周年を機に習近平主席から手紙が届いた日を指している。内モンゴル自治区政府や内モンゴル族民代表常務委員会などを通じ、法制化するために意見交換を行っている段階である。ウランムチルの事業条例についての新たな計画に参加している。この計画には既に毎年の11月21日をウランムチルの記念日として定める項目を入れている。年末に新たな条例として誕生すると考えている。

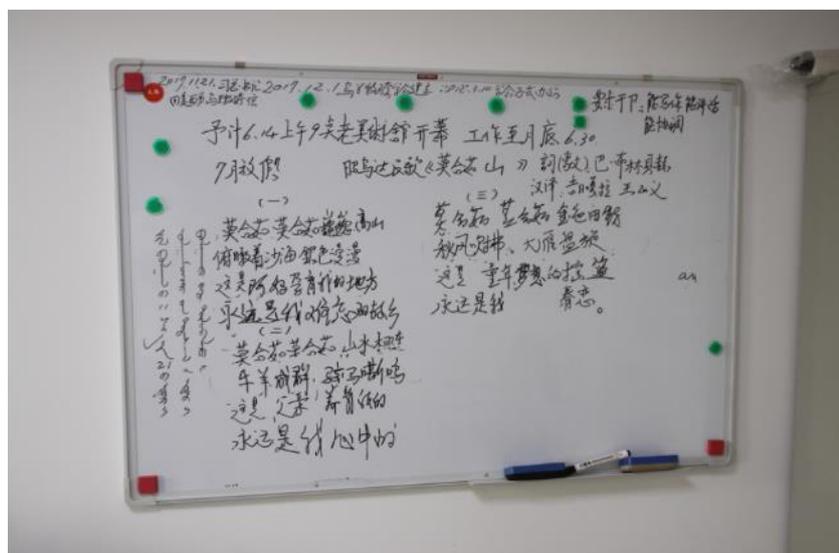


写真3 内モンゴル自治区文化庁のウランムチル学会事務室の学会計画

(2018年8月6日 筆者撮影)

以上は筆者が2018年8月6日に内モンゴル自治区文化庁のウランムチル学会事務室で行ったインタビューである。当時、新たなウランムチル学会が成立してから、

半年以上経っていた。

また内モンゴル元美術館で内モンゴル自治区文史研究館と内モンゴル自治区ウラーンムチル学会が主催するウラーンムチル展覧会が開催されていた。展覧会は 2018 年 6 月 14 から 9 月 1 日まで行われた（写真 4）。入場無料で様々な行政機関の団体や個人が参加した。参加者に感想を残してもらうために、赤い色の寄せ書き欄を作っていた。そこには、参加者からのさまざまなコメントが寄せられた。例えば、写真 5 の寄せ書きには「ウラーンムチルの良い伝統を発揚し、牧畜地域の人民に奉仕せよ！」、「ウラーンムチルの精神に学び、党と人民が心を繋ぎ、誠心誠意、人民に奉仕せよ！」と参加者のコメントがある（写真 5）。また写真 3 にあるように、内モンゴル文聯（文学と芸術界の联合会）の有名な作家のブ・ブリンプヒ（布林貝赫）氏が書いたジョーオダ盟の民謡とも言われる「ムケル・ムケル・ショロン・ハダ（*möhkru möhkru sorung qada*, 巔連の山峰の意味）」というモンゴル語の詩がウラーンムチル学会のシ氏とス氏に中国語で翻訳されていた。「この歌は内モンゴル主席である布小林同志が大好きなもので、我々が翻訳しウラーンムチルの隊員に覚えてもらう。今度、主席と会えたらいつでも聴いてもらうようにしている。翻訳はまだまだ終わっていない、いつでも修正できるように黒板に書いておいたもの」と副秘書長のツ氏は語る。



写真 4 元美術館のウラーンムチル展覧会  
(2018 年 8 月 3 日 筆者撮影)

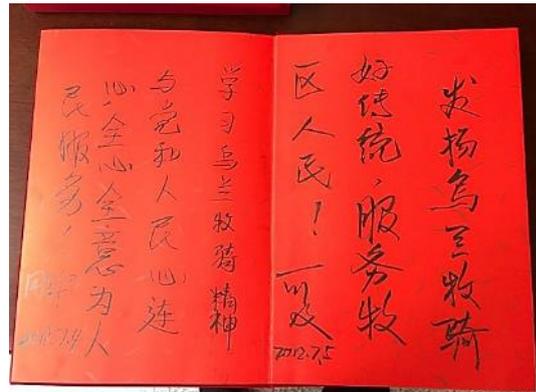


写真 5 寄せ書きコメント蘭  
(2018 年 8 月 4 日 筆者撮影)

## 1.2 ツ氏とウラーンムチル学会

ウラーンムチル学会の副秘書長というツ氏（67 歳，男性）は、モンゴル人で 1970 年～1982 年までオンニュート旗ウラーンムチルで働き、その後赤峰市ラジオ局で 13 年間仕事をした後、内モンゴル自治区ラジオ局に移動した。ラジオ局では主に文芸編集を行っていた。定年退職後、文化・芸術研究所、内モンゴル文化出版社、内モンゴル歌舞協会などに特別研究員として招かれた。

ウラーンムチル学会の成立後、内モンゴル自治区党委宣传部、文化庁に呼ばれ、ウラーンムチル学会の副秘書としての職務を与えられた。そこでは主に学会の著作に関する編集と資料収集に携わっている。

2019 年 8 月にアラシャー盟で行った第 8 回ウラーンムチル芸術祭に資料収集のた

め出かけた。ツ氏は「今回のアラシャー盟におけるウラーンムチル芸術祭に参加した目的は、各ウラーンムチルの活動を把握し、資料を収集するためである。ウラーンムチル学会はウラーンムチル芸術祭の活動を中心に『ウラーンムチル研究』の雑誌を刊行する企画をしているからである」という。芸術祭では8月20日にオープニング儀式が行われた。21日にアラシャー盟の図書館で「新時代ウラーンムチルの創新と発展に関するシンポジウム」を開かれ、ツ氏は専門家として招待された。ツ氏は芸術祭の終了する28日まで、「一专多能」のコンクールやウラーンムチル団体の公演コンクール及び基層（農村、牧畜地域）公演、審査員との会談、懇親会、隊長・隊員との会談など様々な事柄に関わっていた。

### 1.3 ス氏とウラーンムチル学会

ウラーンムチル学会の常任理事として招待されたス氏（79歳、男性）は、漢人である。1963年～1977年までオンユート旗ウラーンムチルで働き、のちに赤峰学院大学に転職し定年退職した。その後孫の面倒を見るために、北京まで息子に連れられて行ったが、ウラーンムチルの「老隊員」時代を思い出しフフホト市に移住した。彼は、2017年12月にウラーンムチル学会が組織される際、常任理事として呼ばれた。学会における主な仕事は、資料の編集や業務の管理である。ス氏は「文化庁は我々の学会に2つの部屋を事務室として貸出してくれ、政府はウラーンムチル事業を重視している」と語った。しかし、政府はウラーンムチル学会の幹部メンバーに給料を一切支払っていない。ウラーンムチル学会の活動経費は、主に会長のシ氏に頼っている。「会長は人脈の広い人で、学会経費をいつでも準備してくれる」とス氏は語る。

### 1.4 セ氏とウラーンムチル学会

ウラーンムチル学会の副会長兼秘書のセ氏（63歳、女性）は、漢人で元内モンゴル軍区政治部の文工団に声楽と舞踊の職務に携わっていた。のちに内モンゴル文化庁の芸術処に調査研究員として派遣され定年退職まで働いた。ウラーンムチル学会の成立をきっかけに副会長として招かれている。副会長は会長のアシスタントでもあり、会長の代理としても活躍している。セ氏は、2018年の『ウラーンムチル回想録』には、「大漠輕騎」というタイトルで回想を寄せた。セ氏はこの回想録で、1989年に自らが参加したアラシャー右旗ウラーンムチルに関するドラマ制作の経験について語っている。このドラマは、アラシャー右旗のバダンジリン沙漠に暮らす牧畜民にアラシャー右旗ウラーンムチルが公演を行っていたことを基づいて制作された。陳宏鷹はバダンジリン沙漠で20数日をかけて、沙漠に暮らす牧畜民の家を歩きまわり、牧畜民が暮らす場所を一つ一つ訪れ、ドラマ制作のため、ウラーンムチルとともに公演を行った。ウラーンムチルの公演をみた牧畜民が感動して泣いていたことに陳宏鷹も感動して泣いたという。内モンゴル自治区党委宣传部、文化庁は、陳宏鷹の文工団、文化庁、ウラーンムチルでの経験を考え、ウラーンムチルの副会長として要請したという。新たに成立するウラーンムチル学会の幹部は基本的にこうした人物によって構成され

る。

ウラーンムチル学会は2018年12月に学会名誉で約40万文字の『ウラーンムチル回想録』を作った。回想録は「内モンゴル自治区党委宣传部と文化庁の指導下で各地域のウラーンムチルと「老隊員」を動員し、習近平総書記のウラーンムチル事業発展に関する重要な指示精神を宣伝し、学ぶために創った」（朱・吉編 2018：339）。以上が、ウラーンムチル学会の幹部メンバーと組織活動における新たな動向である。続いてウラーンムチルの隊員について分析を試みる。

## 2 ウラーンムチル「老隊員」

まず、ウラーンムチルの「老隊員（古参隊員）」を取り上げ、中国国家主席の習近平の手紙の後の隊員の対応を見てみたい。「老隊員」はよく使われる表現であるが、実は明確な定義はない。ウラーンムチルで隊員として経験を持つ者を言うのか、現にウラーンムチルで隊員として長期に渡って働いている者を言うのか、それともウラーンムチルで働き定年退職した者を言うのか。さらに、どれほどの参加年数をもって、「老隊員」というのか。そのため、本論では、およそウラーンムチルで隊員として働き、30年以上の社会経験を持つ者を「老隊員」と定義しておく。以下はこうした「老隊員」の個人個人のインタビューを通し、ウラーンムチルの新たな方針における個人の対応はいかなるものであるのかをみる。

### 2.1 ソ氏とウラーンムチル演目の創作について

ソ氏（61歳、男性）はモンゴル人で、スニド右旗ウラーンムチルの現職隊員であり、1976年に17歳の時、ウラーンムチルに舞踊隊員として採用され、現在（2020年）に至っている。年を取るにつれ、舞踊だけでなく、ホルボー、歌、演劇に携わるようになった。内モンゴル文聯の有名な作家であるア・オトスル（阿・敖德斯爾）の『アルマスの音（*alamas-un dayun*）』、モンゴルの歴史小説である『モンゴル秘史』のような人気の口誦詩や小説をホール（四胡）でウリゲル（物語）、ホルボーの形式で語る。さらに「青年」、「教師」、「放牧の草原」、「モンゴル故郷の春」などモンゴル生活を背景にしたホルボーを自ら作って歌う。即興的にホルボーを作って歌うのが得意だという。2017年7月に第7回内モンゴル・ウラーンムチル芸術祭が赤峰市のバーリン右旗に内モンゴル自治区成立の70周年とウラーンムチル創立60周年を祝うために行った。「当時、芸術祭に参加したところ、我々の幹部には新たなホルボーを作ってみないかと言われ、「双つの喜び（*qos bayar-un qurai*）」というホルボーを即興に作った。つまり、内モンゴル成立の70周年とウラーンムチル創立の60周年の喜びを言う。現場にいた十数人の審査員の審査を受け準優秀賞を貰うことができた」<sup>93</sup>。

ソ氏は2017年11月21日に中国国家主席の習近平がウラーンムチルに送った手紙をみて、嬉しくて夜も寝られなかったという。一晩かけて「鎧にかけた牛乳（*dören degere tusqagsan sü*）」というお祝いの意味合いが強いホルボーを作った。その意味は

<sup>93</sup> 2018年8月にスニド右旗ウラーンムチルでのインタビューを基に整理した。

「モンゴル族は、昔は馬に乗って参戦する。また騎馬民族としてのモンゴル軍隊がいた。さらに、モンゴル族はどこかへ行くとき、馬を使うことを常としていた。こうした中、鐙に牛乳をかける慣習は、遠いところへ出かける際に障害なく順調に帰ってくることを象徴している。習近平主席の送ってきた手紙をきっかけに「鐙にかけた牛乳」を作ったのは、ウラーンムチル事業が今後もっと繁栄することを象徴している」という<sup>94</sup>。ソ氏のこのホルボーは内モンゴル・テレビ局を始め、様々なメディアに取り上げられた。

ソ氏に2019年11月1日、実行された新たな「ウラーンムチル事業条例」について確認した。「ウラーンムチル事業条例」は、ウラーンムチル創立当時にあったもので、数回の改革を経ている。2019年9月26日に行った内モンゴル自治区第13回の人民代表常務委員会の第15次全体会議において「内モンゴル自治区ウラーンムチル条例（草案）」が更なる改革を得て、同年の11月1日に実施されるようになった。

ソ氏に新たな「ウラーンムチル事業条例」について確認したところ、条例の第14条<sup>95</sup>がより現実的、具体的であり、若者には有利であると言われた。「15年以上ウラーンムチルの隊員として経験を持つ者は、本人の願望によりほかの事業部門に転勤できる法案が極めて突発的な点である。しかし、同条例の30年以上の経験を持つ者である定年退職の年齢になっていない者が定年退職できるという点については納得できない。30年の経験を持っていても若い人であれば、定年退職したら、給料が安くて生活的に困る。だが、身体に健康に不安がある者には良い政策だと思う。この条例についてはまだ議論の余地があり、不十分である」と条例施行後においてWeChatを通じて回答した<sup>96</sup>。

## 2.2 タ氏とウラーンムチル演目の創作について

タ氏（59歳、男性）はモンゴル人で、1976年にスニド左旗ウラーンムチルに舞踊隊員として採用され、十数年間働いた後、スニド右旗ウラーンムチルに移動した。ウラーンムチルで舞踊隊員からホルボー編集、舞踊編集、作曲、演劇などに転身している。1987年に、自らが編集した「晩年の幸福（*ötelege nasun-no jiryal*）」という舞踊が内モンゴル自治区の芸術コンクールで優勝賞を貰った。この舞踊は中国共産党の中央委員会の第三回全体会議（三中全会）の会議内容が実施されていた時期に作られた。

「80年代初期は、牧畜民の文化・芸術に関する施設が少なく、そうしたものがすべて時代遅れであった。だが、80年代後期になり、カラーテレビを見ることができた。ある日、年寄の牧畜民夫婦はテレビをみていたところ、息子がウラーンムチル隊員とし

<sup>94</sup> 2018年8月にスニド右旗ウラーンムチルでのインタビューを基に整理した。

<sup>95</sup> 十四条は、旗・県以上の人民政府はウラーンムチル隊員における退職を実施する制度である。ウラーンムチルで15年以上に経ってダンスを踊っている隊員が本人の願望で退職願を申請する場合、政府はその人を文化、教育、コミュニティなどの職に移動させることである。30年以上のウラーンムチルでの経験を持つ者で、定年退職の年齢になってなくとも、政府は国家と自治区の法律に基づき、その人を退職させるべきである。

<sup>96</sup> 2019年11月末のインタビューである。

て舞踊を踊り、テレビに映った。これを見た老年夫婦は非常に驚き、喜んだ」<sup>97</sup>というエピソードを描いた作品である。つまり、当時において中国共産党軍事委員会（中軍委）の副主席であった、鄧小平が改革開放政策を打ち出した三中全会の内容が牧畜地域にしっかりと伝達されたというエピソードである。

タ氏はそれ以降、地域の特徴として「銀鞍の白ラクダ (*mügin emegel-tai čayan temege*)」というホルボーを作った。「我々のスニド右旗は赤いラクダの故郷で、冬はラクダ祭りを催す儀礼がある。このホルボーはラクダの褒め歌として作った」と言い、「このホルボーは 1989 年に、内モンゴル自治区の芸術コンクールで優秀賞を貰い、中国全国の芸術コンクールで準優勝賞を貰った」<sup>98</sup>という。

最近「習近平主席の手紙を受け、我々のウラーンムチルに内モンゴル自治区主席の布小林や書記の李紀恒及びシリング盟の幹部らは訪問するためにきた。さらに手紙をきっかけに各ウラーンムチルに、44 人乗りの大型バスを一台ずつ配給した。こうしてウラーンムチルの活動は以前より何倍も増えた。我々は今日の午後、アラシャン・ソムに行き「基層公演（農村・牧畜地域の公演）」を行う。戻ってきてから、上海芸術団体と連携しウラーンムチル広場に市民向けの公演を行う。実は、この前にフフホト市における公演やコンクールに出かけて帰ってきたばかりだ。また作品については「朱日和の情 (*jurkhe-in qair-a*)」という軍隊と牧畜民の関係を賛美した舞踊を編集し、さらに「法律を普及せよ (*qauli čayaža-gi tögemjileylügsen*)」というホルボーなども作った<sup>99</sup>と語った。朱日和とはスニド右旗における中国の軍事基地の一つである「朱日和合同戦術訓練基地」を指す。2017 年 7 月末、中国人民解放軍は建軍 90 年を記念し、軍事パレードを行い、習近平国家主席が閲兵した。ウラーンムチルはそれを記念して、軍人と牧畜民の友好エピソードを描いた舞踊を作成した。「法律を普及せよ」を作った背景として中国共産党の第十八期中央委員会の第三回全体会議（十八期三中全会）において、習近平の提出した「法治中国」の理念が上げられる。この理念が 2015 年に中国の中央国務院に「法治政府建設実施綱要」の法案として全国に施行された。法案に関する会議が内モンゴル自治区政府では 2016 年から始まり、2018 年初に法案について研究の加速や実施の強化などが討論<sup>100</sup>され、全区の各旗・州政府に国家政策として重要視された。こうした中、ウラーンムチルの方針や性質から政府政策の宣伝として「法律を普及せよ」が作られたと考えられる。ただし、ホルボーの詞はウラーンムチル組織の決定とともに隊員のソ氏が書き、タ氏は編曲している。

<sup>97</sup> 2018 年 8 月にスニド右旗ウラーンムチルでのインタビューを基に整理した。

<sup>98</sup> 2018 年 8 月にスニド右旗ウラーンムチルでのインタビューを基に整理した。

<sup>99</sup> 2018 年 8 月にスニド右旗ウラーンムチルでのインタビューを基に整理した。

<sup>100</sup> 会議の主題を中国語では、研究《内モンゴル自治区落实〈法治政府建设实施纲要（2015-2020 年）〉实施方案》という（2016 年 8 月 11 日に行われた）。2018 年初の討論が 10 月に《关于加快推进法治政府建设的实施意见》（内党办发〔2018〕31 号）が実施されている。

### 2.3 チ氏のウラーンムチル経歴

チ氏<sup>101</sup>（84歳，女性）はモンゴル人で、1957年～1962年までスニド右旗ウラーンムチルで働いた。27歳の時、身体の不自由が生じ、ウラーンムチルから離れた。健康が回復した後、貿易公司や図書館などの仕事を得た。チ氏はウラーンムチルの第一世代「老隊員」である。第一世代「老隊員」の中で、健在しているのは、「私とイラン氏の二人だ。ほかの皆は天国に行った」とチ氏は語る。「私は、1957年の3月から文化館で働いた。これはウラーンムチルが創立するための準備段階であった。ウラーンムチル創立において、9人の隊員がいたが、皆歌や踊りができない。歌や踊りの基本技術を勉強するために、フフホト市の文化局から指導者がきて教えていた」<sup>102</sup>。チ氏は当時のウラーンムチルでの経歴を繰り返した。

当時、ウラーンムチルが巡回を行う際に本や新聞を持って行く。宣伝部は我々には牧畜民を教育する任務を課し、牧畜民に共産党を愛する教育や政府の政策をしっかりと宣伝するよう指示する。当時、解放（1949年の中華人民共和国成立）からそれほど経ってない、我々の新たな生活がどのようにしてできたのか、どこからきたのかは、牧畜民には全然分からない。2万5000華里の長征が何かも分からない。こうした事情について私たちがとくとくと語ってあげる。多くの英雄たちの犠牲で、新たな社会ができたことも分かっていない。3つの大敵<sup>103</sup>を倒し、新たな生活ができた事情についても全く知らない。こうしたことを公演が始まる前に、説明してあげる。また牧畜民に本や新聞を読んであげるのも一苦勞であった<sup>104</sup>。

チ氏は当時、牧畜地域で公演を行っていた際、トグム公社の公演において公演終了後、一人の帰れない女性客と出会った。チ氏自ら近づいてみると、両足のない人だった。彼女に事情を聞いたところ、彼女はある寒冬のジョド（雪災害）に遭い羊の群れを保護するために一生懸命雪氷と戦っている間に両足が凍ったという。凍った両足を切断したため、大腿でしか動けないようになり、そこに座っていたのであった。これを見た荷花氏は隊員のイランとともに、家まで送って数日間か家事を手伝った。「彼女の名前はヘシゲーと言い、息子と娘がいるが、夫は亡くなっていた。これをみた私とイランはどうしても、この人をほっておくことができないと判断し、夫を探してあげることにした」<sup>105</sup>。その後、二人の「老隊員」は彼女に夫を探し、結婚させた。荷花氏は2018年2月に中国中央テレビの『馬上の牧歌』という番組に出た際、ヘシゲーの息子と娘に会って、非常に驚き感動して抱きあった。さらに、春節のお祝いにヘシゲーの息子と娘がチ氏を訪問するためにやってきたという。

チ氏は中国国家主席の習近平の手紙後にウラーンムチル学会に頼まれ、『ウラーン

<sup>101</sup> 1937年生まれのモンゴル人である。

<sup>102</sup> 2019年4月に行ったチ氏自宅でのインタビューを基に整理した。

<sup>103</sup> 三つの大敵を三つの大山ともいう。それは帝国主義、封建主義、官僚資本主義を指す。

<sup>104</sup> 2019年4月にチ氏の家でのインタビューを基に整理した。

<sup>105</sup> 2019年4月にチ氏の家でのインタビューを基に整理した。

ムチル回想録』に回想を寄せた。習近平の手紙が来た当時、両眼に障害があり手術し終わったばかりであった。「うちの子どもがこの喜ばしいメッセージを私に伝えてくれて、私は大変感動し、心が落ち着かない」と氏は回想した（朱・吉編 2018 : 36）。さらに習近平の手紙後、『ウランムチル 60 周年の特別貢献賞』を貰い、中国中央テレビ局をはじめ各地方メディアに招待され、インタビューを受けているという。

## 2.4 歌手金花氏のウランムチル経歴

金花（77 歳、女性）氏はモンゴル人で、10 歳まではジリェム盟（現の通遼市）のガンチカ旗に育ち、後に騎兵の父親に連れられて、イクジョー盟（現のオールドス市）にきた。小学校時代に軍区の文工団の公演をみて歌手になることを夢見た。中学 1 年の時に、ウランムチル隊員の勧誘者がきたので、学校で、即興で歌い、ウランムチルに勧誘された。しかし、彼女がウランムチル隊員になることに両親は反対していたという。金花は 1960 年～1977 年までイクジョー盟ウーシン旗ウランムチルで隊員として働き、後に異動し、1977 年～1982 年までオールドス歌舞団で働いた。1982 年からは内モンゴル自治区歌舞団（2000 年以降、歌舞劇院）で働き定年退職した。中国国家の一級演員<sup>106</sup> の名誉を与えられ、内モンゴル歌舞劇院の終身演員として評価された。また 2009 年に、内モンゴル自治区の「傑出音楽家」という名誉が与えられた。金花の歌った「オボーでの出会い（*obuyan degerehi ayuljilt-a*）」や「漂う牛乳の香り（*anyilum-a su-in önör*, 乳香飄）」などの歌は、筆者が小学生時代に流行した歌である。当時、モンゴル人の中で、「金花は金色の歌声（*toryun qoyulai*, 金嗓子）」の歌姫と言われていた。初期の公演において、内モンゴルの元主席のウランフーは「金花は金色の歌声」とたたえたという。金花は内モンゴル・テレビ局を始め、中国中央テレビ局など権威のあるテレビ局に数多く出演している。金花は、また早期から、自ら新聞や雑誌を通してウランムチルの労働者・農民に奉仕する役割や基本機能などについて紹介していた（金 1976）。

2017 年、中国国家主席の習近平の手紙を受け金花は『赤色文芸軽騎兵である金花が語るウランムチル・ストーリー（紅色文芸軽騎兵金花講烏蘭牧騎的故事）』というタイトルで本を執筆し、出版の準備を進めていた。「以前、メディアに 20 時間のインタビューを受けて、このタイトルで、本を書かれたことがある。しかし、その文章を見たら、私の考えとは大きな食い違いがあることに気づいた。彼は若者で我々の時代を体験したことはないし、そうした生活や環境について全然分かっていない。彼は優れた文章能力で大変立派な文章を書いたが、私にとっては真実が欠けている。私がウランムチルを代表して書いているから必ず真実を書かなければならない。そのために、2018 年 8 月から書き始め、A4 判の紙で 300 枚以上書いた。現在、内モンゴル自治区党委宣传部に送り、文化出版社に出版するように依頼している」<sup>107</sup>。金花はこの

<sup>106</sup> 本来は歌手と表現するのが正しい。しかし、中国の演員は歌手、女優、俳優、漫才師、演劇者を含む多くの芸術家、芸能人を指す。そのため、オリジナルの意味を尊重し、「演員」とした。

<sup>107</sup> 2019 年 4 月に金花氏の自宅で行ったインタビューを整理した。

著作物がいかに始まったかを次のように語った。

2017年11月21日、私が学生とともに録音室で録音していた時、夫が電話をかけてきた。夫は私に非常に喜ばしい報告があると言った。何かと聞いたら、中央テレビ番組の第一報道（ニュース）が、習総書記があなたたちのウラーンムチルに送った手紙を報道していると伝えた。その瞬間、私は、あの時代における周総理とウラーンムチルの経験と、この時代における習総書記とウラーンムチルの経験はまさに同じだと思った。大変感激した。その後、内モンゴル自治区党委宣传部が私にウラーンムチルのストーリーを書くことを依頼してきた。彼らは金花先生が語るストーリーは全て実体験からなるものであり、真実であると言った。ウラーンムチルには私と同年代の人は少ない。杖をついていたり、病気だったりして語り手は少ない。そのため、私がこのウラーンムチルのストーリーをしっかりと書いて、次世代にウラーンムチルはいかなるものであるのかを伝える。一人のウラーンムチル隊員が全ウラーンムチルを代表することができる。内モンゴル自治区党委宣传部の人々はこの著作で以って、「五個工程賞」<sup>108)</sup>を貰いたいと考えている<sup>109)</sup>。

金花は70歳を過ぎ、定年退職したにもかかわらず、中国国家主席からの手紙が送られてきた後、ウラーンムチルのシンポジウムや訓練班といった様々な活動に参加している。また2018年にウラーンムチル学会の編集する回想録にも回想を寄せた。2019年8月のアラシャー盟で行われた芸術祭のオープニングで歌を披露したり、さらにウラーンムチルのシンポジウムに招待され、ウラーンムチル隊長や関係者に経験をみずから語ったりしている。

以上、ウラーンムチルの現職「老隊員」や定年退職した「老隊員」のインタビューを通しウラーンムチルの中国国家主席習近平の手紙を受けた後の動向を見た。ウラーンムチルは習近平の手紙を受け、より一層広く活動を続けていることが分かった。具体的にはウラーンムチル学会の創設や、シンポジウムの開催、出版などである。宣伝部や文化庁はさらに、マスメディアを通じて「老隊員」を表彰し、ウラーンムチルの各活動に彼らを指導者や経験者として招待していることが分かる。

## 小結

本章では、中国国家主席の習近平時代の内モンゴル自治区におけるウラーンムチルの動向を分析したものである。ウラーンムチルは2017年、ウラーンムチル創立60周年を迎え、中国国家主席である習近平に発展報告を行い、その返信としてお祝いの手紙を受けた。その後、全内モンゴルがウラーンムチルに学ぶブームになった。具体的

---

<sup>108)</sup> 「五個工程賞」（五の一プロジェクト賞）は1992年、中国中央宣伝部が実施した精神文明建設における「五個工程」を評価する活動を言う。毎年1回行う。「五個工程」とは、良い喜劇作品、良いドラマ作品、良い映画作品、良い図書（社会科学分野に限る）、良い論文（社会科学分野に限る）の5つの中から1つ受賞する。

<sup>109)</sup> 2019年4月に金花の自宅で行ったインタビューを整理した。

な事例としてウラナムチル学会が再び組織され、より活発に活動を行っていることが指摘される。学会はウラナムチルの写真展覧会を始め、本や雑誌を編集し、ウラナムチルに関するシンポジウムを開催し、ウラナムチルの理論研究をリードする。ウラナムチル学会の再組織においては、元ウラナムチルの隊員や元文工団の「老隊員」が招かれ、内モンゴル文化庁から2部屋の事務室が与えられた。学会の幹部は政府から給料はもらっていないと言いながら、毎日時間をきちんと守り、新たな政策や活動に携わっている。彼らは、ウラナムチルの記念日の制定を提案し、内モンゴル文聯における有名な作家の作品を翻訳し、幹部の論調にあうように活動している。ウラナムチル学会の雑誌『ウラナムチル研究』から、回想録の『ウラナムチル回想録』は、すべて中国共産党の思想や社会主義理論、国家政策を讃えたものである。彼らのこうした活動は中国国家主席、内モンゴル自治区主席、及び内モンゴル自治区党委宣伝部、組織部、文化庁、内モンゴル自治区政府など国家機構の直接的な管理によって行われたものと考えられる。

#### (1) 演目の創作にみる政治宣伝と文化活動

ウラナムチル学会の活動以外に「老隊員」のインタビューからも分かるように、ウラナムチルは内モンゴル文聯における作家の作品『アルマスの音』やモンゴル歴史の『モンゴル秘史』や、口誦詩や小説の「放牧の草原」、「モンゴル故郷の春」、「銀鞍の白ラクダ」などを演目に改作している。こうした演目から、隊員（モンゴル人）もウラナムチルという場所（舞台）を利用し、積極的に文化活動（宣伝）を行っている様子が窺える。同時に中国共産党の三中全会を始め、習近平時代の新たな政策を讃えた作品を作り、国家の政策に協調している。その具体例は「双つの喜び」、「鐙にかけた牛乳」、「晩年の幸福」や「法律を普及せよ」などの歌舞やホルボーがある。つまり、国家はこの舞台を政治宣伝の場所として利用し、隊員（モンゴル人）は文化活動の場所として利用している。両者に場所の利用目的について、同床異夢である。しかし、両者は国家体制において、誰を離れて「一人」が独立した方針で活動できない。ウラナムチルは両者の相互利益のために作られた場所である。だが、最終的な権力は国家にあり、隊員（モンゴル人）はそれに従う或いは協力という形になる。

演目の創作についても、隊員は自らが即興で作っているというが、まさしく共産党の指示や評価のもとに作られたものであり、きわめて定型的で意図的なものである。モンゴル歴史に関する口誦詩や小説など牧畜民の好みに合わせた文芸作品も創作されているが、それは国家が「社会主義思想」（政治宣伝）のために観客である牧畜民に身近な題材を取り入れた可能性が高い。

最近、ウラナムチルの「老隊員」には、中国中央テレビ番組の『馬上の牧歌』や著作物など主流のマスメディアを通じ、ウラナムチルのストーリーが語られている。「老隊員」である金花の「内モンゴル宣伝部の人々はこの著作によって、「五個工程賞」を目指している」という発言は、内モンゴル自治区党委宣伝部が中央宣伝部に評価されることを指摘し、そうした評価によりウラナムチルの評価が更なる権威とな

る可能性を意味している。さらに、こうした権威機構の活動により、もっと多くの人に中国国家政策がスムーズに宣伝されることが窺える。

## (2) 政治宣伝のメカニズム

ウランムチルは中国国家主席の習近平の手紙を受け、その活動が様々な形で活発化している。ウランムチルには、習近平の掲げる「法治中国」や中国人民解放軍の建軍 90 年を記念する軍事パレードなどが政治宣伝として作品化されている。ウランムチルにおけるこうした政治宣伝は、ウランムチルの隊員自らが行われているものと考えられるが、それはすべて共産党の指示や評価のもとである。チ氏が牧畜民に「我々の新たな生活がどのようにしてできたのか」を語る目的は何のためであるのか。牧畜民にとって新たな生活や古い生活の違いは何だろう。そうした概念を解釈する意義が何だろう。ウランムチルにおけるこのような政治宣伝のメカニズムでは、誰が、誰に、何を目的で行われているかという問いがある。それは、つまり国家がモンゴル人に国民としての教育、宣伝を行うためであると考えられる。このメカニズムの中核は国家のトップや共産党のリーダーであり、政府の職員と言った人々によって構成される。そして、最終的にウランムチルという場所を借りて、国家政策として宣伝されるのである。彼らのこうした宣伝は、さらにメディアの協力や加工を得て社会的に反映されている。

## 第十一章 観客からみたウラーンムチルの公演活動

本章では観客にとってのウラーンムチルはいかなるものであるかを観客の聞き取り調査から分析する。観客がなければ、ウラーンムチルは成り立たない。筆者は小学時代(1990年代中旬)にウラーンムチルの公演をガチャ(行政村)の学校でみていた。当時ガチャの村民委員会と学校は一つの場所にあつて、そこにウラーンムチルの公演や映画の放送など活動が定期的に行われていた。中学時代(1990年代末)は、学校がフレイ旗(通遼市所属)の中心街に移ったため、ウラーンムチルの公演はほとんど見てない。大学時代(2000年代初)、学校はフレイ旗から通遼市の中心街に移り、街の中で国家政策を宣伝して公演を行っていたウラーンムチルをよくみていた。

ウラーンムチルの公演はほかのバンド、アイドル、人気歌手の公演と異なり、老年観客が多く集まっていた印象が強い。以下は、まず観客と歴代ウラーンムチルの公演を説明し、次に観客の聞き取り調査を取り上げる。

### 1 ウラーンムチルの公演と観客

ウラーンムチルの観客は当然様々である。たとえば、政府職員、官僚、公務員、教職員、軍人及び農民、牧畜民、学生、商売人、フリーランスなどである。筆者はフィールドワークを通し、これら観客を含む30代から70代の人に聞き取り調査を行っている。以下は、まず文献資料からこれまでのオンニェート旗ウラーンムチル及びほかのウラーンムチルの公演における観客について記述し、次に筆者のフィールドワークで観察した観客について取り上げる。

#### 1.1 歴代ウラーンムチルの公演とそのデータ

オンニェート旗ウラーンムチル誌によれば、オンニェート旗ウラーンムチル約55年間(1957年6月から2012年8月まで)に5,239回の公演を行い、589万5,451人に上る観客を集めた。この55年間、創作された演目は1,783余に上る(劉・張編2012:57)。このデータからウラーンムチルは概ね1年間、95回の公演を行い、1回の公演に平均1,100人の観客を集め、3回の公演に1つの演目が作られていたことが分かる。ほかのウラーンムチルにしても同じ程度観客数を集めている。例えば、内モンゴル自治区直属ウラーンムチルは1986年の8月4日から9月16日までの約40日間、新疆での「全国少数民族運動会」に巡回公演を行い、40回公演し、6万人を超える観客を集めた(内モンゴル自治区文化庁編1997a:182)。このデータからウラーンムチルは忙しい時、毎日1回の公演を行い、公演ごとに平均1,500人の観客を集めていたことが分かる。

#### 1.2 フィールド調査でみるウラーンムチルの公演と観客

2019年8月20日から8月28日までの9日間に渡り、内モンゴルのアラシャー盟左旗で「第8回ウラーンムチル芸術祭」が行われた。この芸術祭に内モンゴル自治区、

新疆ウイグル自治区、青海省、甘肅省、吉林省から 22 のウラーンムチルが参加し、わずか9日間に67回の公演を行い、15万人を超える観客を集めた<sup>110</sup>。

この2019年の芸術祭に筆者はフィールド調査を行い、観客（参与観察者）として参加した。このデータは政府側のデータであり、誇張されているかもしれない。だが、毎回の公演にはかなりの観客を集めていた。このデータから概ね9日間、1つのウラーンムチルが平均3回の公演を行い、公演ごとに2,200人の観客が集めていたことになる。実際に筆者の観察でも、ウラーンムチルがアラシャー盟左旗市庁所在地の中心街（広場、体育館、公園など）における昼の公演にしては500人～1,000人の観客を集め、夜の公演ではほぼ1,000人～3,000人を集めていた。場合によってはもっと多い。

さらに、22のウラーンムチルの内、16のウラーンムチルがアラシャー盟左旗の金色胡楊音楽庁（写真6）で毎日2回のコンクール公演を行い、毎回800人の観客を集めていた。この芸術祭では、金色胡楊音楽庁だけに毎日1,600人を超える観客が集まり、9日間延べ14,400人の観客を集めたことになる。金色胡楊音楽庁は800人の観客席がある。実際にスタッフやメディア人を含むとその数はより多くなる。この芸術祭りでコンクール公演に参加した16のウラーンムチルはコンクール公演時間以外にも巡回公演を行い、観客を集めていた。



写真6 金色胡楊音楽庁に並ぶ観客

出典：2019年8月23日 筆者撮影

「第8回ウラーンムチル芸術祭」の金色胡楊音楽庁に行われたウラーンムチルのコンクール公演会は2回で、昼の午後2時から4時までと夜は7時から9時までであっ

<sup>110</sup> 「第8回内モンゴル自治区ウラーンムチル芸術祭閉幕」（2020年6月20日閲覧）  
<https://mp.weixin.qq.com/s/BdbLwnVjtJ0bAi7cXtC4mA>

た。コンクール公演において、昼にしても、夜にしても、会場に満席以上の観客が集まり、満席になった時点で会場の出入口を閉鎖していた。会場まで足を運んできて、会場の中には入らない観客はいつも 100 人から 200 人に上っていた。

政府の統計データである 15 万人の観客を 22 ウラーンムチルに分けると 1 つのウラーンムチルが 9 日間に約 6,800 人の観客を集めたことになる。実際は 1 つのウラーンムチルは平均してそれほど人を集められなかったとしても、筆者の観察によると、少なくとも約 3,000 人は集めたと考えられる。アラシャー盟左旗に行われた「第 8 回ウラーンムチル芸術祭」で筆者は観察した観客の数は政府の統計数と約半分の差がある。しかし、これは筆者が観察したウラーンムチルにおけるコンクール公演と巡廻公演の数であり、ウラーンムチル芸術祭のオープニングと閉幕式におけるロコミでの観客の数は約 5 万人に合わせると「第 8 回ウラーンムチル芸術祭」の観客の数は約 12 万人に上る。こうした数字からウラーンムチルは現在にしても、かなり多くの観客を集めていることが分かる。

「第 8 回ウラーンムチル芸術祭」の公演は、ほとんどアラシャー盟左旗の市庁所在地の中心街で行われた。そのため、観客はほぼ、地元の人である。オープニングと閉幕にはアラシャー盟左旗の牧畜民と他の隣接するアラシャー盟右旗、バインヌル市（巴彦淖尔市）や、烏海市、オールドス市から参加し観客も少数いる。また 22 ウラーンムチルが「第 8 回ウラーンムチル芸術祭」を機に、アラシャー盟左旗以外にバインヌル市、烏海市など地域の農民、牧畜民を対象に巡回公演を行った。



写真 7 アラシャー盟左旗の中心街に行われるウラーンムチル公演会

出典：2019 年 8 月 23 日 筆者撮影

アラシャー盟左旗の市庁所在地の中心街で行われるウラーンムチル公演会には、観客はたいてい立ち見である。自らが椅子を持ってきてみる人もいる。さらに 8 月は、真夏であり、傘をさしたり、帽子を被ったりする人が多い（写真 7）。

ウラーンムチルが農民、牧畜民を対象に行う公演では、1 日 1 回～2 回の公演を行う場合があれば、1 日 3 回以上の公演を行う場合もある。公演は距離や時間の関係で決めるものであり、いずれにしても観客は数十人から数千人が集まっている。公演の時期は夏季が多く、観客の余暇の時間に合わせて公演する。夏季は農民や牧畜民にとって仕事が少ない時期である。特に 7 月と 8 月は余暇な時間が多く時期である。ウラーンムチルはこうした時期に合わせて公演を行い、観客を集める。

## 2 観客へのインタビュー

以下はウラーンムチルの具体的公演を事例に観客のインタビューを分析する。そのため、まず牧畜地域と農業地域における公演を事例とする。次に都市に行われた公演を事例として取り上げる。

### 2.1 牧畜地域での公演

2018 年 8 月中旬に、筆者はスニド右旗ウラーンムチルでフィールド調査を行った。そこで、ウラーンムチルの牧畜地域での公演であった。公演はスニド右旗のエリエン・ヌール・ソム（郷・鎮）のアラシャント・ガチャ（村）という村民委員会がある場所で行われた。時間は 2018 年 8 月 16 日であった。観客は牧畜民以外にスニド右旗政府官僚と司法機関の幹部、宣伝部・組織部・教育局の人、軍人、学生たちであった。観客数は約 1,000 人である。公演は無料で行った（写真 8 と写真 9）。



写真 8 プロジェクトのタイトル



写真 9 観客

出典：2018 年 8 月 16 日 筆者撮影

出典：2018 年 8 月 16 日 筆者撮影

公演はシリングル盟における「初心を忘れず、気合を入れて、基礎を固めよう（不忘初心、凝魂聚气、固本强基）」という新たなプロジェクトの開始儀式として行われた。公演現地でこのプロジェクトの名がモンゴル語と中国語で書かれている。このプロジェクトは、習近平の 2017 年の第 19 回全国人民大会での講話内容であった「初心

を忘れず、使命を肝に銘じる（不忘初心，牢记使命）」を基にしたものである。つまり中国の特徴ある社会主義の旗印を掲げ、小康社会を完成させる（ややゆとりのある生活ができる社会を全面的に完成させる）という習近平の掲げる「偉大なる中華民族復興の夢」スローガンに合わせたプロジェクトである。

ウラーンムチル隊員は 40 人乗りバスで三十数人が乗り、午後 1 時にスノド右旗の文化センターから出発し、約 40 分後に公演地に到着した。現地に到着後、隊員たちは公演に使う道具を準備し、午後 3 時から公演を開始した。まず公演直前に、政府幹部らは新たなプロジェクトについて説明し、中国共産党の成立时间・人数・リーダーについて観客（牧畜民、学生、軍人）に質問した。また中国における現在の共産党員数、シリング盟や、スノド右旗における共産党員数などについても質問した。そして質問を回答できる観客には生活用品をプレゼントした。さらに模範的な牧畜民を表彰し、幹部たち自らが挨拶に回っていた。こうしたイベントが約 30 分間行われた後に、ウラーンムチルの公演が開始した。公演の演目は歌舞・漫才・演劇・ホルボーなどであった。約 1 時間半で終了した。筆者は公演後に 40 代のテ氏（モンゴル人）と 60 代のト氏（モンゴル人）にインタビューを行った（写真 10 と写真 11）。



写真 10 テ氏（40 代、牧畜民）

出典：2018 年 8 月 16 日 筆者撮影



写真 11 ト氏（60 代、牧畜民）

出典：2018 年 8 月 16 日 筆者撮影

テ氏はモンゴル人男性で 40 代の牧畜民である。公演を見るためにガチャ（村）から馬に乗ってきた。彼はウラーンムチルの公演についてこのように語った。

ウラーンムチルの公演は小さい頃からみていた。今見ても大変面白くて、特にウラーンムチルの歌が大好きで観にきた。ウラーンムチルには、私が小さい頃からみていた隊員もいるし、彼らとあいさつするためにもきている。1 時間半の公演は短かった。演目は全て素晴らしかった。また見たい。

ト氏はモンゴル人女性で 60 代の牧畜民出身の共産党員である。政府の新たなプロジェクトに模範党員・労働者として呼ばれてきた。彼女はスニド右旗ウラーンムチルの公演についてこのように述べている。

私は、ウラーンムチルの公演をみるようになって約 50 年になっている。それでも、ウラーンムチルの公演は大好きである。今日の公演も素晴らしかったし、特に貧困牧畜民をゆとりのある生活へ指導していくテーマの演劇が本当によかった。我々は共産党の恩恵を忘れてはいけない。共産党の指導があったからこそ、今日の生活ができています。牧畜民がより豊かな生活ができています。さらに私を模範労働者として表彰したことについても心から感謝している。

スニド右旗ウラーンムチルは公演が終わった後に道具を片付け、スニド右旗の文化センターに戻った。当日の夜に文化センターの隣にあるウラーンムチル広場で午後 8 時から 10 時まで「ウラーンムチルの精神に学ぶ—芸術家がスニド右旗の民衆を対象する公演（学习乌兰牧骑精神—艺术家走基层深入苏尼特右旗惠民演出）」という公演に参加した。この公演は、中国国家主席習近平がスニド右旗に送った返信の手紙を宣伝するためである。この公演の主催は「第 15 回中国・内モンゴル草原文化祭組織委員会と第 20 回・中国上海国際芸術祭内モンゴル分会（第 15 届中国・内蒙古草原文化节暨第 20 届中国・上海国际艺术节内蒙古分会）」である。共催は、中国上海国際芸術祭組織委員会と内モンゴル民族芸術劇院、中国共産党スニド右旗委員会、スニド右旗人民政府である。公演は無料であった。

「中国・内モンゴル草原文化祭」とは、内モンゴル政府が 2004 年から主催した文化イベントである。このイベントは、主に内モンゴルを宣伝する歌舞団の優秀な演目や草原文化を紹介した演目を上演する。公演団体として内モンゴル民族芸術劇院が内モンゴルの地方歌舞団と協力し、内モンゴルの市庁所在地、あるいは旗・県の政府所在地で巡回活動を行うものである。

「中国・上海国際芸術祭組織委員会」とは、1999 年に中華人民共和国国務院の批准の下で、中華人民共和国文化部が主催し、上海人民政府が実務を担当し、国際的に活動する団体（委員会）を指す。この団体は、「中国上海国際芸術」を設け、国際的に芸術・文化の交流を行うことを目的にしている。いわゆる「中華民族の芸術と文化」を国際的に宣伝する目的であるという。団体は、さらに中国内でも、各地域に分会を設け、地域の政府や歌舞団と協力し、公演活動を行っている。これらの芸術祭は、毎年 1 回行い、劇場での公演、あるいは巡回公演を行う。公演期間は約 1 週間続き、場合によってはもっと長くなることもある。筆者のフィールドワークした 2018 年まで、「中国内モンゴル草原文化祭」は 15 回になり、「中国上海国際芸術祭」は第 20 回になっていた。2018 年 8 月 16 日にスニド右旗で行われた「ウラーンムチルの精神に学ぶ—芸術家がスニド右旗の民衆を対象とする公演」には、上述の団体が参加したことで、

この公演はかなり大きな公演であり、観客は隣のスノド左旗、正鑲黄旗からきた人を含め1万人に上っていた。

スノド右旗ウラーンムチルの牧畜地域で行った公演とスノド右旗ウラーンムチル広場で行った公演及び観客のインタビューから、ウラーンムチルは牧畜地域の人に人気であることが分かった。一方で、政府は政策の宣伝を行うため、「ウラーンムチルの精神に学ぶ」活動を通し、「中国上海国際芸術」の協力の下で、さまざまな方法を利用し、ウラーンムチルの活動を盛り上げ、観客を集めている。

## 2.2 農業地域での公演

筆者は2019年8月にアラシャー盟に行われた「第8回ウラーンムチル芸術祭」後に赤峰市のオンニュート旗にフィールド調査のために行った。そして、同年の9月3日にオンニュート旗ウラーンムチルに連れて農村地域での巡回公演に参加した。今回の公演の目的は脱貧困政策を宣伝するためであった（写真12と写真13）。

ウラーンムチルは1日で、オンニュート旗の橋頭鎮（桥头镇）の羊草沟村・西南店村・杜家地村の3つの村で公演を行った。公演はすべて無料である。当日の朝9時に若手隊員21名と文化館の職員である5人とともに習近平の返信でもらった40人乗りのバスで出発した。まず羊草沟村に到着したが、既に10時半を過ぎていた。



写真12 羊草沟村での公演

出典：2019年9月3日 筆者撮影



写真13 西南店村での公演

出典：2019年9月3日 筆者撮影

公演に関して羊草沟村の村長と話しあい、最初は一人の農民の庭で公演すると決めていた。しかし、オンニュート旗ウラーンムチルが農民の庭を貸し出して公演を行うことに対して、農民に料金を支払わないと庭を貸してくれないと言われた。結局、農民の庭での公演がキャンセルになった。そのため、近所の農民の家から電線を繋ぎ、村の空いていた場所にバスを止め、公演を行った。

その日三つの村で各1時間公演を行い、最初の村では30人~40人の観客が集まった。昼は隣の西南店村の村民委員会室で休憩を取り、村長自らが昼食を作ってごちそうした。昼食の後に村の広い場所にバスを移動し、1時間の公演を行い、午後の3時

ごろにその日の最後の公演として杜家地村に移動した。杜家地村の公演が終わり、オンニユート旗ウラーンムチル機構へ戻ってきたときは、既に夜の6時半を過ぎていた。西南店村と杜家地村での公演に参加した観客は各村で約100人～200人程度であった。この地域の農民は全て漢人であり、各村で11の演目を披露し、この中2つの演目だけがモンゴル語で行われた。演目のジャンルはダンス・馬頭琴曲・京劇・快板・四胡曲・歌などがあつた。モンゴル語で行われた2つの演目は歌で、1つは女性隊員が歌った「ウラーンバートルの夜」という歌で、もう1つは男女のラブソングであつた。ほかの演目はすべて中国語で行われた。三つの村において、演目の順番が変わっても、演目の内容は変わっていない。筆者はオンニユート旗ウラーンムチルの公演後、40代・50代と思われる4人の農民に感想を聞いた。写真14の左からナ氏とニ氏は漢人男性で、2人は40代である。写真15の左からヌ氏とネ氏は漢人男性で、ヌ氏は50代とネ氏は40代である。



写真14 羊草沟村での公演

出典：2019年9月3日 筆者撮影



写真15 西南店村での公演

出典：2019年9月3日 筆者撮影

筆者：公演はどうだったのか。

農民：素晴らしかった。

筆者：どの演目が素晴らしかったか。

農民：ダンスと馬頭琴曲などが良かった。

筆者：京劇と馬頭琴曲のどちらが良かったか。

農民：馬頭琴曲がよかった。音が強くてきれい。

筆者：モンゴル語の演目はどうだった。

農民：メロディーが素晴らしかった。歌詞について分からなかったが、メロディーが心地よい。

筆者：公演は多いか。

農民：多くない、数年に一度公演が行われたものであり、こんな身近に公演をみることがほとんどない。今回は暇ですべての演目をみることができたが、ほとんどの場合、農業の仕事に集中するため公演はみない。

今回の公演は羊草沟村と西南店村にとっては数年間に一度行われた公演であるという。杜家地村ではウラーンムチルが来る前まで、京劇団が来て一周間（7日間）ず

っと京劇を演じていたという。農民は毎日みていた。ウラーンムチルが公演にきたと聞き、また見にきたという。農民はウラーンムチルの公演が終了後、やはりウラーンムチルの公演が好きという。それは、京劇団の一つの演目がウラーンムチルより時間的に長いし、演目のジャンルも少ないことが要因という。ウラーンムチルは8月に入ってから同じテーマで以上の村以外に亿合公鎮の苏家营子村・梁后村・西场村・早泡子村など村々にも公演を行ったという。以下は、ウラーンムチルの都市と街での公演における観客の反応をみる。

## 2.3 ウラーンムチルの都市での公演

### (1) フフホト市での公演

筆者は2018年8月に、フフホト市の档案局でウラーンムチルに関する資料を調べるために滞在していたところ、ウラーンムチル公演の広告が入り、チケットを購入し、公演を観に行った。座種によってチケット料金が4種類に分けられ、それぞれ80元、60元、40元、20元である。筆者は20元（約300円）のチケットを購入している。

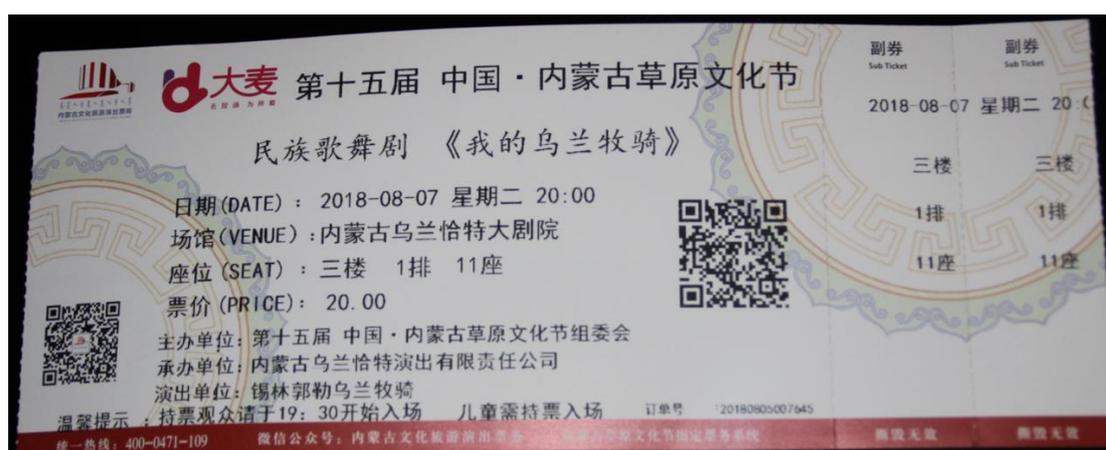


写真16 『我々のウラーンムチル』の公演チケット

出典：2018年8月7日 筆者収蔵

写真16は筆者が購入したチケットである。チケットのタイトルは「第15回中国・内モンゴルの草原文化祭」と書かれ、サブタイトルは民族歌舞劇「我々のウラーンムチル」と書かれている。その下に公演日付、曜日、時間で、会場は内モンゴル・ウラーン・チャトル（紅色劇場）大劇院と書かれている。さらに席番、チケット値段も書かれている。主催は「第15回中国・内モンゴルの草原文化祭組織委員会」で、引き受けは内モンゴル・ウラーン・チャトル演出有限責任会社である。公演はシリング盟ウラーンムチルである。

公演は2018年8月7日の夜にフフホト市のウラーン・チャトルに8時から9時半まで行われた。ウラーン・チャトルの観客席は3階までであり、一階と三階は普通の観

客向け席で、二階は貴賓席<sup>11</sup>であり、合わせて 1,300 席があるという。筆者はチケットを買うのは 2 日前であって、三階の席になっている。当時は一階の席もあったが、かなり後ろの席であり、視界が悪いと判断し、三階席のチケットを購入した。チケット購入する際、スタッフには一階席はほとんど空いていないと言われていた。しかし、当時は、かなり空いていたことに気づいた。そこで一階に移動しようと隣の人(30 代、男性)に話しかけると、彼に「一階の観客席は政府の関係者の席であり、チケットなくでも入ってくるから、時間はぎりぎりならないとわからない」という。まさに彼の言う通り、公演が始まる 10 分前から団体のような観客が次々として入ってきて客席を埋めていた。最終的に観客席はほとんど埋まった。



写真 17 オペラ『我々のウラーンムチル』の現場

出典：2018 年 8 月 7 日 筆者撮影

公演は「第 15 回中国・内モンゴルの草原文化祭の開幕式公演」として行われ、シリングル盟ウラーンムチルが公演した(写真 17)。シリングル盟ウラーンムチルというのはシリングル盟の市庁所在地であるシリント市におかれるウラーンムチルを指す。このウラーンムチルは一時的にシリングル盟民族歌舞団という名を使っていたことから、隊員がかなり多い。シリングル盟民族歌舞団は、本論の第九章の赤峰市民族歌舞劇院と同じレベルの歌舞団で、人数的にも同じである。シリングル盟民族歌舞

<sup>11</sup> 貴賓席、またはお客様席ともいう。政府の幹部や歌舞団の関係者に開けている席のことをいう。

団と赤峰市民族歌舞劇院は2017年11月に中国国家主席習近平がウラーンムチルに返信した手紙をきっかけに以上の名を保留しつつも、ウラーンムチルと名乗っている。

シリンホト市では、シリングル盟ウラーンムチルと別にシリンホト市ウラーンムチルもある。シリングル盟ウラーンムチルはシリンホト市ウラーンムチルより規模的・人数的に大きい。シリンホト市ウラーンムチルは約60人の隊員がいることに対し、シリングル盟ウラーンムチルは約150人の隊員がいる。

シリングル盟ウラーンムチルがウラーン・チャトルで公演した演目は、自らが作ったオペラ『我々のウラーンムチル』である。その内容は、ウラーンムチルが創立から現在まで約60年間いかに存続し、国家の政策を宣伝してきたことをウラーンムチルの成長過程として表現したものである。このオペラを中国語で民族歌舞劇ともいう。民族歌舞劇とは、モンゴル民族の、モンゴル地域の歌舞劇という意味である。公演は中国語で行われ、司会者がなく、演目のジャンルも少ない。公演終了後、筆者は内モンゴル・ラジオ・テレビ放送局（内蒙古廣播電視台）の定年退職したノ氏に感想を聞いた。ノ氏はモンゴル人男性で、70代である。

ウラーンムチルの公演を見るのが大好きで、いつでも見ている。ほとんど公演現場に観にきている。公演はモンゴルの伝統文化を披露し、面白い。また共産党政府の政策・方針を賛美する演目も多い。共産党の恩恵で幸せな生活ができ、ウラーンムチルはそれを演じて我々に伝えている。ウラーンムチルは党と政府の代弁者（喉舌）であり、人民に新たなメッセージを発信している。私は勉強するためでもあり、ウラーンムチルの公演はいつも見ている。今日はシリングル盟ウラーンムチルの演じるウラーンムチル60年の成長過程をみて感動した。

定年退職したノ氏は「勉強するためでも、公演をみている」というが、これは中国では老年幹部活動センターがあって、定年退職者たちにも「大衆路線教育」を行うからである（T.アルタンバガナ 2018）。もう一人の内モンゴル日報社（内蒙古日報社）のハ氏に観客としての経験とチケットの購入負担などについて訪ねた。ハ氏はモンゴル人女性で、40代である。

ウラーンムチルの公演を小学時代からみていた。その時は、外のオープン・ステージでみていた。今は屋内での公演を見ることが多い。こうした立派な建物で公演をみるのが大好き。チケットの負担はほとんどない。公演はチケットがなくても参加できる。事務室（機関）が案内してくれるから、同僚たちとともに参加する。私たちはウラーンムチルの応援隊である。だから、チケットは購入しない。

ウラーンムチルは牧畜地域や農業地域の巡廻公演ではほとんどチケットを販売しない。ウラーン・チャトルのような劇場では、チケットを販売する。彼女のいうよう

に政府関係者には所属事務室が用意してくれなので、ほとんどの人はチケットを購入しない。

以上の二人は政府の関係者であり、ウランムチルの公演をみるのが好きというが、そうでもない人もいる。この公演をみるためにフフホト市にいる大学の友達であるヒ氏を誘ってみた。ヒ氏はモンゴル人男性で、30代のフリーランスで絵を描いている。彼は、「ウランムチルは小学時代によくみていたが、今は全然見ない。共産党の宣伝ばかりで面白くない。歌を聴くのであれば、インターネットでモンゴル国の歌手を探せば良い」という。ウランムチルの公演であれ、ほか歌舞団の公演であれ、都市における歌舞団の公演には、フリーランスや商売人の観客が少ないのは事実である。

## (2) アラシャー盟での公演

2019年8月20日から28日までにアラシャー盟で行った「第8回ウランムチル芸術祭」に22のウランムチルが参加した。そこで、ロコミではオープニングに約2万5千人の観客が参加したと言われている。オープニングはアラシャー盟左旗の中心街にある運動場で行われた。しかも、公演現場の人数や安全から考えて、入れなかった人が多い。筆者もチケットがなかったため、公演現場に入れなかった。この公演をみるにもチケットが必要である。だが、チケットは無料で何らかの形で事前に関係者に配られたものである。公演現場は鉄の柵で囲まれて、5メートル間隔で、一人の警察が警備として立っており、外の人は入れない（写真18を参考）。

オープニングと閉幕の公演現場は運動場の中に行われ、公演のステージは運動場の真中であり、現場の観客は階段式客席から公演をみる。オープニングで公演現場に入った観客は約1万5千人であるが、約1万人の観客は公演現場に入れなかった（写真18と写真19）。



写真18 公演現場の外の観客

出典：2019年8月20日 筆者撮影



写真19 公演現場と外の観客

出典：2019年8月20日 筆者撮影

筆者は公演現場に入れなかったため、公演現場の外にいる観客とおしゃべりをした。おしゃべりをしたのはアラシャー盟左旗のフ氏で、60代のモンゴル人女性で、牧畜民

である。フ氏は公演現場からかなり遠いところにいた。フ氏のいた場所はほか観客が少なく視野が良い。しかし、公演ははっきり見られない。筆者は最初に公演現場の近くに詰め込んでいたが、トラブルになると思い、人が少ないところへ移動した。そこで、牧畜民と会って話しかけた。

筆者：公演現場に入ってみたいね。

フ氏：それはそうよ。公演現場から遠いし、なかなか見られない。

筆者：この地域の人なのに、どうして入れないのか。

フ氏：チケットをもらってないから、当然入れない。

筆者：誰にチケットをもらうのか。チケットは販売しているのではないか。

フ氏：チケットは販売してない。関係者が配付したものであり、我々のような牧畜民にはない。あなたはカメラを持っているのに、どうして入れなかったのか。メディア人か。

筆者：私は、カメラを持っているが、メディア人ではない。ウラーンムチルに関する資料を集めている学生だ。チケットを購入しようと思ったが、販売しているところが見つからない。

フ氏：かわいそうに、あなたみたいな人を入れた方が良いのに。

筆者：いいえ、こちらこそ、地元の人を入れた方が良かったと思う。

フ氏：あなたは、せっかくなにもっと近づいてみたほうがよいよ。我々は年齢も年齢だし、若者が多いところ行くとトラブルの元になるから、これ以上は近づかない。この賑やかな雰囲気でも十分だよ。

筆者：了解、家はここから近いのか。

フ氏：ま、遠くはない、15キロ離れている。うちの子が車で送ってきたが、今は公演現場の近くにいると思う。

筆者：分かった、気をつけてお帰り下さい。

フ氏は折り畳み椅子に座ってみていたが、かなり遠いところにあつたため、公演は見られなかった。公演終了後、公演現場が解除され、筆者は中に入り、公演をみた60代の夫婦観客に話しかけた（写真20を参考）。夫のヘ氏はモンゴル人で、アラシャー盟左旗のあるソム（郷・鎮）政府定年退職者である。妻のホ氏はモンゴル人で、専業主婦である。

筆者：公演はどうだったか。

ヘ氏：立派だった。人が多くて、こんなに人が集まるとは思わなかった。

筆者：どの演目が立派だった？

ホ氏：デデマや金花の歌は心地よいね。いつ聴いても飽きない。またアラシャー左旗ウラーンムチルのサウリドン舞（薩吾尔登舞）も素晴らしかった。

筆者：ウラーンムチルの公演はよく見るか。

ヘシ：見るよ。若い時はよく見ていたが、仕事してからは、見る時間は少なくなった。でも今は定年退職しているので、ウラーンムチルの公演があれば、みに行っている。

筆者：2人は左旗の人か。

ヘ氏：そうだ。定年退職してからは旗に住んでいる。その前はソム政府に働いていたので、そこに住んでいた。

筆者：ソム政府で何の仕事を務めていたか。

ヘ氏：財務処（課）で会計の仕事していた。

筆者：どうして、サウリドン舞は素晴らしいと思ったか。

ホ氏：やはり、地域の伝統踊りを表現した演目であり、一番馴染みある演目だった。

筆者：ほかどの演目が地域性を表現したか。

ヘ氏：いろいろな地域のウラーンムチルがあったので、アラシャの演目は実は少なかった。またアラシャのオルティン・ド（長い歌）などがあった。

筆者：夜も公演あるが、ウラーンムチルのコンクール大会を観に行かないか。

ホ氏：行かない。少し遠いので、文化体育局の広場で公演するウラーンムチルを観に行く。

以上の夫婦観客は地域の特徴的なものを話題にしたことから、筆者に地元の特徴ある蒸し餃子を食べさせるために連れて行ってくれた。その後、ウラーンムチルのコンクール大会（写真 21 を参考）でもいろいろな観客と話していたが、その中から、モンゴル中学校で教師の仕事をやっていたマ氏の話を取り上げる。マ氏はモンゴル人男性で、70代の定年退職である。マ氏はウラーンムチルの公演を観た感想としてこのように述べている。



写真 20 夫婦観客



写真 21 コンクール大会の観客

出典：2019年8月20日

筆者撮影

出典：2019年8月22日

筆者撮影

ウラーンムチルの公演を観るのが大好きで、2019年8月にアラシャ左旗で行われたウラーンムチルの公演をすべて見ている。ウラーンムチルは習近平の返信を受け、共産党の方針を演じていて、面白い。特に脱貧困についての演目は素晴らしい。

教師観客は政府との関係が近いと、政策に関する演目に注目している。以上の観客以外にも様々な観客に感想を聞いているが、ほとんどの観客は彼らと似たような感想だった。

### 3 ウラーンムチル関係者へのインタビュー

ウラーンムチル観客以外に、ウラーンムチルをどうみるかについて、ウラーンムチル責任者（隊長）の5人にインタビューしてみた。ところが2人のウラーンムチル責任者から意外な回答ができたので、取り上げる。2人とも50年代の人で、モンゴル人である。2人のウラーンムチルの経験は30年以上に及ぶ。一人は通遼市のあるウラーンムチルの隊長で、もう一人は赤峰市のあるウラーンムチルの隊長である。仮に一人をミ氏とし、一人をモ氏とする。

ウラーンムチルは1985年から隊長责任制<sup>112</sup>を導入している。隊長责任制とは、隊長がウラーンムチルの活動、人事的調整、財務的管理を行うことである。筆者はこの2人に人事的な問題について聞いたので、ここで取り上げる。まずミ氏はこのように語った。

私は、ウラーンムチルで30年間以上に働いている。言わば、ウラーンムチルはすべて共産党政権のために働いている。共産党は酷いよ、すべての人をコントロールできるし、なんでもやる。私はしょうがなく働いているが、本当は転職したい。でも転職はできない。共産党から離党もできないし、仮に離党したら、職業を失う。そのため、この仕事に就くしかない。

ミ氏の自身は、日常の人間関係はかなり複雑で悩みがあるという。筆者にもその悩みの一部を相談にしていた。ミ氏にとってウラーンムチル隊員に職名を与えることにもどのように対応するのが問題であった。この2人を仮にA氏とB氏に命名しよう。ミ氏によるとAB氏隊員の2人から1人を選び、2級の俳優（女優）として職名を与えることである。ミ氏の意志では、隊員の経験が長い方で、成績が優れたA氏に与えようとする。しかし、経験が浅い隊員B氏は政府の方と関係が近いし、政府の方からB氏にするようにミ氏にずっと連絡が入ってくるという。この職名が与えられた者は給料が上がるし、それによって人脈も広がる。これは確かに誰にとっても悩ましい問題である。自分の意志で成績の優れた方に与えた方が公平であるが、後から自分の職を失う可能性が高い。政府の方の意志を受けて経験の浅い隊員に職名を与えると隊員の中に不公平が生じ、ほかの隊員から意見が出る。

---

<sup>112</sup> 1985年8月28日に1957年の「内モンゴル自治区ウラーンムチル条例」が4条例から6章の30条例まで改革された。この条例の第三章は体制改革の制度である。ウラーンムチルには、正式隊員を25～30人に限定し、隊長の責任制を導入する。管理において「隊長は業務的に、人事的に、財務的なすべて責任を負う」ことである（内モンゴル自治区文化庁編1997a：294-296）。

これと似たような問題をもう一人のモ氏はこう語った。

ウラーンムチルはモンゴル地域の芸術歌舞団である以上、モンゴル族の割合が多いのは当然である。しかし、最近漢族の割合が多いから、やりにくいことが多い。漢族はモンゴル地域で歌や踊りをするのは良いが、漫才やオペラをするのは難しい。観客はモンゴル族が多いので、漢語の演目について歌や踊り以外はなかなか理解できないからだ。ウラーンムチルの隊員は一つの得意な技だけではやっていけないから、ほかの民族の隊員を募集することにおいてはいつも葛藤が生じる。

ウラーンムチルの 1985 年の条例では隊長責任制が導入され、隊長は隊員を募集する資格を持っている。しかし、実際に隊長は資格があっても、人事をコントロールできない事が多い。中国では、人間関係で職場に就くことが多い。公務員の腐敗は日常茶飯事である。こうした腐敗により、親戚が政府の関係者であれば、賄賂を送り、裏で人間関係を利用し就職する。モ氏によるとウラーンムチルには、最初はモンゴル族の隊員が多かったものが、最近は漢族がどんどん入ってくるという。モ氏はこれを止めようとするが、自身にはそのような資格はない。そのため、新人隊員を募集することについていつも悩みで葛藤が生じるという。

## 小結

本章ではウラーンムチルの観客に関するインタビューを整理した。そうした中で、牧畜地域、農業地域、都市での公演をみる事ができた。牧畜地域と農業地域で公演を行う場合は、牧畜民・農民を中心とする観客が集まり、政府関係者は少ない。しかし、都市や旗の中心街で公演を行う場合は、公務員や政府関係者などが多く集まる。またチケット販売している場合であっても、政府関係者であれば、ほとんど無料で見ることができる。公演演目については、これらの観客はほとんど演目が好きで見に来ているという。しかし、政府関係者の中には、単純にウラーンムチルの演目を見ようというより、応援する気持ちや「大衆路線教育」として共産党の新たな政策を勉強する気持ちで参加している人もいる。それは、ウラーンムチルは国家の政策に合わせ、さらに地方政府の方針で公演を行っているからである。これと対照的に牧畜民・農民など観客は演目に集中し参加する人が多い。一方で、フリーランスや商売人などはほとんど観にこない。彼らは自らが公演に興味ないというが、時間的に余裕がないことと仕事の関係で政府と直接関わっていないことを意味する。演目に集中して参加する観客にとってウラーンムチルは馴染みあるものとして身近な存在であるからだ。それは、ウラーンムチルは 1957 年に創立して以来、地元の牧畜と農業地域を巡回し、牧畜民・農民の観客を中心に公演を行ってきたことに由来する。

牧畜民・農民の観客にとってウラーンムチル、或いは他の歌舞団の公演というのは普通生活では見られない珍しい存在である。ウラーンムチルには一年間 100 回以上の公演任務が課せられているが、一年中に地元のすべて村を巡回することができない。

ウラーンムチルは地元巡回公演以外に他地域の公演など中国全国巡回公演にも参加するからである。ウラーンムチルの公演は、地元の牧畜民・農民にとって数年に一度しかみられない珍しく身近な存在である。そのため、ウラーンムチルには牧畜民と農民の観客が欠かせない。

公演は牧畜地域ではほとんどモンゴル語で行われている。漢人が集中する農業地域では当然中国語で公演する。だが、演目の多様性や地域の民族の割合を考えて、少ない演目をモンゴル語で、場合によっては中国語で公演する。漢人の地域において、モンゴル語が分からないにもかかわらず、京劇の演目より馬頭琴曲が好き、モンゴル歌のメロディーが良いという観客がいた。これは公演している側だけの多様性を顧慮した結果ではなく、観ている側である観客にとっても演目の多様性が要求された結果であると考えられる。また同じ地域において、複数のウラーンムチルが公演する場合、観客にとって地域性が強調される。つまり、地域のものは馴染みしやすいという視点から地域性を表現した演目が印象に残っていると言えよう。

さらに、ウラーンムチルで務めている人たちから、自身をみると別の問題が読み取れる。ミ氏とモ氏の語りからは、観客に見えないウラーンムチルの内部の問題の存在が窺える。それは中国の国家制度、政治体制そのものであり、抵抗しようとしても、できないことを物語っている。

## 終章

本論では、内モンゴルの東部地域の赤峰市のオンニュート旗ウラーンムチルの演目分析を中心に、中国共産党政権 70 年における内モンゴルの文化政策による政治宣伝と民族・地域文化の創造過程について整理分析した。第一章から第三章まで、ウラーンムチル創立以前の内モンゴルの文化政策の在り方を分析し、第四章から第九章まで、ウラーンムチルの時期区分を中心に中国共産党の国家政策、内モンゴルの文化政策と文化事業、オンニュート旗ウラーンムチルの現状と他の文化事業、オンニュート旗ウラーンムチルの演目について分析した。第十章から第十一章まで、ウラーンムチルの隊員と観客を対象にフィールド調査としてウラーンムチルの演目の制作過程及び観客の現状について論述した。さらに、観客から見るウラーンムチルの公演活動についても分析した。本章は結論として、これまでの論述と分析をまとめた上で共産党政権下でのモンゴル人の政治宣伝と民族・地域文化の創造過程について論じる。

### 1 内モンゴルの時代変化

清朝崩壊後、1924年にモンゴル人民共和国が成立したことをきっかけに、内モンゴルでは1925年に内モンゴル人民革命党が組織され、党の機関誌を発行した。内モンゴル人民革命党の指導下で、1927年に内モンゴル人民革命青年同盟（青年同盟）が作られた。

内モンゴルには、満洲国が崩壊すると、1945年中旬から、1947年の5月1日の内モンゴル自治区が成立するまでは、様々な政党組織が作られるが、徐々に中国共産党の勢力下に入り、組織は解散させられた。

1947年5月1日に内モンゴル自治政府がウラーンホト（王爺廟）に成立し、ウラーンフーが自治区政府の主席に選ばれ、ハーフンガーが副主席に就任した。事実上、中国共産党に主導されたのである。

ウラーンフーは内モンゴルで中国共産党の宣伝するためには、内モンゴル自治運動連合会があった張家口で内モンゴル文工団を創立した。こうして内モンゴルでは、内モンゴル文工団のもとでさまざまな文化事業が盛んになる。

1957年、中国で反右派闘争が行われ、「地方民族主義」、「民族右派分子」が主な標的となり、牧畜地域の民族的、地域的特徴に基づくものが、「右寄りの保守思想」とみなされた。こうしたことにより、「民族融合論」が提示された。1958年から大躍進（1958-1962年）が実施されたとともに人民公社（1958-1980年代）が設立された。大躍進は、内モンゴルにおいて、特に草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与えた。人民公社化は、内モンゴルでは、家畜の公有制、集団所有制が施行された。1958年から始まり1961年に完了し、体制は1983年まで続いた。

1966年～1976年まで中国では、文化大革命が起こった。文革中、内モンゴルの最高指導者だったウラーンフーと息子のブヘが批判され、政治権力が降格されている。内モンゴルのナンバーツーの指導者であったハーフンガーも「内モンゴル人民革命党」

として批判され、1970年に亡くなっている。さらに馬頭琴演奏で有名な内モンゴル歌舞団のセーラシ、サンドーロン、バイノール歌舞団のバラガンなども迫害された。

1976年に中国文化大革命の終結とともに、文革期において、批判されたものが徐々に回復した。回復は1970年代末から始まる。しかし、大幅に回復するのは、1980年代初から1980年代中旬まで続く。鄧小平は、改革開放政策を進める同時に、文革の被害を調査し、名誉回復を行った。内モンゴルにおける文革被害の調査は、1985年まで続いた。1978年から8年をかけて内モンゴル自治区の数十万の被害者の名誉が回復された。内モンゴルの指導者については、批判された人々の名誉は回復された。内モンゴル自治区のモンゴル人による共産党書記の権力は回復されなかった。

江澤民時代では社会主義市場経済体制を改革する目標を掲げた。1994年の「中国全国思想工作会议」では、文化事業の改革を社会主義市場経済に合わせて行うべきであるという。

胡錦濤時代は、胡錦濤は江澤民の理論を宣伝し、さらに2003年以降、「科学的發展観」と「社会主義調和社会」を提起した。胡錦濤の科学的發展観の時代は、社会主義現代化の發展を新たな段階に加速化するため、新農村、新牧畜地域の建設及び新型城鎮化建設を実現する政策が打ち出された。

習近平は国家主席になった後、2013年から「中華民族の偉大なる復興」、「中国の夢」を強調した。習近平は、さらに2017年に「中国の特色のある社会主義が新時代に進入した」と発言した。中国が経済強国、軍事強国として「強国化」した新たに時代に入ったことを強調した。

## 2 内モンゴルの文化政策の変遷

内モンゴルの文化政策は初期において、モンゴル人民共和国の影響を受けて組織された内モンゴル人民革命党の下で行われていた。もう一つは日本の満洲国政権下で作られた蒙古聯合自治政府（徳王の政権）の下で行われていた。内モンゴル人民革命党には、党の機関誌や革命歌などが作られ、「自治国家」の樹立が主旨になっていた。日本の満洲国の下では、モンゴル人に民族主義的なアイデンティティを構築した。モンゴル人の協力の下で中国人に抵抗するためであると考えられる。いずれにしても文芸を通じたモンゴル人のイデオロギー的な変化であった。

内モンゴル自治区成立後、中国共産党政権に代わり、共産党政権を讃える方針で文化政策が実施された。その一環として、内モンゴル文工団が創立された。内モンゴル文工団をもとに、さまざまな歌舞団や文化事業が盛んになった。これらの文化事業は、共産党の文芸路線を執行し、啓蒙教育を普及していたものである。こうした中で、ウランムチルは牧畜地域と農業地域における共産党の政治宣伝の担い手として創立された。

しかし、これらの文化事業は大躍進で大きく後退する。その要因は、民族的、地域的なものが「右寄りの保守思想」とみなされ、「民族融合論」が提示されたことに由来

する。こうした中で、歌舞団には、大躍進政策、階級闘争など政策宣伝がメインに演目が制作された。

続いて、文化大革命時期において、内モンゴルの文化事業は更なる被害を受けた。まず文化事業に従事していた人々は「内モンゴル人民革命党」としての政治レッテルが貼られた。多くの人は、職務が停止され、労働改造が行われた。文化事業を停止期に入った。こうした中で、歌舞団は、専ら毛澤東を宣伝する「毛澤東思想の宣伝ステージ」に変更され、毛澤東崇拜、革命精神、民族団結など政治宣伝、イデオロギーを反映した作品を制作した。

鄧小平時代以降はその情勢は徐々に回復し、歌舞団を含む大衆文化事業が拡大された。特に 1980 年代において、その回復率はピークを迎え、文化ステージが「村々まで繋がる」というスローガンの下で、公共文化プロジェクトが開始された。歌舞団の演目が多様化し、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けた。

そこから 1990 年代において、社会主義市場経済の影響を受け、市場向けの文化事業の改革が重要視された。ウラーンムチルを始め多くの芸術歌舞団や文化館や文化ステージなど文化事業は衰退した。一方で、歌舞団では、民族的、地域的特徴が表現された。

2000 年代は、胡錦濤は国家のソフト・パワーと民族の凝集力をアップするため文化の建設をアピールした。こうした発信により、内モンゴルが「民族文化大区」として建設され、文化館より文化ステージが重要視された。ウラーンムチルの演目には、モンゴル歴史・伝統・文化・技術・民俗などがメインになった。

2010 年代に習近平が「中国の夢」と「中華民族の偉大なる復興」を掲げてきた。内モンゴルの各地域に「中国民間文化芸術の村」の一環として「村の文化大院」が設置された。ウラーンムチルが習近平の返信を受け、全内モンゴルがウラーンムチルから学ぶブームになった。歌舞団の演目が、民族的、地域的なものから再び、国家政策へ、政治宣伝へと転換した。

このようにして内モンゴルのモンゴル人の文学と芸術に関する文化政策を現在まで文化史としてとらえるなら、約 100 年の歴史になる。この 100 年間におけるモンゴル人の文化史は、前半の約 1/3 の期間（1946 年まで）では、モンゴルとしての文芸を持って「自治国家」や「民族自決」の主旨を樹立するという宣伝を行っていた。後半の約 2/3 の期間の約 70 年間（1947 年～現在まで）は中国共産党の文化政策のもとで行われている。こうした中で、モンゴル文化は、中国共産党の文化政策時期を経て、「少数民族文化」や「モンゴル民族文化」というような「民族文化」に位置付けられた。それでも大躍進時代、文化大革命時代に民族的な、地域的な特徴が批判の標的になったことは、「民族」という概念はそもそも中国共産党にとって警戒の対象として敏感な概念だったことを意味する。その後、鄧小平時代の改革期を経て民族、地域的なものが徐々に回復されたが、習近平時代になると政治宣伝が重要視され、民族的、地域的なものが再び衰退しつつある。

### 3 内モンゴルの文化事業の変遷

内モンゴル自治区成立以前の文化事業について、1945年から1947年に文芸幹部によって「熱河軍区勝利劇社」、「魯迅文芸学院」など24の文工団や宣伝隊が組織され、隊員を応募し、訓練班を設けていたという。

他方、1946年の一年の統計では、芸術歌舞団が8余で、団員（隊員）は586人あった。劇場・映画館は12余で、職員は96人であった。1945年前のデータがないので、この時期の文化事業の変化について不明である。

6年間後の1952年の統計データでは、芸術歌舞団、団員（隊員）、劇場・映画館、職員などは数倍に増加した。

しかし、ウラーンムチル創立当時の1957年に文化館は100余あったものが、大躍進時代を経て、1962年の統計では、文化館はわずか5年間に20数（20%）が減った。この時期において、ほかの文化事業に関するデータはない。大躍進政策を経て、文化事業は衰退傾向にある。

文革期における文化事業のデータはない。文革前の1965年の統計データと文革後の1978年の統計データから芸術歌舞団、映画館職員、文化館劇、文化ステージとその職員はすべて減少したことが分かった。文革期に唯一群衆芸術館は3余増え、職員が69人増加した。文革の被害を受けほとんどの文化事業が減少したにもかかわらず、唯一群衆芸術館が増えたことは、国家の政策を宣伝するには、必要されたと考えられる。

改革開放時代、内モンゴルの文化事業は1978年から1980年の短い2年で、芸術歌舞団が106団体増え、職員は3,350人増えた。劇場・映画館は11余増え、職員は125人増加した。文化館は51余増え、職員も650人増加した。文化ステージは3余あったものが、457余（約152倍）に増加し、職員は15人から635人（約42倍）まで増加した。群衆芸術館が6余増え、187人増加した。わずか2年間で、ほとんどの文化事業は復活ができた。

社会主義市場経済時代、内モンゴルの文化事業に関する1996年のデータがあった。この時代、内モンゴル文化事業が社会主義市場経済にいかに関与されていることをみるため、改革期の1986年の統計データと比べることにした。

1986年の統計データと1996年の10年間の統計データを比べると、芸術歌舞団は26団体減り、団員（隊員）は1,200人減少した。劇場・映画館は8余減り、職員は97人減少した。文化館は2余減り、職員は149人減少した。文化ステージは135余減り、職員は93人増加した。群衆芸術館は13余で、10年前と比べ変更してない。職員は51人減少した。データから分かるようにほとんどの文化事業が減少した。唯一文化ステージの職員が少々（4.1%）増えたが、増加の幅はそれほど大きくない。さらに1986年の文化事業の資金が899万元であることに對し、1996年の文化事業の資金が20万元である。こうしたデータからこの時期、文化事業は市場経済政策の影響を強く受けたことが分かる。

胡錦濤の科学的発展観時代は、内モンゴルにおける文化事業に関するすべてのデータはないが、芸術歌舞団の 2012 年のデータがあった。このデータから、芸術歌舞団は 1996 年より 20 団体増え、団員（隊員）は 717 人が増加したことが分かった。この時期は、また文化ステージについて 2011 年のソム・郷鎮に 910 の文化ステージがあったと記録されていた。これは江澤民時代であった 1996 年の 1,500 余の文化ステージと比べて 590 余少ない。このことは、内モンゴルの文化事業が江澤民の社会主義市場経済政策に強く影響をうけ、長い時間をかけて回復していたことを示す。

習近平の中国夢の新時代は内モンゴルにおける文化事業に関する 2018 年のデータがあった。2018 年の統計データでは、芸術歌舞団は胡錦濤時代の 2012 年の統計データより、89 団体が増え、1,663 人の団員（隊員）が増加している。文化ステージは 2011 年の 910 余より、183 余増加している。文化事業は総体的に増加している傾向である。さらに公共文化プロジェクトの「村々まで繋がる」というスローガンが再び強調され、内モンゴルの各地域に「中国民間文化芸術の村」の一環として「村の文化大院」が設置された。

#### 4 オンニュート旗ウラーンムチルと他の文化事業

オンニュート旗ウラーンムチル創立以前のオンニュート旗には、民衆教育館が 1946 年に設置され、文化館の役割を果たしていた。文化館以外に「烏丹児童劇団」、「烏丹街道群衆アマチュア劇団」、「烏丹京評劇団」が創立されていた。1951 年に文化館をもとに文化ステージが創立された。

1957 年に、オンニュート旗ウラーンムチルが創立され、隊員はわずか 6 名であった。すべてモンゴル人であった。この時期におけるオンニュート旗のほかの文化事業について、1958 年のデータによると文化ステージは 21 余にのぼった。農村には、教歌ステージ、歌唱隊、文芸創作組が数百余設けられた。さらに幻灯放映組、皮影班も設けられ、倶楽部、アマチュア劇団もあった。

1966 年 5 月から文革が始まり、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員と指導者が粛清され、ウラーンムチルの活動は停止した。1968 年、オンニュート旗ウラーンムチルの活動は再開されたものの、同年の 10 月から 1969 年 1 月にかけてオンニュート旗ウラーンムチルは「毛澤東思想の宣伝ステージ」に名称が変更されていた。ウラーンムチル以外に、文教局が停止され、1973 年に回復した。1975 年に文化と教育機構を解散し、文化局を設置した。烏丹京評劇団が文革の被害を受け、解散している。

1976 年 10 月に文革が終息し、改革開放時代、オンニュート旗ウラーンムチルが四人組を批判する演目を創作したが、具体的な演目は記録されていない。1978 年の話劇「声の届かない処がない」は文革をテーマした作品である。ウラーンムチル以外、1978 年に文化館の機能が拡張された。文化館には、図書閲覧室、貸出し室、文物陳列室、美術展覧室が設けられた。1985 年、オンニュート旗の農村における「農村アマチュア劇団」は 49 余で、牧畜地域には、「牧畜地域アマチュア文芸宣伝隊」が 24 余あった。

社会主義市場経済時代、オンニュート旗ウラーンムチルは市場経済の影響を受け、組織と運営の改革を行った。隊員の中から数人の隊員を 1997 年から中国の深圳市、広州市、北京などに行き、ほか地域の企業と連携し、公演を行った。

胡錦濤の科学的発展観政策時代、2003 年の春に中国でサーズウイルスが流行し、オンニュート旗ウラーンムチルはすべての活動を停止した。活動開始後、医者を讃えた演目を制作した。2007 年、内モンゴル自治区成立 60 周年とウラーンムチル成立 50 周年を祝う「内モンゴル自治区第 4 回ウラーンムチル芸術祭」に参加した。2011 年、中国共産党が成立 90 周年を機に、オンニュート旗ウラーンムチルはオンニュート旗の政務局、交通運輸局、病院、小学校などさまざまな機構に文芸演目を指導した。

習近平の中国夢の新時代、2017 年、スニド旗ウラーンムチルは中国国家主席習近平の返信を受けたことで、オンニュート旗ウラーンムチルの活動は例年より 2 倍増えた。

## 5 上演作品にみるウラーンムチル

### 5.1 ウラーンムチル隊員構成の変化

創立当時（1957 年）、隊員は 6 名のみ、すべてモンゴル人であった。そのうち 2 人が文化館の出身である。創立の翌年の 1958 年から漢人の李玉珍や朝鮮人の宋正玉などモンゴル人以外の人も隊員として参加している。その後文革新期、回復期、改革期、革新期、繁栄期を経て、モンゴル人と漢人は増えても、ほか民族は加わっていない。隊員の民族構成比率をみると、モンゴル人が多かった。

### 5.2 上演作品の制作者

制作者については、オンニュート旗ウラーンムチルの草創期（1957-1965 年）から隊員はオリジナル作品を制作しているが、最初はほか地域や歌舞団から導入した作品が多かった。そのため、ほか歌舞団の団員（隊員）が制作した作品が多い。例えば、シリング盟文工団の高太、内モンゴル文工団の舞踊家賈作光と祈・達林太、内モンゴル直屬ウラーンムチル隊員の図力古爾などの振付、作曲、作詞した作品が多かった。文革期からオリジナル作品が多くなるにつれて、オンニュート旗ウラーンムチル隊員の制作した作品が多くなっていく。

### 5.3 上演作品数とその種類

毛澤東時代の草創期（1957-1965 年）から胡錦濤時代の革新期（2002-2012 年）まで記録された作品にはダンスが多かった、その次に歌が多い。しかし、習近平時代の繁栄期（2013 年-現在）における具体的なパンフレットを見ると歌が多い、ダンスがその次に多い。いずれにしても、ウラーンムチルにおいては、歌とダンスの割合が多いことである。さらに、こうした変化から、『オンニュート旗ウラーンムチル誌』には、記録されていない作品が多いことを判明した。

作品の種類について毛澤東時代の草創期では、ダンス、歌、歌舞、オペラがあったものが、文革期（1966-1976年）では、小戯、ホルボーなど演目のジャンルが増加している。鄧小平時代の回復期（1977-1989年）では、新たに評劇、話劇、戯劇のジャンルが加わった。江澤民時代の改革期（1990-2001年）では、舞劇が加わった。胡錦濤時代の創新期では、馬頭琴演奏やサクソ演奏のような楽器及びマジックなどの新たなジャンルの演目が入り入れられた。習近平時代の繁栄期では、合奏曲、ホーミー、原生态、ファッションショーが加わった。このように時代とともに種類が多様化している。

#### 5.4 上演作品のテーマとその変遷

毛澤東時代の草創期から政治性や社会主義思想の政治宣伝について、その内容は多岐にわたることが明らかになった。鄧小平時代の回復期まで政治性がないと言い切れる作品はわずかであった。一方で、回復期には、演目のテーマも多様で、社会主義や兵士、民族の団結、改革開放政策、模範人物、教育、環境問題、愛情や歴史、医者、国際化と幅広い。さらに、モンゴル民歌、オペラ、戯劇という演目の種類にモンゴルという修辭語を使い、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けている。

江澤民時代の改革期から胡錦濤時代の創新期までは、様々なテーマの作品が見られる。共産党、社会主義や国防兵士や労働者の革命精神、民族の団結を讃えた政治イデオロギー的な作品は当然ある。他方で、模範的な人物及び教育事業を讃えた演目、ラブソング、医者の精神、環境問題、地域の特徴を表現した演目がメインになっていた。さらに、地域の特徴を表現した作品が制作されるようになった。創新期では、「チンギス・ハーン」や「キタイの狩人」など歴史人物や伝統文化の要素を積極的に取り入れている。習近平時代の繁栄期最初のウラーンムチルは、胡錦濤時代の創新期を続け緩やかに発展し、モンゴルの文化や地域性が表現されていた。しかし、習近平政権の3年後の2016年の春祭りでは、「共に中国の夢を築きあげよう」を始め、習近平の政策を讃えた作品が増えた。2020年になるとそうした演目はさらに増えた。

2013年のオンニュート旗春祭りは21作品で、16作品はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員が制作し、公演に携わっている。また2016年に18作品があり、13作品はオンニュート旗ウラーンムチルが携わっている。しかし、2020年に25作品があり、オンニュート旗ウラーンムチルが7作品しか携わっていない。ほかの18作品は地元の民営歌舞団や芸能人が携わっている。さらに、共産党と社会主義思想を讃えた政治宣伝に関する作品では、2013年に5作品があり、2作品は地元の民営歌舞団や芸能人が携わっていたものが、2020年に9作品があり、6作品は地元の民営歌舞団や芸能人が携わっている。こうしたことから、オンニュート旗政府はウラーンムチル以外の団体についても共産党の政治宣伝に参加させ、コントロールしている狙いが窺える。

## 6 政治宣伝と民族・地域文化の創造過程

### 6.1 政治宣伝

中華人民共和国が成立する以前、モンゴル人の組織した内モンゴル人民革命党においては、「自治国家」の樹立というイデオロギー的な政治宣伝が文芸・文化を通して内モンゴルに広がっていた。しかし、内モンゴル自治区が成立され、さらに中華人民共和国が成立するとモンゴル人には、共産党の政治宣伝の担い手として内モンゴル文工団が成立された。内モンゴル文工団をもとに、さまざまな歌舞団や文化事業が発展してきた。歌舞団の中で、内モンゴルでは、ウラーンムチルが中国の国家形成において、その一端を担ってきた。

ウラーンムチル草創期の上演作品から分かるように政府の当時のあらゆる政策が作品化されていた。まさに社会主義思想の宣伝が重要視されていた。その社会主義思想とは、いわゆる労働者階級の利益や生産手段の共有を提唱した思想であり、さらに毛澤東思想や共産党や国防警備及び民族団結などを讃えたものであった。上演作品は当時の政策を反映したもので、共産党革命、民族解放、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争など政策と政治宣伝が重要視されていた。例えば、1960年の歌舞「新疆は素晴らしい」は毛澤東だけでなく、共産党による民族解放も讃えている。1964年の歌「賛歌」は共産党の革命・民族解放、毛澤東崇拜、民族団結などを讃えている。

毛澤東時代の文革期も、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、革命精神、民族団結などを中心に政治宣伝の作品が作られた。この時期、模範人物を讃えた作品として1968年歌「歌唱英雄李長順」と1976年のダンス「老夫婦にご飯を送る」がある。民族の団結を呼びかけた作品として1975年のダンス「民族の大団結」などがある。

鄧小平時代の回復期も、共産党思想、社会主義や兵士、民族の団結、改革開放政策、模範人物などを中心に政治宣伝の作品が作られた。具体的には、1978年の話劇「声が届かない処がない」と1979年の大型評劇「甘たるい事業」と1985年のダンス「豊かな生活へ歩む」は鄧小平の行った文革の被害を是正する政策及び改革開放政策を讃えたものである。

江澤民時代の改革期も、社会主義や国防兵士や労働者の革命精神を讃えた演目、模範的な人物及び共産党の事業や民族団結を呼びかけた作品として1992年の歌「辺境兵士を見る」と「服を洗う」、1993年の戯劇「妻を交換する老人と若者」、1996年のダンス「千歌万曲を党に捧げる」、1997年のダンス「香港の帰還」、歌「愛する我が中華」と「祖国を歌う」などがある。

胡錦濤時代の創新期も、社会主義社会とその政策、共産党や兵士、民族の団結を讃えた作品として、2004年の歌「辺境兵士を見る」、「服を洗う」、2010年の歌「兄弟姉妹と一緒に暮らす」、「大愛と大善の大中国」、2011年の歌「愛する中華」、「復興に向かう」、2011年の快板「タバコ製造者の心は共産党に向かう」と歌「太陽の頌」などがある。

習近平時代の繁栄期は共産党や社会主義思想を讃えた演目が元々からあったものが、再び増えている。具体的には、2016年の春祭りでは、「共に中国の夢を築きあげよう」を始め、2020年の歌「村に住む幹部」や戯劇「脱貧困の良い時期」など習近平の掲げる脱貧困政策を讃えている。

さらに、ウラーンムチルの隊員のインタビューからもわかるように隊員は、自らが習近平時代の新たな政策を讃えた作品を作り、国家の政策に協調している。その具体例は「双つの喜び」、「鐙にかけた牛乳」、「晩年の幸福」や「法律を普及せよ」などの歌舞やホルボーである。演目の創作についても、隊員は自らが即興で作っているというが、すべて共産党の指示や評価のもとで行われてのものである。

こうして、内モンゴルにおける中国共産党の政治宣伝は70年間に渡っている。ウラーンムチルは、毛澤東時代の大躍進と文革を経て政治宣伝が強くなった。一方で、鄧小平時代の回復期から胡錦濤時代の創新期を経て緩やかになっていたこともある。しかし、習近平時代になると更なる政策を受け、政治宣伝のため、厳しく利用されていることが分かる。

## 6.2 「民族の形成」

中国では、中華民族という概念が清朝崩壊時からあったものであるが、当時の中華民族と現在の中華民族の概念は異なるものである。当時は漢、満、モンゴル、回、チベットの5民族を中華民族としてとらえていた。中華人民共和国成立以降、民族は民族識別工作により「上から作られ」、「発掘され」、「再編」されたプロセスとして生まれた（松村1993；毛里1998など）。さらに、1989年以降費孝通により56民族を取り入れて定着した概念である。こうした中で、いかに民族を形成し、いかに民族問題を平和的に共存させるというのが、中国共産党が政権を維持するに当たって大きな問題であった。

アンダーソンは「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と国家・民族・国民についてイメージされた概念として解釈している。政治宣伝の演目から中国では、民族・国民とは相当なる強制力と反復の宣伝によって創り上げられていることが分かった。

中国では民族の形成というのは、国家政策と地域政策の組み合わせである。中国の国家政策とは、共産党リーダーの一人が発信したもので、全国人民代表大会、共産党大会で決定され、地域の共産党政府がそれを実施し、宣伝していくものである。こうした中で、文化事業を中心とする文芸界の人々が政策の運び手として存在する。文芸界の人々は政策に合わせて作品を制作し、歌舞団を通して表現する。文芸界の人々は、国家政策を宣伝するため、地域の特徴、或いは「民族」の特徴に合わせて作品を制作し、地域の人々に呼びかけ、政策と政治に関する宣伝を行う。こうした中、徐々に地域的、民族的なものが新しく創られていく。最終的に民族が新しく創られることになる。例えば、中華民族の中のモンゴル民族とはいかなるものであるかということと、

モンゴル民族としての中華民族はいかなる存在であるかという新たな民族概念である。

本論はウラーンムチルを事例に内モンゴルの文化事業を通し、モンゴル人の中国共産党政権の下での民族としての在り方を考察したものであるが、ウラーンムチル以外のほか文化事業においても「民族の形成」については同じようなプロセスが行われている。

ウラーンムチルの演目からも分かるように民族的なものは草創期にもあったが、数的には少ない。それが鄧小平時代の回復期を経て徐々に増えた。こうした変化からモンゴル人は「民族」という概念について理解が薄かったものが、反右派闘争、大躍進と文革の被害を経て、この概念の重さを感じた。その後、鄧小平時代の回復期を経て民族的なものが緩やかに復活し、「民族」という概念も再び広がっていた。それが習近平の時代になると、徐々に政治イデオロギー的なものに代替されている。このように中国では、「民族」は創られている一方、いかに存続するのは難しい問題である。

### 6.3 「地域文化の創作」

中国の少数民族における文化政策は国家の政策と政治宣伝の役割を担っている一方、少数民族にとっては文化の継承と創作の役割でもある。ウラーンムチル演目からも分かるように、ウラーンムチルは草創期から政治宣伝の演目として社会主義思想、国防兵士、革命精神、民族団結などの演目を作ってきた。文革期は小戯、ホルボーなどジャンルのな変化があったが、内容は変化していない。鄧小平時代の回復期から多様性が見られた。具体的に、模範人物、環境問題、牧畜技術、教育、自然、愛情をテーマにした演目のジャンルと内容が増えた。さらに、これらの演目のジャンルにモンゴル民歌、モンゴル・オペラ、モンゴル戯劇のように「モンゴル」という修辭語を使い、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けていた。江澤民時代の改革期には、地域性を強調した作品が作られた。胡錦濤時代の創新期には、馬頭琴演奏やサクソ演奏のような楽器及びマジックなどさらに多様性が強調された。こうした中、「チンギス・ハーン」や「キタイの狩人」など歴史人物や伝統文化の要素を積極的に取り入れている。創新期は創新的なものとしては明確な変化は見られないが、モンゴル民族の伝統、文化、歴史、民俗、技術を讃えた作品が注目される。

繁栄期は中国国家主席の習近平の時代になり、ウラーンムチルは習近平の提唱する偉大なる「中国の夢」と「偉大なる中華民族の復興」を讃える。演目の「共に中国の夢を築きあげよう」、「復興に向かう」、「平和と繁栄」などがそれにあたりと考える。政治宣伝以外に当然モンゴルの地域性や伝統、文化、民俗、歴史、技術などを賛美した作品も多く公演された。

隊員のインタビューからも分かるように、政策やイデオロギー的なものは「上から作られた」、「編集された」としても、民族的、地域的なものはウラーンムチル隊員の自己意識で作られたものが多い。例えば、草創期のダンス「狼を狩る」と「羊毛を刈る」、文革期のダンス「子羊の出産踊り」、回復期のダンス「モンゴル馬」、改革期のダ

ンス「相撲の踊り」、創新期の歌「チンギス・ハーン」と「私の馬頭琴」、繁栄期の馬頭琴曲「黒駿馬」、歌「小黄馬」などは牧畜文化と生活そのものである。また「老隊員」のインタビューで語られたモンゴル作家の小説『アルマスの音』やモンゴル歴史の『モンゴル秘史』及び口誦詩を演目にしたことと、モンゴル生活を基に制作した「放牧の草原」、「モンゴル故郷の春」、「銀鞍の白ラクダ」など演目は、モンゴル隊員（人）がウラーンムチルという場所（舞台）を利用し、積極的に文化活動を行っている様子が窺える。

ただ、その一方で「創られた伝統」としてさまざまな「文化」作品が国家の統治に利用されてきた。例えば草創期のダンス「搾乳員」と「頂碗踊り」、文革期のダンス「収穫の踊り」、回復期のダンス「オールドス踊り」、改革期の戯劇「シャグデル」、創新期の馬頭琴曲「草原は北京と連なる」、繁栄期の歌「私は草原の子ども」などは、一見牧畜文化と生活及びモンゴル草原を讃えたものように見えるが、これらの作品は、国家政策の素晴らしさを讃えたものである。その主旨は国家政策のもとで、自由になり、労働ができ、生活が幸せになり、草原は平和で、そこの人々は豊かになっているというものである。演目の中で、「草原は北京と連なる」について、サ氏はモンゴル人が元朝時代に北京を大都とし、首都を置いていたという。しかし、当時サ氏は文革の被害を受け、牢獄の中でこの曲を作った。その意味は、共産党の認可を得て、「罪」を免れるために作った曲と考えられる。つまり草原は北京を離れたことないという政治イデオロギーの深い曲である。こうして作られた文化的なものは多くある。植民地では、「創られた伝統」は入植者たちの正当化を表現する役割を果たしてきたように内モンゴルでも共産党のこうした「伝統」、「文化」が創られている。だが、モンゴル人はこうした「伝統」、「文化」を自覚していないわけではない。自覚したとしても仕方なく、国家の強制力のもとで、こうした「伝統」、「文化」を創作しつつも、こうした環境（舞台）を利用し、自らの文化の継承と創作を図っている。植民地では、入植者たちは伝統・地域文化を修正し、儀礼化し、制度化するものだけでなく、植民されている側も自らが文化的にほかの民族と差異化し、伝統・地域文化を創作することがある。社会主義中国では、このように民族の両義性、文化の両義的なものが常として存在している。いわば、モンゴル人は文化としての「モンゴル民族」というカテゴリーを保持し、政治的には「中華民族」としての存在である。

## 7 結論

本論は、ウラーンムチルの演目を分析するに当たって、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員を中心としたインフォーマントの聞き取りを文献資料とともに収集して精査・分析した。その結果として内モンゴルの文化政策は中国の社会主義思想に関する政治宣伝の役割を担っていることが判明した。一方で、モンゴル人はこうした文化政策を利用し、自らの文化としての民族的な、地域的なものを披露している。ただし、モンゴル人のこうした民族的な、地域的なものは大躍進時代から文化大革命が終息するまで、批判の標的になっていた。だが、鄧小平時代の回復期を経て、徐々に活発さ

れていたものが、習近平時代には再び、政治イデオロギー的なものに代替されていることが判明した。こうした中で、民族というのは、社会主義中国では、文化のカテゴリー的な存在であり、政治のカテゴリーでは中華民族に過ぎない存在である。

## 8 今後の課題

本論は、ウラーンムチルの演目を中心に社会主義中国の共産党政権の下で 70 年間に渡って行われてきた内モンゴルの文化政策の特徴と変遷に焦点を当て、ウラーンムチルがいかにかの政治宣伝と伝統・地域文化の創造を担ってきたを検討したものである。今後の研究をさらに強化するため、残された課題としてウラーンムチル隊員の表彰、評価及び個人生活などに注目し、研究していきたい。さらに、ウラーンムチルに限らず、ほかの歌舞団についても研究を深めていきたい。

## 引用文献

### 【日本語】

アンダーソン・ベネディクト（著）

1987 白石隆、白石さや（訳）『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』  
リポート

愛知大学中日大辞典編集所

2010 『中日大辞典』（第三版）大修館書店

エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編） 前川啓治、梶尾景昭、他（訳）

1992 『作られた伝統』 紀伊国屋書店

エリック・ホブズボウム（著） 前川啓治（訳）

1992 「伝統は作り出される」エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編）  
『作られた伝統』 紀伊国屋書店 pp.9-28

鏡屋一

2014 「映画『東方紅』における歴史と政治—周恩来と「文革」以前の毛沢東崇拜—」  
『目白大学人文学研究』 第10号 pp.93-109

ボルジギン・フスレ

2005 「内モンゴルにおける革命歌の形成—内モンゴル族民革命党と内モンゴル人民革命青年同盟の歌を中心に—」『学苑』（781） PP.32-50

2011 『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策（一九四五～四九年）-民族主義運動と国家建設との相克』 風響社

ボルジギン・ブレンサイン

2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』 風間書房

チョイバルサン（他著）

1971 田中克彦（編訳）『モンゴル革命史—付・スヘバートルの生涯』 未来社

チ・ボラグ

2001 『馬頭琴と私』 内モンゴル人民出版社

D.スネルグローヴ、H.リチャードソン

1998[1980] 『チベット文化史』 春秋社

デムチュクドンロブ（著）

1991[1994] 森久男（翻訳）『徳王自伝—モンゴル再興の夢と挫折』 岩波書店

デレングト・アイトル

2016 『詩的狂気の想像力と海の系譜—西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』  
現代図書

フランチェスコ・グァラ（著）

2018 瀧澤弘和（監修、翻訳）・水野 孝之（翻訳）『制度とは何か—社会科学のための制度論』 慶應義塾大学出版会

藤澤忠編

1938年『満洲映画』第二巻第十号,第十一号

藤野一夫

2017「地域主権の国・ドイツ文化の分権的形成と文化政策の基礎」藤野一夫・秋野有紀・マティアス・T・フォークト編『地域主権の国ドイツの文化政策—一人格の自由な発展と地方創生のために』美学出版 pp.13-32

龍涛

2014「新中国映画、新中国文芸における「満映」の影響：朱文順、賈作光、王啓民を中心に」北海道大学. 博士(文学) 甲第 11483 号

原山煌

1995『モンゴルの神話・伝説』東方書店

平野聡

2014『「反日」中国の文明史』ちくま新書

費孝通（編）

2008 西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人（訳）『中華民族の多元一体構造』、風響社

ホッブズ

1961 水田洋（訳）『リヴァイアサン2』岩波書店

ホプキンス・デビッド

2012「音楽としてのプロパガンダ・プロパガンダとしての音楽：ある革命歌を考える」『中国文化研究』（28）PP.39-44

ホミ・K・バーバ（著）

2005 本橋哲也・外岡尚美・正木恒夫・阪元留美（訳）『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局

2009『ナラティヴの権利—戸惑いの生へ向けて—』みすず書房

井桁貞敏

1980『コンサイス露和辞典』（第三刷）三省堂

岩村三千夫

1966「紅衛兵運動の第1階段」『中国研究月報』（223）一般社団法人中国研究所 pp.1-22

1967「紅衛兵運動と「大交流」」『中国研究月報』（227）一般社団法人中国研究所 pp.1-21

稲垣一穂

1952『近代芸術の見方考え方』理想社

石田一志

2005『モダニズム変奏曲—東アジアの近現代音楽史』朔北社

焦国標（著）

2004 坂井臣之助（訳）『中央宣伝部を討伐せよ』草思社

加々美光行

- 2008『中国の民族問題-危機の本質』岩波書店  
兼重努
- 2014「文化資源としての民間文芸-トン族の演劇「秦娘梅」の事例から」武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源-南部地域の分析から』風響社 pp.331-400
- 木村理子
- 2013「[モンゴル] 大衆的プロパガンダと「現実の社会」」地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会『地域研究』13（2） pp.267-275
- 鯉淵信一
- 1992『騎馬民族の心』NHK ブックス
- 河野勝
- 2002『制度』東京大学出版会
- 後藤和子
- 2001『文化政策学』有斐閣
- 谷苞
- 2008「中華民族の共同性を論じる」費孝通（編）西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人（訳）『中華民族の多元一体構造』、風響社 pp.65-86
- 貴志俊彦
- 2013『東アジア流行歌アワー』岩波書店
- 菊地杜夫
- 1943「蒙古の文化運動—特に演劇について—」『蒙古』第10巻7号善隣協会 PP.22-35
- 金花
- 1976「プロレタリア文化大革命の新生事物—ウランムチ」『アジア経済旬報』（1007）PP.13-16
- クサビエ・グレフ（著）
- 2007 垣内恵美子（監訳）『フランスの文化政策—芸術の創造と文化的実践』水曜社
- 紅桂蘭
- 2013「中国内モンゴル自治区における民族文化活動に関する考察—通遼市のウランムチを事例にして—」筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻『教育学論集』9,pp.155-175
- 2019「中国における少数民族文化活動に関する研究：モンゴル族にみる民族文化と国民統合」、筑波大学 12102 甲第 9102 号,pp.1-153
- 小長谷有紀
- 2013年「チンギス・ハーン崇拝の近代的起源—日本とモンゴルの応答関係から—」『国立民族博物館研究報告』37巻4号 pp.425-447
- 小滝透
- 2008『中国が日本を植民地にする日』飛島新社

児玉香菜子

2012『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容—オールドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会（代表:嶋田義仁）名古屋大学大学院文学研究科 比較人文学研究室

黄文雄

2013『真実の中国史 1949-2013』ビジネス社

レイモンド・ウィリアムズ（著）

1980 岡崎康一（訳）『キーワード辞典』晶文社

松浦恒雄

2000a「宣伝の担い手—文工団とその役割」牧陽一,松浦恒雄,川田進編『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店 pp.35-64

2000b「翳りなき表彰—秧歌劇から革命模範劇へ」牧陽一,松浦恒雄,川田進編『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店, 159-195

松村嘉久

1993「中国における少数民族政策の展開-雲南省を事例として-」『人文地理』第45巻 第5号 pp.51-74

ミンガド・ボラグ

2016『「スーホの白い馬」の真実』風響社

毛里和子

1989a『中国とソ連』岩波書店

1989b「中ソ対立の構造—対立の二〇年をどう評価するか」山極晃,毛里和子編『現代中国とソ連』日本国際問題研究所 pp.114-139

1998『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版社

西澤治彦

2008「解題—費孝通の「中華民族の多元一体構造」をめぐって」費孝通（編）西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人（訳）『中華民族の多元一体構造』、風響社 pp.333-358

根木昭

2010『文化政策学入門』水曜社

岡本雅享

2008 [1999]『中国の少数民族教育と言語政策』（増補改訂版）社会評論社

2001「中国のマイノリティ政策と国際規準」毛里和子編『現代中国の構造変動—中華世界—アイデンティティの再編』東京大学出版社 pp.79-120

リンチン

2015『現代中国の民族政策と民族問題-辺境としての内モンゴル』集広舎

新村出（編）

2008『広辞苑』（第六版）岩波書店

シンジルト

2010「オラームチル現象に 見る内モンゴル・インパクト」小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編『中国における社会主義的近代化－宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版 pp.185-217

崔淑芬

2012『中国少数民族の文化と教育』中国書店

スターリン

1928「マルクス主義と民族問題」佐野学・西雅雄編『スターリン・ブハーリン著作集 第十四巻 支那革命論・民族問題』白揚社

田中克彦

1988「監修のことば」モンゴル科学アカデミー歴史研究所（著）,二木博史,岡田和行,今泉博（翻訳）『モンゴル史』恒文社 pp.1-12

武田康孝

2018「文化と政治」小林真理編『文化政策の現在 1－文化政策の思想』東京大学出版社 pp.3-18

戸部健

2015『近代天津の社会教育－教育と宣伝の間－』汲古書院

テレンス・レンジャー（著）中林伸浩、亀井哲也（訳）

1992「植民地下のアフリカにおける創られた伝統」エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー（編）『作られた伝統』紀伊国屋書店 pp.323-406

T.アルタンバガナ

2017「文化資源としてのモンゴル族の文芸と中国の宣伝政策－内モンゴル自治区の歌舞団の演芸作品を中心に－」『ユーラシア言語文化論集』19,pp.111-153

2018「中国の大衆路線教育とモンゴル人の文化活動－通遼市の老年ウラームチルを事例に－」,大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト『環境変動下における牧畜技術文化とその変化』 pp.62-84

2020a「ウラームチル芸術歌舞団の草創期における上演作品－中国内モンゴル自治区赤峰市オンニュート旗の事例から－」児玉香菜子（編）『環境変動下における先住民の文化芸術・継承活動とその変遷』千葉大学大学院人文公共学府,pp.5-27

2020b「中国の少数民族の歌舞団における文化制度と社会契約－内モンゴル自治区のウラームチル芸術歌舞団を事例に－」人文公共学府研究論集委員会『人文公共学府研究論集』第41号,pp.71-89

2020c「ウラームチル芸術歌舞団の文革期と回復期における上演作品－中国内モンゴル自治区赤峰市オンニュート旗の事例から－」千葉大学ユーラシア言語文化論講座,『ユーラシア言語文化論集』,第22号,pp.273-296

内田 孝

2008「『新モンゴル』誌第2号とモンゴル族留学生による文芸活動」『北東アジア研究』第14・15合併号 島根県立大学北東アジア地域研究センターPP.225-243

梅棹忠夫

1991『回想のモンゴル』中央公論新社

楊海英

2009『墓標なき草原』（上）岩波書店

2013年『中国とモンゴルのはざまで一ウランフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店

2015a『日本陸軍とモンゴル—興安軍官学校の知られざる戦い』中央公論新社

2015b『交感するアジアと日本』静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター

2016「革命歌・音・発声」吉川哲士編『思想』第1号（第1101号）岩波書店

楊海英（編）

2015『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料（7）—内モンゴル人民革命党  
粛清事件』風響社

横山宏章

2009年『中国の異民族支配』集英社新書

周星

2005「費孝通氏の民族理論」、『文明21』NO.15 愛知大学国際コミュニケーション学会 pp.77-93

【中国語】

阿木爾

2020「非遺視域下烏蘭牧騎對本土文化的傳承與發展—以新巴日虎左旗烏蘭牧騎為例」中央民族大學·修士學士論文 pp.1-104

安波、許直編

1952『東蒙民歌選』新文藝出版社

奧其、松來編

1954『內蒙古民歌』內蒙古人民出版社

巴義爾

2001《蒙古寫意-當代人物卷二》民族出版社

巴雅爾編

2002『蘇尼特右旗志』內蒙古文化出版社

包銀山

1997「群眾文化事業」焦雪岱編『內蒙古文化五十年』內蒙古自治區文化廳 pp.30-54

陳破空

2016『傾斜的天安門』台灣博大出版社

陳响

2018『中國共產黨民族文化政策在延邊朝鮮族居住區的實踐研究』延邊大學法學，碩士學位論文 pp.1-41

赤峰市志編輯委員會

1996年《赤峰市志》（上）內蒙古人民出版社

『當代中國』叢書編輯委員會

1993『當代中國的民族工作』（上）當代中國出版社

達·阿拉坦巴干·朱嘉庚（編）

2007『民族文化品牌烏蘭牧騎贊』內蒙古自治區烏蘭牧騎學會編集出版

達·阿拉坦巴干·朱嘉庚·洪濤編

2017『烏蘭牧騎發展史』內蒙古自治區藝術研究院

馮金英

2018「我與烏蘭牧騎三隊」吉日嘎拉·朱嘉庚（編）『烏蘭牧騎回想錄』內蒙古人民出版社、pp.311-324。

郭玉峰·周金樁

2017『烏蘭牧騎-赤峰市60年圖志』赤峰市文化新聞出版廣播局

國務院文化組革命歌曲編輯小組

1972年『戰地新歌』人民文學出版社

郝維民編

1991『內蒙古自治區史』內蒙古大學出版社

賀志亮主編

- 2019『内蒙古文化和旅游年鑑』内蒙古大学出版社  
胡惠林
- 2015『文化政策学』（第2版）精華大学出版社  
胡日查編
- 1958『昭烏達民歌集』内蒙古人民出版社  
惠鳴·張曉明
- 2013「面向“十二五”：中国少数民族文化发展的新视野」武翠英·張曉明·張学進  
（主編）『文化藍皮書—中国少数民族文化發展報告（2012）』社会科学文献出版社  
賈作光（著）
- 1992 聞章·魯微·閔正文（編）『賈作光舞蹈藝術文集』文化藝術出版社  
紀蘭慰·邱久榮（編）
- 1998『中国少数民族舞蹈史』中央民族大学出版社  
金秋·張莉·寵雅文（編）
- 2015『新疆地域少数民族舞和内蒙古地区少数民族民間舞』藍天出版社  
李炎
- 2015「全球化時期民族地区文化建設的思考与建議」武翠英·張曉明·任烏晶『中国少数民族文化發展報告（2014~2015）』社会科学文献出版社  
李佳
- 2016「新中国文化政策与少数民族音樂舞蹈的發展」卢丽娟編『貴州民族研究』貴州省民族研究院、『貴州民族研究』编辑部 10 期 pp.103-106  
劉希燕
- 1997「藝術事業」焦雪岱編『内蒙古文化五十年』内蒙古自治区文化厅編集出版 pp.1-29  
劉增軍·張仲仁（編）
- 2012『翁牛特旗烏蘭牧騎志』内蒙古文化出版社  
劉源泉
- 2013「中国共产党少数民族文化政策研究」華中師範大学馬克思主義学院博士学位論文 pp.1-181  
劉源泉
- 2014『中国共产党少数民族文化政策研究』人民出版社  
馬宝慶
- 1990「内蒙古藝術研究所簡介」内蒙古文化厅文化志文物志編纂委员会編『内蒙古文化史料』（第二集）内蒙古文化厅  
廖鈺
- 2020「新中国 70 年民族政策对少数民族国家认同影响研究」西南民族大学 博士学位論文 pp.1-149  
『蒙古学百科全書』編集委员会編纂『藝術卷』編集委员会編  
2013『蒙古学百科全書-藝術』内蒙古人民出版社

內蒙古統計局（編）  
2019『內蒙古統計年鑑-2019』中國統計出版社有限公司

內蒙古自治區文化局（編）  
1965『烏蘭牧騎之歌』音樂出版社出版

內蒙古自治區文化庁（編）  
1997a『烏蘭牧騎之路-紀念烏蘭牧騎建立四十周年 1957-1997』內蒙古人民出版社  
內蒙古自治區文化庁（編）  
1997b『內蒙古文化五十年』內蒙古自治區文化庁  
內蒙古文化庁文化志文物志編纂委員會・內蒙古文化庁革命文化史料征集委員會（編）  
1989『內蒙古文化史料』（第一集）內蒙古文化庁  
內蒙古文化庁文化志文物志編纂委員會・內蒙古文化庁革命文化史料征集委員會（編）  
1990『內蒙古文化史料』（第二集）內蒙古文化庁  
內蒙古自治區成立十周年紀念藝術作品選集編輯委員會  
1957『內蒙古自治區歌曲選集』內蒙古人民出版社  
內蒙古自治區人民政府『政府志』辦公室編  
2001『內蒙古自治區志・政府志』方志出版社

內蒙古自治區黨委宣傳部  
2004『再鑄草原文化新輝煌-內蒙古民族文化大區建設文集』內蒙古人民出版社  
內蒙古自治區黨委宣傳部  
2015『內蒙古自治區志・宣傳志』內蒙古人民出版社  
『內蒙古大辭典』編委會  
1991『內蒙古大辭典』內蒙古人民出版社

鵬飛・塔莎（著）  
2001「吳曉邦與內蒙古舞蹈」華蚩（編）『吳曉邦與內蒙古新舞蹈藝術』舞蹈雜誌社 pp.41-61

齊・寶力高  
2001《馬頭琴與我》內蒙古人民出版社

總政治部文化部（編）  
1995『毛澤東、鄧小平、江澤民-論文學藝術』解放軍文芸出版社

王保士（編）  
2000『前蘇連文化藝術辭典』長江文芸出版社

王慧琴・刑野（編）  
2018『烏蘭牧騎精神』方志出版社

翁牛特旗志編委員會（編）  
1993『翁牛特旗志』內蒙古人民出版社

吳明海  
2006年《中國少數民族教育史教程》中央民族大學出版社

吳瑩

- 2014「新中国成立後党的民族文化政策在雲南的實施效果評估」左安嵩『學術探索』  
雲南省社會科學界聯合會『學術探索』雜誌社 pp.42-46
- 烏國政（編）  
2002『芸苑輕騎』內蒙古人民出版社  
『烏蘭夫伝』編寫組（編）  
2007『烏蘭夫伝』中央文獻出版社
- 烏蘭杰  
1999『蒙古族音樂史』內蒙古人民出版社
- 文藝作品選集編輯委員會  
1957『內蒙古自治區歌曲選集 1947-1957』內蒙人民出版社
- 夏立民（編譯）  
1950『蘇連紅軍歌舞團』萬葉書店（原著：1939 Red army song and dance  
ensemble of the U.S.S.R. Moscow, Foreign Languages Pub. House）
- 許直、胡日查編  
1949『蒙古民歌集』內蒙古日報社
- 徐萬邦・祁慶富  
1996『中國少數民族文化通論』中央民族大學出版社
- 音樂出版社編  
1965『冼星海歌曲選』音樂出版社
- 于智・赫佳音編  
1997『草原金曲』遠方出版社
- 張曉明・惠鳴・徐平著  
2009「以科學發展寬觀為指導,推動少數民族文化加快發展」金星華・張曉明・蘭智  
奇編『中國少數民族文化發展報告（2008）』民族出版社
- 趙林平（編）  
2014『當代草原藝術年譜・舞蹈卷』內蒙古大學出版社
- 楊興猛  
2013「新中國少數民族文化政策研究」中央民族大學 博士學位論文 pp.1-104
- 曹紅  
2021「新時代內地藏族大學生中華民族文化的認同研究」『太遠城市職業技術學院  
學報』第三期 pp.143-145
- 朱嘉庚・吉日嘎拉（編）  
2018『烏蘭牧騎回想錄』內蒙古人民出版社
- 中國民族民間文藝研究會（編）  
1960『內蒙古歌謠』人民文學出版社
- 中國民族民間舞蹈集成編集部（編）  
1994『中國民族民間舞蹈集成・內蒙古卷』中國 ISBN 中心出版  
中共中央宣傳部・中共中央文獻研究室（編）

2012『論文化建設-重要論述摘編』學習出版社・中央文獻出版社  
中共中央文獻研究室（編）

2013『論群眾路線-重要論述摘編』中央文獻出版社・黨建讀物出版社  
中共中央文獻研究室（編）

2016『習近平總書記重要講話文章選編』中央文獻出版社・黨建讀物出版社

【欧文】

Edward Burnett Tylor

1871 Primitive Culture, 2 vols, London: John Murray

Peter K. Marsh

2006 Beyond the Soviet Houses of Culture: Rural Responses to Urban Cultural Policies in Contemporary Mongolia. In Ole Bruun and Li Narangoa (eds.) MONGOLS FROM COUNTRY TO CITY Floating Boundaries, Pastoralism and City Life in The Mongol lands Nordic Institute of Asian Studies Studies on Asian Topics. No.34. pp.290-304

Uradyn E. Bulag

2002 The Mongols at China's Edge: History and the Politics of National Unity. Lanham: Rowman & Littlefield.

2006 Municipalization and Ethnopolitics in Inner Mongolia In Ole Bruun and Li Narangoa (eds.) MONGOLS FROM COUNTRY TO CITY Floating Boundaries, Pastoralism and City Life in The Mongol lands Nordic Institute of Asian Studies Studies on Asian Topics. No.34. pp.56-81

YuKi Konagaya, Baasanjargal Byamba, and AiMaekawa

2020 Mongolian Propaganda posters 1920s~1980s Texnai

【モンゴル語】

T. Ürgen

2017, c1959. *Šhagder soliyatu* Öbür mongyol-un arad-un hebelel-un quriy-a (T. ウルゲン編集、2017 [1959]、シャグデル「アホ」、内蒙古人民出版社)

Rinčin dorji, Dongrubjamsu, Ding shou pu

1979 *Mongyol arad-un mingyan dayuu* Öbör mongyol-un arad-un hebelel-un quriy-a (リンチン・ドルジ, ドンロブジャブ, 丁守璞編 1979 《蒙古民歌一千首》第一卷, 内蒙古人民出版社)

Ünen boyan

2007 *Mongjol Undesten-no arad-un dajuu* Öbör mongyol-un bagacod khuhed-un hebelel-un quriy-a (ウエン・ボヤン 2007 《蒙古族民歌》下, 内蒙古少年出版社)

## 【オンライン文献】

### ① アラチャー盟メディア報道

「習近平のウランムチルに下さった精神についての記事」

<https://mp.weixin.qq.com/s/BdbLwnVjtJ0bAi7cXtC4mA> (2020年1月16日閲覧)

### ② 「国务院关于深化体制改革推动社会主义文化大发展大繁荣工作情况的报告」 (2012.12.24)

[http://www.npc.gov.cn/zgrdw/huiyi/cwh/1129/2012-10/26/content\\_1741157.htm](http://www.npc.gov.cn/zgrdw/huiyi/cwh/1129/2012-10/26/content_1741157.htm) (2021.2.7 閲覧)

### ③ 「内モンゴル文化芸術ネットでは「各族人民心连心」の日付を 1957 年と記している」 (2016年12月8日閲覧)

[http://www.nmgcnt.com/nmgwhyszyk/cyzs/cyzsmgzmg/mgg/201012/t20101209\\_20785.html](http://www.nmgcnt.com/nmgwhyszyk/cyzs/cyzsmgzmg/mgg/201012/t20101209_20785.html)

### ④ 「オボーでの出会い」歌詞訳参考 (2021年5月28日閲覧)

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/guanguang/jieri/200112/200112.htm>

### ⑤ 中国共産党ニュース (2016年12月6日閲覧)

<http://cpc.people.com.cn/n/2015/0409/c64387-26819791.html>

### ⑥ 「十カ全覆蓋」—中国人民のネット (2016年12月9日閲覧)

<http://tv.people.com.cn/GB/28140/399095/>

### ⑦ 「中国中央宣伝部の通知」—中国人民共和国中央政府ネット (2021年9月19日閲覧) [http://www.gov.cn/xinwen/2017-12/17/content\\_5247892.htm](http://www.gov.cn/xinwen/2017-12/17/content_5247892.htm)

### ⑧ 「ウランムチル 60 周年を祝う活動」—オンニュート旗ニュース (2021年9月19日閲覧) <https://mp.weixin.qq.com/s/hB0jMr4oRqNQFUsu3k4okw>

### ⑨ 「布小林のウランムチルに対する講話内容」—オンニュート旗ニュース (2021年9月19日閲覧) [https://mp.weixin.qq.com/s/1D\\_OVB4Z7-pLw\\_QkIEZoGg](https://mp.weixin.qq.com/s/1D_OVB4Z7-pLw_QkIEZoGg)

### ⑩ 「オンニュート旗ウランムチルの金融機関と連携した公演」—オンニュート旗ニュース (2021年9月19日閲覧) <https://mp.weixin.qq.com/s/VD6OCaimQuyjrkmGc5p2aQ>

### ⑪ 「赤峰市庆祝建市 30 周年乌兰牧骑汇演」 (2021年8月10日閲覧)

<http://roll.sohu.com/20130812/n383966539.shtml>

### ⑫ 「红山文化节开幕式晚会联排现场吸引万余名市民」 (2021年8月10日に閲覧)

<http://www.anhuinews.com/zhuyeguanli/system/2013/08/16/005996953.shtml>

### ⑬ 「オンニュート旗ウランムチルの 2020 年春祭り」 (2021年7月23日閲覧)

<https://v.qq.com/x/page/f3057p808he.html>

### ⑭ 「第 8 回内モンゴル自治区ウランムチル芸術祭閉幕」 (2020年6月20日閲覧)

<https://mp.weixin.qq.com/s/BdbLwnVjtJ0bAi7cXtC4mA>

### ⑮ 「習近平「新時代の中国の特色ある社会主義」思想とは？」 (2021年9月6日閲覧)

<https://news.yahoo.co.jp/byline/endohomare/20171022-00077240>

**【新聞】**

『人民日報』1964年11月20日

## 謝辞

本論は静岡大学での2年間の研究成果と千葉大学での4年間の研究成果をまとめたものです。本論を執筆するにあたっては、大変多くの方々のご指導・お力添えをいただきました。

静岡大学では、修士論文の構成・執筆において、楊海英（大野旭）先生、小松かおり先生、長沼さやか先生、山本達也先生、戸部健先生に2年間大変お世話になりました。楊海英先生にはウランムチルに関する新聞や雑誌など、古い資料をたくさん提供していただきました。楊先生はさらに、本論に関する内モンゴルの芸術家と政治家についても数多くの資料をご提供くださり、幅広い視点から惜しみなく建設的なご助言を与えてくださいました。小松かおり先生は論文を書く技術の基礎をご指導くださいました。また、先生は北海学園大学に異動した後も、筆者が修論を送り、先生に先行研究について大変貴重なアドバイスをいただきました。長沼さやか先生と山本達也先生は、筆者の今後の研究の指針となるような人類学の知識をご教授くださいました。そして、戸部健先生にも感謝を申し上げたい。先生は論文の先行研究について、いつも親身に相談に乗ってくださいました。

千葉大学では、プロジェクト研究会やワークショップ、国際シンポジウムなどを行うじて、博士論文の構成を発表する様々な機会を与えていただきました。その際、千葉大学文学部の名誉教授である荻原眞子先生からはいつも貴重なコメントを頂き、大変勉強になりました。本論を完成するに当たり、丁寧に指導してくださった千葉大学文学部の児玉香菜子先生に心より感謝します。先生は日頃から大きな視野をもって研究対象を捉えることの重要性をご指導くださいました。本論の執筆時には、構造、章立て、文法など、細部に至るまで入念に見て頂きました。最後の最後まで熱心にご指導くださった先生への感謝の意は言葉に表現できないほどです。そして、国際シンポジウムを通じて本論の構成について中国中央民族大学のサランゲレル先生にもアドバイスをして頂きました。

プロジェクトの研究会においては、千葉大学文学部の吉田睦先生、中川裕先生、小谷真吾先生、周飛帆先生から多くのアドバイスやコメントを頂きました。厚く御礼を申し上げます。特に吉田睦先生、小谷真吾先生、周飛帆先生には博士論文の審査において、何度も発表を聞いてくださり、的確なコメントを頂きました。また、吉田先生が筆者に足りない視点をご教示くださったことで、論文の内容がより充実したものとなりました。先生方のご助言を、今後の研究に活かせるよう精進します。そして、博士論文の公開審査では、昭和女子大学のフスレ先生にも発表を聞いていただき、中ソ関係の研究の視点を取り入れるよう、貴重なコメントを頂きました。この場を借りて、感謝の意を申し上げます。

本論の校正やネイティブチェックにあたっては、河村俊明先生、千葉大学大学院・人文公共学府の先輩である小川洋二さん、同じゼミ生の廣田千恵子さん、後輩の阪口諒さん、岡本国際奨学交流財団のスタッフ舘上浩太さんにお世話になりました。心よ

り御礼を申し上げます。特に廣田千恵子さんには、論文の最後の仕上げとしてすべての章をチェックして頂きました。廣田さんに最後まで丁寧に校正して、温かくアドバイスを頂いたことに大変勉強になりました。心より感謝を申し上げます。

そして、同じゼミ生のバヤリタさん、ソロンガさん、ウニバトさん、ソリナさん、オノンさんにもゼミの研究会や報告会などにおいて何度も議論を交わし、たくさんのアドバイスやコメントを頂きました。彼らの存在は筆者の研究生活において大きな支えとなっていました。彼らからのアドバイスやコメントがあったからこそ、論文をより一層充実した形で完成させることができました。ゼミの皆さんにも、この場を借りて、感謝を申し上げます。

本研究・調査は以下の助成金を受けておこなわれました。

- ・公益信託・東海澱粉国際交流奨学金（2016年4月～2017年3月）。
- ・JSPS 科研費 17H01639 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析—「近代世界システム」との相克—(研究代表者: 嶋田義仁中部大学特任教授) (2017年4月～2018年3月)。
- ・独立行政法人・日本学生支援機構の JASSO 学習奨励費（2018年10月～2019年3月）。
- ・公益財団法人・岡本国際奨学交流財団（2019年4月～2021年3月）。

これらの助成金があったからこそ、本論の調査や資料収集に専念することができました。そして留學生活における日常交流では、岡本国際奨学交流財団のスタッフを始め、理事長には長い間、大変お世話になりました。特に同財団理事長の岡本和久さんに学業や生活において大変多くの励ましを頂きました。

本論の趣旨を理解し、何度もご協力くださった、オンニュート旗ウラーンムチル隊長であるウエン氏とスニド右旗ウラーンムチルの隊長ムンケ・ジラガル氏に心より感謝しております。両氏は中国国家主席習近平のウラーンムチルへの返信を受けて、多忙を極めていた中、インタビューや聞き取り調査に協力し、時間を割いてくださいました。

また、オンニュート旗ウラーンムチル隊員のハストヤ氏、ウルガ氏、メデェグ氏及びスニド右旗ウラーンムチル隊員のガンボロード氏、ウリジト氏、定年退職した隊員のバトチョロ氏、荷花氏と歌手の金花氏にもインタビューや聞き取り調査で協力していただいたことに感謝を申し上げます。また、本論の調査にあたり、ウラーンムチル学会の方々にも大変お世話になりました。そのほかにも、本論の執筆に至るまでに、非常に多くの方のご協力やご助言、激励を賜りました。ここにお名前を挙げきれない非礼をお許しいただきたいです。本論の趣旨とフィールド調査に当たって、快く協力して頂いた全ての皆様に感謝を申し上げます。

最後に長年に渡って学業や日常生活で息子を温かく見守って下さった両親に深い感謝します。そして、家庭のことでいつも相談に乗って温かく支えてくれた兄弟の三人及び彼女のデレゲルチチグさんに感謝します。